

Oracle Primavera® P6™

アドミニストレータガイド

バージョン 7.0

Copyright © 1999, 2009, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.

The Programs (which include both the software and documentation) contain proprietary information; they are provided under a license agreement containing restrictions on use and disclosure and are also protected by copyright, patent, and other intellectual and industrial property laws. Reverse engineering, disassembly, or decompilation of the Programs, except to the extent required to obtain interoperability with other independently created software or as specified by law, is prohibited.

The information contained in this document is subject to change without notice. If you find any problems in the documentation, please report them to us in writing. This document is not warranted to be error-free. Except as may be expressly permitted in your license agreement for these Programs, no part of these Programs may be reproduced or transmitted in any form or by any means, electronic or mechanical, for any purpose.

If the Programs are delivered to the United States Government or anyone licensing or using the Programs on behalf of the United States Government, the following notice is applicable:

U.S. GOVERNMENT RIGHTS Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are “commercial computer software” or “commercial technical data” pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987) . Oracle USA, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

The Programs are not intended for use in any nuclear, aviation, mass transit, medical, or other inherently dangerous applications. It shall be the licensee's responsibility to take all appropriate fail-safe, backup, redundancy and other measures to ensure the safe use of such applications if the Programs are used for such purposes, and we disclaim liability for any damages caused by such use of the Programs.

Oracle, JD Edwards, PeopleSoft, and Siebel are registered trademarks of Oracle Corporation and/or its affiliates. Other names may be trademarks of their respective owners.

The Programs may provide links to Web sites and access to content, products, and services from third parties. Oracle is not responsible for the availability of, or any content provided on, third-party Web sites. You bear all risks associated with the use of such content. If you choose to purchase any products or services from a third party, the relationship is directly between you and the third party. Oracle is not responsible for: (a) the quality of third-party products or services; or (b) fulfilling any of the terms of the agreement with the third party, including delivery of products or services and warranty obligations related to purchased products or services. Oracle is not responsible for any loss or damage of any sort that you may incur from dealing with any third party.

To view the P6 Commercial Notices and Disclosures for Documentation, go to the
\\ Documentation \ <language> \ Notices and Disclosures folder of the P6 physical media or download.

目次

目次.....	3
序文.....	7
アドミニストレータガイドの使用方法.....	8
メディア・パック	10
P6 のドキュメント	12
サポート窓口.....	15
 パート 1: はじめに	
インストールの概要.....	19
P6 ソリューションとは	20
インストール要員について.....	25
インストール作業のフェーズ.....	27
P6 の業界タイプ	28
実装計画.....	29
必要となるコンポーネントの選定.....	30
クライアントおよびサーバの要件.....	34
Project Management データベースサーバの要求サイズガイド	39
Methodology Management データベースサーバの要求サイズガイド	40
実際の製品限界.....	41
 パート 2: データベースのインストールおよび設定	
データベースの自動インストール.....	45
概要.....	46
データベースウィザードの実行.....	48
Oracle データベースのインストールとアプリケーションデータの ロードの自動実行.....	49
SQL Server データベースのインストールとアプリケーションデータの ロードの自動実行.....	53

手動データベース構成	57
概要.....	58
Oracle 用のデータベース構成の作成とアプリケーションデータの ロード.....	59
MS SQL サーバおよびアプリケーションデータのロード用の データベース構造の作成.....	67
基本通貨の変更 (Oracle および Microsoft SQL Server)	77
データベース管理	79
P6 でのバックグラウンド処理とクリーンアップ	80
RDBMS スケジューラの設定.....	81
Settings テーブル.....	82
Setting 値の読み書き	83
バックグラウンドジョブ実行のトラッキング	85
SYMOM (System Monitor).....	87
DAMON (Data Monitor)	89
Oracle データベース性能の向上	100
安全な削除の設定.....	101
ネイティブデータベース監査.....	102
Oracle 11g Instant Client を使用した Oracle データベースへの接続.....	109

パート 3: サーバのインストールおよび設定

P6 Progress Reporter のインストール.....	113
P6 Progress Reporter のインストールプロセス	114
P6 Progress Reporter サーバのアップグレード.....	116
P6 Progress Reporter 用のアプリケーションサーバのインストール.....	117
P6 Progress Reporter のインストール.....	120
P6 Progress Reporter 用アプリケーションサーバの設定と展開.....	122
P6 Progress Reporter 用サーバの起動.....	134
P6 Progress Reporter 用サーバの停止.....	135
アプリケーションサーバプラグインの実装.....	136
Progress Reporter Administrator の使用	137
P6 Web Access のインストール	139
P6 Web Access のアップグレード.....	140
旧バージョンのアンインストール.....	141
P6 Web Access 用のアプリケーションサーバのインストール	143
P6 Web Access のインストールプロセス	146
コンテンツリポジトリとワークフローリポジトリのインストール.....	151
P6 Web Access 用アプリケーションサーバの設定と展開.....	153
P6 Web Access 用サーバの起動.....	168
P6 Web Access のプレコンパイル	169
P6 Web Access 用サーバの停止.....	170
クライアントのブラウザから P6 Web Access にアクセス	171
クライアントブラウザの構成設定.....	173

データベース構成設定の変更.....	179
P6 Web Access 用の Oracle Universal Content Management と Microsoft SharePoint の設定	180
管理アプリケーションの使用法.....	184
P6 Web Access の設定の確認と変更.....	186
P6 Web Access の設定.....	197
アプリケーションサーバプラグインの実装.....	229
分散ジョブサービスの設定.....	231
分散ジョブサービスの概要.....	232
分散ジョブサービスのインストール.....	233
Windows ファイアウォールの無効化	234
分散ジョブサービスのアクセス権の設定.....	235
分散ジョブサービスの DCOM の設定.....	236
コントローラと DJS サーバの設定	247
ジョブサービスレジストリの設定.....	250

パート 4: P6 クライアントのインストールおよび設定

クライアントモジュールとその他のコンポーネントの インストール.....	259
データベースクライアントソフトウェアのインストール.....	260
旧バージョンのアンインストール.....	262
設定ウィザードの実行.....	263
クライアントモジュールのインストール.....	266
ジョブサービスおよび分散ジョブサービスのインストール.....	268
ソフトウェア開発キットのインストール.....	275
ProjectLink のインストール.....	278
スタンドアローン版のインストールまたはアップグレード.....	280
P3 と Project Management モジュール間でデータ転送されるように P6 を設定	284
自動データベースアップグレード.....	285
アップグレードプロセスの概要.....	286
Oracle データベースの P6 へのアップグレード.....	288
Microsoft SQL Server データベースの P6 へのアップグレード.....	291
無人セットアップの作成と実行.....	295
無人セットアップファイルの作成.....	296
無人セットアップの実行.....	300
データベース構成設定の変更.....	303
データベース接続設定の変更.....	304
管理タスクの実行.....	306
認証モードの設定.....	309
P6 における認証	310
プロセスの概要.....	312

認証方法の選択.....	313
Project Management モジュールの設定	324
ログイン手順および認証.....	325

パート 5: P6 アプリケーション管理

ユーザ管理とセキュリティ管理	329
P6 のセキュリティについて	330
プロセスの概要.....	339
グローバル設定の定義.....	341
プロジェクト設定の定義.....	349
Project Management モジュールでユーザを追加	356
OBS ノードとプロジェクト設定の割り当て	370
EPS への OBS ノードの割り当て	373
リソースへのユーザアクセスの定義.....	376
P6 Web Access 機能へのユーザアクセスの定義.....	380
Methodology Management モジュールのセキュリティ設定	382
Project Management での管理設定と分類の定義.....	389
既定設定の定義.....	390
標準的な分類と値の定義.....	401
通貨の定義.....	407
報告期間の定義.....	410
Methodology Management での管理設定と分類の定義.....	413
既定設定の定義.....	414
標準的な分類と値の定義.....	418
通貨の定義.....	423
P6 Progress Reporter の実装.....	427
実装の概要.....	428
P6 Progress Reporter を使うためのリソースの設定.....	430
P6 Progress Reporter ユーザ用のタイムシートの作成.....	434
プロジェクト固有の Progress Reporter 設定	436
クライアントのブラウザから P6 Progress Reporter へのアクセス.....	437
Timesheet Approval へのアクセス設定	441

インデックス

序文

序文の内容

アドミニストレータガイドの使用
方法

メディア・パック

P6 のドキュメント

サポート窓口

Oracle Primavera は、Oracle データベースと Microsoft® SQL サーバデータベース上に構築された包括的なマルチプロジェクト計画・管理ソフトウェアです。組織全体にわたるプロジェクトマネジメントを実行できるスケーラビリティを備えています。より小規模のマルチユーザ、またはスタンドアローン事業所では、Oracle Database Express Edition (Oracle Database XE) を使用することができます。P6 のソリューションには、プロジェクトおよびリソース管理に単体または他の関連製品とともに使用できる、Project Management モジュールが含まれます。P6 Progress Reporter は、Web ベースによるチーム内の意思伝達および時間管理を可能にします。Methodology Management モジュールは新規プロジェクト用のメソドロジをテンプレートとして保存します。P6 Web Access は、組織全体にわたるプロジェクトの分析情報を提供します。ユーザはインターネット経由で Project Management データにアクセスすることができます。

アドミニストレータガイドの使用方法

本書では、P6 ソフトウェアコンポーネントのインストールと設定についてステップごとに解説します。まず、**パート 1**を読み、P6 ソフトウェアコンポーネントについての全体概要について理解してください。その後、インストールおよび設定を予定しているそれぞれのコンポーネントの説明がある章に進んでください。本書は、以下のように構成されています。

パート 1: はじめに P6 ソフトウェアコンポーネントの概要を説明します。ユーザ組織に適した実装計画の立て方を説明し、P6 ソフトウェアコンポーネントのインストールおよび設定に関する概要を述べます。

パート 2: データベースのインストールおよび設定 Oracle/Oracle Database Express Edition または Microsoft SQL Server 上に Project Management および Methodology Management データベースの作成プロセスを自動化するウィザードの使い方を説明し、データベースにアプリケーションデータをロードする方法を解説します。この部分では、データベースを手動で作成する方法も詳細に説明します。

パート 3: サーバのインストールおよび設定 以下を始めとする P6 ソリューションのサーバベースコンポーネントの手動インストール・設定方法をステップを踏んで説明します。

- P6 Progress Reporter（旧称 “Group Server”）
- P6 Web Access（旧称「Primavera Web アプリケーション」または「myPrimavera」）
- 分散ジョブサービス

パート 4: P6 クライアントのインストールおよび設定 P6 クライアントモジュールのインストールと設定方法を説明します。

パート 4 では以下を解説します。

- Project Management および Methodology Management モジュールのインストール方法
- その他のコンポーネント、例えば、(分散) ジョブサービス、SDK (ソフトウェア開発キット) および ProjectLink のインストール方法
- 旧バージョンの P6 から自動的にアップグレードを行うためのウィザードの使用法
- 無人セットアップの作成と実行方法
- Configure Connection ツールを使用した Project Management データベースへのモジュール接続の設定方法、および Administration Configuration ツールを使用したプライベートデータベースおよびユーザパスワードのリセット方法
- 認証の設定方法

パート 5: P6 アプリケーション管理 インストール後に P6 のモジュールをカスタマイズする方法について説明します。特に、**パート 5** では以下について概説しています。

- ユーザ設定とセキュリティ設定方法
- Project Management および Methodology Management モジュールで設定と分類を変更する方法
- P6 Progress Reporter ユーザが Project Management データベースに各自の作業時間を記録するための Project Management モジュール構成方法
- Timesheet Approval アプリケーションへのアクセスを設定する方法
- 報告期間ディクショナリで報告期間を作成する方法

メディア・パック

メディア・パックには、Primavera P6 クライアントアプリケーションのインストールに必要な全ファイル、Primavera P6 コンポーネントのインストール、管理、および使用に関連するすべてのマニュアルと技術文書、およびクイックインストールガイドが含まれています。

Primavera P6 メディア・パックは、Oracle E-Delivery Web サイトからダウンロードできます。

メディア・パックは以下のような構造になっています。

Primavera P6 Professional Project Management (v7.0) メディア・パック

- Primavera P6 Professional Project Portfolio Management Quick Install Guide – クイックインストールガイドが含まれています。
- Primavera P6 Client Applications v7.0 – Project Management モジュール、Methodology Management モジュール、P3 コンバータ、圧縮サーバ、ジョブサービス、LDAP 設定、および SDK のインストールに必要なすべてのファイルが含まれています。
- Primavera P6 Database Setup v7.0 – 手動および自動両方でのアプリケーションデータベースセットアップ用の全ファイルが含まれています。
- Primavera P6 Tools v7.0 – Compression Server、SharePoint コネクタ、および OIM コネクタが含まれています。
- Primavera P6 Documentation – Primavera P6 コンポーネントのインストール、管理、および使用に関するすべてのマニュアルと技術文書が含まれています。

Primavera P6 Enterprise Project Portfolio Management (v7.0) メディア・パック

- Primavera P6 Enterprise Project Portfolio Management Quick Install Guide – クイックインストールガイドが含まれています。
- Primavera P6 Web Access v7.0 – Primavera P6 Web Access のインストールに必要なすべてのファイルが含まれています。
- Primavera P6 Database Setup v7.0 – 手動および自動両方でのアプリケーションデータベースセットアップ用の全ファイルが含まれています。

- Primavera P6 Client Applications v7.0 – Project Management モジュール、Methodology Management モジュール、P3 コンバータ、Compression Server、ジョブサービス、LDAP 設定、および SDK のインストールに必要なすべてのファイルが含まれています。
- Primavera Integration API and Web Services v7.0 – Integration API と Web Services のインストールに必要なすべてのファイルが含まれています。
- Primavera P6 Reporting Database v6.2 Service Pack 1 – Primavera P6 Reporting Database のインストールに必要なすべてのファイルが含まれています。
- Primavera P6 Tools v7.0 – 圧縮サーバ、SharePoint コネクタ、および OIM コネクタが含まれています。
- Primavera P6 Documentation – Primavera P6 コンポーネントのインストール、管理、および使用に関するすべてのマニュアルと技術文書が含まれています。
- Primavera P6 Progress Reporter v7.0 – P6 Progress Reporter のインストールに必要なすべてのファイルが含まれています。

P6 のドキュメント

リファレンスマニュアルとアドミニストレータガイドには、P6 のメディアまたはダウンロードに含まれている ¥Documentation¥<language> フォルダ内の P6 ドキュメンテーションセンターからアクセスできます。PDF を表示する際は、Adobe Acrobat Reader を使って情報を表示します（ドキュメンテーションフォルダも利用できます）。以下の表では発行ドキュメントについて説明し、ロール別の対象読者を示しています。P6 のロールについては、本マニュアルの 19 ページの「インストールの概要」で説明します。

タイトル	説明
P6 アドミニストレータガイド	本ガイドは、P6 サーバ、データベースおよびコンポーネントの設定方法を説明します。また、P6 ソリューションのすべてのコンポーネントに関する概要を提供します。本ガイドは、セキュリティ設定およびグローバル項目設定を始めとする、Project Management モジュールを管理するのに必要な、作業の流れを説明します。Project Management モジュールネットワーク管理者／データベース管理者、およびプロジェクト管理コーディネータが本ガイドの対象読者です。
Project Management リファレンスマニュアル	本ガイドでは、マルチユーザ環境においてプロジェクトを計画、設定、管理する方法を説明します。Project Management モジュールをはじめてご利用になる場合や、慣れていない場合は、ソフトウェアを効果的に使用してプロジェクトを計画、管理する方法を学習するために、本ガイドから読み始めることをお勧めします。より詳細が必要な場合は、Project Management ヘルプを参照してください。プロジェクト管理コーディネータ、プログラマネージャ、プロジェクトマネージャ、リソース・コストマネージャおよびチームリーダーが本ガイドの対象読者です。
Methodology Management リファレンスマニュアル	本ガイドでは、メソドロジまたはプロジェクトのテンプレートを Methodology Management モジュールを使用して確立する方法を説明します。メソドロジを使うことにより、Project Management モジュールで個別のプロジェクト計画を策定するのに、ユーザ組織の「ベストプラクティス」を収集し、再利用することができます。Methodology Management モジュールに初めて接する場合は、本ガイドから開始し、ソフトウェアを使用してベース、プラグイン、アクティビティライブラリメソドロジを作成する方法を学ぶことができます。より詳細が必要な場合は、Methodology Management ヘルプを参照してください。プロジェクト管理コーディネータ、プログラマネージャ、プロジェクトマネージャ、リソース・コストマネージャおよびチームリーダーが本ガイドの対象読者です。

P6 Web Access ヘルプ	P6 Web Access ヘルプは、プロジェクトの作成と管理方法、プロジェクトをポートフォリオとしてグループ化する方法、リソース割当てと要求のレビュー、予算管理、プロジェクトポートフォリオのパフォーマンスと ROI の評価について説明します。経営幹部、プロジェクト管理コーディネータ、プログラムマネージャ、プロジェクトマネージャ、リソース・コストマネージャおよびチームリーダーが本ヘルプの対象読者です。
Progress Reporter 管理者ヘルプ	Progress Reporter 管理者ヘルプは、P6 Progress Reporter に関する Project Management アプリケーション設定情報の入力方法、および P6 Progress Reporter サーバ設定の変更方法を説明します。P6 ネットワーク管理者 / データベース管理者がこのヘルプの対象読者です。
Progress Reporter Web ベースヘルプ	Progress Reporter Web ベースヘルプでは、作業に費やした時間を P6 Progress Reporter に入力、更新する方法を説明します。チームメンバがこのヘルプの対象読者です。
ProjectLink ヘルプ	Microsoft Project (MSP) ユーザが、P6 のエンタープライズ機能に接続したまま MSP 環境で作業することを可能とする ProjectLink の使用方法を説明します。MSP ユーザは、MSP アプリケーションから Project Management モジュールのデータベースのプロジェクトを開いたり保存する方法や P6 のリソース管理を MSP 環境から起動する方法を学びます。全社的なプロジェクト計画・管理に P6 を使用する組織において、日常的に MSP を使ってプロジェクト保全を行うチームメンバがこのヘルプの対象読者です。
Integration API アドミニストレータガイド	本ガイドでは、Integration API (Application Programming Interface) のインストールおよび設定方法について説明します。Integration API を利用すると、Project Management モジュールに Java から直接アクセスできるようになります。Java でクライアントコードを作成したり、プロジェクト管理データベースに直接アクセスする必要がある人がこのガイドの対象読者です。このガイドは、P6 のメディアまたはダウンロードに含まれている ¥Web_Services¥Integration API フォルダ内にあります。

P6 Web Services アドミニストレータガイド、*P6 Web Services プログラマガイド*、*P6 Web Services リファレンスマニュアル*

『*P6 Web Services アドミニストレータガイド*』では、P6 Web Services のインストールおよび設定方法について説明しています。これにより、Web サービス標準を使って P6 の機能を他の Web ベースのアプリケーションにスムーズに統合することができます。『*P6 Web Services プログラマガイド*』は HTML ヘルプシステムとして利用でき、サポートされている環境内で利用できるサービスやメソッドを管理、使用、トラブルシューティングする方法について説明しています。『*P6 Web Services リファレンスマニュアル*』は HTML ヘルプシステムとしても利用でき、P6 Web Services で使用できるすべてのサービスと操作について包括的に説明しています。Java でクライアントコードを作成したり、プロジェクト管理データベースに直接アクセスする必要のある人が本書の対象読者です。P6 Web Services のインストール後、本書は P6 Web Services インストールフォルダ内の ¥docs フォルダで入手できます。また、P6 のメディアまたはダウンロードに含まれている ¥Web_Services¥WebServices フォルダにも含まれています。

SDK (ソフトウェア開発キット) Web ベースのドキュメント

本ドキュメントでは、Project Management データベースに接続するために SDK を使用する方法を説明します。SDK によってアクセスすることができるテーブル、フィールド、ストアードプロシージャについて説明します。例えば新プロジェクトの作成方法、リソースをプロジェクトアクティビティに割り当てる方法など、SDK を使って行う基本的なタスクの例も示します。プロジェクトマネジメントネットワーク管理者/データベース管理者、プロジェクト管理コーディネータが本ドキュメントの対象読者です。本ドキュメントは、¥Program Files¥Common Files¥Primavera Common¥PMSDK¥Doc フォルダに入っています。INDEX.HTML ファイルをダブルクリックして、目次を開いてください。

チームへの情報配布

オンラインドキュメントは、ネットワークドライブにコピーし、プロジェクトメンバがアクセスすることができます。各チームメンバはそれぞれ組織の中で、自分の職務に関係する部分だけをプリントすることができます。



本ドキュメントでは、全機能へのフルアクセス権をもつ標準的な製品設定を想定しています。

サポート窓口

Oracle Primavera 製品の使用について、ドキュメントやヘルプの情報で解決できない問題がある場合は、以下のテクニカルサポートにアクセスしてください。

<http://www.oracle.com/primavera/support.html>

このページには、Oracle グローバルカスタマーサポートへの問い合わせ方法や、サポートリニューアルプロセスについての最新情報が記載されています。

はじめに

内容：

インストールの概要
実装計画

本パートでは、P6 のコンポーネントをインストールする準備の進め方を説明します。はじめに、「**インストールの概要**」をお読みください。P6 のコンポーネント製品をインストールするために必要なスキル、インストールの各フェーズについて説明されています。

「**実装計画**」では、組織によって必要となるコンポーネントを識別する方法を示し、実装に必要なハードウェアおよびソフトウェアが揃っていることを確認します。

インストールの概要

本章の内容：

- P6 ソリューションとは
- インストール要員について
- インストール作業のフェーズ
- P6 の業界タイプ

本章では、P6 ソリューションを構成するコンポーネントとそのインストール、設定プロセスの概要を説明します。

P6 ソリューションとは

Oracle Primavera は、企業の様々な部門におけるプロジェクト管理の要求を満たす一連の統合コンポーネントを提供します。Primavera は標準的な Windows インタフェース、Web を活用したテクノロジー、小規模マルチユーザあるいはスタンドアローン (Oracle Database Express Edition) データベース、またはネットワークベースのデータベース (Oracle and Microsoft SQL Server) を使用します。

この導入ガイドでは、クライアント・サーバネットワーク上に P6 ソフトウェアコンポーネントをインストール、つまりクライアントソフトウェアとサーバベースコンポーネントの両方がインストールされ設定されるものを想定しています。また、スタンドアローンインストールについての情報も提供します。



Primavera では、そのコンポーネントと Project Management および Methodology Management データベース間の標準インタフェースに DBExpress を使用します。DBExpress は、Project Management モジュールをインストールすると自動的にインストールされます。ジョブサービスのようなコンポーネントをインストールしても、データベースとの接続のため、DBExpress のインストールが行われます。

クライアントコンポーネント P6 ソリューションには、以下のクライアントモジュールがあります。

- **Project Management** Project Management は、ユーザが多数のプロジェクトの計画・管理に使うことができるモジュールです。プロジェクトデータは、集中管理された Project Management データベースに保存されます。大規模ネットワーク構成では、リレーショナルデータベース管理システムとして、Oracle または Microsoft SQL Server を使用することができます。より小規模なマルチユーザシステムまたはスタンドアローンの実装では、Oracle Database Express Edition (Oracle Database XE) をデータベースとして使用することができます。また、Project Management ではリソース管理も統合的に行います。Web ベースのタイムシート管理アプリケーションである Progress Reporter モジュールを通じてプロジェクトリソースと通信し、リソースのタイムシート承認を行います。
- **Methodology Management** Methodology Management は、メソッドロジやプロジェクト計画テンプレートの承認と保存を行うモジュールです。Methodology Management によって、ユーザは組織における「ベストプラクティス」を収集し、統合管理された Methodology Management データベースへ保存することができます。

- **Progress Reporter** Progress Reporter モジュールは、Web ベースのプロジェクト間のコミュニケーションおよび時間管理システムです。チームメンバーは、複数のプロジェクトに割り当てられた作業の分単位の情報、および作業に費やした時間を Progress Reporter に記録します。

サーバコンポーネント P6 では、以下のサーバベースコンポーネントのインストールおよび設定が必要になります。

- **リレーショナルデータベース管理システム (RDBMS)** 各プロジェクトデータとプロジェクトメソッドログが別々の統合データベースに保存されます。これら 2 つのデータベースは、Oracle、Oracle Database Express Edition (Oracle Database XE)、または Microsoft SQL Server のいずれかのデータベースサーバに保管されます。(RDBMS では、データベースサーバにネットワークを通じてアクセスする必要のある各コンピュータに、クライアントソフトウェアをインストールする必要があります。Oracle Database XE または Microsoft SQL Server を使用する場合は、Project Management モジュールをインストールすると必要なソフトウェアは自動的にインストールされます。)
- **P6 Progress Reporter** ユーザの P6 実装に Progress Reporter (旧称 TimeSheets) クライアントモジュールが含まれる場合は、P6 Progress Reporter のファイルをアプリケーションサーバにインストールする必要があります。これにより、クライアントは Web ブラウザを使用して Timesheets をダウンロードできるようになります。さらに、Progress Reporter クライアントと Project Management データベース間でのデータのやり取りに活用されます。
- **P6 Web Access** P6 Web Access (旧称「Primavera Web アプリケーション」または「myPrimavera」) はアプリケーションサーバ上でホストされ、企業全体にわたるプロジェクト、ポートフォリオ、リソースデータにブラウザでアクセスできるようになります。P6 Web Access のユーザは、プロジェクトやリソース管理における各自の役割に合わせた特定のプロジェクトやプロジェクトデータの分類に焦点をあてた、ダッシュボードを独自にカスタマイズすることができます。プロジェクトワークスペースやワークグループでは、特定のプロジェクトチームメンバーはひとつのプロジェクトまたはプロジェクト内のアクティビティのサブセットに関わるデータの一貫したチーム用ビューを作成できるため、カスタマイズされた集中的なデータ表示モデルを拡張できます。P6 Web Access では、幅広いデータ表示様式を提供します。ユーザはプロジェクトの初期概念から完了の承認まで全体を通して管理することができます。

P6 Web Access は、プロジェクトを成功裏に遂行するために必要な共有作業の提携機能をあらゆるレベルの全チームメンバに提供します。この機能の中には、問題管理と E メール統合が含まれます。設定済みのコンテンツおよびワークフローリポジトリを使うと、拡張されたドキュメント管理機能とプロジェクト要求プロセスを含むよう P6 Web Access の機能を拡張することができます。

その他のコンポーネント ユーザの P6 実装によっては、さらにオプションのコンポーネントのインストールが必要になります。これらの追加モジュールによって、P6 ソリューションの機能が拡張されます。

- **(分散) ジョブサービス** ジョブサービスは、予め設定された時間間隔でプロジェクトデータ上で定義されたジョブを実行する Windows 2003/2008 サービスです。ユーザは、Project Management モジュールでジョブを作成します。ジョブ詳細は、中央の Project Management データベースに保存されます。ジョブサービスは、定期的にデータベースを読み取り、定義されたジョブを実行します。このサービスは、データベースサーバに常時接続されているサーバ上で実行されなければなりません。

P6 Web Access のスケジュール計算、実績の適用、集計機能を実行するには、ジョブサービスのインストールが必要です。

分散ジョブサービスは、制御マシンがジョブサービスを実行する複数のサーバを管理する、ジョブサービスの拡張機能です。

- **ProjectLink** ProjectLink は、Microsoft Project (MSP) ユーザが、P6 のエンタープライズ機能に接続したまま MSP 環境で作業することを可能とするプラグインです。MSP ユーザは、MSP アプリケーション内から Project Management データベースを開いたり、プロジェクトを当該データベースに保存したりすることができます。さらに、MSP 環境内で P6 のリソースを管理できます。ProjectLink は、MSP を日常的なプロジェクト管理に使用している組織において、P6 アプリケーションが提供するエンタープライズ機能を利用する必要のあるユーザがいる場合に有用です。

- **SDK (ソフトウェア開発キット)** SDK により、Project Management データベースのデータと外部のデータベースおよびアプリケーションを統合することが可能になります。それは、スキーマとビジネスロジックへのアクセスを提供します。SDK では、P6 データベースとの接続に、Open Database Connectivity (ODBC) 標準と OLE DB のような ODBC 準拠インタフェースをサポートしています。SDK は、P6 データベースと統合する必要のあるすべてのコンピュータにインストールすることができます。(SDK では 2byte 環境はサポートされていません。)

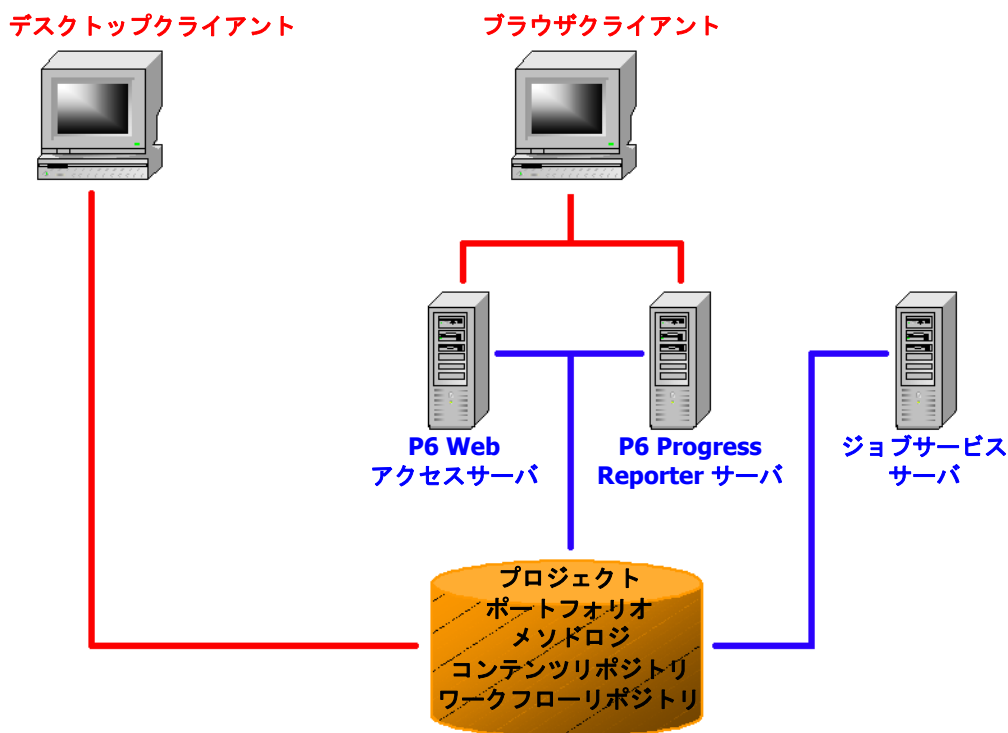


Integration API (Application Programming Interface) は、Project Management データベースに直接接続するために使うこともできます。このツールでは、Java でクライアントコードを書き込む必要があります。詳細については、『Integration API アドミニストレータガイド』を参照してください。



P6 Web Services では、XML や SOAP、WSDL などの標準ファイル形式を利用して、P6 の Project Management 機能を他のアプリケーションにスムーズに統合できます。詳細については、『P6 Web Services アドミニストレータガイド』を参照してください。

以下の図は、P6 のコンポーネント間の関係を示します。



各コンポーネントの設定要求についての詳細は、29 ページの「**実装計画**」を参照してください。

ユーザは、サーバベースコンポーネントをここで示すようにインストールする必要はありません。例えば、ジョブサービスは、P6 データベースと常時接続されているあらゆるコンピュータにインストールすることができます。性能を最適化するため、Oracle では上記のようにコンポーネントをインストールするようお勧めします。

インストール要員について

P6 コンポーネントをユーザ組織においてインストールするに当たり、違う資質の従業員が必要になる可能性があります。以下の項では、インストール時に必要となる役割とその職務に通常与えられる責任を説明します。ユーザ組織構造によって、役割は異なったり重複している可能性があります。

ネットワーク管理者 ネットワーク管理者は、P6 コンポーネントのパフォーマンスを最適化すべく組織のネットワーク環境（ローカルおよび広域ネットワーク）を設定します。P6 ソリューションのサーバとクライアントコンポーネントをインストールし、保守します。プロジェクトデータへアクセスできるユーザを管理し、プロジェクトと手法データを不承認アクセス、盗難、損失から保護する総合的なセキュリティポリシーの開発と保守に当たります。

ネットワーク管理者は、P6 をサポートするハードウェアとソフトウェアが安定的に機能するよう以下を行います。

- 信頼のおける接続となるべく早いデータ転送を確保するためにネットワークを設定、維持する
- ネットワークリソースとユーザの正確なリストを作成、維持して、各リストに独自のネットワークアイデンティティを持たせる

データベース管理者 データベース管理者 (DBA) は P6 データベースへのアクセス権の設定、管理、割当を行う責任を負っています。企業データベースの使用に関する規則の策定と監督を行い、データの整合性を維持し、互換性標準を設定します。

データベース管理者は、P6 データベースの信頼的なアクセスを確保するため、以下を行います。

- 必要に応じてデータベースサーバのソフトウェアや関連製品をインストール、設定、更新
- データベースの作成と実装
- ユーザ、ユーザロール、データベースに対する権限の作成と保守を始めとするデータベースセキュリティの実装と保全
- データベースのパフォーマンスをモニタリングし、必要に応じて調整
- 将来の拡大と変化に備えて計画を行い、バックアップおよびリカバリのポリシーと手順を設定、維持

プロジェクト管理コーディネータ プロジェクト管理コーディネータは、Project Management モジュールの適切な実装と潤滑な運用を確保します。また、実装中は以下により主要な役割を担います。

- 上級幹部と協同で企業プロジェクトの構造、リソース階層、組織分割構成 (OBS) を確立し、基本的な工程表を設定し、Project Management モジュールの組織全体にわたるコードを定義
- ネットワーク管理者と協同で、プロジェクト管理モジュールのユーザアカウントとユーザグループを作成
- Project Management でセキュリティ権限を P6 ユーザに割当
- 人事部 (HR) と共同でプロジェクト管理モジュールのリソース階層を最新かつ完全に維持。企業リソース計画 (ERP) システムの HR モジュールとの統合も可能

プログラママネージャおよびプロジェクトマネージャ 場合によっては、プログラママネージャやプロジェクトマネージャも P6 ソリューションの初期設定に関わることがあります。ただし、通常はインストールには携わりません。1 つあるいは複数のプロジェクト管理の責任を負い、以下の目的のため Project Management モジュールを使用します。

- プロジェクトを Project Management データベースに追加
- プロジェクト間でリソースの優先度を決定
- プロジェクトの計画と管理

インストール作業のフェーズ

ネットワーク管理者、データベース管理者、プロジェクト管理コーディネータは、P6 ソリューションがユーザ組織に適切にインストールされるよう協力しなければなりません。これらの職務は、多くの人々がチームとなって、あるいは少人数で責任分担をして遂行されます。

Oracle は、P6 ソリューションのインストールと設定をフェーズに分けて行うことを推奨します。インストール作業の各フェーズを以下に説明します。

計画フェーズについては、本ガイドのこのパートで説明しています。

フェーズ 1: P6 構成の計画 インストール作業前に、P6 ソリューションのユーザ組織への実装方法を決定します。実装をサポートするのに必要となるサーバやハードウェアを明確化します。必要に応じて、サードパーティのデータベースサーバ (Oracle または Microsoft SQL Server) をインストールして設定します。旧版から新版にプロジェクトをアップグレードするのに必要な手順を実行します。スタンドアローンバージョンをインストールするだけであれば、280 ページの「[スタンドアローン版のインストールまたはアップグレード](#)」を参照してください。

データベースの自動および手動設定については、本ガイドの[パート 2](#)にて説明します。[パート 3](#)ではサーバの設定について説明しています。

フェーズ 2: P6 サーバの設定 ネットワークが設定され、サーバの準備ができたならサーバの設定を開始することができます。Project Management および Methodology Management データベースをデータベースサーバに設定することから開始します。この作業には、自動または手動のどちらかの方法を選ぶことができます。Oracle Database Express Edition (Oracle Database XE) を使用する場合は、自動作業を選択してください。

クライアントモジュールの設定フェーズについては、本ガイドの[パート 4](#)で説明します。

フェーズ 3: P6 クライアントモジュールの設定 サーバが設定され、データベースのインストールが完了すると、ユーザはその実装計画に従い、P6 クライアントモジュールのクライアントワークステーションへのインストールを開始することができます。その後、ユーザの実装に必要な場合は、さらなるコンポーネントの追加インストールおよび設定を行います。

P6 の業界タイプ

P6 では、データベースの設定およびアプリケーションのインストール時に業界を選択する必要があります。P6 に表示される用語および既定の設定は、選択した業界タイプで決まります。下表は、業界タイプごとに対応する用語および既定の設定を示しています。インストール中にプロンプトで要求された場合は、自分の業界に最適のオプションを選択してください。各データベースまたはインストールするアプリケーションで同じ業界を使用することをお勧めしますが、必ずしもそうする必要はありません。

業界タイプの サンプルデータ	手動データベース セットアップ中 のサンプル データ用 コード	P6 Web Access URL 用 コード	業界用語例	既定のプロジェクト 比較ツール	Project Management モジュールの 既定の起動 ウィンドウ
土木および建設	ec	cmt	計画工数 計画コスト 計画所要期間	Claim Digger	アクティビティ
政府、航空宇宙、 および防衛	pd	it	計画工数 計画コスト 計画所要期間	Schedule Comparison	ユーザ定義
高度先端技術、 製造	it	it	計画工数 計画コスト 計画所要期間	Schedule Comparison	プロジェクト
公共事業、石油、 およびガス	mt	cmt	計画工数 計画コスト 計画所要期間	Claim Digger	プロジェクト
その他の業界	it	it	計画工数 計画コスト 計画所要期間	Schedule Comparison	ユーザ定義

実装計画

本章の内容：

必要となるコンポーネントの選定
クライアントおよびサーバの要件
Project Management データベース
サーバの要求サイズガイド
Methodology Management データ
ベースサーバの要求サイズガイド
実際の製品限界

P6 実装の計画に当たっては、本章を読んでもください。さらなる詳細情報については、Oracle グローバルカスタマーサポート（インストールについて質問がある場合）または Oracle Primavera GBU コンサルティング（Oracle Primavera に実装の作業を依頼する場合）にご相談ください。

必要となるコンポーネントの選定

P6 の実装計画に当たって、先ず行わなければならないことは、インストールと設定を行う必要のあるクライアントモジュールとサーバコンポーネントを明確化し、それらモジュールとコンポーネントのインストール先を決めることです。以下は、開始前に決めなければならない項目です。

データベースサーバには、どのリレーショナルデータベース管理システム (RDBMS) を使用するか？ エンタープライズインストールでは、Oracle または Microsoft SQL Server を使用することができます。小規模な実装では、Oracle Database Express Edition (Oracle Database XE) を使用することができます。

どのワークステーションに Project Management モジュールが必要か？ どのワークステーションに Methodology Management が必要か？ すべての Project Management および Methodology Management ユーザは、データベースサーバにアクセスすることが必要になります。Oracle を RDBMS に使う場合は、これらのクライアントモジュールを実行するすべてのコンピュータに Oracle クライアントソフトウェアをインストールしなければなりません。SQL Server を RDBMS に使用する場合は、Project Management モジュールのインストール時に、クライアントアクセスに必要な SQL Server ファイルが自動的にインストールされます。

Project Management および Methodology Management モジュールのインストール時には、予め決められた標準設定を使用するか？ すべてのクライアントモジュールに同一の設定を行う場合、管理者は各モジュールの設定を標準設定に基づいて無人セットアップを利用して行うことができます。1 つあるいは複数の無人セットアップファイルを作成して、ネットワークサーバで共有することができます。

Project Management モジュールのユーザは、プロジェクトデータについてジョブの自動実行（例えばスケジュールまたはサマリ）を行う必要があるか？ Project Management ユーザがジョブを実行する必要がある場合は、ジョブサービスをインストールする必要があります。非分散ジョブの場合は、常時データベースサーバに接続されているサーバにジョブサービスをインストールします。分散ジョブの場合は、コントローラサーバに制御される複数のサーバに分散ジョブサービスをインストールします。さらに、P6 Web スケジューラがあります。ただしデフォルトでは無効となっています。Web スケジューラは P6 Web Access の管理者アプリケーションで有効にすることができます。

プロジェクトデータを他のグローバルシステムと統合する必要があるか？ プロジェクトデータを、経理あるいは人事システムなど、他のグローバルシステムと統合する必要がある場合は、データにアクセスする必要のあるコンピュータに Integration API (Application Programming Interface)、P6 Web Services、または SDK (ソフトウェア開発キット) のいずれかをインストールしなければなりません。Integration API を使うと、JDBC によりデータにアクセスできるようになります。ただし、Java でプログラミングを行うための知識が必要です。P6 Web Services は、XML や SOAP、WSDL などの標準的な規格で、P6 の Project Management 機能を他のアプリケーションにスムーズに統合します。SDK は、プロジェクトデータを外部のアプリケーションから OLE DB などの Open Database Connectivity (ODBC) インタフェースによってアクセスすることを可能にします。

Microsoft Project によるプロジェクト管理と P6 によるグローバルデータの管理を必要とするユーザがいるか？ ユーザの組織では、現在プロジェクト管理に Microsoft Project を使用している可能性があります。ユーザに、引き続き MSP によるプロジェクト管理を許容しつつ、P6 による組織レベル機能との統合を可能にするには、P6 ProjectLink をインストールする必要があります。

チームメンバは P6 Progress Reporter を使用してプロジェクトマネージャあるいはリソースマネージャにタイムシートを提出するか？ その場合、リソースマネージャやプロジェクトマネージャはリソースタイムシートをレビューして承認する必要があるのか？ チームメンバが Progress Reporter モジュールを使用する場合は、P6 Progress Reporter のファイルをアプリケーションサーバにインストールする必要があります。

リソースマネージャやプロジェクトマネージャがリソースタイムシートをレビュー、承認する必要がある場合は、P6 Web Access をインストールしなくてはなりません。P6 Web Access をインストールする際に P6 Web Access アプリケーション上にインストールされた Timesheet Approval を利用すると、タイムシート承認マネージャはタイムシートのレビュー・承認・却下や、Progress Reporter ユーザとの連絡、あるいはタイムシートレポートの実行などができます。インストール後は P6 Web Access と Project Management から Timesheet Approval へのアクセスを設定するか、スタンドアロン型アプリケーションとして承認マネージャが利用できるようにすることができます。

P6 Progress Reporter を使用する場合、どのバージョンを使用すべきか？

P6 Progress Reporter は、Progress Reporter クライアントをフロントエンド、プロジェクトを含むデータベースサーバをバックエンドとし、中間に P6 Progress Reporter ファイルをホストするアプリケーションサーバを置く構成で Progress Reporter クライアントとデータベース間のリンクを提供します。

P6 は、2 種類の P6 Progress Reporter インタフェースを提供することにより、組織内でのチームメンバー間のプロジェクトコミュニケーションを促進します。それは、Java Web Start 版と Web ブラウザ版です。Web ブラウザ版は、設定に応じたオプションになります。この 2 種類のインタフェースの差は、以下の通りです。

Java Web Start 版 Progress Reporter Java Web Start 版では、ユーザが Java アプリケーションとしてタイムシートデータにインターネットを経由してアクセスすることを可能にします。

Java Web Start は、Java Network Launching Protocol (JNLP) テクノロジーにより、セキュアでプラットフォームに依存しない Progress Reporter の使用が可能になります。また、Java Web Start を使用すると、1 つ以上の JRE のバージョンが存在しているときでも、ユーザは常に正しい JRE のバージョンによる最新版の P6 Progress Reporter を確実に起動することができます。Java Web Start はユーザのコンピュータに自動的に最新版の P6 Progress Reporter をダウンロードするので、ユーザは手動で更新する必要がなくなります。

Web ブラウザ版 Progress Reporter Web ブラウザ版は、Web ブラウザ版と同じ機能ですが、この版は Java アプレットとして実行されます。シングルサインオン認証を使用する場合には、この版が必要です。

Web ブラウザ版を実行するには、ユーザは単に指定された URL にアクセスするだけで済みます。Java アプレットが自動的にユーザのコンピュータにダウンロードされ、Web ブラウザで実行されます。多くのユーザが P6 Progress Reporter を使用する必要がある場合は、Java アプレットによる実行により大幅な管理の時間削減となります。クライアント側のインストールが必要なくなり、ソフトウェアのアップデートは自動的に頒布されます。主な欠点は当初のアプレットのダウンロード時間です。遅いモデム接続の場合は、20 分程度かかります。

プロジェクト管理タスクの性能向上のため、プロジェクトデータを Web アクセスで共有したいか？ P6 Web Access により、Web ブラウザでプロジェクトデータにアクセスすることができるようになります。これにより、組織内でのプロジェクトの作成と管理のサポート、使用可能なリソースと割り当ての詳細の提供、プロジェクトポートフォリオのレポート機能を提供し、戦略的な意思決定をサポートします。

以下の表に、各クライアントコンポーネントおよび対応のそれぞれが必要とするサーバベースコンポーネントを示します。

	RDBMS	P6 Progress Reporter	P6 Web Access	P6 ジョブ サービス	コンテンツ リポジトリとワークフローリポジトリ
Project Management	✓ ¹			✓ ²	
Methodology Management	✓ ¹				
P6 Progress Reporter ユーザ	✓	✓	✓ ⁴		
P6 Web Access ユーザ	✓	✓ ³	✓	✓	✓ ⁵

- ¹ Oracle を RDBMS として使用する場合は、このモジュールは Oracle クライアントソフトウェアがクライアントコンピュータにインストールされていることを必要とします。
- ² ジョブサービスは、Project Management モジュールのオプションコンポーネントです。
- ³ P6 Progress Reporter は、P6 Web Access 用のオプションコンポーネントです。P6 Web Access の Progress Reporter の機能を使用するときが必要となります。
- ⁴ P6 Web Access は Progress Reporter のコンポーネントとしてはオプションであり、リソースタイムシートをレビュー、承認しなくてはならない場合にのみ必要です。
- ⁵ コンテンツリポジトリとワークフローリポジトリは、P6 Web Access のオプションコンポーネントです。ドキュメント管理やプロジェクト要求プロセスに関する補助機能を備えています。

クライアントおよびサーバの要件

P6 の導入に際し、ハードウェアとソフトウェアがサポートされているかを確認してください。



以下の表は、P6 で検証された構成を示します。システム要件、バージョン、検証済みの環境のリストについては、P6 のメディアまたはダウンロードに含まれている *Documentation* *Tested Configurations* フォルダを参照してください。

P6 をサポートするプラットフォーム

クライアントモジュール (Project Management、Methodology Management、P6 Web Access、P6 Progress Reporter)

- Microsoft Windows XP Professional (SP3)
- Microsoft Windows Vista Business Edition (sp2)
- Ubuntu Linux 9 (Progress Reporter のみ)
- Citrix Presentation Server 4.5
- Citrix XenApp 5.0

Integration API (Application Programming Interface) と SDK (ソフトウェア開発キット) は、Windows 2003 Server (R2 sp2)、Windows 2008 Server (SE sp2)、XP (sp2)、または Vista Business Edition (sp2) を搭載したコンピュータにインストールできます。システム要件は、P6 データベースと統合する API または SDK を使用するモジュールの必要条件によって異なります。

最小クライアント構成

Project Management および Methodology Management モジュールを実行するクライアント用

- Oracle 10.2 Runtime
- Oracle 11.1 Runtime
- Oracle Database 10g Express Edition (Oracle Database XE)(スタンドアローンのみ)
- SQL Server 2005 sp2 フルバージョン
- SQL Server 2008 フルバージョン
- SQL Server 2005 Express with Advanced Series sp2 (P6 v6.2.1 以前からのスタンドアローンアップグレードのみ)
- 1 x 2.8 GHz 以上の Intel Pentium 4 (またはその同等) プロセッサ
- 1 GB の RAM

- スタンドアロンモジュールをインストールする場合は、Project Management モジュール、Methodology Management モジュールのほか、.NET や Oracle Database Express Edition を含むサポートソフトウェアのため、800 MB の空きハードディスクスペース。前リリースからのアップグレードの場合は、モジュールごとにさらに 40MB の空きハードディスクスペース。
- Project Management モジュールのみをインストールする場合は最低 185 MB のハードディスク空きスペース
- Methodology Management モジュールのみをインストールする場合は、最低 45 MB の空きハードディスクスペース
- Microsoft IE (Internet Explorer) 7 または IE 8
- TCP/IP ネットワークプロトコル

P6 Progress Reporter にアクセスするクライアント用

- 256 MB の RAM
- Microsoft IE 7、IE 8、または Firefox 3.5
- Sun JRE (Progress Reporter と共に適切なバージョンが自動的にインストールされます)
- TCP/IP ネットワークプロトコル
- オプションのソフトウェア
 - Java Access Bridge 2.01 (508 アクセシビリティ用)
- Progress Reporter モジュールは、以下の支援テクノロジーでテスト済みです。
 - JAWS for Windows 画面読み取りソフトウェア 7.0 版
 - ZoomText Magnifier 9.0

P6 Web Access にアクセスするクライアント用

- 1 x 2.8 GHz 以上の Intel Pentium 4 (またはその同等) プロセッサ
- 1 GB の RAM (推奨)
- 25 MB のハードディスク空きスペース
- TCP/IP ネットワークプロトコル
- Microsoft IE 7、IE 8、または Firefox 3.5
- Sun JRE (必要なバージョンが P6 Web Access と共に自動的にインストール)

サーバ用のサポート構成

データベースサーバ用

- Windows 2003 Server (R2 sp2), Windows 2008 Server (SE sp2), Oracle Enterprise Linux 4.0、および Oracle Enterprise Linux 5 (5.2.0.0.0) 上の Oracle 10.2.0.4
- Windows 2003 Server (R2 sp2), Windows 2008 Server (SE sp2), Oracle Enterprise Linux 4.0、Oracle Enterprise Linux 5 (5.2.0.0.0), Solaris 10 (Sparc), HP-UX 11i v2、および IBM AIX 5.3 上の Oracle 11.1.0.6
- Windows XP Professional (sp3) および Vista Business Edition (sp2) 上の Oracle Database 10g Express Edition (Oracle Database XE)
- Windows 2003 Server (R2 sp2) および Windows 2008 Server (SE sp2) 上の Microsoft SQL Server 2005 (sp2)
- Windows 2003 Server (R2 sp2) および Windows 2008 Server (SE sp2) 上の Microsoft SQL Server 2008
- Windows XP Professional (sp3) および Vista Business Edition (sp2) 上の Microsoft SQL Server 2005 Express with Advanced Services (sp2) (P6 v6.2.1 以前からのアップグレードのみ)
- 2 x 3.2 GHz 以上の Intel Pentium 4 (またはその同等) プロセッサ
- 2 GB 以上の RAM (実装のサイズによって異なります)
- 最低 6 の物理ドライブにわたる 15K RPM SCIS I/O サブシステム
- メモリ条件は、39 ページの「[Project Management データベースサーバの要求サイズガイド](#)」および 40 ページの「[Methodology Management データベースサーバの要求サイズガイド](#)」を参照してください。

ジョブサービスまたは分散ジョブサービス用

- Microsoft Windows 2003 Server (R2 sp2)
- Microsoft Windows 2008 Server (SE sp2)
- 1 x 2.8 GHz 以上の Intel Pentium 4 (またはその同等) プロセッサ
- 2 GB の RAM (最低)
4 GB の RAM (推奨)
- 250 MB (最低) のハードディスク空きスペース

P6 Progress Reporter をホストするアプリケーションサーバ要件

- Microsoft Windows 2003 Server (R2 sp2)
- Microsoft Windows 2008 Server (SE sp2)
- Oracle Enterprise Linux 4
- Oracle Enterprise Linux 5 (5.2.0.0.0)
- Solaris 10 (Sparc)
- HP-UX 11i v2
- IBM AIX 5.3
- 2 x 3.2 GHz 以上の Intel Pentium 4 (またはその同等) プロセッサ
- 512 MB 以上の RAM
- 200 MB のハードディスク空きスペース
- TCP/IP ネットワークプロトコル

P6 Progress Reporter をホストする Java アプリケーションサーバ要件

- JBoss 5.0.1
- Oracle WebLogic 10g R3
- IBM WebSphere 7.0

P6 Web Access をホストするアプリケーションサーバ要件

- Microsoft Windows 2003 Server (R2 sp2)
- Microsoft Windows 2008 Server (SE sp2)
- Oracle Enterprise Linux 4
- Oracle Enterprise Linux 5.0 (5.2.0.0.0)
- Solaris 10 (Sparc)
- HP-UX 11i v2
- IBM AIX 5.3
- 2 x 3.2 GHz 以上の Intel Pentium 4 (またはその同等) プロセッサ
- 4 GB 以上の RAM (推奨)
- 1 GB (最低) のハードディスク空きスペース
- TCP/IP ネットワークプロトコル

P6 Web Access をホストする Java アプリケーションサーバ要件

- JBoss 5.0.1
- Oracle WebLogic 10g R3
- IBM WebSphere 7.0

プロジェクト Web サイトファイルをホストする Web サーバ用

- Microsoft Internet Information Server (IIS) 6.0 搭載の Microsoft Windows 2003 Server (R2 sp2)
- Microsoft Internet Information Server (IIS) 7.0 搭載の Microsoft Windows 2008 Server (SE sp2)
- Microsoft TCP/IP ネットワークプロトコル

P6 Web Access Web サーバ用

- Oracle HTTP 2.0 Server 搭載の Microsoft Windows 2003 Server (R2 sp2) および Oracle Enterprise Linux 4
- Microsoft Internet Information Server (IIS) 6.0 搭載の Microsoft Windows 2003 Server (R2 sp2)
- Microsoft Internet Information Server (IIS) 7.0 搭載の Microsoft Windows 2008 Server (SE sp2)
- Apache Web Server 2.2.6 搭載の Microsoft Windows 2003 Server (R2 sp2) および Microsoft Windows 2008 Server (SE sp2)

サポートされる E-メールシステムとネットワークプロトコル



P6 Web Access は、SMTP のみをサポートします。

- インターネット E メール (SMTP) または MAPI はサポートされています。
- ネットワークプロトコルは、データベースベンダのみに依存します。
- Web サイトには TCP/IP が必要です。

Project Management データベースサーバの要求サイズガイド

次のサイズは、Project Management データベースの単一インスタンスを参照するものです。メモリサイズには、オペレーティングシステムが必要とするオーバーヘッドは含まれません。また、サーバのバージョンによって異なります。

Oracle

ファイル	小規模	中規模	大規模
Temp TBS	300 MB	500 MB	1,000 MB
Undo TBS	300 MB	500 MB	1,000 MB
Index TBS	250 MB	500 MB	1,000 MB
Data TBS	250 MB	500 MB	1,000 MB
Lob TBS	250 MB	500 MB	1,000 MB
合計	1,350 MB	2,500 MB	5,000 MB
RAM:	384 MB	512 MB	1024+MB

Microsoft SQL Server

ファイル	小規模	中規模	大規模
データ	300 MB	500 MB	1,000 MB
データログ	150 MB	250 MB	500 MB
一時的	300 MB	500 MB	1,000 MB
一時的なログ	50 MB	100 MB	125 MB
合計	800 MB	1,350 MB	2,625 MB
RAM:	384 MB	512 MB	1024+MB

Methodology Management データベースサーバの要求サイズガイド

次のサイズは、Methodology Management データベースの単一インスタンスを参照するものです。メモリサイズには、オペレーティングシステムが必要とするオーバーヘッドは含まれません。また、サーバのバージョンによって異なります。

Oracle

ファイル	推奨の規模
Temp TBS	100 MB
Undo TBS	100 MB
Index TBS	250 MB
Data TBS	250 MB
Lob TBS	250 MB
合計	950 MB

Microsoft SQL Server

ファイル	推奨の規模
データ	300 MB
データログ	150 MB
一時的	100 MB
一時的なログ	50 MB
合計	600 MB

実際の製品限界

以下の表で、さまざまな実際上の限界を示します。この限界を超えると性能問題が生じます。

アプリケーション 要素		実際のな 限界
Progress Reporter の モジュール	指定期間中にユーザに割り当てられる アクティビティ数	100
Progress Reporter の モジュール	タイムシートごとのアクティビティ数	100
Project Management モジュール	プロジェクトごとのアクティビティ数	100,000
Project Management モジュール	プロジェクトごとの接続数	100,000

データベースのインストール および設定

内容

データベースの自動インストール

手動データベース構成

データベース管理



ネットワークサーバで実行するため、P6 アプリケーションのインストールおよび設定を行うのは経験あるデータベース管理者が行うのが最適ですが、社内にそのような人が存在していない場合もあります。Oracle Primavera では、素早く簡単にデータベースサーバに必要なデータベースコンポーネントをインストールすることができる設定プログラムを提供しています。「[データベースの自動インストール](#)」を参照して、データベースウィザードの指示するステップに従い、新しい Project Management および／または Methodology Management データベースを作成し、必要なデータをロードしてください。

自動手順に従わない場合は、手動でデータベースを設定してデータをロードすることもできます。手順の詳細は、「[手動データベース構成](#)」を参照してください。

データベースのインストールに自動あるいは手動のどちらを選択した場合でも、インストール／設定プロセスに含まれないデータベース設定の変更方法に関する重要な手順については「[データベース管理](#)」を参照してください。

データベースの自動インストール

本章の内容：

概要

データベースウィザードの実行

Oracle データベースのインストールとアプリケーションデータのロードの自動実行

SQL Server データベースのインストールとアプリケーションデータのロードの自動実行

自動インストールプロセスを使って、Project Management および Methodology Management モジュールのデータベースをサーバに設定、ロードするには、以下のステップに従います。

概要

P6 の実行には、2 つのデータベースが使われます。

- Project Management データベース (PMDB) は、P6 で使われる Project Management データを保存します。これは必須データベースです。
- Methodology Management データベース (MMDb) は、新プロジェクトを作成するときにテンプレートとして使用できるメソドログを保存します。このデータベースは Methodology Management モジュールを使用する場合に、インストールする必要があります。

Oracle Database または SQL Server のインストールに関する詳細な作業ステップの情報が必要な場合は、各製品に付属のデータベースドキュメントを参照してください。

P6 は、Oracle、Oracle Database Express Edition、および Microsoft SQL Server データベースをサポートしています。データベースを作成するには、その前に Oracle Server または SQL Server ソフトウェアがインストールされている必要があります。

データベースウィザードを実行して、自動的にデータベース構造を作成し、アプリケーションデータをそこにロードすることができます。あるいは、データベース構造を手動で構築し、バッチファイルを実行してアプリケーションデータをロードすることもできます。本章では自動方法について、また、次の章「[手動データベース構成](#)」では手動方法について説明します。



既にインストールおよび設定されている P6 データベースを最新バージョンにアップグレードする場合の詳細については、285 ページの「[自動データベースアップグレード](#)」を参照してください。



スタンドアローンバージョンの P6 をインストールする (Oracle Database Express Edition が自動的にインストールされる) 場合は、259 ページの「[クライアントモジュールとその他のコンポーネントのインストール](#)」を参照してください。

データベース性能やさらなる設定に関するヒントや特記事項については、79 ページの「[データベース管理](#)」を参照してください。

Oracle に関する特記事項 P6 データベースのインストール前には、以下を考慮してください。

- P6 を Oracle データベースサーバで実行する場合は、Oracle クライアントがデータベースサーバにアクセスするすべてのマシンにインストールされていなければなりません。

- Oracle クライアントをインストールする場合は、TNSPING.EXE ユーティリティプログラムが自動的に、¥oracle¥<ora_home>¥bin フォルダにインストールされます。このユーティリティは、P6 のアプリケーションの実行に必要です。消去しないでください。
- Oracle は、(MTS モードでなく) 専用モード (Dedicated Mode) で実行する必要があります。
- 西欧言語においてユーロ記号の使用が必要な場合は、コードページ WE8MSWIN1252 または、UTF8 を使わなければなりません。
- Oracle 11g Instant Client を使用してユーザが P6 Oracle データベースに接続する場合、ユーザが P6 の使用可能な全機能を利用するために指定する必要がある管理設定については、109 ページの「[Oracle 11g Instant Client を使用した Oracle データベースへの接続](#)」を参照してください。



Oracle データベースのパスワードには、マルチバイト文字は使用できません。

SQL Server に関する特記事項 P6 を SQL Server データベースサーバで実行する場合は、Project Management モジュールのインストール時に、クライアントアクセスに必要な SQL Server ファイルが自動的にインストールされます。

データベースウィザードの実行

データベースウィザードは、新しいデータベース構造を構築したり、アプリケーションデータをそこにロードするガイドとなります。このステップを実行するのに、ユーザはデータベースについての知識に精通している必要はありません。ただし、Oracle または Microsoft SQL Server がすでにデータベースサーバ上にインストールされている必要があります。

データベースウィザードをコマンドラインから実行する方法については、Oracle Primavera サポートナレッジベースを参照してください。

データベースウィザードを実行して新しいデータベースを作成するのは、クライアントコンピュータからでもサーバ自身でも可能です。データベースウィザードは、必要なファイル構造やユーザを作成します。

Methodology Management モジュールを使用する場合は、データベースウィザードを 2 回実行します。最初は、データベース構造を作成し Project Management データベースをロードします。その後、Methodology Management データベースのために再度実行します。

Oracle データベースのインストールとアプリケーションデータのロードの自動実行

以下のステップを踏み、Oracle データベースの作成とアプリケーションデータのロードを行います。



SSL プロトコルを使用する場合は、設定手順について Oracle データベースのドキュメントおよび Oracle Primavera サポートナレッジベースを参照してから、データベースウィザード (dbsetup) を実行してください。



Oracle では、500 MB のテンポラリーテーブルスペースと 500 MB アンドゥテーブルスペースを作成するよう推奨しています。このプロセスに詳しくない場合は、Oracle のデータベースドキュメントを参照してください。

- 1 P6 のメディアまたはダウンロードファイルに含まれている Database フォルダから **dbsetup.bat** (Linux の場合は **dbsetup.sh**) を実行します。



Linux の場合は、`JAVA_HOME` Environment 変数を **dbsetup.sh** ファイルに追加してから実行します。例えば、以下のようになります。
`export JAVA_HOME = /usr/jre 1.6.0_14`



ウィザードの各ダイアログボックスでは、[次へ] をクリックして次ステップへ進みます。

- 2 「Primavera P6」ダイアログボックスで、

- **Install a new database** を選択します。
- サーバタイプとして、**Oracle** を選択します。
- 組織に該当する**業界タイプ**を選択します。

業界タイプの詳細については、28 ページの「[P6 の業界タイプ](#)」を参照してください。

- 3 **Database Selection** ダイアログボックスで、

- 必要なサイズと性能に応じて、**Project Management and Content Repository in one database** または **Project Management and Content Repository in two different databases** を選択します。

コンテンツリポジトリデータは、ドキュメントの共有などのコラボレーション機能で使用されます。**Content Repository only** のオプションは、データベースウィザードを実行しようと試みたものの完了できなかった場合に利用できます。

4 Connection Information ダイアログボックスの

- 「**DBA ユーザ名**」フィールドで、Oracle システムのユーザ名を入力し、データベースにログオンします。例えば、**system** (既定) と入力します。
- 「**DBA パスワード**」フィールドにパスワードを入力し、データベースにログオンします。DBA ユーザ名に **system** を選んだ場合は、**manager** をパスワードとして使ってください。そうでない場合は、入力したユーザ名に対応するパスワードを入力します。
- 「**Database host address**」フィールドに、サーバのマシン名または Oracle がインストールされている IP アドレスを入力します。
- 「**Database host port**」フィールドに、Oracle が使用しているポート番号を入力します。既定値は 1521 です。
- 「**Database name (SID)**」フィールドに Oracle SID を入力します。これは、ユーザまたはその DBA が Oracle クライアントを設定した際に作成された TNSNAMES.ORA ファイルにあります。

5 Oracle テーブルスペースの設定ダイアログボックスで、次へをクリックし、データ、インデックス、LOB テーブルスペースおよび推定テーブルスペースサイズを承諾します。

推定テーブルスペースサイズは、変更することができます。サイズに関するガイドラインについては、39 ページの「[Project Management データベースサーバの要求サイズガイド](#)」を参照してください。

Use existing tablespaces をマークするのは、接続しようとしているデータベースサーバにすでにテーブルスペースがある場合のみです。新規のデータベースサーバの場合、このオプションはマークしないでください。このオプションをマークする場合は、[パート 8](#) に進みます。

6 Specify Oracle Tablespace Locations ダイアログボックスで、Oracle テーブルスペース（データ、インデックス、LOB）のデフォルトロケーションを承諾するか、別の場所を指定します。



このステップで **Create** をクリックすると、プロジェクト管理データベースの初期設定が始まります。この後は、**Previous** をクリックして以前の選択を変更することはできなくなります。ただし、次のステップで **Next** または **Cancel** のいずれかをクリックすることができます。

- 7 テーブルスペースの作成を完了すると、**Creating Oracle Tablespaces** ダイアログボックスで **Next** をクリックします。
- 8 「**Create Oracle Users**」ダイアログボックスで、Oracle 管理者ユーザ、特権ユーザ、パブリックユーザの既定の名前を承諾するか、あるいは適宜、名前を指定します。



管理者ユーザ名に `privuser` を入力してはいけません。これは競合の原因になります。



Oracle 11g を使用する場合は、ユーザ名に使われたものと同じ大文字または小文字をパスワードでも使います。たとえば、ユーザ名として「`ADMUSER`」と入力した場合はパスワードも大文字で「`ADMUSER`」になります。



マルチバイト文字の Oracle データベースのパスワードは、サポートされていません。

デフォルトのテーブルスペースフィールドのドロップダウンリストから、異なったデフォルトテーブルスペースを選ぶことができます。一時テーブルスペースフィールドでは、本手順の開始以前に作成した一時テーブルスペースを使用します。



一時テーブルスペースは、一時型とします。そうしないとデータベースでエラーが発生します。

9 Configuration Options ダイアログボックスで、

- データベースにサンプルのプロジェクトデータを含めたい場合は、**Load sample data** のチェックボックスにマークします。



米ドル (\$) をデータベースの基本通貨として使用したくない場合は、以下のステップに従って基本通貨を選択してください。プロジェクトが進行し始めたら基本通貨を変更することはできません。

基本通貨の設定

表示できる通貨を追加するための情報については、389 ページの「**Project Management** での管理設定と分類の定義」を参照してください。

基本通貨は、データベースに保存するすべてのプロジェクトのコストに使用し、Project Management モジュールのグローバル管理設定によって管理されています。P6 の既定基本通貨は米ドル (\$) です。表示通貨は、P6 のコストデータを表示するのに使われる通貨単位で、ユーザ設定によって管理されます。

基本通貨の為替レートは常に 1.0 です。ユーザがコストデータに基本通貨と異なる通貨を選択した場合は、基本通貨の値に表示通貨の為替レートを掛け、コストと価格フィールドの表示値が計算されます。

例えば、基本通貨が米ドルで表示通貨がユーロの場合で、ユーロの為替レートが .75 の場合は、データベースに保存されている \$10 の値はコストおよび価格フィールドに 7.5 ユーロと表示されます。同様に、7.5 ユーロとコストまたは価格フィールドに入力すると、データベースには \$10 と保存されます。

データが基本通貨と異なる表示通貨で表示される場合、コストと価格の値が僅かに変化することがあります（例えば丸め誤差）。データベースのインストール時に正しい基本通貨を選択している限り、ユーザは表示通貨を基本通貨に一致させることで完全に正確なコストと価格データを表示することができます。

- データベースの基本通貨として米ドル以外の通貨を使用したい場合は、**Currency** フィールドで別の基本通貨を選択します。

- 10 アプリケーションデータを使ってデータベーステーブルをロードするプロセスを開始するには、**Configurations Options** ダイアログボックスで **Install** をクリックします。
- 11 プロセスを完了したら、**Creating Database...** ダイアログボックスで、**Next** をクリックします。



データベースを作成できなかった場合は、ユーザのホームディレクトリにある `PrimaveraDatabaseSetup.log` を参照してください（`C:\¥Documents and Settings¥Administrator\` など）。さらに詳細なサポートが必要な場合は、Oracle グローバルカスタマーサポートまでご連絡ください。

- 12 **Methodology Management** モジュールを使う場合は、**Finish** ダイアログボックスで **Next** をクリックして、再度データベースウィザードを実行します。その他の場合は、**Finish** をクリックしてウィザードを終了します。

両方のアプリケーションデータ（**Project Management** および **Methodology Management**）のインストールが完了したら、クライアントモジュールとその他のコンポーネントをインストールすることができます。サーバの設定とクライアントモジュールおよびその他のコンポーネントのインストールについてのさらなる詳細については、[パート3](#) および [パート4](#) を参照してください。

SQL Server データベースのインストールとアプリケーションデータのロードの自動実行

以下のステップを踏み、SQL Server データベースの作成とアプリケーションデータのロードを行います。

- 1 P6 のメディアまたはダウンロードファイルに含まれている Database フォルダから **dbsetup.bat** (Linux の場合は **dbsetup.sh**) を実行します。



dbsetup.bat ファイルは、マッピングされたドライブから実行する必要があります。



ウィザードの各ダイアログボックスでは、[次へ] をクリックして次ステップへ進みます。

- 2 「Primavera P6」ダイアログボックスで、

- **Install a new database** を選択します。
- サーバタイプとして、**Microsoft SQL Server** を選択します。
- 組織に該当する**業界タイプ**を選択します。

業界タイプの詳細については、28 ページの「[P6 の業界タイプ](#)」を参照してください。

- 3 **Database Selection** ダイアログボックスで、

- 必要なサイズと性能に応じて、**Project Management and Content Repository in one database** または **Project Management and Content Repository in two different databases** を選択します。

コンテンツリポジトリデータは、ドキュメントの共有などのコラボレーション機能で使用されます。**Content Repository only** のオプションは、データベースウィザードを実行しようと試みたものの完了できなかった場合に利用できます。

- 4 **Connection Information** ダイアログボックスの

- **Sys admin user name** フィールドに、Microsoft SQL Server システム管理者名を入力し、サーバに登録します。
Microsoft SQL Server インストール時に既定値を選んだ場合は、システム管理者名を SA のままにしておきます。

- **Sys admin password** フィールドに、このシステム管理者のパスワードを入力します。Microsoft SQL Server インストール時に既定値を選択した場合は、パスワードフィールドを空白のままにしておきます。
- **Database host address** フィールドに、サーバのマシン名または Microsoft SQL Server がインストールされている IP アドレスを入力します。
- **Database host port** フィールドに、Microsoft SQL Server が使用しているポート番号を入力します。既定値は 1433 です。

5 Configuring Microsoft SQL Server Database ダイアログボックスで、**Next** をクリックし、既定値を使用するか、インストールに適切な値に変更します。

データベース名を変更する場合、データベース名の重複は許容されません。指定された名前のデータベースがすでに存在している場合は、固有の名前を入力するよう指示されます。



データベース名には、ダッシュ (-) を使用しないでください。エラーとなります。

データファイルには、データベーステーブルとプロシジャが含まれます。ログファイルには、変更レコードが含まれます。既定で、データベースウィザードは、これらのファイルを Microsoft SQL Server がインストールされているサーバのフォルダに保存します。指定したデータベース名が、ファイル名に使用されます。場所を変更する場合は、サーバ上に保存先のフォルダがなければなりません。

データベースコードページは、Microsoft SQL Server 向けにすでに選択されているページに既定設定されます。必要に応じて、異なったコードページを選択します。



このステップの後、**Next** をクリックすると、プロジェクト管理データベースの初期作成が始まります。この後は、**Previous** をクリックして以前の選択を変更することはできません。ただし、次のステップで **Install** または **Cancel** のいずれかをクリックすることができます。

6 Configuration Options ダイアログボックスで、

- データベースにサンプルのプロジェクトデータを含めたい場合は、**Load sample data** のチェックボックスにマークします。



米ドル (\$) をデータベースの基本通貨として使用したくない場合は、以下のステップに従って基本通貨を選択してください。プロジェクトが進行し始めたら基本通貨を変更することはできません。

表示できる通貨を追加するための情報については、389 ページの「[Project Management モジュールの管理設定と分類の定義](#)」を参照してください。

基本通貨の設定

基本通貨は、データベースに保存するすべてのプロジェクトのコストに使用し、Project Management モジュールのグローバル管理設定によって管理されています。P6 の既定基本通貨は米ドル (\$) です。表示通貨は、P6 のコストデータを表示するのに使われる通貨単位で、ユーザ設定によって管理されます。

基本通貨の為替レートは常に 1.0 です。ユーザがコストデータに基本通貨と異なる通貨を選択した場合は、基本通貨の値に表示通貨の為替レートを掛け、コストと価格フィールドの表示値が計算されます。

例えば、基本通貨が米ドルで表示通貨がユーロの場合で、ユーロの為替レートが .75 の場合は、データベースに保存されている \$10 の値はコストおよび価格フィールドに 7.5 ユーロと表示されます。同様に、7.5 ユーロとコストまたは価格フィールドに入力すると、データベースには \$10 と保存されます。

データが基本通貨と異なる表示通貨で表示される場合、コストと価格の値が僅かに変化することがあります（例えば丸め誤差）。データベースのインストール時に正しい基本通貨を選択している限り、ユーザは表示通貨を基本通貨に一致させることで完全に正確なコストと価格データを表示することができます。

- データベースの基本通貨として米ドル以外の通貨を使用したい場合は、**Currency** フィールドで別の基本通貨を選択します。
- 7 アプリケーションデータを使ってデータベーステーブルをロードするプロセスを開始するには、**Configuration Options** ダイアログボックスで **Install** をクリックします。
- 8 プロセスを完了したら、**Creating Database...** ダイアログボックスで、**Next** をクリックします。



データベースを作成できなかった場合は、ユーザのホームディレクトリにある PrimaveraDatabaseSetup.log を参照してください（「C:\Documents and Settings\Administrator」など）。さらなる支援が必要な場合は、Oracle グローバルカスタマーサポートまでご連絡ください。

- 9 Methodology Management モジュールを使う場合は、**Finish** ダイアログボックスで **Next** をクリックして、再度データベースウィザードを実行します。その他の場合は、**Finish** をクリックしてウィザードを終了します。

両方のアプリケーションデータ（Project Management および Methodology Management）のインストールが完了したら、クライアントモジュールとその他のコンポーネントをインストールすることができます。サーバの設定とクライアントモジュールおよびその他のコンポーネントのインストールについてのさらなる詳細については、[パート3](#) および [パート4](#) を参照してください。性能最適化のためのデータベース設定方法については、79 ページの「[データベース管理](#)」を参照してください。

手動データベース構成

本章の内容：

概要

Oracle 用のデータベース構成の作成とアプリケーションデータのロード

MS SQL サーバおよびアプリケーションデータのロード用のデータベース構造の作成

基本通貨の変更（Oracle および Microsoft SQL Server）

Oracle または Microsoft SQL Server が実行されるサーバ上に、Project Management データベースおよび Methodology Management データベースを手動設定する場合は、本章をお読みください。本章のステップは、データベース管理者 (DBA) が行う必要があります。

設定は、大きく 3 ステップに分かれます。各データベース構造を作成すること、各データベースにアプリケーションデータをロードすること、そしてコンテンツリポジトリを設定することです。

データベース構造の自動作成とデータの自動ロードにウィザードを使用する場合は、45 ページの「[データベースの自動インストール](#)」を参照してください。

Oracle Database Express Edition を使用している場合は、データベースウィザードを実行してください。

概要

P6 の実行には、2 つのデータベースが使われます。

- Project Management データベース (PMDB) は、P6 で使われる Project Management データを保存します。これは必須データベースです。
- Methodology Management データベース (MMDb) は、新プロジェクトを作成するときにテンプレートとして使用できるメソドログを保存します。このデータベースは Methodology Management モジュールを使用する場合に、インストールする必要があります。

サーバとクライアント用の Oracle、またはサーバ用の SQL Server のインストールに関する詳細な作業ステップの情報が必要な場合は、Oracle グローバルカスタマーサポートまでお問い合わせください。

P6 は、Oracle、Oracle Database Express Edition、および Microsoft SQL Server データベースをサポートしています。データベースを作成するにはその前に、MS SQL Server または Oracle サーバソフトウェアがインストールされていなければなりません。



Oracle データベースのパスワードには、マルチバイト文字は使用できません。



Oracle クライアントをインストールする場合は、TNSPING.EXE ユーティリティプログラムが自動的に、`¥oracle¥<ora_home>¥bin` フォルダにインストールされます。このユーティリティは、P6 のアプリケーションの実行に必要です。消去しないでください。



旧バージョンの P6 データベースを手動で設定した場合は、データベースを最新バージョンに自動アップグレードする手順について、285 ページの「[自動データベースアップグレード](#)」を参照してください。データベースを手動でアップグレードする場合は、P6 のメディアまたはダウンロードファイルに含まれている `¥Documentation¥<language>` フォルダから P6 Documentation Center にアクセスして、データベースの手動アップグレードに関するドキュメントを参照してください。



バージョン 6.2.1 以降の P6 には、プライベートデータベースのログインパスワードのセキュリティを拡張する新しい暗号化アルゴリズムが含まれています。ただし、データベースを手動でインストールまたはアップグレードした場合、この新しい暗号化アルゴリズムは自動的に適用されません。既存のプライベートデータベースのログインパスワード（既定のログインとパスワード `privuser` を含む）を適用して新しい暗号化アルゴリズムを使用するには、303 ページの「[データベース構成設定の変更](#)」の説明に従って、これらのパスワードをリセットまたは変更する必要があります。

Oracle 用のデータベース構成の作成とアプリケーションデータのロード

Oracle データベース管理者 (DBA) は、Project Management および Methodology Management データベースを作成し、Oracle Primavera が提供する SQL スクリプトを実行して各データベース構造 (テーブル、インデックス、リレーション関係など) を作成します。



Oracle は、(MTS モードでなく) 専用モード (Dedicated Mode) で実行する必要があります。



西欧言語においてユーロ記号の使用が必要な場合は、コードページ WE8MSWIN1252 または、UTF8 を使わなければなりません。

また、データベースの作成とデータのロードを、ユーザになり代わって自動的に行うウィザードを使用することもできます。さらなる詳細については 45 ページの「データベースの自動インストール」を参照してください。

本項の記述は、読者が Oracle DBA か Oracle データベースの管理に詳しいことを想定しています。すべてのステップを指定された順序で完了する必要があります。手動設定プロセスについて質問がある場合は、先に進む前に Oracle グローバルカスタマーサポートに連絡してください。

Oracle では、以下の手順で説明されているスクリプトを実行する際には SQL Plus を使用するよう推奨しています。

PMDB Oracle データベース構造の作成

ローカルドライブへのスクリプトファイルのコピー

P6 の媒体またはダウンロードファイルの Database フォルダをローカルドライブにコピーします。このセクションでは、すべての手順でローカルドライブ上のコピーを使用します。

データベーステーブルスペースの作成

- 1 SYSTEM またはその他の DBA 権限ユーザとして Oracle にログインします。
- 2 %database%\scripts\install\PM_07_00_00 以下の、**orpm_init_db.sql** スクリプトを実行します。



orpm_init_db.sql スクリプトを実行する代わりに、手動でシステムを使ってデータベースを一時的に作成しテーブルスペースを元に戻すことができます。Oracle は、500 MB のテンポラリーテーブルスペースと 500 MB アンドウテーブルスペースでデータベースを作成するよう推奨しています。Oracle クライアントがデータベースに接続できることを確認してください。このプロセスに詳しくない場合は、Oracle のデータベースドキュメントを参照してください。

ユーザとテーブルの作成

- 1 SYSTEM あるいは、その他の DBA 特権ユーザとして PMDB データベースにログオンします。
- 2 ¥database¥scripts¥install¥PM_07_00_00 以下の、**orpm_create_users.sql** スクリプトを実行します。



orpm_create_users.sql スクリプトを実行すると、ADMUSER、PRIVUSER、および PUBUSER というユーザ名が作成されます。これ以外の管理ユーザ、プライベートユーザ、およびパブリックユーザ名を作成しており、Oracle Primavera のデータベーススクリプトの実行時にこれを使用したい場合は、実行前に該当するスクリプトすべてで必ず *admuser*、*privuser*、または *pubuser* を作成したカスタムユーザ名に置き換えてください。

- 3 PMDB データベースに *admuser* としてログオンします。
- 4 ¥database¥scripts¥install¥PM_07_00_00 以下の、**orpm_tables.sql** スクリプトを実行します。

サンプルデータのインストール

- 1 コマンドプロンプトを開き、データベースフォルダのルートに置かれている *rundataloader.bat* ファイルの場所にディレクトリを変更します。
- 2 以下に類似したステートメントを実行します。

```
rundataloader.bat sample:pmdb_<industry>.zip
admuser/admuser@oracle:<host>:<port>:<instance>
```

業界タイプの詳細については、28 ページの「**P6 の業界タイプ**」を参照してください。

ここで *<industry>* は業界タイプに応じて “ec” または “it” になり、*<host>* は Oracle がインストールされているサーバのマシン名または IP アドレス、*<port>* は Oracle が使用しているポート番号（既定では 1521）、*<instance>* はデータベース名または SID になります（PMDb など）。



サンプルデータの代わりに空のデータをロードしたい場合は、ジップファイル名の最後に **_empty** を追加します。空のデータには、Project Management データベースの実行に必要な最も基本的な情報のみが含まれています。

残りのデータベースオブジェクトの作成

- 1 PMDB データベースに *admuser* としてログオンします。
- 2 ¥database¥scripts¥install¥PM_07_00_00 以下の、**orpm_database_version.sql**、**orpm_ins_aux.sql**、および **orpm_querylib.sql** スクリプトを実行します。

- 3 ¥database¥scripts¥source¥PM_07_00_00 以下の、**orpm_src.sql** スクリプトを実行します。

コンテンツリポジトリデータの作成

以下のステップで使われるスクリプトは、新しい Oracle インスタンス、またはすでに PMDB データが含まれている既存の Oracle インスタンスで実行できます。新しい Oracle インスタンスでコンテンツリポジトリデータを作成したい場合は、66 ページの[を参照してください](#)。

- 1 PMDB データベースで admuser としてログオンし、¥database¥scripts¥install¥JR_01_01_00 以下の **orjr_ins.sql** スクリプトを実行します。
- 2 ¥database¥scripts¥source¥JR_01_01_00 以下の、**orjr_src.sql** スクリプトを実行します。

基本通貨を米ドル (\$) にしたくない場合は、77 ページの「[基本通貨の変更 \(Oracle および Microsoft SQL Server\)](#)」を参照してください。

データベース性能の向上のために、変更できるデータベース設定や実行できるその他のスクリプトについての情報は、79 ページの「[データベース管理](#)」を参照してください。

Oracle 11g Instant Client を使用してユーザが P6 Oracle データベースに接続する場合、ユーザが P6 の使用可能な全機能を利用するために指定する必要がある管理設定については、109 ページの「[Oracle 11g Instant Client を使用した Oracle データベースへの接続](#)」を参照してください。

PMDB Oracle データベースオブジェクトのドロップ

間違った場合、あるいは Project Management データベースのデータベースオブジェクトを作成し直したい場合は、まずデータベースインストールスクリプトで作成したオブジェクトをドロップします。データベースオブジェクトをドロップすると、それらは永久に削除されます。

ユーザにとって便利がよいように、データベースオブジェクトをドロップするスクリプトが提供されています。P6 の媒体またはダウンロードファイルの

¥Database¥scripts¥install¥PM_07_00_00¥drop フォルダ内にある“or”で始まるスクリプトを実行します。特に実行するファイルやアクションなどです。

ORDP_SPS.SQL	ストアドプロシジャをドロップ
ORDP_SYN.SQL	シノニムをドロップ
ORDP_GRN.SQL	特権を上げます
ORDP_FKC.SQL	フォーリンキーの制約をドロップ
ORDP_PK.SQL	プライマリーキーをドロップ
ORDP_NDX.SQL	インデックスをドロップ
ORDP_TAB.SQL	テーブルをドロップ

オブジェクトをドロップするには、admuser としてサーバに接続しなければなりません。データが存在している場合は、上記にリストされている順番にオブジェクトをドロップしなければなりません。

MMDB Oracle データベース構造の作成

Methodology Management を使う予定の場合は、以下のステップすべてを指定された順序で完了する必要があります。

ローカルドライブへのスクリプトファイルのコピー

P6 のメディアまたはダウンロードファイルの Database フォルダをローカルドライブにコピーします。本セクションでは、すべての手順でローカルドライブ上のコピーを使用します。このフォルダが PMDB 向けにすでに作成されている場合は、既存のフォルダを使用できます。

データベーステーブルスペースの作成

- 1 SYSTEM またはその他の DBA 権限ユーザとして Oracle にログインします。
- 2 `¥database¥scripts¥install¥MM_07_00_00` 以下の、**ormm_init_db.sql** スクリプトを実行します。



ormm_init_db.sql スクリプトを実行する代わりに、手動でシステムを使ってデータベースを一時的に作成しテーブルスペースを元に戻すことができます。Oracle は、100 MB のテンポラリーテーブルスペースと 100 MB アンドゥテーブルスペースでデータベースを作成するよう推奨しています。Oracle クライアントがデータベースに接続できることを確認してください。このプロセスに詳しくない場合は、Oracle のデータベースドキュメントを参照してください。

ユーザとテーブルの作成

- 1 SYSTEM あるいは、その他の DBA 特権ユーザとして MMDB データベースにログオンします。
- 2 admuser、privuser、pubuser がまだ作成されていない場合は (PMDb のユーザとテーブルの作成の [パート 2](#))、`¥database¥scripts¥install¥MM_07_00_00` 以下の **ormm_create_users.sql** スクリプトを実行してください。



ormm_create_users.sql スクリプトを実行すると、ADMUSER、PRIVUSER、および PUBUSER というユーザ名が作成されます。これ以外の管理ユーザ、プライベートユーザ、およびパブリックユーザ名を作成しており、Oracle Primavera のデータベーススクリプトの実行時にこれを使用したい場合は、実行前に該当するスクリプトすべてで必ず admuser、privuser、または pubuser を作成したカスタムユーザ名に置き換えてください。

- 3 MMDB データベースに admuser としてログオンします。
- 4 `¥database¥scripts¥install¥MM_07_00_00` 以下の、**ormm_tables.sql** スクリプトを実行します。

サンプルデータのインストール

- 1 コマンドプロンプトを開き、データベースフォルダのルートに置かれている rundataloader.bat ファイルの場所にディレクトリを変更します。
- 2 以下に類似したステートメントを実行します。

```
rundataloader.bat sample:mmdb_<industry>.zip  
admuser/admuser@oracle:<host>:<port>:<instance>
```

業界タイプの詳細については、28 ページの「[P6 の業界タイプ](#)」を参照してください。

ここで <industry> は業界タイプに応じて “ec” または “it” になり、<host> は Oracle がインストールされているサーバのマシン名または IP アドレス、<port> は Oracle が使用しているポート番号（既定では 1521）、<instance> はデータベース名または SID になります（MMDB など）。



サンプルデータの代わりに空のデータをロードしたい場合は、ジップファイル名の最後に **_empty** を追加します。空のデータには、Methodology Management データベースの実行に必要な最も基本的な情報のみが含まれています。

残りのデータベースオブジェクトの作成

- 1 MMDB データベースに admuser としてログオンします。
- 2 %database%\scripts\install\MM_07_00_00 以下の、**ormm_database_version.sql** および **ormm_ins_aux.sql** スクリプトを実行します。
- 3 %database%\scripts\source\MM_07_00_00 以下の、**ormm_src.sql** スクリプトを実行します。

基本通貨を米ドル (\$) にしたくない場合は、77 ページの「[基本通貨の変更 \(Oracle および Microsoft SQL Server\)](#)」を参照してください。

データベース性能の向上のために、変更できるデータベース設定や実行できるその他のスクリプトについての情報は、79 ページの「[データベース管理](#)」を参照してください。

Oracle 11g Instant Client を使用してユーザが P6 Oracle データベースに接続する場合、ユーザが P6 の使用可能な全機能を利用するために指定する必要がある管理設定については、109 ページの「[Oracle 11g Instant Client を使用した Oracle データベースへの接続](#)」を参照してください。

MMDB Oracle データベースオブジェクトのドロップ

間違った場合、あるいは Methodology Management データベースのデータベースオブジェクトを作成し直したい場合は、まずデータベースインストールスクリプトで作成したオブジェクトをドロップします。データベースオブジェクトをドロップすると、それらは永久に削除されます。

ユーザにとって便利がいいように、データベースオブジェクトをドロップするスクリプトが提供されています。

¥Database¥scripts¥install¥MM_07_00_00¥ 内の “or” で始まるスクリプトを実行します。

drop フォルダで「ss」で始まるスクリプトを実行します。特に実行するファイルやアクションなどです。

ORDP_SPS.SQL	ストアードプロシジャをドロップ
ORDP_SYN.SQL	シノニムをドロップ
ORDP_GRN.SQL	特権を取り上げます
ORDP_FKC.SQL	フォーリンキーの制約をドロップ
ORDP_PK.SQL	プライマリーキーをドロップ
ORDP_NDX.SQL	インデックスをドロップ
ORDP_TAB.SQL	テーブルをドロップ

オブジェクトをドロップするには、admuser としてサーバに接続しなければなりません。データが存在している場合は、上記にリストされている順番にオブジェクトをドロップしなければなりません。

PMDB がある同じ Oracle インスタンスにコンテンツデータを追加したい場合は、61 ページの「コンテンツリポジトリデータの作成」を参照してください。

新しい Oracle インスタンスでのコンテンツリポジトリデータベース構造の作成

必要なサイズやパフォーマンスに応じて、PMDB データを含む既存の Oracle インスタンスに追加するのではなく、新規 Oracle インスタンスにコンテンツリポジトリを設定した方がよいこともあります。

データベーステーブルスペースの作成

- 1 SYSTEM またはその他の DBA 権限ユーザとして新規 Oracle インスタンスにログインします。
- 2 `¥database¥scripts¥install¥JR_01_01_00` 以下の、**orjr_init_db.sql** スクリプトを実行します。

スクリプトを実行すると、データベースの基本的な構造が作成されます。



orjr_init_db.sql スクリプトを実行する代わりに、手動でシステムを使ってデータベースを一時的に作成しテーブルスペースを元に戻すことができます。Oracle では、サイズを自動拡張 (autoextend) に設定するよう推奨しています。Oracle クライアントがデータベースに接続できることを確認してください。このプロセスに詳しくない場合は、Oracle のデータベースドキュメントを参照してください。

ユーザの作成

- 1 SYSTEM あるいは、その他の DBA 特権ユーザとして Oracle データベースにログオンします。
- 2 `¥database¥scripts¥install¥JR_01_01_00` 以下の、**orjr_create_users.sql** スクリプトを実行します。

スクリプトを実行すると、CRUSER という名前のユーザが作成されます。

コンテンツリポジトリデータの作成

- 1 CRUSER として新規 Oracle データベースにログオンします。
- 2 `¥database¥scripts¥install¥JR_01_01_00` 以下の、**orjr_ins.sql** スクリプトを実行します。
- 3 `¥database¥scripts¥source¥JR_01_01_00` 以下の、**orjr_src.sql** スクリプトを実行します。

MS SQL サーバおよびアプリケーションデータのロード用のデータベース構造の作成

Microsoft SQL Server DBA は、Project Management および Methodology Management データベースを作成し、Oracle Primavera が提供する SQL スクリプトを実行して各データベース構造（テーブル、インデックス、リレーション関係など）を作成します。

さらなる詳細情報については、34 ページの「[クライアントおよびサーバの要件](#)」を参照してください。

P6 は Microsoft SQL Server 2005 をサポートしています。本項の記述は、作業者が DBA もしくは Microsoft SQL Server データベースの管理に詳しいことを想定しています。すべてのステップを指定された順序で完了する必要があります。手動設定プロセスについて質問がある場合は、先に進む前に Oracle グローバルカスタマーサポートに連絡してください。

Microsoft SQL Server データベース構造を作成する前に、システム管理者 (SA) としてサーバに登録し、Microsoft SQL Server Management Studio で以下のサーバレベルの設定変更を確認する必要があります。

- **ワークスレッド最大数** サーバに接続されるユーザをサポートする最大スレッド数を指定します。既定設定 (255) は、構成によっては同時接続ユーザ数に対して多過ぎる可能性があります。ワークスレッドには、使用されなくてもスレッドが割り当てられます。つまり、割り当てられた作業スレッドに対して同時接続数が少なければ、メモリリソースを無駄にしている可能性があります。
- **メモリ** 設定は、動的に保持します。Microsoft SQL Server は、サーバで利用可能なメモリ最大量まで、必要に応じて動的にメモリを獲得したり解放したりします。
- **オープンオブジェクト** 設定は、動的に保持します。この設定は、Microsoft SQL Server で同時に開くことができる最大オブジェクト数を特定します。この値は、現在のシステムニーズにより、自動的に設定されます。この値を変更する必要はありません。
- **ユーザ接続数** 設定は、0 にします。これによって、Microsoft SQL Server に、同時ユーザ接続数を必要数に応じて最大値まで調整することができるようになります。
- **ネットワークパケットサイズ** 16384 に設定します。

サーバの設定が完了したら、Microsoft SQL Server を停止して開始します。これによって確実に変更を有効にします。

PMDB Microsoft SQL Server データベース構造の作成

ローカルドライブへのスクリプトファイルのコピー

P6 のメディアまたはダウンロードファイルの Database フォルダをローカルドライブにコピーします。本セクションでは、すべての手順でローカルドライブ上のコピーを使用します。

データベーステーブルスペースの作成

- 1 SA ユーザとしてサーバに登録
- 2 Microsoft SQL Server Management Studio を開きます。
¥database¥scripts¥install¥PM_07_00_00 以下の、
sspm_init_db.sql スクリプトを実行します。



sspm_init_db.sql スクリプトを実行する代わりに、PMDB という名前のデータベース（データファイルは 500 MB 以上、ログファイルは 200 MB 以上）を手動で作成できます。ファイルグループの **pmdb_dat1**、**pmdb_lob1** と **pmdb_ndx**、および各グループのデータベースファイルを作成します。
pmdb_dat1 を既定のファイルグループにします。ユーザの構成によって、これらのファイルグループを物理的に別々のドライブに設定することも考慮してください。



手動で PMDB を作成する場合は、必ず互換性レベルを SQL Server 2000 (80) に設定してください。

初期のテーブルスペースサイズは、データベースにどの程度のデータ量を保存するかによって変更したり、量を増減したりできます。また、自動拡大ファイルのチェックボックスをマークすることによって、これらの値は必要に応じて自動的に増加します。サイズに関するガイドラインについては、39 ページの「[Project Management データベースサーバの要求サイズガイド](#)」を参照してください。



Oracle は、Microsoft SQL Server Management Studio を使ってこれらのステップを行うことを推奨します。

ユーザとテーブルの作成

- 1 PMDB データベースに SA ユーザとしてログオンします。
- 2 ¥database¥scripts¥install¥PM_07_00_00 以下の、
sspm_create_users.sql スクリプトを実行します。



`sspm_create_users.sql` スクリプトを実行すると、ADMUSER、PRIVUSER、およびPUBUSER というユーザ名が作成されます。これ以外の管理ユーザ、プライベートユーザ、およびパブリックユーザ名を作成しており、Oracle Primavera のデータベーススクリプトの実行時にこれを使用したい場合は、実行前に該当するスクリプトすべてで必ず `admuser`、`privuser`、または `pubuser` を作成したカスタムユーザ名に置き換えてください。

- 3 ¥database¥scripts¥install¥PM_07_00_00 以下の、`sspm_tables.sql` スクリプトを実行します。

サンプルデータのインストール

- 1 コマンドプロンプトを開き、データベースフォルダのルートに置かれている `rundataloader.bat` ファイルの場所にディレクトリを変更します。
- 2 以下に類似したステートメントを実行します。

```
rundataloader.bat sample:pmdb_<industry>.zip
sa/sa@sqlserver:<host>:<port>:<instance>
```

業界タイプの詳細については、28 ページの「**P6 の業界タイプ**」を参照してください。

ここで `<industry>` は業界タイプに応じて“ec”または“it”になり、`<host>` は SQL Server がインストールされているサーバのマシン名または IP アドレス、`<port>` は SQL Server が使用しているポート番号（既定では 1433）、`<instance>` はデータベース名になります（PMDB など）。



サンプルデータの代わりに空のデータをロードしたい場合は、ジップファイル名の最後に **_empty** を追加します。空のデータには、Project Management データベースの実行に必要な最も基本的な情報のみが含まれています。

残りのデータベースオブジェクトの作成

- 1 PMDB データベースに SA ユーザとしてログオンします。
- 2 ¥database¥scripts¥install¥PM_07_00_00 以下の、`sspm_database_version.sql`、`sspm_ins_aux.sql`、および `sspm_querylib.sql` スクリプトを実行します。
- 3 ¥database¥scripts¥source¥PM_07_00_00 以下の、`sspm_src.sql` スクリプトを実行します。

コンテンツリポジトリデータの作成

以下のステップで使われるスクリプトは、新規データベース、またはすでに PMDB データが含まれている既存のデータベースで実行できます。新規データベースでコンテンツリポジトリデータを作成したい場合は、76 ページのを参照してください。

PMDb データベースで SA ユーザとしてログオンし、
¥database¥scripts¥install¥JR_01_01_00 以下の **ssjr_ins.sql** スクリプトを実行します。

基本通貨を米ドル (\$) にしたくない場合は、77 ページの「[基本通貨の変更 \(Oracle および Microsoft SQL Server\)](#)」を参照してください。

データベース性能の向上のために、変更できるデータベース設定や実行できるその他のスクリプトについての情報は、79 ページの「[データベース管理](#)」を参照してください。

PMDB Microsoft SQL Server データベースオブジェクトのドロップ

間違った場合、あるいは Project Management データベースのデータベースオブジェクトを作成し直したい場合は、まずデータベースインストールスクリプトで作成したオブジェクトをドロップします。データベースオブジェクトをドロップすると、それらは永久に削除されます。

ユーザにとって便利がいいように、データベースオブジェクトをドロップするスクリプトが提供されています。P6 の媒体またはダウンロードファイルの

¥Database¥scripts¥install¥PM_07_00_00¥drop フォルダ内にある“ss”で始まるスクリプトを実行します。特に実行するファイルやアクションなどです。

SSDP_SPS.SQL	ストアードプロシジャをドロップ
SSDP_SYN.SQL	シノニムをドロップ
SSDP_GRN.SQL	特権を取り上げます
SSDP_FKC.SQL	フォーリンキーの制約をドロップ
SSDP_PK.SQL	プライマリーキーをドロップ
SSDP_NDX.SQL	インデックスをドロップ
SSDP_TAB.SQL	テーブルをドロップ

オブジェクトをドロップするには、SA ユーザとしてサーバに接続しなければなりません。データが存在している場合は、上記の順にスクリプトを実行しなければなりません。

MMDB Microsoft SQL Server データベース構造の作成

Methodology Management を使う予定の場合は、以下のステップすべてを指定された順序で完了する必要があります。

ローカルドライブへのスクリプトファイルのコピー

P6 のメディアまたはダウンロードファイルの Database フォルダをローカルドライブにコピーします。本セクションでは、すべての手順でローカルドライブ上のコピーを使用します。このフォルダが PMDB 向けにすでに作成されている場合は、既存のフォルダを使用できます。



Oracle は、Microsoft SQL Server Management Studio を使ってこれらのステップを行うことを推奨します。

データベーステーブルスペースの作成

- 1 SA ユーザとして SQL にログインします。
- 2 ¥database¥scripts¥install¥MM_07_00_00 以下の、**ssmm_init_db.sql** スクリプトを実行します。



ssmm_init_db.sql スクリプトを実行する代わりに、MMDB という名前のデータベース（データファイルは 300 MB 以上、ログファイルは 150 MB 以上）を手動で作成できます。ファイルグループの **mmdb_dat1**、**mmdb_lob1**、**mmdb_ndx**、および各グループのデータベースファイルを作成します。**mmdb_dat1** を既定のファイルグループにします。ユーザの構成によって、これらのファイルグループを物理的に別々のドライブに設定することも考慮してください。



手動で MMDB を作成する場合は、必ず互換性レベルを SQL Server 2000 (80) に設定してください。

初期のテーブルスペースサイズは、データベースにどの程度のデータ量を保存するかによって変更したり、量を増減したりできます。また、自動拡大ファイルのチェックボックスをマークすることによって、これらの値は必要に応じて自動的に増加します。サイズに関するガイドラインについては、40 ページの「[Methodology Management データベースサーバの要求サイズガイド](#)」を参照してください。

ユーザとテーブルの作成

- 1 MMDB データベースに SA ユーザとしてログオンします。
- 2 admuser、privuser、pubuser がまだ作成されていない場合は (PMDb のユーザとテーブルの作成の [パート 2](#))、
¥database¥scripts¥install¥MM_07_00_00 以下の
ssmm_create_users.sql スクリプトを実行してください。



ssmm_create_users.sql スクリプトを実行すると、ADMUSER、PRIVUSER、および PUBUSER というユーザ名が作成されます。これ以外の管理ユーザ、プライベートユーザ、およびパブリックユーザ名を作成しており、Oracle Primavera のデータベーススクリプトの実行時にこれを使用したい場合は、実行前に該当するスクリプトすべてで必ず admuser、privuser、または pubuser を作成したカスタムユーザ名に置き換えてください。

- 3 ¥database¥scripts¥install¥MM_07_00_00 以下の、
ssmm_tables.sql スクリプトを実行します。

サンプルデータのインストール

- 1 コマンドプロンプトを開き、データベースフォルダのルートに置かれている rundataloader.bat ファイルの場所にディレクトリを変更します。
- 2 以下に類似したステートメントを実行します。

```
rundataloader.bat sample:mmdb_<industry>.zip
sa/sa@sqlserver:<host>:<port>:<instance>
```

業界タイプの詳細については、28 ページの「[P6 の業界タイプ](#)」を参照してください。

ここで <industry> は業界タイプに応じて “ec” または “it” になり、<host> は SQL がインストールされているサーバのマシン名または IP アドレス、<port> は SQL が使用しているポート番号（既定では 1433）、<instance> はデータベース名になります（MMDB など）。



サンプルデータの代わりに空のデータをロードしたい場合は、ジップファイル名の最後に **_empty** を追加します。空のデータには、Methodology Management データベースの実行に必要な最も基本的な情報のみが含まれています。

残りのデータベースオブジェクトの作成

- 1 MMDB データベースに SA ユーザとしてログオンします。
- 2 ¥database¥scripts¥install¥MM_07_00_00 以下の、
ssmm_database_version.sql および **ssmm_ins_aux.sql** スクリプトを実行します。
- 3 ¥database¥scripts¥source¥MM_07_00_00 以下の、**ssmm_src.sql** スクリプトを実行します。

基本通貨を米ドル (\$) にしたくない場合は、77 ページの「[基本通貨の変更 \(Oracle および Microsoft SQL Server\)](#)」を参照してください。

データベース性能の向上のために、変更できるデータベース設定や実行できるその他のスクリプトについての情報は、79 ページの「[データベース管理](#)」を参照してください。

MMDB Microsoft SQL Server データベースオブジェクトのドロップ

間違った場合、あるいは Methodology Management データベースのデータベースオブジェクトを作成し直したい場合は、まずデータベースインストールスクリプトで作成したオブジェクトをドロップします。データベースオブジェクトをドロップすると、それらは永久に削除されます。

ユーザにとって便利がいいように、データベースオブジェクトをドロップするスクリプトが提供されています。

¥Database¥scripts¥install¥MM_07_00_00¥ 内の “ss” で始まるスクリプトを実行します。

drop フォルダで「ss」で始まるスクリプトを実行します。特に実行するファイルやアクションなどです。

SSDP_SPS.SQL	ストアードプロシジャをドロップ
SSDP_SYN.SQL	シノニムをドロップ
SSDP_GRN.SQL	特権を取り上げます
SSDP_FKC.SQL	フォーリンキーの制約をドロップ
SSDP_NDX.SQL	インデックスをドロップ
SSDP_PK.SQL	プライマリーキーをドロップ
SSDP_TAB.SQL	テーブルをドロップ

オブジェクトをドロップするには、SA ユーザとしてサーバに接続しなければなりません。データが存在している場合は、上記の順にスクリプトを実行しなければなりません。

PMDB がある同じ SQL Server データベースにコンテンツデータを追加したい場合は、70 ページの「コンテンツリポジトリデータの作成」を参照してください。

新しい SQL Server データベースでのコンテンツリポジトリデータベース構造の作成

必要なサイズやパフォーマンスに応じて、既存の PMDB データベースに追加するのではなく、新規 SQL Server データベースにコンテンツリポジトリを設定した方がよいこともあります。

データベーステーブルスペースの作成

- 1 SQL Server データベースに SA ユーザとしてログオンします。
- 2 ¥database¥scripts¥install¥JR_01_01_00 以下の、**ssjr_init_db.sql** スクリプトを実行します。

スクリプトを実行すると、データベースの基本的な構造が作成されます。



ssjr_init_db.sql スクリプトを実行する代わりに、手動でデータとログファイルを使ってデータベースを作成することができます。Oracle では、必要に応じて自動的に拡張するようサイズを設定することをお勧めします。

コンテンツリポジトリデータの作成

- 1 SQL Server データベースに SA ユーザとしてログオンします。
- 2 ¥database¥scripts¥install¥JR_01_01_00 以下の、**ssjr_ins.sql** スクリプトを実行します。

基本通貨の変更 (Oracle および Microsoft SQL Server)

Project Management および Methodology Management データベースを手動で作成、設定した後、データベースで基本通貨として米ドル (\$) を使用したくない場合は、基本通貨を変更する必要があります。



プロジェクトが進行し始めたら基本通貨を変更することはできません。

表示できる通貨を追加するための情報については、389 ページの「[Project Management](#) での管理設定と分類の定義」を参照してください。

基本通貨の設定

基本通貨は、データベースに保存するすべてのプロジェクトのコストに使用し、Project Management モジュールのグローバル管理設定によって管理されています。P6 の既定基本通貨は米ドル (\$) です。表示通貨は、P6 のコストデータを表示するのに使われる通貨単位で、ユーザ設定によって管理されます。

基本通貨の為替レートは常に 1.0 です。ユーザがコストデータに基本通貨と異なる通貨を選択した場合は、基本通貨の値に表示通貨の為替レートを掛け、コストと価格フィールドの表示値が計算されます。

例えば、基本通貨が米ドルで表示通貨がユーロの場合で、ユーロの為替レートが .75 の場合は、データベースに保存されている \$10 の値はコストおよび価格フィールドに 7.5 ユーロと表示されます。同様に、7.5 ユーロとコストまたは価格フィールドに入力すると、データベースには \$10 と保存されます。

データが基本通貨と異なる表示通貨で表示される場合、コストと価格の値が僅かに変化することがあります (例えば丸め誤差)。データベースのインストール時に正しい基本通貨を選択している限り、ユーザは表示通貨を基本通貨に一致させることで完全に正確なコストと価格データを表示することができます。

通貨選択のレビュー

基本通貨の変更プロセスには、Oracle Primavera が提供したスクリプトの編集と実行が含まれています。既定では米ドルが基本通貨であり、スクリプトで使用される短縮形は **USD** です。スクリプトで使用する必要な通貨の短縮形を知りたい場合は、まず利用可能な短縮形のリストを確認してください。このためには、Project Management または Methodology Management データベースで以下のクエリを実行します。

```
select curr_type, curr_short_name from currtype;
```

基本通貨の変更

- 1 P6 のメディアまたはダウンロードファイルで、¥Database¥scripts¥common を探します。次のいずれか 1 つのスクリプトをローカルドライブにコピーします。

Oracle 用 **or_set_currency.sql**

SQL Server 用 **ss_set_currency.sql**

- 2 メディアからスクリプトがコピーされている場合は、スクリプトファイルの読み取り専用の属性を外します。

メディア上のファイルは読み取り専用なので、CD または DVD からファイルをコピーするとこの属性がかかります。Windows Explorer でファイルを右クリックし、プロパティを選び読み取り専用のチェックボックスを外します。

- 3 編集用にスクリプトを開き、以下を含むラインを見つけます。
v_new_base_currency: = 'USD'
- 4 USD から、選択した通貨の短縮形に置き換えます。
- 5 変更を保存して、修正されたスクリプトを実行します。

データベース管理

本章の内容：

P6 でのバックグラウンド処理とク
リーンアップ

RDBMS スケジューラの設定

Settings テーブル

Setting 値の読み書き

バックグラウンドジョブ実行のト
ラッキング

SYMON (System Monitor)

DAMON (Data Monitor)

Oracle データベース性能の向上

安全な削除の設定

ネイティブデータベース監査

Oracle 11g Instant Client を使用し
た Oracle データベースへの接続

本章を読むと、RDBMS によって供給されるスケジューラの設定方法、Oracle と SQL P6 データベースの性能を最適化する方法、データベースの編集、削除、追加の監視を行うネイティブデータベース監査機能の設定方法を学ぶことができます。

P6 でのバックグラウンド処理とクリーンアップ

概要

旧バージョン P6 以前は、データベースのクリーンアップ作業は PM (Project Management) クライアントアプリケーションによって起動されていました。クリーンアップ作業によって、これらのタスクは個別セッションからのユーザログインまたはログアウトの際、あるいはツールメニューのオプションから手動で起動されたときに PM クライアントから自動的に起動されていました。

現行バージョン クリーンアップタスクはリソース集約的で時間がかかるため、P6 ではこれらのタスクはデータベースサーバ上で実行する 2 つのバックグラウンドジョブで起動されるようになりました。

- SYMON (System Monitor) は、数秒以内に完了するタスクの実行手順を担います。
- DAMON (Data Monitor) は、完了までに数秒以上かかるプロセスの実行を担います。

これらのジョブの両方とも既定により予め設定されています。既定設定は多くの環境で最適な値ですので、通常これを調整する必要はありません。しかし、特定の環境でより最適化が必要な場合は、この設定を変更しバックグラウンドジョブの動きを調整することができます。

RDBMS スケジューラ バックグラウンドジョブは RDBMS によって供給されるジョブスケジューラで起動されるので、該当 RDBMS のスケジューラが正しく設定されているかどうか確認する必要があります。RDBMS の設定パラメータについては、81 ページの「[RDBMS スケジューラの設定](#)」を参照してください。

RDBMS スケジューラの設定

Oracle

P6 は DBMS_SCHEDULER を使って Oracle のジョブスケジューリングを行います。P6 バージョン 7.0 に対するパラメータの変更は必要ありません。

SQL Server

SQL Server 2005 ジョブは、ジョブをスケジューリングする際に SQL Agent を使用します。SQL Server 2005 を使用する場合は、サーバ上で SQL Server Agent サービスが起動されており、起動タイプが自動となっていることを確認してください。

Settings テーブル

Settings テーブルの概要

Settings テーブルには、バックグラウンド処理の動きを設定する値ペアが含まれます。

Setting 名 Setting 名は、2 つのコンポーネントによって構成されます。ネームスペースと **setting** 名です。ネームスペースコンポーネントは、ドット記法の文字列で、パラメータへの正式なパスを示します。2 つ目のコンポーネントは、文字列名を表します。これら 2 つのコンポーネントが合わさって完全な **setting** 名となります。

値 SETTINGS テーブルの値は、大文字小文字の区別があります。ペアの値部分は、以下の型のいずれかになります。

- 文字列。文字列型は自由なテキスト値です。最も普通な文字列サブタイプは、以下の表に表すような数字部と単位部の組み合わせの時間間隔です。

表 1: 時間間隔サブタイプ

数字部分	単位部分	例	意味
	d	‘30d’	30 日間隔
	h	‘2h’	2 時間間隔
	m	‘10m’	10 分間隔
	s	‘30s’	30 秒間隔

- 数値。数値データ型はすべての数字を表します。
- ブーリアン。ブーリアン型は 2 つの値のどちらかの値をとることができます。真または偽で、ゼロは偽をその他の値は真を示します。
- 日付。

Setting 例 以下に setting 例を示します。

- ネームスペース : database.cleanup.Usession
- Setting 名 : ExpiredSessionTimeout
- 値 : 2h (2 時間間隔)

Setting 値の読み書き

Settings は Settings API 手順によって設定することができます。この手順は、レジストリまたは INI file プロシジャコールに似ています。

Settings 値の読み出し 以下の SETTINGS_READ_* 手順を使い、具体的な設定の現在値を特定します。

```
SETTINGS_READ_STRING(ret_val,namespace,settings_name,default)
```

```
SETTINGS_READ_DATE(ret_val,namespace,settings_name,default)
```

```
SETTINGS_READ_NUMBER(ret_val,namespace,settings_name,default)
```

```
SETTINGS_READ_BOOL(ret_val,namespace,settings_name,default)
```

例として、以下の Oracle および SQL サーバのコードスニペットは、setting 値の読み出しに使われるこれら手順の使い方を示します。

Oracle の例： Oracle で KeepInterval setting 値を取り出すには、以下のコードを使います。

```
SQL> variable vset varchar2(255)
```

```
SQL> exec settings_read_string(:vset,' database.cleanup.Usession',  
' ExpiredSessionTimeout');
```

システムは以下の応答をします。
PL/SQL procedure successfully completed.

```
SQL> print vset
```

SQL Server の例： SQL で KeepInterval setting 値を取り出すには、以下のコードを使います。

```
declare @vset varchar(255)
```

```
exec settings_read_string @vset  
OUTPUT,' database.cleanup.Usession', ' ExpiredSessionTimeout'
```

```
print @vset
```

Setting 値の書き込み 特定の設定の値を設定するには、SETTINGS_WRITE_STRING プロシジャを使用します。

```
SETTINGS_WRITE_STRING(new value,namespace,settings_name);
```

Oracle と SQL サーバデータベースの以下のコードスニペットは、この手順を使って ExpiredSessionTimeout setting 値を 12 時間に設定する方法を示します。

Oracle の例： Oracle データベースで ExpiredSessionTimeout setting を 12 時間に設定するには、以下の手順に従います。

- 1 ユーザ名として privuser を使い、SQL *Plus にログインします。
- 2 以下のステートメントを実行します。

```
SQL > exec SETTINGS_WRITE_STRING  
( '12h', 'database.cleanup.Usession', 'ExpiredSessionTimeout' );
```

SQL Server の例： SQL サーバデータベースで ExpiredSessionTimeout setting 値を 12 時間に設定するには、以下の手順を使います。

- 1 クエリアナライザ /SSMS を開き、privuser として接続します。
- 2 PMDB データベースを選択し、以下のステートメントを実行します（例として 12 時間を使います）。

```
exec SETTINGS_WRITE_STRING  
'12h','database.cleanup.Usession','ExpiredSessionTimeout'  
'ExpiredSessionTimeout'
```

バックグラウンドジョブ実行のトラッキング

バックグラウンドジョブの実行は、ハイレベルステータス設定の監視または BGPLOG テーブルを点検することでトラッキングすることができます。

ハイレベルステータス設定の監視 ジョブの実行ごとに、`setting_name = 'HeartBeatTime.'` の `SETTINGS` テーブルが更新されます。ジョブは実行中に複数回この値を更新することがあります。この時間と現在の日付の最大差を監視することで、ジョブが素早く実行されていることを確認できます。`HeartBeatTime` の設定については、以下のハイレベルステータス設定テーブルを参照してください。

表2: ハイレベルステータス設定

バックグラウンドジョブの SYMON が最後に実行された日付と時刻	
ネームスペース	database.background.Symon
Setting 名	HeartBeatTime
既定の設定	該当なし
バックグラウンドジョブの DAMON が最後に実行された日付と時刻	
ネームスペース	database.background.Damon
Setting 名	HeartBeatTime
既定の設定	該当なし

BGPLOG テーブルの点検 バックグラウンドジョブの実行は、BGPLOG テーブルを点検することでもトラッキングすることができます。BGPLOG テーブルにはバックグラウンド処理からの詳細エントリが保持されています。例えば、情報エントリ、経過時間、エラー情報などです。このテーブルの内容についての詳細は、BGPLOG テーブルの説明を参照してください。

表3: BGPLOG テーブルの説明

カラム	説明	値
Log_time	バックグラウンド処理でログエントリが行われた時刻	Datetime
Source	ログエントリを生成するプログラム	“system_monitor”、 “data_monitor”
タイプ	メッセージタイプ	情報、経過時間、エラー
説明	バックグラウンド処理からのメッセージ	可変のメッセージに括弧内の数字が処理済みの行数を示します。例えば、「Complete BGPLOG (40)」というメッセージは 40 行が処理されたことを示します。

SYMON (System Monitor)

SYMON は、シンプルな P6 タスクを比較的速いスケジュールで実行させるものです。既定では、ジョブは毎分実行されるように設定されています。このジョブに割り当てるタスクは毎回の実行に数秒以上かからないものとします。このプロシジャでは、既定の 1 分間隔は変更してはいけません。

SYMON で実行されるプロシジャ

PRMQUEUE プロシジャと USESSION_CLEANUP_EXPIRED プロシジャは SYMON が実行します。

PRMQUEUE PRMQUEUE プロシジャはプロジェクトセキュリティ用の PRMQUEUE エントリを処理します。

USESSION_CLEANUP USESSION_CLEANUP_EXPIRED プロシジャは、失効セッション設定に基づき last_active_time を更新しなかった USESSION レコードを論理的に削除します。失効の USESSION レコードを論理的に削除することで、利用可能なモジュールアクセスログイン数を最大化できます。内在のデータをクリーンアップしない（物理的に行を削除）ので、タスクは早く完了します。

失効セッションのクリーンアップは、SETTINGS テーブル内の値によって制御されます。既定では、失効セッションのクリーンアップは 2 時間ごとに行われますが、SETTING テーブルにはこの設定値がありません。SETTINGS_WRITE_STRING (<value>, <namespace>, <setting>) ストアドプロシジャを使って、既定のクリーンアップ値を変更します。

例えば、"2d" との値を設定すると、2 日より前の失効セッションだけを削除します。



Oracle は、失効セッションのクリーンアップは、少なくとも最長ジョブの実行期間より少なくとも 1 時間長く設定することを推奨します。例えば、最長のジョブがサマライザジョブだとして、通常 12 時間かかるとします。SETTINGS テーブルの値は少なくとも 13 にすべきです。

USESSION_CLEANUP_EXPIRED Settings については、以下の
テーブルを参照してください。

表 4: USESSION_CLEANUP_EXPIRED Settings

Setting の説明 : 通常のセッションのタイムアウト期間	
ネームスペース	database.cleanup.Usession
Setting 名	ExpiredSessionTimeout
既定の設定	2h
タイプ	間隔
Setting の説明 : アプリケーションで実行する機能に基づく長時間 実行中セッションのタイムアウト期間（すなわち、スケジューリン グ、レベリング、要約など）。	
ネームスペース	database.cleanup.Usession
Setting 名	ExpiredLongSessionTimeout
既定の設定	12h
タイプ	間隔

DAMON (Data Monitor)

2 番目のデータベースジョブは、DAMON データモニタージョブです。DAMON ジョブは、バックグラウンド処理のほとんどの実行を占め、比較的長時間の実行となる可能性の高いアプリケーションに必要なバックグラウンドクリーンアップ処理を実行する役目を担っています。

Oracle

DAMON は、既定で、毎週土曜日に実行されます。DAMON は、Oracle DBMS_SCHEDULER パッケージを使用して、ジョブをスケジュールします。そのスケジュールは、DBMS_SCHEDULER 間隔と同じパラメータを使用する間隔設定により制御できます。さらなる詳細については、Oracle データベースのドキュメントを参照してください。

SQL Server

DAMON は、既定で、毎週土曜日に実行されます。隔週の実行も設定できます。また、実行日を指定することもできます。隔週で DAMON を実行するには、次のコマンドを使用して間隔を設定します。-eg 2W

DAMON の実行日を指定するには、ネームスペースの下で以下の設定を使用します。‘Database.background.Damon’
<DayOfWeek>

DAMON により実行されるプロシジャ

DAMON によって実行されるプロシジャは以下のタスクを実行します。

- バックグラウンドログを含む BGPLOG テーブルのクリーンアップ。
- REFRDEL テーブルのクリーンアップ。
- PRMQUEUE テーブルのクリーンアップ。
- 残りの USESSION レコードの物理的クリーンアップ。
- 論理的に削除されたレコードのクリーンアップ。
- PRMAUDIT テーブルのクリーンアップ。
- USESSION 監査テーブル (USESSAUD) のクリーンアップ。
- リリース固有データのクリーンアップ実行。

さらに、DAMON プロセスの機能は、ユーザ定義プロシジャの USER_DEFINED_BACKGROUND を使用して動的に拡張することができます。

DAMON プロシジャの設定

BGPLOG_CLEANUP このプロシジャは、BGPLOG テーブルを 適切なサイズに保持します。既定のクリーンアップ間隔は 5 日間で、テーブルサイズは約 54,000 レコードとなります。

BGPLOG_CLEANUP プロシジャ関連の設定については、以下の テーブルを参照してください。

表 5: BGPLOG_CLEANUP Settings

Setting の説明 : BGPLOG テーブルに保存する最古のレコード。	
ネームスペース	database.cleanup.BackGroundProcessLog
Setting 名	KeepInterval
既定の設定	5d
タイプ	間隔

REFRDEL_CLEANUP このプロシジャは KeepInterval setting の値に基づき、REFRDEL テーブルから物理的にレコードを削除します。既定の設定では、最新の 5 日間 REFRDEL レコードを保管します。

REFRDEL_CLEANUP プロシジャ関連の設定詳細については、以下のテーブルを参照してください。

表 6: REFRDEL_CLEANUP Settings

Setting の説明 : REFRDEL テーブルに保管する最古のレコード。	
ネームスペース	database.cleanup.Refrdel
Setting 名	KeepInterval
既定の設定	5d
タイプ	間隔
Setting の説明 : REFRDEL テーブルからレコードが削除されるまでの最大分数を識別します。	
ネームスペース	database.cleanup.Refrdel
Setting 名	DaysToDelete
既定の設定	1d
タイプ	間隔
Setting の説明 : 各ステップ間隔の分数を決定します。	
ネームスペース	database.cleanup.Refrdel
Setting 名	IntervalStep
既定の設定	15m
タイプ	間隔

OBSPROJ_PROCESS_QUEUE このプロシジャは、更新を PRMQUEUE テーブルにつなげることで、OBSPROJ 更新の処理を延期するために使用されます。

OBSPROJ_PROCESS_QUEUE プロシジャ関連の設定については、以下のテーブルを参照してください。

表 7: OBSPROJ_PROCESS_QUEUE Settings

Setting の説明 : 各実行において処理する最大のプロジェクトレベルキューレコード。	
ネームスペース	database.obsproj.queue
Setting 名	MaxProjectUpdates
既定の設定	1000
タイプ	数字
Setting の説明 : 各実行において処理する最大の EPS レベルキューレコード。	
ネームスペース	database.obsproj.queue
Setting 名	MaxEpsUpdate
既定の設定	25
タイプ	数字
Setting の説明 : エラーとマークするまでの失敗エントリ再処理回数。	
ネームスペース	database.obsproj.queue
Setting 名	MaxRetries
既定の設定	50
タイプ	数字

CLEANUP_PRMQQUEUE このプロシジャは KeepInterval setting 値に基づき、物理的にレコードを PRMQQUEUE テーブルから削除します。その他の設定は、REFRDEL_CLEANUP と同様です。

REFRDEL_CLEANUP プロシジャ関連の設定詳細については、以下のテーブルを参照してください。

表 8: CLEANUP_PRMQQUEUE Settings

Setting の説明 : PRMQQUEUE テーブルに保管する最古のレコード。既定は 5 日間です。	
ネームスペース	database.cleanup.Prmqueue
Setting 名	KeepInterval
既定の設定	5d
タイプ	間隔
Setting の説明 : プロシジャが各パスで、削除可能な PRMQQUEUE レコードをすべて削除するかどうかを決めます。	
ネームスペース	database.cleanup.Prmqueue
Setting 名	DeleteAll
既定の設定	0 (偽)
タイプ	ブーリアン
Setting の説明 : すべてのレコードをクリーンアップするか決めます。全レコード数がこの数より少なければ、すべてのレコードはクリーンアップされます。	
ネームスペース	database.cleanup.Prmqueue
Setting 名	DeleteAllThreshold
既定の設定	1,000
タイプ	数字

表 8: *CLEANUP_PRMQUEUE Settings*

Setting の説明 : 各パスで削除するレコードのパーセンテージ。	
ネームスペース	database.cleanup.Prmqueue
Setting 名	DeletePercentage
既定の設定	10(%)
タイプ	数字
Setting の説明 : 各パスで削除する最大行数。	
ネームスペース	database.cleanup.Prmqueue
Setting 名	MaxRowsToDelete
既定の設定	10,000
タイプ	数字

USESSION_CLEAR_LOGICAL_DELETES このプロシジャは、すべての論理的に削除された USESSION レコードを物理的に消去します。このプロシジャ関連の設定はありません。すべての論理的に削除された USESSION が削除されます。

CLEANUP_LOGICAL_DELETES このプロシジャは KeepInterval 設定値に基づき、論理的に削除された行を消去します。データベース中のレコードは、DELETE_SESSION_ID カラムに Null でない値を設定することで、削除済みとマーク（論理的削除）することができます。既定で、5 日間以前に削除されたレコードはこのプロシジャで物理的に消去されます。

 **CLEANUP_LOGICAL_DELETES** プロシジャは、DELETE_SESSION_ID カラムが負の値に設定されたレコードは物理的に消去しません。

CLEANUP_LOGICAL_DELETES プロシジャ関連の設定詳細については、以下のテーブルを参照してください。

表9: CLEANUP_LOGICAL_DELETES Settings

Setting の説明 : テーブルに保存する最古の論理的に削除されたレコード。	
ネームスペース	database.cleanup.LogicalDelete
Setting 名	KeepInterval
既定の設定	5d
タイプ	間隔
Setting の説明 : プロシジャが各パスで、削除可能な論理的に削除されたレコードをすべて削除するかどうかを決めます。	
ネームスペース	database.cleanup.LogicalDelete
Setting 名	DeleteAll
既定の設定	0 (偽)
タイプ	ブーリアン

表9: *CLEANUP_LOGICAL_DELETES Settings*

Setting の説明 : 各パスで削除する最大行数。	
ネームスペース	database.cleanup.LogicalDelete
Setting 名	MaxRowsToDelete
既定の設定	10,000
タイプ	数字

PRMAUDIT_CLEANUP 監査機能が有効に設定されていれば、このプロシジャは **KeepInterval** 設定値に基づきテーブルから物理的にレコードを削除します。

PRMAUDIT_CLEANU プロシジャ関連の設定詳細については、以下のテーブルを参照してください。

表 10: PRMAUDIT_CLEANUP Settings

Setting の説明 : プロシジャが PRMAUDIT レコードのクリーンアップを試行すべき。	
ネームスペース	database.cleanup.auditing
Setting 名	Enabled
既定の設定	1 (真)
タイプ	ブーリアン
Setting の説明 : PRMAUDIT に保存する最古の監査レコード。	
ネームスペース	database.cleanup.auditing
Setting 名	KeepInterval
既定の設定	30d
タイプ	間隔

CLEANUP_USESSAUD このプロシジャは、KeepInterval に基づき、USESSAUD テーブルから物理的にレコードを削除します。その他の設定は、REFRDEL_CLEANUP プロシジャと同様です。

CLEANUP_USESSAUD プロシジャ関連の設定詳細については、以下のテーブルを参照してください。

表 11: CLEANUP_USESSAUD Settings

Setting の説明 : USESSAUD テーブルに保管する最古のレコード。	
ネームスペース	database.cleanup.Usessaud
Setting 名	KeepInterval
既定の設定	5d
タイプ	間隔
Setting の説明 : 各パスで、削除可能な REFRDEL レコードをすべて削除するかどうかを決めます。	
ネームスペース	database.cleanup.Usessaud
Setting 名	DeleteAll
既定の設定	0 (偽)
タイプ	ブーリアン
Setting の説明 : すべてのレコードをクリーンアップするか決めます。全レコード数がこの数より少なければ、すべてのレコードはクリーンアップされます。	
ネームスペース	database.cleanup.Usessaud
Setting 名	DeleteAllThreshold
既定の設定	1,000
タイプ	数字

表 11: *CLEANUP_USESSAUD Settings*

Setting の説明 : 各パスで削除するレコードのパーセンテージ。	
ネームスペース	database.cleanup.Usessaud
Setting 名	DeletePercentage
既定の設定	10 (%)
タイプ	数字
Setting の説明 : 各パスで削除する最大行数。	
ネームスペース	database.cleanup.Usessaud
Setting 名	MaxRowsToDelete
既定の設定	10,000
タイプ	数字

USER_DEFINED_BACKGROUND このプロシジャは、DAMON によって実行されるオプションのカスタマープロシジャです。このプロシジャ関連の設定はありません。

CLEANUP_OLD_DATA このプロシジャは P6 では空です。将来、リリース関連のデータクリーンアップ実行に使用される予定です。

Oracle データベース性能の向上

Oracle データベース設定には、P6 データベースの性能を向上するいくつかの変更事項があります。

45 ページの「[データベースの自動インストール](#)」の説明に従って、データベースウィザードを使用してデータベースを自動インストールした場合、インストールの最後に `RUN_AS_SYS.SQL` と `GATHER_STATS.SQL` スクリプトの実行を要求する指示が表示されます。57 ページの「[手動データベース構成](#)」で説明したように、データベースを手動で作成した場合は、下記に説明するようにデータベースの作成が済んだらスクリプトを実行すべきです。

V_\$TRANSACTION テーブルへのアクセス権の付与：

V_\$TRANSACTION テーブルは、データが変更された最初のログイン時刻を保存します。これはデータのリフレッシュ時の性能を高めます。なぜならばこのログイン時刻以前のデータにはアクセスしないからです。ユーザは、V_\$TRANSACTION テーブルを表示するためにアクセスが必要です。これがなければ、最初のログイン時刻を表示できずアクセスが冗長になり、パフォーマンスが鈍化します。

このテーブルに対するアクセス権を付与するには、SYS として Oracle に接続します。P6 のメディアまたはダウンロードに含まれている `¥Database¥scripts¥common` フォルダ内の `RUN_AS_SYS.SQL` スクリプトを実行するか、以下の GRANT ステートメントを実行します。

```
grant select on v_$transaction to admuser;
```

コストベースの最適化のために統計データを収集します。

Oracle 10g およびその後の版数では、コストベースの最適化のみがサポートされていますが、これはクエリに最適なアクセスパスを決定するのに正確な統計に依存します。データベース性能を向上するオプティマイザのために適切な統計を収集するには、P6 のメディアまたはダウンロードファイルに含まれている `¥Database¥scripts¥common` フォルダ内の `GATHER_STATS.SQL` スクリプトを実行します。

安全な削除の設定

やり直し機能の使用に関するさらなる情報については、『Project Management リファレンスマニュアル』またはヘルプを参照してください。

Project Management データベースでは、通常安全な削除設定を使って削除したデータの復元を行います。削除したデータは、クリアするまで Project Management データベースに残っています。[元に戻す] コマンド ([編集]、[元に戻す]) を使って削除したデータを復元します。

安全な削除の機能停止 データを削除したときに Project Management データベースから直ちに削除データをクリアするには、安全な削除機能を停止する必要があります。SQL Server を使用しているならば、その管理ツールを使って SQL コマンドを実行することができます。データベースで、ADMIN_CONFIG のテーブルで次の行があれば、CONFIG_VALUE の「N」は安全な削除の停止を意味します。

```
CONFIG_NAME = 'SAFEDELETE' および CONFIG_TYPE =  
'ACTIVE'
```

これは起動時のみロードされます。PM 実行中にこの値を変更しても、その設定は適用されません。以下のステートメントを実行することができます。

初めて安全な削除を停止するには、

```
INSERT INTO ADMIN_CONFIG ( CONFIG_NAME,  
CONFIG_TYPE, CONFIG_VALUE ) VALUES ( 'SAFEDELETE',  
'ACTIVE', 'N' )
```

安全な削除を停止したあと、その機能を再開するには、以下の更新ステートメントを実行します。

```
UPDATE ADMIN_CONFIG SET CONFIG_VALUE = 'Y' WHERE  
CONFIG_NAME = 'SAFEDELETE' AND CONFIG_TYPE =  
'ACTIVE'
```

安全な削除を再開したあと、その機能を停止するには、以下の更新ステートメントを実行します。

```
UPDATE ADMIN_CONFIG SET CONFIG_VALUE = 'N' WHERE  
CONFIG_NAME = 'SAFEDELETE' AND CONFIG_TYPE =  
'ACTIVE'
```

ネイティブデータベース監査

ネイティブデータベース監査では、P6 アプリケーションのユーザが行った編集、追加、削除を記録することができます。ネイティブデータベース監査は、ユーザによるすべての変更がデータベーススキーマのテーブルを対象に実行されるデータ操作言語 (DML) の INSERT、UPDATE、または DELETE ステートメントとなることを利用しています。スキーマのすべてのアプリケーションテーブルにそれぞれ監査トリガがあるので、誰の変更でもいつの変更でも各テーブルに対し実行された変更を記録することができます。データベーススキーマのオーナーが監査トリガを所有します。トリガの実行はバイパスすることはできません。

監査レベルの設定

各テーブルの監査レベルを調整することで、記録される情報量を調節することができます。監査レベルを各テーブルで挿入、更新、削除個別に設定することで、監査のさらにきめ細かい設定を行うことができます。

表 12: 監査レベル

平準化	説明
レベル 0	監査なし
レベル 1	行レベルの監査。カラム詳細なしで操作のみを監査
レベル 2	ブロブ以外のカラムレベルの監査 カラムレベルのデータ変更の監査、ただしブロブ変更は非対象
レベル 3	全監査 カラムレベルのデータ変更の監査 Oracle では、ブロブに対するカラムレベルの変更は監査されます。SQL サーバでは、ブロブに対するカラムレベルの変更は含まれません。

シンプル構成

シンプルな制御を提供する監査機能には 2 種類の設定プロシジャがあります。

- `auditing_enable(<table_name>, <level>)`
- `auditing_disable(<table_name>)`

これらのプロシジャによって、監査レベルを個別テーブルに設定したり、同じ監査レベルをすべてのテーブルに設定することができます。ただし、シンプル構成プロシジャでは、同じテーブルに対して挿入、更新、削除のそれぞれに別の監視レベルを設定することはできません。

Oracle の例： 監査機能を管理するためにシンプル監査設定プロシジャを使用する方法については、以下の例をガイドとして参照してください。

次のコードスニペットは全テーブルの全監査を行います。

```
exec auditing_enable(null,3);
```

次のコードスニペットはタスクテーブルのレベル 1 監査を行います。

```
exec auditing_enable(' TASK' ,1);
```

次のコードスニペットは PROJWBS の監査を無効にします。

```
exec auditing_disable(' PROJWBS' );
```

次のコードスニペットは全データベースの監査を完全に無効にします。

```
exec auditing_disable(null);
```

詳細な設定

監査トリガの動きは、以下の監査機能を有効または無効にするよう Settings テーブルの値を変更することで設定することができます。

- 監査機能自身
- 特定のテーブルの監査
- 各テーブルにおける、挿入、更新、または削除操作の監査

監査の有効および無効化 監査機能自身は、database.audit.Enable setting を使って有効化または無効化することができます。settings_write_bool プロシジャを使って、監査機能全体を有効 / 無効にします。

Oracle の例： Oracle で監査機能全体を有効にするには、次のコードを使います。

```
exec settings_write_bool(1,' database.audit' , ' Enabled' );
```

SQL Server の例： SQL Server で監査機能全体を有効にするには、次のコードを使います。

```
exec settings_write_bool 1,' database.audit' , ' Enabled'
```


各個別テーブルの監査設定は、各テーブルの監査ネームスペースのオプション設定で制御します（例えば、`database.audit.TASK`）。オプション設定は、3 文字からなる数値の文字列で、各文字位置がそれぞれ挿入、更新、削除の監査レベルを示します。

表 13: テーブル操作ごとの監査レベルオプション設定

	操作			説明
	挿入	更新	削除	
平準化	0	0	0	監査なし
	1	1	1	行レベルの監査。カラム詳細なしで操作のみを監査
	2	2	2	プロプ以外のカラムレベルの監査 カラムレベルのデータ変更の監査、ただしプロプ変更は非対象
	3	3	3	全監査 カラムレベルのデータ変更の監査 Oracle では、プロプに対するカラムレベルの変更は監査されます。SQL サーバでは、プロプに対するカラムレベルの変更は含まれません。

以下のテーブルにオプション設定の例を示します。

表 14: テーブル操作ごとの監査レベルオプション設定例

ネームスペース	設定	値	説明
<code>database.audit.TASK</code>	Options	330	すべての挿入および更新操作の全監査 削除操作は監査なし。
<code>database.audit.PROJWBS</code>		001	削除のみの行レベル監査。
<code>database.audit.TASKRSRC</code>		333	全監査

個別テーブル監査設定は、`settings_write_string` プロシジャを使って変更することができます。

Oracle の例： Oracle で削除操作は無視して、挿入と更新操作の全監査を行うようにテーブルを設定する場合は、次のコードを使います。

```
exec settings_write_string(' 330', ' database.audit.TASK', ' Options');
```

SQL Server の例： SQL Server で削除操作は無視して、挿入と更新操作の全監査を行うようにテーブルを設定する場合は、次のコードを使います。

```
exec settings_write_string ' 330', ' database.audit.TASK', ' Options'
```



監査設定の変更は、必ずしも即時にアプリケーションに反映しません。通常、新しい設定を使い始めるにはプログラムはデータベース接続を閉じて再接続を行う必要があります。

データ監査の理解

監査テーブル 監査レコードは PRMAUDIT テーブルに挿入されます。データベースの各行の変更に対して 1 行のレコードが監査テーブルに挿入されます。

表 15: PRMAUDIT テーブル

カラム	タイプ	説明
audit_date	日付	変更の日付と時刻
table_name	文字列 (30)	テーブル名
pk1, pk2, pk3, pk4	文字列 (255)	監査レコードの主要キー値
oper	文字列 (1)	I= 挿入、U= 更新、D= 削除
prm_user_name	文字列 (32)	P6 アプリケーションで変更が行われた場合、P6 のユーザ名
audit_info	文字列 (4000)	4000 文字までのカラム変更 (レベル 2 および 3 のみ)
audit_info_extended	BLOB	プロブ変更および audit_info からのオーバーフロー (レベル 2 および 3 のみ)
logical_delete_flag	文字列 (1)	物理的削除でなく論理的削除フラグ (マーク)
rdbms_user_name*	文字列 (255)	データベースユーザ名 (通常 privuser)
os_user_name*	文字列 (255)	接続セッションのオペレーティングシステムユーザ名
program*	文字列 (255)	データベースに接続のプログラム名
host_name*	文字列 (255)	接続セッションのコンピュータ名
app_name*	文字列 (25)	データベースに接続のアプリケーション名
netaddress*	文字列 (24)	接続セッションの IP または MAC アドレス
* SQL Server と Oracle では値が異なります		



さまざまな監査テーブル値を正しく設定するためには、`V_$SESSION` で管理者ユーザ (`admuser`) には選ばれた特権が付与される必要があります。

セッションの監査

USESSION テーブルのアクティビティは独自のトリガとテーブルで監査されます。アプリケーションユーザがシステムからログアウトした場合は、それらによってセッションレコードは論理的に USESSION テーブルから削除またはマークされます。ログアウトごとに 1 レコードが USESSAUD テーブルに書き込まれます。USESSAUD テーブルのフォーマットは、USESSION テーブルのそれと同等です。この監査は、`usessaud_enable` プロシジャによって有効化され、`usessaud_disable` プロシジャによって無効化されます。

カラムレベルの監査データ

各監査の変更データは `audit_info` and `audit_info_extended` カラムに保存されます。`audit_info` column には、4000 文字を超えない限り全行変更が含まれます。4000 文字を超える変更あるいはプロブに対するどんな編集も `audit_info_extended` BLOB カラムに書き込まれます。

2 つの `audit_info` カラムのデータは特定のフォーマットをもちます。データ中の各カラム監査は、先頭に「O」（古いデータ）または「N」（新しいデータ）のいずれかがついており、前の（古い）値か変更後の（新しい）値の監査かを区別します（BLOB カラムの場合は、データの先頭は `BLOBO` または `BLOBN` となります）。この後は小文字によるカラム名が続きます。カラム名の後は、固定 4 文字フィールドで監査値の長さを表します。最後に、実際のデータが監査レコードに入ります。更新については、各変更の古い値と新しい値の両方が入ります。挿入には新しい値のみが、削除には古い値のみが入ります。

以下は、`task_code` を 'A1010' から 'B102' に変更した TASK の変更に対する監査レコードの例です。

```
audit_info =>:Otask_code: 5:A1010:Ntask_code: 4:B102
```

Oracle 11g Instant Client を使用した Oracle データベースへの接続

Oracle 11g Instant Client を使用して Oracle P6 データベースに接続する場合は、SETTINGS テーブルに Oracle 接続文字列を指定してください。接続文字列を指定しないと、Oracle 11g Instant Client を使用してデータベースに接続するユーザは、P6 Integration API に依存する機能（「ベースラインの更新」など）に Project Management モジュール内でアクセスできません。

ADMINISTRATOR_SETTINGS Oracle 11g Instant Client ユーザが Project Management モジュール内で Integration API 機能を利用できるようにするには、P6 で使用する Oracle データベースごとに ADMINISTRATOR_SETTINGS 行を SETTINGS テーブルに追加する必要があります。この設定に値を入力するときは、TNSNAMES.ORA ファイル内にある標準の接続文字列構文の前に 'jdbc:oracle:thin:@' を付けて使用します。例えば、以下のような状況を想定してください。

```
jdbc:oracle:thin:@(DESCRIPTION=(ADDRESS_LIST=(ADDRESS=(PROTOCOL=TCP)(HOST=<hostname>)(PORT=<portnumber>))))(CONNECT_DATA=(SID=<database>)))
```

以下は設定をまとめた表です。

表 16: ADMINISTRATOR_SETTINGS の設定

Setting の説明： Oracle P6 データベースの JDBC 接続 URL を指します。	
ネームスペース	Administrator_Settings
Setting 名	JdbcConnectionURL
既定の設定	-
タイプ	文字列

サーバのインストールおよび 設定

内容：

P6 Progress Reporter のインストール

P6 Web Access のインストール

分散ジョブサービスの設定

本パートを読んで、ネットワークサーバで P6 を実行するのに必要なコンポーネントのインストールと設定を行います。

「**P6 Progress Reporter のインストール**」は、アプリケーションサーバを必要とする **Progress Reporter** を実装するためのサーバを準備する方法を説明します。

「**P6 Web Access のインストール**」の章では、**P6 Web Access** の設定についての手順を説明します。「**分散ジョブサービスの設定**」の章では、ジョブを複数のサーバに同時に分散するジョブサービスの設定方法の詳細を提供します。

P6 Progress Reporter のインストール

本章の内容：

P6 Progress Reporter のインストールプロセス

P6 Progress Reporter サーバのアップグレード

P6 Progress Reporter 用のアプリケーションサーバのインストール

P6 Progress Reporter のインストール

P6 Progress Reporter 用アプリケーションサーバの設定と展開

P6 Progress Reporter 用サーバの起動

P6 Progress Reporter 用サーバの停止

アプリケーションサーバプラグインの実装

Progress Reporter Administrator の使用

P6 のインストール中に Progress Reporter モジュールを実装するには、ネットワークに Progress Reporter サーバ（旧称「Group Server」）を追加する必要があります。Progress Reporter サーバはアプリケーションサーバを使用して、Progress Reporter アプリケーションファイルをホストしデータベースサーバに接続します。本章では、P6 Progress Reporter をインストールし、Progress Reporter Administrator を使用して設定を確認して変更する方法について説明します。

P6 Progress Reporter のインストールプロセス

Progress Reporter は Web ベースのモジュールで、プロジェクトチームのメンバがプロジェクトデータを更新するために使用します。Progress Reporter は、アプリケーションサーバを介して Project Management データベースに接続します。

Java Web Start の詳細については、以下のサイトを参照してください。
<http://java.sun.com>

ユーザは、Java Web Start 版または Web ブラウザ版を介して Progress Reporter を起動します。Java Web Start は、Java Network Launching Protocol (JNLP) テクノロジーにより、セキュアでプラットフォームに依存しない Progress Reporter の導入を可能とし、Java アプリケーションとして実行します。Java Web Start は複数のバージョンの JRE が存在している場合でも、常にクライアント側の最新バージョンの Progress Reporter を起動します。Web ブラウザ版では、ユーザが Java アプレットとしてタイムシートデータにインターネットを経由してアクセスすることを可能に、シングルサインオン認証を使用している場合には、この Web ブラウザ版が必須になります。

P6 Progress Reporter サーバのインストールおよびサーバの管理タスクの実行には、本章で説明されている以下のステップが含まれます。

Progress Reporter サーバの検証済み環境一覧については、P6 のメディアあるいはダウンロードに含まれる ¥Documentation¥ <language>¥Tested Configurations フォルダを参照してください。

- (アップグレードのみ) Group Server のアンインストール。116 ページを参照してください。
- サポートされているいずれかのアプリケーションサーバのインストール。117 ページを参照してください。
サポートされているアプリケーションサーバの一覧は、34 ページを参照してください。
- P6 Progress Reporter のインストール。120 ページを参照してください。
- アプリケーションサーバの設定と展開。122 ページを参照してください。
- Progress Reporter Administrator による Project Management データベースの接続情報の入力。137 ページを参照してください。
- Progress Reporter Administrator による Progress Reporter サーバのユーザ設定の確認と変更。137 ページを参照してください。詳細については、*Progress Reporter Administrator* のヘルプを参照してください。



Group Server の旧バージョンをインストールしている場合、P6 Progress Reporter にアップグレードする前にアンインストールすることをお勧めします。

Progress Reporter サーバをインストールして設定した後に、必ず以下のステップを実行して Progress Reporter のアプリケーション管理タスクを完了してください。

- 389 ページの「[Project Management](#) での管理設定と分類の定義」の説明に従って、ユーザがタイムシートを使用し、間接コードを作成する方法を設定する。



いくつかのユーザ設定も Progress Reporter Administrator から利用できます。

- 427 ページの「[P6 Progress Reporter の実装](#)」の説明に従って、Project Management モジュールを使用して Progress Reporter のユーザ設定を完了する。
- 437 ページの「[クライアントのブラウザから P6 Progress Reporter へのアクセス](#)」の説明に従って、Progress Reporter モジュールを起動する方法をユーザに指示する。



タイムシートをレビュー、承認する必要がある場合は、ユーザが Timesheet Approval アプリケーションにアクセスできるよう、139 ページの「[P6 Web Access のインストール](#)」の説明に従って P6 Web Access をインストールしなくてはなりません。P6 Web Access をインストールして Progress Reporter を設定すると、441 ページの「[Timesheet Approval へのアクセス設定](#)」に説明されているように Timesheet Approval アプリケーションへのアクセスを設定することができます。

P6 Progress Reporter サーバのアップグレード

P6 を旧バージョンからアップグレードする場合は、P6 Progress Reporter をインストールする前に、既存の Group Server をアンインストールすることをお勧めします。Progress Reporter サーバの設定中に新しい Web サイトが作成されます。

Group Server のアンインストール

- 1 Windows の [コントロールパネル] から、[サービス] を選択します。
- 2 [Primavera Group Server] を選択して、[停止] をクリックします。
- 3 「サービス」画面を閉じます。
- 4 [コントロールパネル] 画面で、[プログラムの追加と削除] をダブルクリックします。
- 5 [Primavera Group Server] を選択して、[追加 / 削除] ボタンをクリックします。アンインストールウィザードの指示に従います。ウィザードによるアンインストールが完了したら、[終了] をクリックします。



P6 バージョン 6.0 またはそれ以降からアップグレードし、タイムシートのレビュー・承認が必要な場合は、ユーザが Timesheet Approval アプリケーションにアクセスできるように、139 ページの [「P6 Web Access のインストール」](#) の説明に従って P6 Web Access をインストールする必要があります。P6 Web Access をインストールした後に、441 ページの [「Timesheet Approval へのアクセス設定」](#) の説明に従って Timesheet Approval アプリケーションへのアクセスを設定します。

P6 Progress Reporter 用のアプリケーションサーバのインストール

Progress Reporter サーバは、Red Hat JBoss、Oracle WebLogic、および IBM WebSphere をサポートします。サポートされているアプリケーションサーバの完全な一覧（バージョン数を含む）については、34 ページの「[クライアントおよびサーバの要件](#)」を参照してください。Progress Reporter サーバの検証済み環境一覧については、P6 の媒体またはダウンロードに含まれる `¥Documentation¥<language>¥Tested Configurations` フォルダを参照してください。



Windows では、アプリケーションサーバは、短い名前のフォルダにインストールすることをお勧めします。

Microsoft Windows に JBoss をインストール

JDK のインストール

JBoss の対応バージョンでは、Java 2 JDK version 6.0 update 14 (1.6.0_14) が必要です。Oracle Primavera は JDK を提供していません。JDK をダウンロードするには、<http://java.sun.com/products/archive> にアクセスしてください。

JBoss 5.0.1 GA-JDK6 のインストール

- 1 以下の Web サイトから「jboss-5.0.1.GA-jdk6.zip」をダウンロードします。
<http://www.jboss.org>
- 2 ローカルドライブに「jboss-5.0.1.GA-jdk6.zip」をコピーします。
- 3 <JBossInstallLocation> にフォルダを解凍します。
(例えば、C:¥jboss-5.0.1.GA-jdk6)。
- 4 <JBossInstallLocation>¥server に移動します。
- 5 「default」フォルダを選択し、Ctrl-C を押してコピーします。次に Ctrl-V を押します。これで「コピー ~ default」という名前のフォルダが作成されます。
- 6 「コピー ~ default」フォルダの名前を「pr」に変更します。

Oracle Enterprise Linux への JBoss のインストール

JDK のインストール

JBoss の対応バージョンでは、Java 2 JDK version 6.0 update 14 (1.6.0_14) が必要です。Oracle Primavera は JDK を提供していません。JDK をダウンロードするには、<http://java.sun.com/products/archive> にアクセスしてください。

JBOSS 5.0.1 GA-JDK6 のインストール

- 1 以下の Web サイトから「jboss-5.0.1.GA-jdk6.zip」をダウンロードします。

`http://www.jboss.org`
- 2 ローカルドライブに「jboss-5.0.1.GA-jdk6.zip」をコピーします。
- 3 <JBossInstallLocation> にフォルダを解凍します。
(例えば、/usr/jboss-5.0.1.GA-jdk6)。
- 4 ファイルを実行できるよう、以下のコマンドを実行します。
`chmod -R +x *`
- 5 <JbossInstallLocation>%server に移動します。
- 6 「default」フォルダを選択し、Ctrl-C を押してコピーします。
次に Ctrl-V を押します。これで「コピー ~ default」という
名前のフォルダが作成されます。
- 7 「コピー ~ default」フォルダの名前を「pr」に変更します。

WebLogic のインストール

JDK のインストール

WebLogic 10g R3 は、Windows と Oracle Enterprise Linux の場合は JRockit 1.6.0_5 および Sun Java 2 JDK version 6.0 update 5 (1.6.0_05)、HP-UX の場合は Java 2 JDK version 6 update 4 (1.6.0_04) を自動インストールします。これらは、いくつかの 32 ビット版と 64 ビット版の Progress Reporter サーバに必要な JDK バージョンです。

WebLogic で Sun JDK を使用するには、JDK version 6.0 update 14 (1.6.0_14) が必要です。Oracle Primavera は JDK を提供していません。JDK をダウンロードするには、<http://java.sun.com/products/archive> にアクセスしてください。

64 ビット版 Windows サーバで JRockit を使用するには、JRockit Real Time 3.0 for Java version 6 (1.6.0_11) が必要です。このバージョンは、以下の Web サイトからダウンロードします。
<http://www.oracle.com/technology/software/products/jrockit/index.html>

WebLogic 10g R3 のインストール

インストールの手順については、WebLogic のドキュメントを参照してください。

WebSphere のインストール

JDK のインストール

WebSphere 7.0 は IBM JDK を自動インストールします。推奨された WebSphere 修正パックをインストールすると Progress Reporter サーバの必須 JDK が自動的に更新されます。どの修正パックが検証されているかについては『Tested Configurations』ドキュメントを参照してください。

WebSphere 7.0 のインストール

インストールの手順については、WebSphere のドキュメントを参照してください。

P6 Progress Reporter のインストール



OUI (Oracle Universal Installer) はグローバルに使用されるため、P6 Progress Reporter のインストールとアンインストールまたは P6 ドキュメントを参照するための OUI オンラインヘルプはありません。代わりに、このセクションのインストール手順を参照してください。



P6 Progress Reporter は Windows の「プログラムの追加または削除」リストには表示されません。P6 Progress Reporter をアンインストールする必要がある場合は、OUI (Oracle Universal Installer) を実行してください。

「ホーム詳細の指定」画面 Progress Reporter のインストールを実行すると、ファイルがコンピュータ上のホームディレクトリにコピーされます。ホームディレクトリ情報は、インストーラの「ホーム詳細の指定」画面に表示されます。構成プロセス中に要求された場合、次のファイルの場所がわかるように、ホームディレクトリパスを控えておきます。

- pr.ear
- pr-help.war

Progress Reporter を使用するように Oracle Enterprise Manager を設定する場合には、このディレクトリにある次のファイルが必要になります。

- pr-empugin.jar

Oracle Enterprise Manager のインストールと設定については、Oracle Enterprise Manager のマニュアルを参照してください。

P6 Progress Reporter のインストール

- 1 物理媒体またはダウンロードファイルの Progress_Reporter フォルダから、システムの種類によって、次のいずれかを実行します。
 - Microsoft Windows システム上にインストールする場合は、**win¥Disk1¥install** ディレクトリに移動し、**setup.exe** ファイルをダブルクリックします。
 - Microsoft Windows 以外のシステム上にインストールする場合は、次のコマンドを入力します。

cd <Operating System>¥Disk1¥install

オペレーティングシステムに応じて、上記のコマンドの <Operating System> 部分を solaris_64、linux、hp_64、または aix_64-5L に置き換えてください。

次のコマンドを入力します。

chmod 755 runInstaller
chmod 755 unzip
./runInstaller

- 2 Oracle Universal Installer が表示されます。各画面で「次へ」をクリックし、既定の設定を使用します。

P6 Progress Reporter 用アプリケーションサーバの設定と展開

このセクションでは、サポートされているすべてのアプリケーションサーバに必要な設定と展開の手順について詳しく説明します。Progress Reporter サーバのセットアップには必要ありませんが、各アプリケーションサーバには、環境を強化するために使用するその他の設定があります。例えば、クラスタリングを使用する場合にセッションレプリケーションの設定を有効にすると、サーバが予期せずにシャットダウンした場合にユーザをスムーズに別のサーバに転送できます。使用できるすべての設定の詳細については、アプリケーションサーバのドキュメントを参照してください。

Microsoft Windows で JBoss 5.0.1 GA を設定

- 1 120 ページで指定されているホームディレクトリから次の場所に、Progress Reporter のヘルプ WAR ファイル (pr-help.war) をコピーします。

```
<JBossInstallLocation>%server%\pr\deploy\%
```

- 2 120 ページで指定されているホームディレクトリから次の場所に、Progress Reporter サーバのアプリケーション EAR ファイル (pr.ear) をコピーします。

```
<JBossInstallLocation>%server%\pr\deploy\%
```

- 3 国際 (言語) をサポートする場合は、以下のファイルを編集します。

```
<JBossInstallLocation>%server%\pr\deploy\%
jbossweb.sar\%server.xml
```

コネクタ設定で、パラメータ

URIEncoding="UTF-8" を追加します。

例えば、以下のような状況を想定してください。

```
<!--A HTTPS/1.1 Connector on port 8080-->
<Connector port="8080" URIEncoding="UTF-8"
address="{$jboss.bind.address}"
maxThreads="250" strategy="ms" maxHttpHeaderSize="8192"
emptySessionPath="true"
enableLookups="false" redirectPort="8443" acceptCount="100"
connectionTimeout="20000" disableUploadTimeout="true"/>
```



SSL 以外のコネクタを使用している場合は、この設定から SSL の指定を削除してください。

構成ホーム設定の詳細については、137 ページの「**Progress Reporter Administrator の使用**」を参照してください。

- 4 <JBossInstallLocation>%bin に移動します。
- 5 Progress Reporter サーバの既定の構成ホームの場所を変更する場合は、次の手順に進んでください。それ以外の場合は、**ステップ 6**に進んでください。



既定の構成ホームの場所は、次のとおりです。

<ユーザのホームディレクトリ>/.oracle/primavera/
progressreporter

run.bat コマンドファイルを編集して、以下の行を
:RESTART 行の前に 1 行で挿入します。

```
set JAVA_OPTS=
"-Dprimavera.configuration.home=<configurationhome>"
%JAVA_OPTS%
```

ここで、<configurationhome> は、新しい場所です（例：
C:\%progressreporter）。



<configurationhome>" と %JAVA_OPTS% の間にはスペース
が入ります。

- 6 run.bat ファイルで、以下を実行してパフォーマンスを向上させます。
 - 以下のラインを見つけてます。
set JAVA_OPTS=%JAVA_OPTS% -Xms128m -Xmx512m
 - このラインを以下のラインに替えます（すべて 1 行）。
set JAVA_OPTS=%JAVA_OPTS% -XX:PermSize=64m
-XX:MaxPermSize=128m -Xms512m -Xmx512m
- 7 この変更を run.bat ファイルに保存します。
- 8 サービス管理者が JMX コンソールを確保したい場合は、
<http://www.redhat.com> で手順を参照してください。

Microsoft Windows 上での JBoss 5.0.1 GA の展開

- 1 着信クライアント接続が JBoss サービスにリモートアクセスするには、JBoss サービスが、ネットワークインタフェースにバインドするように設定されている必要があります（JBoss がインストールされているサーバのネットワークカードの IP アドレスなど）。JBoss アプリケーションサーバへのリモートアクセスを有効にするために JBoss サービスがバインドする必要のあるインタフェースを決定します。セキュリティ上、JBoss の既定のインストールでは、JBoss サービスはローカルホスト (127.0.0.1) インタフェースにバインドされ、JBoss サービスにリモート接続できないようになっています。

- 2 JBoss アプリケーションサーバを起動するには、ローカルドライブに「startPRinJBoss.bat」という bat ファイルを作成します。次のように入力します。

```
@echo off
set JBOSS_HOME=<JBossInstallLocation>
call %JBOSS_HOME%\bin\run.bat -c pr
```

展開によっては、“call %JBOSS_HOME%...” ラインの最後に -b オプションを含め、JBoss サービスを [ステップ 1](#) で決定したインタフェースにバインドします。例えば、以下のようになります。

```
call %JBOSS_HOME%\bin\run.bat -c pr -b <IP address>
```

適切なインタフェースへのリモートアクセスの有効化とセキュリティ設定の詳細については、<http://www.jboss.org> から参照可能な『JBoss Application Server Installation and Getting Started Guide』を参照してください。

また、事前に定義されていない場合は、startPRinJBoss.bat ファイルに JAVA_HOME Environment 変数を追加します。例えば、以下のようになります。

```
set JAVA_HOME=C:\Program Files\Java\jdk1.6.0_14
```

- 3 新しく作成された bat ファイルを実行します。

Oracle Enterprise Linux で JBoss 5.0.1 GA を設定

- 1 120 ページで指定されているホームディレクトリから次の場所に、Progress Reporter のヘルプ WAR ファイル (pr-help.war) をコピーします。

```
<JBossInstallLocation>/server/pr/deploy/
```

- 2 120 ページで指定されているホームディレクトリから次の場所に、Progress Reporter サーバのアプリケーション EAR ファイル (pr.ear) をコピーします。

```
<JBossInstallLocation>/server/pr/deploy/
```

- 3 国際 (言語) をサポートする場合は、以下のファイルを編集します。

```
<JBossInstallLocation>/server/pr/deploy/
jbossweb.sar/server.xml
```

コネクタ設定で、パラメータ

URIEncoding="UTF-8" を追加します。

例えば、以下のような状況を想定してください。

```
<!--A HTTPS/1.1 Connector on port 8080-->
<Connector port="8080" URIEncoding="UTF-8"
address="{jboss.bind.address}"
maxThreads="250" strategy="ms" maxHttpHeaderSize="8192"
emptySessionPath="true"
enableLookups="false" redirectPort="8443" acceptCount="100"
connectionTimeout="20000" disableUploadTimeout="true"/>
```



SSL 以外のコネクタを使用している場合は、この設定から SSL の指定を削除してください。

- 4 <JBossInstallLocation>¥bin に移動します。
- 5 Progress Reporter サーバの既定の構成ホームの場所を変更する場合は、次の手順に進んでください。それ以外の場合は、[ステップ 7](#)に進んでください。



既定の構成ホームの場所は、次のとおりです。

```
<ユーザのホームディレクトリ>/.oracle/primavera/
progressreporter
```

構成ホーム設定の詳細については、137 ページの「[Progress Reporter Administrator の使用](#)」を参照してください。

run.sh コマンドファイルを編集し、「# Setup JBoss specific properties」セクションの前に以下のラインを挿入します。

```
JAVA_OPTS=
"-Dprimavera.configuration.home=<configurationhome>
$JAVA_OPTS"
```

ここで、<configurationhome> は、新しい場所です（例：/usr/progressreporter）。



<configurationhome> と \$JAVA_OPTS” の間にはスペースが入ります。



以前に定義されていない場合は、run.sh ファイルで JAVA_HOME Environment 変数を追加します。例えば、以下のようになります。
export JAVA_HOME = /usr/jdk 1.6.0_14

6 この変更を run.sh ファイルに保存します。

7 run.conf ファイルを編集し、以下を実行してパフォーマンスを向上させます。

- 以下のラインを見つけてます。

```
JAVA_OPTS="-XX:PermSize=64m -XX:MaxPermSize=64m -
Dsun.rmi.dgc.client.gcInterval=3600000 -
Dsun.rmi.dgc.server.gcInterval=3600000"
```

- 「-XX:PermSize=64m -XX:MaxPermSize=64m」を以下に置き換えます（すべて 1 行）。

```
"-XX:PermSize=64m -XX:MaxPermSize=128m -Xms512m
-Xmx512m"
```

8 この変更を run.conf ファイルに保存します。

9 サービス管理者が JMX コンソールを確保したい場合は、<http://www.redhat.com> で手順を参照してください。

Oracle Enterprise Linux での JBoss 5.0.1 GA の展開

- 着信クライアント接続が JBoss サービスにリモートアクセスするには、JBoss サービスが、ネットワークインタフェースにバインドするように設定されている必要があります（JBoss がインストールされているサーバのネットワークカードの IP アドレスなど）。JBoss アプリケーションサーバへのリモートアクセスを有効にするために JBoss サービスがバインドする必要のあるインタフェースを決定します。セキュリティ上、JBoss の既定のインストールでは、JBoss サービスはローカルホスト (127.0.0.1) インタフェースにバインドされ、JBoss サービスにリモート接続できないようになっていきます。

- 2 ターミナルを開きます。以下のコマンド、または以下の拡張バージョンを入力して、サーバを開始します。

```
cd /<JBossInstallLocation>/bin  
./run.sh -c pr
```

展開によっては、2 行目の最後に **-b** オプションを含め、JBoss サービスを [ステップ 1](#) で決定したインタフェースにバインドします。例えば、以下のようになります。

```
cd /<JBossInstallLocation>/bin  
./run.sh -c pr -b <IP address>
```

適切なインタフェースへのリモートアクセスの有効化とセキュリティ設定の詳細については、<http://www.jboss.org> から参照可能な『*JBoss Application Server Installation and Getting Started Guide*』を参照してください。

Oracle WebLogic 10g R3 の設定と展開

Oracle WebLogic を設定するには、以下のタスクを実行する必要があります。

- P6 Progress Reporter 用の WebLogic ドメインを作成する
- P6 Progress Reporter のホームディレクトリの作成
- P6 Progress Reporter 用の WebLogic の設定
- P6 Progress Reporter の WebLogic ドメインへの展開

WebLogic ドメインの作成

- 1 WebLogic 設定ウィザードを実行します。
- 2 「Welcome」 ウィンドウで「Create a new WebLogic domain」を選択し、「Next」をクリックします。
- 3 「Select Domain Source」 ウィンドウで「Next」をクリックし、既定の選択内容をそのまま使用します。
- 4 「Configure Administrator Username and Password」 ウィンドウで、ユーザ名とパスワードの情報を入力して「Next」をクリックします。
- 5 「Configure Server Start Mode and JDK」 ウィンドウの左側のペーンで、「Production Mode」を選択します。右側のペーンで適切な JDK を選択して「Next」をクリックします。
- 6 「Customize Environment and Services Settings」 ウィンドウで「Next」をクリックします。
- 7 「Create WebLogic Domain」 ウィンドウで、ドメインおよび場所の情報を入力して「Create」をクリックします。
- 8 「Creating Domain」 ウィンドウで、「Start Admin Server」をマークして「Done」をクリックします。
- 9 プロンプトで要求されたら、[ステップ 4](#) で入力したユーザ名とパスワードを入力します。

P6 Progress Reporter サーバのホームディレクトリの作成

- 1 Progress Reporter サーバ (C:\¥prhome など) のローカルドライブに新しいディレクトリを作成します。
- 2 120 ページで指定されているホームディレクトリから新しいディレクトリに、Progress Reporter サーバのアプリケーション EAR ファイル (pr.ear) をコピーします。
- 3 120 ページで指定されているホームディレクトリから新しいディレクトリに、Progress Reporter のヘルプ WAR ファイル (pr-help.war) をコピーします。

構成ホーム設定の詳細については、137 ページの「**Progress Reporter Administrator の使用**」を参照してください。

P6 Progress Reporter 用の WebLogic の設定

- 1 Progress Reporter サーバの既定の構成ホームの場所を変更する場合は、次の手順に進んでください。それ以外の場合は、**ステップ 5**に進んでください。



既定の構成ホームの場所は、次のとおりです。

<ユーザのホームディレクトリ>/oracle/primavera/
progressreporter

変更を元に戻す必要がある場合に備えて、**startWebLogic** ファイルのバックアップ用コピーを作成します。

- Windows では、ファイル名は「startweblogic.cmd」で、保存場所は以下のとおりです。
<bea_home>%user_projects%domains%<your_domain>%bin
- Unix では、ファイル名は「startweblogic.sh」で、保存場所は以下のとおりです。
<bea_home>/user_projects/domains/<your_domain>/bin

- 2 startWebLogic ファイルを編集します。

- 3 「set JAVA_OPTIONS=」で始まるラインを見つけて、Primavera 構成ホーム変数を追加します。

Windows では、以下に似たラインになります。

```
set JAVA_OPTIONS=%SAVE_JAVA_OPTIONS%
-Dprimavera.configuration.home=<configurationhome>
```

ここで、<configurationhome> は、新しい場所です（例：C:\%progressreporter）。

Unix では、以下に似たラインになります。

```
JAVA_OPTIONS=${SAVE_JAVA_OPTIONS}
-Dprimavera.configuration.home="<configurationhome>"
```

ここで、<configurationhome> は、新しい場所です（例：/usr/progressreporter）。

- 4 この変更を startWebLogic ファイルに保存します。
- 5 変更を元に戻す必要がある場合は、**ステップ 1**で指定したものと同一 bin ディレクトリ内に置かれている、適切な **setDomainEnv** ファイル（.cmd または .sh）のバックアップコピーを作成します。
- 6 setDomainEnv ファイルを編集します。

- 7 メモリ不足になることを防ぐため、`setDomainEnv` ファイルで `JVM MaxPermSize` の設定を増やします。`MaxPermSize` 設定は少なくとも `256m` に設定してください。

- Windows では、以下に似たラインになります。

```
if “%JAVA_VENDOR%”==”Sun” (  
    set MEM_ARGS=%MEM_ARGS% %MEM_DEV_ARGS%  
    -XX:MaxPermSize=256m  
)
```

- HP-UX では、以下に似たラインになります。

```
if [ “${JAVA_VENDOR}” = “HP” ]; then  
    MEM_ARGS=”${MEM_ARGS} ${MEM_DEV_ARGS}  
    -XX:MaxPermSize=256m”  
    export MEM_ARGS
```

- 8 パフォーマンスを最大化するには、`setDomainEnv` ファイルでメモリの設定を変更します。まず、`NewSize`、`MaxNewSize`、`SurvivorRatio` の値を設定できるよう `MEM_ARGS` ラインを編集します。

例えば、ヒープサイズの合計が `1024` の場合、`NewSize` と `Max NewSize` は `256` に設定し、`SurvivorRatio` の値が `8` になるようにします。

完全なラインは以下に似たものになります。

```
set MEM_ARGS=-XX:NewSize=256m -XX:MaxNewSize=256m  
-XX:SurvivorRatio=8 -Xms1024m -Xmx1024m
```

ここで

`-XX:NewSize=` は新世代ヒープの最低サイズ（`eden` と 2 つの `Survivor` スペースの合計）

`-XX:MaxNewSize=` は新世代ヒープの最大サイズ

`-XX:SurvivorRatio=` `Survivor` スペースのサイズ（`Survivor` スペースに対する `eden` の比率）

`Young` 世代は、`eden` と 2 つの `Survivor` スペースの合計に相当します。

- 9 変更を `setDomainEnv` ファイルに保存します。

P6 Progress Reporter の WebLogic ドメインへの展開

1 WebLogic 管理コンソールを起動します。



管理コンソールは、以下のアドレスを使用して Web ブラウザから開くことができます。http://<serverIP>:<listenport>/console
例 : http://<serverIP>:7001/console

- 2 「Welcome」 ウィンドウで、「WebLogic ドメインの作成」の **ステップ 4** で入力したユーザ名とパスワードを使用してログインします。
- 3 管理コンソールの「Change Center」 ペーンで、「Lock & Edit」 をクリックします。
- 4 「Domain Structure」 ペーンで、「Deployments」 をクリックします。
- 5 「Summary of Deployments」 ペーンで、「Install」 をクリックします。
- 6 「Install Application Assistant」 ペーンで、Progress Reporter サーバのホームディレクトリ (C:\prhome など) に移動します。pr.ear ファイルを選択して「次へ」 をクリックします。
- 7 「Install Application Assistant」 ペーンで、「Install this deployment as an application」 を選択して「Next」 をクリックします。
- 8 「Install Application Assistant」 ペーンで「Next」 をクリックして、既定のオプションをそのまま使用します。
- 9 選択した設定を確認してから「Finish」 をクリックしてインストールを完了します。
- 10 「Settings for pr」 ウィンドウで「Save」 をクリックします。
- 11 「Change Center」 ペーンで「Activate Changes」 をクリックします。
- 12 「Domain Structure」 ペーンで、「Deployments」 をクリックします。
- 13 「Summary of Deployments」 ペーンで、「pr」 をマークします。
- 14 「Summary of Deployments」 ペーンで、「Start」 ボタンの右側にある下向き矢印をクリックし、「Servicing all requests」 をクリックします。
- 15 「Start Application Assistant」 ペーンで「Yes」 をクリックします。
- 16 「Summary of Deployments」 ペーンで、pr が含まれている行の「State」カラムの「start Running」リンクをクリックします。
- 17 しばらくしてから「Refresh」 をクリックします。「pr」の「State」カラムに「Active」と表示されます。
- 18 pr-help.war ファイルに対して、**ステップ 3** から **ステップ 15** までを繰り返します。
- 19 両方のファイルの「State」カラムには、「Active」と表示されます。

WebSphere 7.0 の設定と展開

P6 Progress Reporter のホームディレクトリの作成

- 1 Progress Reporter サーバ (C:\¥prhome など) のローカルドライブに新しいディレクトリを作成します。
- 2 120 ページで指定されているホームディレクトリから新しいディレクトリに、Progress Reporter サーバのアプリケーション EAR ファイル (pr.ear) をコピーします。
- 3 120 ページで指定されているホームディレクトリから新しいディレクトリに、Progress Reporter のヘルプ WAR ファイル (pr-help.war) をコピーします。

P6 Progress Reporter 用の WebLogic の設定および展開

- 1 WebSphere アプリケーションサーバを起動します。
- 2 WebSphere アプリケーションサーバの**管理者コンソール**を起動します。
- 3 Progress Reporter サーバの既定の構成ホームの場所を変更する場合は、次の手順に進んでください。それ以外の場合は、[ステップ 10](#)に進んでください。

左側のナビゲーションペーンで、「Servers」、「Server Types」の順に拡張します。「WebSphere application servers」をクリックします。

- 4 「Application Servers」画面で、サーバ名のリンクをクリックします。
- 5 「Configuration」タブの「Server Infrastructure」で、「Java」と「Process Management」を拡張します。
- 6 「Process definition」をクリックします。
- 7 「Additional Properties」で、「Java Virtual Machine」をクリックします。
- 8 「Generic JVM arguments」で以下を入力します。
-Dprimavera.configuration.home=<configurationhome>
ここで、<configurationhome> は、新しい場所です (例 : C:\¥progressreporter)。
- 9 「OK」をクリックします。変更を報告するメッセージ内に表示されている [保存] リンクをクリックします。
- 10 左側のナビゲーションペーンで「Applications」を拡張して、「New Application」をクリックします。
- 11 「Install a New Application」画面で、「New Enterprise Application」をクリックします。
- 12 「Path to the new application」画面で、Progress Reporter サーバのホームディレクトリと pr.ear ファイル (C:\¥prhome¥pr.ear など) へのパスを指定し、「Next」をクリックします。

構成ホーム設定の詳細については、137 ページの「[Progress Reporter Administrator の使用](#)」を参照してください。

- 13 「How do you want to install the application」画面で、既定の設定のまま「Next」をクリックします。



[Application Security Warnings] 画面が表示されたら、
[Continue] をクリックします。

- 14 「Install New Application」画面で、以下の操作を行います。

- ステップ 1 の「Select installation options」セクションでは、既定の設定をそのまま使用します。
- ステップ 2 の「Map modules to servers」セクションで、「Oracle Primavera Progress Reporter」チェックボックスにマークを付けます。
- ステップ 3 の「Map virtual hosts for Web modules」セクションで、「Oracle Primavera Progress Reporter」チェックボックスにマークを付けます。
- ステップ 4 の「Map context roots for Web modules」セクションで「/pr」と入力します。
- ステップ 5 の「Summary」セクションで設定を確認し、「Finish」をクリックします。アプリケーション EAR ファイルが展開します。このプロセスには数分かかることもあります。

- 15 マスター設定に直接保存する場合は、「保存」リンクをクリックします。このプロセスにも数分かかることがあります。

- 16 pr-help.war ファイルに対して、[ステップ 10](#) から [ステップ 15](#) までを繰り返します。



pr-help.war ファイルに対しては、[ステップ 14](#) に追加のステップがあります。「Map context roots for Web modules」のステップに対して、以下のコンテキストルートを入力します。
/pr-help

- 17 管理者コンソールのメイン画面で、左側のナビゲーションの「Applications」を拡張して「WebSphere enterprise applications」をクリックします。

- 18 pr を検索して、アプリケーションのステータスを確認します。緑色の矢印でない場合は、[Select] 列の上にある [Start] ボタンをクリックします。

- 19 pr-help_war を検索して、アプリケーションのステータスを確認します。緑色の矢印でない場合は、[Select] 列の上にある [Start] ボタンをクリックします。

- 20 必要に応じて、WebSphere アプリケーションサーバを再起動します。

P6 Progress Reporter 用サーバの起動

以下の手順は、サポートされているアプリケーションサーバに P6 Progress Reporter がインストールされており、122 ページの「[P6 Progress Reporter 用アプリケーションサーバの設定と展開](#)」で説明されている追加手順を完了していることを前提としています。

JBoss 上でのサーバの起動

- Windows では、124 ページの[ステップ 2](#)で作成した「startPRinJoss.bat」ファイルをダブルクリックします。
- Linux では、ターミナルを開いて以下のコマンドを入力します。

```
cd /<JBOSS INSTALL LOCATION>/bin  
./run.sh -c pr
```

WebLogic 上でのサーバの起動

- Windows では、「スタート」 - 「Oracle WebLogic」 - 「User Projects」 - 「<domain>」 - 「サーバの起動」を選択します。

WebLogic のコンソールウィンドウでユーザ名とパスワードの入力を求められた場合は、ドメイン作成時に指定した管理者のユーザ名とパスワードを入力します。

- HP-UX では、<bea_home>/user_projects/<domain> ディレクトリに変更し、startWebLogic.sh スクリプトを実行します。

WebLogic のコンソールウィンドウでユーザ名とパスワードの入力を求められた場合は、ドメイン作成時に指定した管理者のユーザ名とパスワードを入力します。



WebLogic のプレコンパイルオプションをオンにすると、プレコンパイルが完了したときに WebLogic コンソールに「Server started in RUNNING mode」と表示されます。プレコンパイルの有効化の詳細情報については、WebLogic Server ドキュメントを参照してください。

WebSphere 上でのサーバの起動

- 管理者コンソールのメイン画面で、左側のナビゲーションの「Applications」を拡張して「WebSphere Enterprise Applications」をクリックします。「pr」（設定中に割り当てられる既定のモジュール名）のチェックボックスにマークを付けて、「Start」をクリックします。「pr-help_war」に対して、この手順を繰り返します。

P6 Progress Reporter 用サーバの停止

JBoss 上でサーバの停止

Windows コマンドプロンプトで Ctrl+c を押します。

WebLogic 上でサーバの停止

Windows の WebLogic ターミナルコンソールで、Ctrl+C キーを押します。

WebSphere 上でサーバの停止

管理者コンソールのメイン画面で、左側のナビゲーションの「Applications」を拡張して「WebSphere Enterprise Applications」をクリックします。「pr」（設定中に割り当てられる既定のモジュール名）のチェックボックスにマークを付けて、「Stop」をクリックします。「pr-help_war」に対して、この手順を繰り返します。

アプリケーションサーバプラグインの実装

Progress Reporter サーバ
の検証済み環境一覧につい
ては、P6 のメディアある
いはダウンロードファイル
に含まれる
¥Documentation¥
<language>¥Tested
Configurations フォルダを
参照してください。

JBoss、WebLogic および WebSphere アプリケーションサーバに
は、さまざまなプラグインが提供されています。これにより、
アプリケーションサーバが提供する以上の Web サーバのフロン
トエンドを設定することができます。Web サーバのプラグイン
を設定する手順については、それぞれのアプリケーションサー
バのドキュメントおよびサポート組織の Web サイト等を参照し
てください。

Progress Reporter Administrator の使用

Progress Reporter Administrator を使用して、Progress Reporter サーバとモジュールの設定を確認および変更します。設定はプロジェクト管理データベースに保存され、P6 Progress Reporter のアプリケーションサーバの実行に使用されます。

Progress Reporter Administrator は、設定のカテゴリを Web ページの最上部にタブとして表示する Web インタフェースです。「Configuration」タブには、Project Management データベースへの接続を指定できるように、Progress Reporter Administrator に最初にログインした日時が表示されます。他のタブは、Project Management データベースに正常に接続し、アプリケーションサーバを再起動した後に使用可能になります。データベース接続および接続プールへの変更を除いて、他のすべての設定変更は即座に適用され、アプリケーションサーバの再起動は必要ありません。

主な設定方法については、「Progress Reporter Administrator の起動」の後で説明します。すべてのタブおよびその設定の詳細については、*Progress Reporter Administrator* のヘルプを参照してください。



Progress Reporter Administrator で設定を変更する場合は、経験のある管理者のみに限定する必要があります。

Progress Reporter Administrator の起動

以下の URL 書式を使用して、Progress Reporter Administrator を起動します。

`http://<serverIP>:<listenport>/<ContextRoot>/admin/configuration`

既定のコンテクストルートは、**pr** です。サポートされている各アプリケーションサーバ用の例は、以下のとおりです。

JBoss: `http://<serverIP>:8080/pr/admin/configuration`

WebLogic: `http://<serverIP>:7001/pr/admin/configuration`

WebSphere: `http://<serverIP>:9080/pr/admin/configuration`

アプリケーションサーバが新しい構成ホームの場所を指すように指定する方法については、122 ページの「**P6 Progress Reporter 用アプリケーションサーバの設定と展開**」を参照してください。

構成ホームの場所 「Configuration」タブには、Progress Reporter サーバの構成ホームの場所が含まれます。「Configuration Home」フィールドを変更しても、データベース接続の設定を保存する際の保存場所が変更されるだけです。「Configuration Home」を変更した場合は、アプリケーションサーバに変数を設定する必要があります。アプリケーションサーバを再設定して再起動すると、「Configuration Home」フィールドには次回 Progress Reporter Administrator にログインする際の新しい場所が表示されます。

Progress Reporter ヘルプサイトの場所の指定 最新のオンラインアシスタンスを提供するために、Progress Reporter ヘルプサイトのファイルは Progress Reporter サーバのアプリケーション EAR ファイルから独立して提供されます。以下の手順に従って、ユーザが Progress Reporter モジュール内のオンラインヘルプにアクセスできるようにします。



この手順では、122 ページの「**P6 Progress Reporter 用アプリケーションサーバの設定と展開**」の説明に従って、既に Progress Reporter ヘルプの WAR ファイルをアプリケーションサーバにコピー、設定、および展開する手順を実行しているものと想定しています。

- 1 Progress Reporter Administrator の起動
- 2 「Application」タブに移動します。
- 3 「Progress Reporter Help site location」フィールドに、Progress Reporter ヘルプの URL を入力します。URL の基本構造は、以下のとおりです。
http://<serverIP>:<listenport>/pr-help/
URL の書式のその他のガイダンスについては、*Progress Reporter Administrator ヘルプ*を参照してください。
- 4 変更を保存し、Progress Reporter Administrator を終了します。



Progress Reporter ヘルプサイトの URL を入力した後に、アプリケーションサーバを再起動する必要はありません。

P6 Web Access のインストール

本章の内容：

- P6 Web Access のアップグレード
- 旧バージョンのアンインストール
- P6 Web Access 用のアプリケーションサーバのインストール
- P6 Web Access のインストールプロセス
- コンテンツリポジトリとワークフローリポジトリのインストール
- P6 Web Access 用アプリケーションサーバの設定と展開
- P6 Web Access 用サーバの起動
- P6 Web Access のプレコンパイル
- P6 Web Access 用サーバの停止
- クライアントのブラウザから P6 Web Access にアクセス
- クライアントブラウザの構成設定
- データベース構成設定の変更
- P6 Web Access 用の Oracle Universal Content Management と Microsoft SharePoint の設定
- 管理アプリケーションの使用方法
- P6 Web Access の設定の確認と変更
- P6 Web Access の設定
- アプリケーションサーバプラグインの実装

本章では、P6 Web Access（旧称「Primavera Web アプリケーション」または「myPrimavera」）を、サポートされるアプリケーションサーバにインストールする方法を説明します。さらに、本章では、P6 Web Access の管理アプリケーションを使って、P6 Web Access のアプリケーションサーバ設定の確認、変更、追加、削除を行う方法を説明します。

P6 Web Access のアップグレード

P6 Web Access バージョン 7.0 にアップグレードする前に、Project Management および／または Methodology Management データベースをバージョン 7.0 にアップグレードして、バージョン 7.0 の Project Management および／または Methodology Management のクライアントモジュールをインストールする必要があります。



さらなる詳細については、285 ページの「[自動データベースアップグレード](#)」および 259 ページの「[クライアントモジュールとその他のコンポーネントのインストール](#)」を参照してください。



現在 Interwoven/iManage または Apache JackRabbit を使用しており P6 Web Access バージョン 7.0 にアップグレードする場合、プロジェクトワークフロー、プロジェクトプロセス、ニュース、ディスカッション、イベント、ドキュメントデータは利用できなくなります。このデータが必要な場合は、Oracle Global カスタマーサポートに連絡してデータの移行や移行ツールに関する情報を入手してください。Oracle では、バージョン 7.0 にアップグレードする前にデータを移行するようお勧めします。移行後に、Apache JackRabbit 管理アプリケーションのすべての設定をリセットする必要もあります。

P6 Web Access の検証済みの環境リストについては、P6 のメディアまたはダウンロードに含まれている ¥Documentation¥ <language>¥Tested Configurations フォルダを参照してください。

myPrimavera 5.0、Primavera Web Application 6.0、または P6 Web Access 6.1 以降から P6 Web Access 7.0 にアップグレードする方法

- myPrimavera、Primavera Web Application、または P6 Web Access の現在のバージョンをアンインストールします。141 ページの「[旧バージョンのアンインストール](#)」を参照してください。
- サポートされているアプリケーションサーバの 1 つをインストールします。143 ページの「[P6 Web Access 用のアプリケーションサーバのインストール](#)」を参照してください。
サポートされているアプリケーションサーバの一覧は、34 ページの「[クライアントおよびサーバの要件](#)」を参照してください。
- P6 Web Access バージョン 7.0 をインストールします。146 ページの「[P6 Web Access のインストールプロセス](#)」を参照してください。
- アプリケーションサーバを設定、展開します。153 ページの「[P6 Web Access 用アプリケーションサーバの設定と展開](#)」を参照してください。

旧バージョンのアンインストール

バージョン 7.0 にアップグレードする前に P6 Web Access の以前のバージョンをすべてアンインストールする必要があります。

myPrimavera 5.0 または Primavera Web Application 6.0 を Tomcat 5.5 Server からアンインストールする方法

Windows では、スタートメニューからプログラムを選び、[<アプリケーション名>]、[<アプリケーション名>のアンインストール]を選びます。

Solaris では、Tomcat インストールディレクトリの下の webapps ディレクトリに移動し、uninstallc.sh スクリプトを実行します。



Tomcat は、P6 Web Access のバージョン 6.1 以上ではサポートされていません。

myPrimavera 5.0、Primavera Web Application 6.0、または P6 Web Access 6.1 以降を JBoss Server からアンインストールする方法

6.1 以前のバージョンでは、Jboss のインストール ディレクトリ (例えば c:\jboss-4.0.4.GA\server) で「myprimavera」フォルダの名前を変更するか、または削除します。

バージョン 6.2 では、Jboss のインストール ディレクトリで「primaveraweb」フォルダの名前を変更するか、または削除します。

myPrimavera 5.0、Primavera Web Application 6.0、または P6 Web Access 6.1 以降を WebLogic Server からアンインストールする方法

- 1 Windows では、スタートメニューからプログラムを選び、[<アプリケーション名>]、[<アプリケーション名>のアンインストール]を選びます。

Solaris では、<BEA_HOME>\user_projects\<domain> ディレクトリの uninstall.sh スクリプトを実行します。

- 2 ドメインの新規作成。「WebLogic 10g R3 の設定と展開」手順で新規ドメインを使用します。

myPrimavera 5.0、Primavera Web Application 6.0、または P6 Web Access 6.1 以降を WebSphere Server からアンインストールする方法

- 1 Windows では、スタートメニューからプログラムを選び、[<アプリケーション名>]、[<アプリケーション名>のアンインストール] を選びます。
Solaris では、WebSphere インストールディレクトリ下の installableApps/<アプリケーション>ディレクトリに移動し、uninstallws.sh スクリプトを実行します。
- 2 WebSphere Application コンソールを起動します。6.1 以前のバージョンでは、現在の「myPrimavera」インストールを削除します。バージョン 6.2 では、現在の「primaveraweb」インストールを削除します。



新しいインストールに、同じ <webaccesshome> ディレクトリを使用する場合は、既存の myprimavera.war ファイルは <webaccesshome> ディレクトリから削除して、新しい primaveraweb.war ファイルとの競合を避ける必要があります。

P6 Web Access 用のアプリケーションサーバのインストール

P6 Web Access は、Red Hat JBoss、Oracle WebLogic、および IBM WebSphere にも対応します。サポートされているアプリケーションサーバの完全な一覧（バージョン数を含む）については、34 ページの「[クライアントおよびサーバの要件](#)」を参照してください。P6 Web Access の検証済みの環境リストについては、P6 のメディアまたはダウンロードに含まれている [¥Documentation¥](#) <language>¥Tested Configurations フォルダを参照してください。



Windows では、アプリケーションサーバは、短い名前のフォルダにインストールすることをお勧めします。



コンテンツリポジトリのクラスタリングは、P6 Web Access アプリケーションサーバ用に WebLogic を使用している場合のみサポートされます。

Microsoft Windows に JBoss をインストール



Oracle Universal コンテンツ管理を使用する場合のコンテンツリポジトリでは、P6 Web Access アプリケーションサーバとして JBoss は使用できません。

JDK のインストール

JBoss の対応バージョンでは、Java 2 JDK version 6.0 update 14 (1.6.0_14) が必要です。Oracle Primavera は JDK を提供していません。JDK をダウンロードするには、<http://java.sun.com/products/archive> にアクセスしてください。

JBoss 5.0.1 GA-JDK6 のインストール

- 1 以下の Web サイトから「jboss-5.0.1.GA-jdk6.zip」をダウンロードします。
<http://www.jboss.org>
- 2 ローカルドライブに「jboss-5.0.1.GA-jdk6.zip」をコピーします。
- 3 <JBoss INSTALL LOCATION> でフォルダを解凍します（例えば、C:¥jboss-5.0.1.GA-jdk6）。
- 4 <JBoss INSTALL LOCATION>¥server にアクセスします。
- 5 「default」フォルダを選択し、Ctrl-C を押してコピーします。次に Ctrl-V を押します。これで「コピー ~ default」という名前のフォルダが作成されます。
- 6 「コピー ~ default」というフォルダの名前を「primaveraweb」に変更します。

Oracle Enterprise Linux に JBoss をインストール



Oracle Universal コンテンツ管理を使用する場合のコンテンツリポジトリでは、P6 Web Access アプリケーションサーバとして JBoss は使用できません。

JDK のインストール

JBoss の対応バージョンでは、Java 2 JDK version 6.0 update 14 (1.6.0_14) が必要です。Oracle Primavera は JDK を提供していません。JDK をダウンロードするには、<http://java.sun.com/products/archive> にアクセスしてください。

JBoss 5.0.1 GA-JDK6 のインストール

- 1 以下の Web サイトから「jboss-5.0.1.GA-jdk6.zip」をダウンロードします。
<http://www.jboss.org>
- 2 ローカルドライブに「jboss-5.0.1.GA-jdk6.zip」をコピーします。
- 3 <JBoss INSTALL LOCATION> でフォルダを解凍します (例えば、/usr/jboss-5.0.1.GA-jdk6)。
- 4 ファイルを実行できるよう、以下のコマンドを実行します。
`chmod -R +x *`
- 5 <JBoss INSTALL LOCATION>%server にアクセスします。
- 6 「default」フォルダを選択し、Ctrl-C を押してコピーします。次に Ctrl-V を押します。これで「コピー ~ default」という名前のフォルダが作成されます。
- 7 「コピー ~ default」というフォルダの名前を「primaveraweb」に変更します。

WebLogic のインストール

JDK のインストール

WebLogic 10g R3 は、Windows と Oracle Enterprise Linux の場合は JRockit 1.6.0_5 および Sun Java 2 JDK version 6.0 update 5 (1.6.0_05)、HP-UX の場合は Java 2 JDK version 6 update 4 (1.6.0_04) を自動インストールします。一部の 32 ビットと 64 ビットの P6 Web Access サーバには、必須の JDK バージョンになります。

WebLogic で Sun JDK を使用するには、JDK version 6.0 update 14 (1.6.0_14) が必要です。Oracle Primavera は JDK を提供していません。JDK をダウンロードするには、<http://java.sun.com/products/archive> にアクセスしてください。

64 ビットの Windows サーバで JRockit を使用するには、Java version 6 (1.6.0_11) 用 JRockit Real Time 3.0 が必要です。このバージョンは、以下の Web サイトからダウンロードしてください。
<http://www.oracle.com/technology/software/products/jrockit/index.htm>

WebLogic 10g R3 のインストール

インストールの手順については、WebLogic のドキュメントを参照してください。

WebSphere のインストール

JDK のインストール

WebSphere 7.0 は IBM JDK を自動インストールします。推奨された WebSphere 修正パックをインストールすると、JDK が自動的に更新されます。これは、P6 Web Access の必須 JDK です。どの修正パックが検証されているかについては、Tested Configurations のドキュメントを参照してください。

WebSphere 7.0 のインストール

インストールの手順については、WebSphere のドキュメントを参照してください。

P6 Web Access のインストールプロセス

Project Management データベースのインストール情報については、43 ページの「[データベースのインストールおよび設定](#)」を参照してください。互換性のため、データベースをアップグレードすることについての情報は、285 ページの「[自動データベースアップグレード](#)」を参照してください。

P6 Web Access 7.0 をインストールまたはアップグレードする前に、Project Management および／または Methodology Management データベースのバージョン 7.0 をインストールするか、現在のバージョンをアップグレードして、Project Management および／または Methodology Management のクライアントモジュールのバージョン 7.0 をインストールする必要があります。

旧バージョンの P6 Web Access、Primavera Web Application、または myPrimavera がインストールされている場合は、P6 Web Access バージョン 7.0 をインストールする前に旧バージョンをアンインストールする必要があります。さらなる詳細については 141 ページの「[旧バージョンのアンインストール](#)」を参照してください。



Project Management モジュールのインストール手順については、259 ページの「[クライアントモジュールとその他のコンポーネントのインストール](#)」を参照してください。

P6 Web Access インストーラはウィザードを提供し、以下のよう
なインストールプロセスをガイドします。

- P6 Web Access に使われるアプリケーションサーバの特定
- P6 Web Access と管理アプリケーションファイルのインストール
- P6 Web Access のデータベースの設定と構成



JBoss をアプリケーションサーバとして使用している場合は、P6 Web Access をインストールする前に、Sun Java 2 JDK version 6.0 update 14 (1.6.0_14) をインストールする必要があります。



OUI (Oracle Universal Installer) はグローバルのため、P6 Web Access のインストールまたはアンインストール、あるいは P6 ドキュメントの参照に OUI オンラインヘルプは適していません。代わりに、このセクションのインストール手順を参照してください。

P6 Web Access のインストール

- 1 物理メディアまたはダウンロード場所に含まれている Web_Access フォルダから、システムの種類に基づいて以下のいずれかを実行します。
 - Microsoft Windows システムにインストールしている場合は、**win¥Disk1¥install** ディレクトリに移動し、**setup.exe** ファイルをダブルクリックします。
 - Microsoft Windows 以外のシステムにインストールしている場合は、以下のコマンドを入力します。

cd <Operating System>¥Disk1¥install

オペレーティング システムによって、上のコマンドの <Operating System> を solaris_64、linux、hp_64、または aix_64-5L で置き換えます。

その後に、次のコマンドを入力します。

```
chmod 755 runInstaller
chmod 755 unzip
./runInstaller
```

- 2 「次へ」をクリックします。



ウィザードの各ダイアログボックスでは、[次へ] をクリックして次ステップへ進みます。

- 3 ようこそ画面で、「次へ」をクリックします。
- 4 「Specify Home Details...」ダイアログボックスで、P6 Web Access の <webaccessshome> フォルダをタイプするかブラウズして選びます（例：c:¥p6wahome）。

P6 Web Access の検証済みの環境リストについては、P6 の媒体またはダウンロードに含まれている ¥Documentation¥<language>¥Tested Configurations フォルダを参照してください。



アプリケーション EAR ファイル (primaveraweb.ear) が P6 Web Access のホームフォルダにコピーされます。アプリケーションサーバの deployment tool を使用して P6 Web Access EAR ファイルをデブロイしなければなりません。また、サポートされている JDK を使用中のパスで変更できる環境として設定し、Java コマンドにアクセスできるようにしてください。

- 5 OCM (Oracle Configuration Management) のサポートファイル
をインストールする場合は、「使用できる製品コンポーネン
ト」ダイアログボックスで、「**Oracle Configuration
Management**」チェックボックスにマークを付けます。

OCM のサポートファイルによって、OCM を実行するリ
モートマシンは、P6 Web Access アプリケーションサーバの
設定情報を取得できるようになります。

OCM と動作するように P6 Web
Access を設定する方法の詳細に
ついては、195 ページの「**P6
Web Access で使用するための
OCM (Oracle Configuration
Management) の設定**」を参照
してください。



P6 Web Access とともにインストールされる OCM のバー
ジョン (10.3.1.2.0) は、Oracle Primavera P6 をサポートし
ません。OCM バージョン 10.3.2 は、Oracle Primavera P6
をサポートします。OCM バージョン 10.3.1.2.0 をインス
トールするように選択すると、Oracle の更新ユーティリ
ティは、OCM をバージョン 10.3.2 にアップグレードします
(使用可能な場合)。

- 6 「ようこそ」ダイアログボックスで、テキストを確認し、「次
へ」をクリックします。
- 7 「Java ホームディレクトリ」ダイアログボックスで、Java が
インストールされる場所をタイプするかブラウズします。
- 8 「サマリ」ダイアログボックスで、「インストール」をクリッ
クします。

P6 Web Access ファイルがインストールされると、
「**Configuration Assistants**」ダイアログボックスが開きます。
このダイアログボックスは閉じないでください。しばらくす
ると、「**Setup and Configuration of the Primavera Database**」
ダイアログボックスが開きます。

- 9 **Setup and Configuration of the Primavera Database** ダイアロ
グボックスで、データベースタイプ (Oracle または SQL)
を選択します。
- 10 On the 「**Please enter the following information...**」ダイアログ
ボックスで、データベース接続パラメータを指定します。

データベースユーザ名 (例えば、pubuser)、パスワード、
データベース名、ホストアドレス、ホストポートを入力し
ます。データベース名、ホストアドレス、ホストポートは、
ユーザの Oracle または MS SQL Server の設置に固有な情報
です。データベースホストポートフィールドには、選択し
たデータベースタイプの既定ポートが表示されます。この
ポートを編集します。



P6 Web Access は、アプリケーションサーバとデータベースサーバ間の SSL 通信に対応します。SSL の設定については、適切なデータベースサーバのドキュメントおよび Oracle Primavera Support ナレッジベースを参照してください。

アプリケーションサーバとデータベースサーバ間の通信を確保するために SSL プロトコルを使用するには、SSL チェックボックスにマークを入れます。SSL チェックボックスにマークを入れる場合は、SSL で有効なポート番号を [Database Host Port] フィールドで指定する必要があります。



SSL プロトコルを使用すると、データベースの性能に影響します。

公開 Group ID は標準構成では、1 でなければなりません。

構成についてのさらなる情報については、184 ページの「[管理アプリケーションの使用方法](#)」を参照してください。

- 11 既存の Primavera 構成がある場合は、インストーラは、... 検出しましたダイアログボックスで、それを使用するか新しい構成を作成するか選択します。



同一のデータベースに対して、旧バージョンの P6 Web Access からアップグレードする場合は、新しい構成を作成するオプションを選択してください。これは、新たに追加された構成設定を導入するため必要です。

既存の Primavera 構成がない場合は、インストーラは、... を検出しましたダイアログボックスは表示されません。インストールプロセスは自動的に Primavera Configuration という名前の既定構成を作成します。この構成の設定は、P6 Web Access の管理アプリケーションで編集することができます。

さらなる詳細については、179 ページの「[データベース構成設定の変更](#)」を参照してください。



インストール後、必要に応じて、Database Configuration Setup ウィザードを使用して、他の構成を選ぶことができます。

- 12 データベースの正しい設定が完了したことを確認するメッセージが表示されたら、**OK** をクリックします。
- 13 「インストール完了」画面で、「終了」をクリックし、「OK」をクリックします。



P6 Web Access のスケジュール計算、実績の適用、集計機能を実行するには、ジョブサービスのインストールが必要です。

ジョブサービスのインストールについての情報は、268 ページの「[ジョブサービスおよび分散ジョブサービスのインストール](#)」を参照してください。



P6 Web Access は、Windows の「プログラムの追加と削除」リストに表示されません。P6 Web Access をアンインストールする必要がある場合は、OUI (Oracle Universal Installer) を実行します。

コンテンツリポジトリとワークフローリポジトリのインストール

コンテンツリポジトリを使用すると、P6 Web Access でドキュメントを共有したり共同で管理したりできます。ワークフローリポジトリを使用すると、プロジェクトの要求をトラッキングできます。P6 ユーザが拡張されたドキュメント管理機能とプロジェクト要求機能を利用できるようにするには、コンテンツリポジトリとワークフローリポジトリをインストールする必要があります。

コンテンツリポジトリのインストール

データベースウィザードを実行して P6 Web Access をインストールすると、自動的に Apache JackRabbit のコンテンツリポジトリのインストールが完了します。これ以上のインストールは必要ありません。Oracle Universal Content Management と Microsoft SharePoint がまだインストールされていない場合は、それぞれのアプリケーションに含まれるドキュメントで、インストール手順を参照してください。

データベースウィザードの詳細については、45 ページの「[データベースの自動インストール](#)」を参照してください。



コンテンツリポジトリのクラスタリングは、P6Web Access アプリケーションサーバ用に WebLogic を使用している場合のみサポートされます。



Oracle Universal コンテンツ管理を使用する場合のコンテンツリポジトリでは、P6 Web Access アプリケーションサーバとして JBoss は使用できません。

コンテンツリポジトリのセットアップを完了するために、インストール後に以下のタスクを完了する必要があります。

- Oracle Universal Content Management と Microsoft SharePoint では、組織のニーズに応じて P6 とともに使用するサーバを設定します。180 ページの「[P6 Web Access 用の Oracle Universal Content Management と Microsoft SharePoint の設定](#)」を参照してください。
- 適切な Database/Instance/Content Repository Administration Application の設定を入力します。この設定のさらなる情報については、197 ページの「[P6 Web Access の設定](#)」のデータベース設定サブセクションを参照してください。

ワークフローリポジトリのインストール

データベースウィザードを実行して P6 Web Access をインストールしても、ワークフローリポジトリはインストールされません。その代わり、インストールファイルをオンラインで利用できます。インストールファイルを見つけてワークフローリポジトリを設定する詳細な方法は、P6 Web Access ホームフォルダ (c:\p6wahome など) にある **addworkflowjars** ファイルに記載されています。addworkflowjars ファイルはダブルクリックしないで最初に編集してください。ファイル内の手順を終了すると、これを実行して一部のステップを自動化できます。

ワークフローリポジトリのインストール後、[Database/Instance/ Workflow Repository Administration Application] 設定を入力する必要があります。この設定のさらなる情報については、197 ページの「[P6 Web Access の設定](#)」のデータベース設定サブセクションを参照してください。

P6 Web Access 用アプリケーションサーバの設定と展開

Microsoft Windows で JBoss 5.0.1 GA を設定

- 1 P6 Web Access インストール中に設定が完了しなかった場合は、P6 Web Access のデータベース設定ウィザードを使用してデータベースに接続します。

- 2 **primaveraweb.ear** ファイルを <webaccessshome> (P6 Web Access のインストール時に指定済み) から以下の場所にコピーします。

<JBoss INSTALL LOCATION>%server%\primaveraweb\deploy%

- 3 国際 (言語) をサポートする場合は、以下のファイルを編集します。

<JBoss INSTALL LOCATION>%server%\primaveraweb\deploy%\jbossweb.sar%\server.xml

コネクタ設定で、パラメータ

URIEncoding="UTF-8" を追加します。

例えば、以下のような状況を想定してください。

<!--A HTTPS/1.1 Connector on port 8080-->

<Connector port="8080" **URIEncoding="UTF-8"**

address="{jboss.bind.address}"

maxThreads="250" strategy="ms" maxHttpHeaderSize="8192"

emptySessionPath="true"

enableLookups="false" redirectPort="8443" acceptCount="100"

connectionTimeout="20000" disableUploadTimeout="true"/>



SSL 以外のコネクタを使用している場合は、設定から SSL の仕様を削除します。

- 4 <JBoss INSTALL LOCATION>%bin を検索します。
- 5 **run.bat** コマンドファイルを編集して、以下の行を :RESTART 行の前に 1 行で挿入します。

set JAVA_OPTS=

"-Dprimavera.bootstrap.home=<webaccessshome>"

%JAVA_OPTS%

この場合の <webaccessshome> は、インストール時に設定された P6 Web Access のホーム ディレクトリ (例えば c:\p6wahome) です。



<webaccessshome>" と %JAVA_OPTS% の間にスペースがあります。

- 6 run.bat ファイルで、以下を実行してパフォーマンスを向上します。

- 以下のラインを見つけてます。

```
set JAVA_OPTS=%JAVA_OPTS% -Xms128m -Xmx512m
```

- このラインを以下のラインに替えます (すべて 1 行)。

```
set JAVA_OPTS=%JAVA_OPTS% -XX:PermSize=64m  
-XX:MaxPermSize=128m -Xms512m -Xmx512m
```

- 7 この変更を run.bat ファイルに保存します。

- 8 P6 Web Access を有効にして Workflow Repository のテンプレートを保存するには、データベースタイプに基づいて、以下のファイルを <webaccesshome>%lib から
<JBoss INSTALL LOCATION>%server%primaveraweb%lib にコピーします。

Oracle の場合は **ojdbc6.jar**

SQL Server の場合は **sqljdbc.jar**

- 9 P6 Web Access が Microsoft Project のファイルを適切にインポートできるようにするには、
<JBoss INSTALL LOCATION>%lib%endorsed から以下のファイルを削除する必要があります。

resolver.jar

serializer.jar

stax-api.jar

xalan.jar

xercesImpl.jar



P6 アプリケーションではこれらのファイルは必要ありませんが、これらのファイルを削除すると現在 JBoss で実行されている他のアプリケーションに影響が出る可能性があります。これらのファイルを削除する前に、JBoss で実行されているサードパーティアプリケーションがこれらのファイルを必要としないことを確認してください。これらのファイルを削除しない場合にも、P6 Web Access ユーザは Microsoft Project のファイルを引き続きインポートできますが、一部のリソース割り当てが重複することがあります。

- 10 P6 Web Access のヘルプ JAR ファイル (P6help.jar) を P6 のメディアまたはダウンロードの Web_Access フォルダから
<JBoss INSTALL LOCATION>%common%lib にコピーします。



複数のサーバを使用するか、またはクラスタリングを使用する場合は、前の手順をそれぞれのサーバで繰り返す必要があります。

- 11 サービス管理者が JMX コンソールを確保したい場合は、<http://www.redhat.com> で手順を参照してください。

Microsoft Windows 上での JBoss 5.0.1 GA の展開

- 1 受信クライアント接続が JBoss サービスにリモートでアクセスできるようにするには、JBoss サービスをネットワークインターフェイスにバインドする必要があります（例えば、JBoss がインストールされているサーバのネットワークカードの IP アドレスなど）。JBoss アプリケーションサーバへのリモートアクセスを有効にするために、JBoss サービスをどのインターフェイスにバインドするかを決定します。セキュリティ上の理由により、JBoss の既定のインストールは、JBoss サービスへのリモート接続を許可しないローカルホスト（127.0.0.1）インターフェイスにサービスをバインドします。
- 2 JBoss アプリケーションサーバを開始するには、以下を含む <webaccesshome> で「startP6WebAccessinJBoss.bat」という名前の bat ファイルを作成します。

@echo off

```
set JBOSS_HOME=<JBOSS INSTALL LOCATION>
call %JBOSS_HOME%\bin\run.bat -c primaveraweb
```

それぞれの展開に合わせて、“call %JBOSS_HOME%...” ラインの最後に -b オプションを追加し、[ステップ 1](#) で決定されるインターフェイスに JBoss サービスをバインドします。例えば、以下のようになります。

```
call %JBOSS_HOME%\bin\run.bat -c primaveraweb -b <IP address>
```

アプリケーションインターフェイスへのアクセスを有効にしてセキュリティで保護する方法の詳細については、<http://www.jboss.org> から入手できる『JBoss Application Server Installation and Getting Started Guide』を参照してください。

また、以前に定義されていない場合は、startP6WebAccessinJBoss.bat ファイルに JAVA_HOME Environment 変数を追加します。例えば、以下のようになります。

```
set JAVA_HOME=C:\Program Files\Java\jdk1.6.0_14
```

- 3 新しく作成された bat ファイルを実行します。



SQL Server を使用している場合、194 ページの『[Microsoft SQL 2005 データベース上の JBoss と WebLogic の設定](#)』にある P6 Web Access 管理アプリケーションを使用した追加の設定手順を必ず確認してください。

Oracle Enterprise Linux で JBoss 5.0.1 GA を設定

- 1 P6 Web Access インストール中に設定が完了しなかった場合は、P6 Web Access のデータベース設定ウィザードを使用してデータベースに接続します。

- 2 **primaveraweb.ear** ファイルを <webaccesshome> (P6 Web Access のインストール時に指定済み) から以下の場所にコピーします。

<JBoss INSTALL LOCATION>/server/primaveraweb/deploy/

- 3 国際 (言語) をサポートする場合は、以下のファイルを編集します。

<JBoss INSTALL LOCATION>/server/primaveraweb/deploy/
jbossweb.sar/server.xml

コネクタ設定で、パラメータ

URIEncoding="UTF-8" を追加します。

例えば、以下のような状況を想定してください。

<!--A HTTPS/1.1 Connector on port 8080-->

<Connector port="8080" **URIEncoding="UTF-8"**

address="{jboss.bind.address}"

maxThreads="250" strategy="ms" maxHttpHeaderSize="8192"

emptySessionPath="true"

enableLookups="false" redirectPort="8443" acceptCount="100"

connectionTimeout="20000" disableUploadTimeout="true"/>



SSL 以外のコネクタを使用している場合は、設定から SSL の仕様を削除します。

- 4 <JBoss INSTALL LOCATION>/bin を検索します。

- 5 **run.sh** コマンドファイルを編集します。「# Setup JBoss specific properties」セクションに以下のラインを挿入します (すべて 1 行)。

JAVA_OPTS="-Dprimavera.bootstrap.home=<webaccesshome>
\$JAVA_OPTS"

この場合の <webaccesshome> は、インストール時に設定された P6 Web Access のホーム ディレクトリ (例えば /usr/p6wahome) です。



<webaccesshome> と \$JAVA_OPTS の間にスペースがあります。



以前に定義されていない場合は、run.sh ファイルで JAVA_HOME Environment 変数を追加します。例えば、以下ようになります。
export JAVA_HOME = /usr/jdk 1.6.0_14

- 6 この変更を run.sh ファイルに保存します。
- 7 **run.conf** ファイルを編集して以下を実行し、Java オプションを設定します。

- 以下のラインを見つけます。

```
JAVA_OPTS="-XX:PermSize=64m -XX:MaxPermSize=64m -
Dsun.rmi.dgc.client.gcInterval=3600000 -
Dsun.rmi.dgc.server.gcInterval=3600000"
```

- 「-XX:PermSize=64m -XX:MaxPermSize=64m」を以下に置き換えます（すべて 1 行）。

```
"-XX:PermSize=64m -XX:MaxPermSize=128m -Xms512m
-Xmx512m"
```

- 8 この変更を run.conf ファイルに保存します。
- 9 P6 Web Access を有効にして Workflow Repository のテンプレートを保存するには、データベースタイプに基づいて、以下のファイルを <webaccessshome>%lib から <JBoss INSTALL LOCATION>%server%primaveraweb%lib にコピーします。

Oracle の場合は **ojdbc6.jar**

SQL Server の場合は **sqljdbc.jar**

- 10 P6 Web Access が Microsoft Project のファイルを適切にインポートできるようにするには、<JBoss INSTALL LOCATION>/lib/endorsed から以下のファイルを削除する必要があります。

resolver.jar
serializer.jar
stax-api.jar
xalan.jar
xercesImpl.jar



P6 アプリケーションではこれらのファイルは必要ありませんが、これらのファイルを削除すると現在 JBoss で実行されている他のアプリケーションに影響が出る可能性があります。これらのファイルを削除する前に、JBoss で実行されているサードパーティアプリケーションがこれらのファイルを必要としていないことを確認してください。ファイルを削除しない場合、P6 Web Access ユーザは Microsoft Project のファイルをインポートできますが、一部のリソース割り当てが重複することがあります。

- 11 P6 Web Access のヘルプ JAR ファイル (P6help.jar) を P6 の媒体またはダウンロードの Web_Access フォルダから
<JBoss INSTALL LOCATION>/common/lib にコピーします。



複数のサーバを使用するか、またはクラスタリングを使用する場合は、前の手順をそれぞれのサーバで繰り返す必要があります。

- 12 サービス管理者が JMX コンソールを確保したい場合は、<http://www.redhat.com> で手順を参照してください。

Oracle Enterprise Linux に JBoss 5.0.1 GA を展開

- 1 受信クライアント接続が JBoss サービスにリモートでアクセスできるようにするには、JBoss サービスをネットワークインターフェイスにバインドする必要があります (例えば、JBoss がインストールされているサーバのネットワークカードの IP アドレスなど)。JBoss アプリケーションサーバへのリモートアクセスを有効にするために、JBoss サービスをどのインターフェイスにバインドするかを決定します。セキュリティ上の理由により、JBoss の既定のインストールは、JBoss サービスへのリモート接続を許可しないローカルホスト (127.0.0.1) インターフェイスにサービスをバインドします。
- 2 ターミナルを開きます。以下のコマンドを入力するか、または次に指定したバージョンを展開してサーバを開始します。

```
cd /<JBoss INSTALL LOCATION>/bin
./run.sh -c primaveraweb
```

それぞれの展開に合わせて、コマンドの 2 行目の最後に **-b** オプションを追加し、[ステップ 1](#) で決定されるインターフェイスに JBoss サービスをバインドします。例えば、以下のようになります。

```
cd /<JBoss INSTALL LOCATION>/bin
./run.sh -c primaveraweb -b <IP アドレス>
```

アプリケーションインターフェイスへのアクセスを有効にしてセキュリティで保護する方法の詳細については、<http://www.jboss.org> から入手できる『JBoss Application Server Installation and Getting Started Guide』を参照してください。



SQL Server を使用している場合、194 ページの『[Microsoft SQL 2005 データベース上の JBoss と WebLogic の設定](#)』にある P6 Web Access 管理アプリケーションを使用した追加の設定手順を必ず確認してください。

WebLogic 10g R3 の設定と展開

Oracle WebLogic を設定するには、以下のタスクを実行する必要があります。

- P6 Web Access アプリケーション用に WebLogic ドメインを作成する
- P6 Web Access 用に WebLogic を設定する
- P6 Web Access を WebLogic ドメインに展開する

WebLogic ドメインの作成

- 1 WebLogic 設定ウィザードを実行します。
- 2 「Welcome」 ウィンドウで「Create a new WebLogic domain」を選択し、「Next」をクリックします。
- 3 「Select Domain Source」 ウィンドウで「Next」をクリックし、既定の選択内容をそのまま使用します。
- 4 「Configure Administrator Username and Password」 ウィンドウで、ユーザ名とパスワードの情報を入力して「Next」をクリックします。
- 5 「Configure Server Start Mode and JDK」 ウィンドウの左側のペーンで、「Production Mode」を選択します。右側のペーンで適切な JDK を選択して「Next」をクリックします。
- 6 「Customize Environment and Services Settings」 ウィンドウで「Next」をクリックします。
- 7 「Create WebLogic Domain」 ウィンドウで、ドメインおよび場所の情報を入力して「Create」をクリックします。
- 8 「Creating Domain」 ウィンドウで、「Start Admin Server」をマークして「Done」をクリックします。
- 9 プロンプトで要求されたら、[ステップ 4](#) で入力したユーザ名とパスワードを入力します。

P6 Web Access 用に WebLogic を設定する

- 1 変更を元に戻す必要がある場合に備えて、startWebLogic ファイルのバックアップ用コピーを作成します。
 - Windows では、ファイル名は「startweblogic.cmd」で、保存場所は以下のとおりです。
`<bea_home>%user_projects%\domains\<your_domain>%bin%`
 - Unix では、ファイル名は「startweblogic.sh」で、保存場所は以下のとおりです。
`<bea_home>/user_projects/domains/<your_domain>/bin/`

2 startWebLogic ファイルを編集します。

3 「set JAVA_OPTIONS=」で始まるラインを見つけて、Primavera bootstrap 変数を追加します。

Windows では、以下に似たラインになります。

```
set JAVA_OPTIONS=%SAVE_JAVA_OPTIONS%  
-Dprimavera.bootstrap.home=<webaccessshome>
```

この場合の <webaccessshome> は、インストール時に設定された P6 Web Access のホーム ディレクトリ（例えば c:\¥p6wahome）です。

Unix では、以下に似たラインになります。

```
JAVA_OPTIONS=${SAVE_JAVA_OPTIONS}  
-Dprimavera.bootstrap.home="<webaccessshome>"
```

この場合の <webaccessshome> は、インストール時に設定された P6 Web Access のホーム ディレクトリ（例えば /usr/p6wahome）です。

4 WebLogic で P6 Web Access のドメインを開始する際のパフォーマンスを向上するには、Primavera bootstrap 変数の後に以下の JVM 引数を追加します（すべて 1 行）。

```
-Djavax.xml.stream.XMLInputFactory=  
weblogic.xml.stax.XMLStreamInputFactory
```



*-Djava の前に必ずスペースを入れてください。
bootstrap の後のプロパティの順序はどのようなものでも構いません。*

5 JAVA_OPTIONS のすぐ下に JAVA_VM の変数を入力して Java バージョナルマシンを設定します（[ステップ 3](#) で追加）。

ラインは以下に似たものになります。

```
JAVA_VM=-server
```

6 WebLogic クラスパスの始めに「<webaccessshome>¥license」を含めます。

- Windows では、以下に似たラインになります。

```
set CLASSPATH=<webaccessshome>¥license¥;  
%SAVE_CLASSPATH%
```

- Unix では、以下に似たラインになります。

```
CLASSPATH="<webaccessshome>/license":${CLASSPATH}
```


- 7 この変更を startWebLogic ファイルに保存します。
- 8 変更を元に戻す必要がある場合は、[ステップ 1](#) で指定したものと
同じ bin ディレクトリ内に置かれている、適切な **setDomainEnv** ファイル (.cmd または .sh) のバックアップ
コピーを作成します。
- 9 setDomainEnv ファイルを編集します。
- 10 メモリ不足になることを防ぐため、setDomainEnv ファイル
で JVM MaxPermSize の設定を増やします。MaxPermSize 設
定は少なくとも 256m に設定してください。

Windows では、以下に似たラインになります。

```
if "%JAVA_VENDOR%"=="Sun" (
    set MEM_ARGS=%MEM_ARGS% %MEM_DEV_ARGS%
    -XX:MaxPermSize=256m
)
```

HP-UX では、以下に似たラインになります。

```
if [ "${JAVA_VENDOR}" = "HP" ]; then
    MEM_ARGS="${MEM_ARGS} ${MEM_DEV_ARGS}
    -XX:MaxPermSize=256m"
    export MEM_ARGS
```

- 11 パフォーマンスを最大化するには、setDomainEnv ファイル
でメモリの設定を変更します。まず、NewSize、
MaxNewSize、SurvivorRatio の値を設定できるよう
MEM_ARGS ラインを編集します。

例えば、ヒープサイズの合計が 1024 の場合、NewSize と
Max NewSize は 256 に設定し、SurvivorRatio の値が 8 になる
ようにします。

完全なラインは以下に似たものになります。

```
set MEM_ARGS=-XX:NewSize=256m -XX:MaxNewSize=256m
-XX:SurvivorRatio=8 -Xms1024m -Xmx1024m
```

ここで

-XX:NewSize= は新世代ヒープの最低サイズ (eden と 2 つの
Survivor スペースの合計)

-XX:MaxNewSize= は新世代ヒープの最大サイズ

-XX:SurvivorRatio= Survivor スペースのサイズ (Survivor スペースに対する eden の比率)

Young 世代は、eden と 2 つの Survivor スペースの合計に相当します。

12 変更を setDomainEnv ファイルに保存します。

13 P6 Web Access のヘルプ JAR ファイル (P6help.jar) を P6 のメディアまたはダウンロードの Web_Access フォルダから各自のオペレーティングシステムに応じて以下の場所にコピーします。

- Windows:
`<bea_home>%user_projects%domains%<your_domain>%lib`
- Unix:
`<bea_home>/user_projects/domains/<your_domain>/lib`



複数のサーバを使用するか、またはクラスタリングを使用する場合は、前の手順をそれぞれのサーバで繰り返す必要があります。

P6 Web Access を WebLogic ドメインに展開する

1 WebLogic 管理コンソールを起動します。



管理コンソールは、以下のアドレスを使用して Web ブラウザから開くことができます。http://<serverIP>:<listenport>/console
例 : http://<serverIP>:7001/console

- 2 「Welcome」ウィンドウで、[ステップ 4](#) で入力したユーザ名とパスワードを使用してログインします。
 - 3 管理コンソールの「Change Center」ペーンで、「Lock & Edit」をクリックします。
 - 4 「Domain Structure」ペーンで、「Deployments」をクリックします。
 - 5 「Summary of Deployments」ペーンで、「Install」をクリックします。
 - 6 「Install Application Assistant」ペーンで、P6 Web Access のホームフォルダに移動します。primaveraweb.ear ファイルを選択して「Next」をクリックします。
 - 7 「Install Application Assistant」ペーンで、「Install this deployment as an application」を選択して「Next」をクリックします。
 - 8 「Install Application Assistant」ペーンで「Next」をクリックして、既定のオプションをそのまま使用します。
-

- 9 選択した設定を確認してから「**Finish**」をクリックしてインストールを完了します。
- 10 「**Settings for primaveraweb**」ウィンドウで「**Save**」をクリックします。
- 11 「**Change Center**」ペーンで「**Activate Changes**」をクリックします。
- 12 「**Domain Structure**」ペーンで、「**Deployments**」をクリックします。
- 13 「**Summary of Deployments**」ペーンで、「**primaveraweb**」をマークします。
- 14 「**Summary of Deployments**」ペーンで、「**Start**」ボタンの右側にある下向き矢印をクリックし、「**Servicing all requests**」をクリックします。
- 15 「**Start Application Assistant**」ペーンで「**Yes**」をクリックします。
- 16 「**Summary of Deployments**」ペーンで、primaveraweb が含まれている行の「**State**」カラムの「**start Running**」リンクをクリックします。
- 17 しばらくしてから「**Refresh**」をクリックします。
「primaveraweb」の「**State**」カラムに「**Active**」と表示されます。



SQL Server を使用している場合、194 ページの「[Microsoft SQL 2005 データベース上の JBoss と WebLogic の設定](#)」にある P6 Web Access 管理アプリケーションを使用した追加の設定手順を必ず確認してください。

WebSphere 7.0 の設定と展開

P6 Administrative BAT ファイル用の Java Home の変更

P6 Web Access のインストール後、dbconfigpv.cmd および adminpv.cmd ファイルで JAVA_HOME を変更する必要があります。これらのファイルは、P6 Web Access のホームディレクトリに含まれています。

- 1 テキストエディタで **dbconfigpv.cmd** および **adminpv.cmd** ファイルを開きます。各ファイルで以下のラインを変更します。

変更前 :

```
set JAVA_HOME=C:\¥DOCUME~1¥ADMINI~1¥LOCALS~1¥Temp....
```

変更後 :

```
set JAVA_HOME=<websphere home>¥AppServer¥java
```

- 2 dbconfigpv.cmd を実行し、146 ページの「[P6 Web Access のインストールプロセス](#)」に説明されているように新しいデータベース接続を作成します。

P6 Web Access のホームの設定



P6 Web Access をインストールした直後に以下のステップを実行してください。

- 1 WebSphere アプリケーションサーバを起動します。
- 2 WebSphere アプリケーションサーバの**管理者コンソール**を起動します。
- 3 左側のナビゲーションペーンで、「Servers」、「Server Types」の順に拡張します。「WebSphere application servers」をクリックします。
- 4 「Application Servers」画面で、サーバ名のリンクをクリックします。
- 5 「Configuration」タブの「Server Infrastructure」で、「Java」と「Process Management」を拡張します。
- 6 「Process Definition」をクリックします。
- 7 「Additional Properties」で、「Java Virtual Machine」をクリックします。
- 8 「Generic JVM arguments」で、次のように入力します（すべて 1 行）。

```
-Dprimavera.bootstrap.home=<webaccessshome>  
-Djavax.xml.transform.TransformerFactory=  
org.apache.xalan.processor.TransformerFactoryImpl
```

この場合の <webaccesshome> は、インストール時に設定された P6 Web Access のホーム ディレクトリ（例えば c:\p6wahome）です。

- 9 「OK」をクリックします。変更を報告するメッセージ内に表示されている「保存」リンクをクリックします。

P6 Web Access を新しい WebSphere Application に設定

- 1 管理者コンソールの左側のナビゲーションペーンで「アプリケーション」を拡張して、「新規アプリケーション」をクリックします。
- 2 「Install a New Application」画面で、「New Enterprise Application」をクリックします。
- 3 「新規アプリケーションのパス」画面で、P6 Web Access のホーム ディレクトリと「primaveraweb.ear」ファイルへのパス（例えば C:\p6wahome\primaveraweb.ear）を指定し、「Next」をクリックします。
- 4 「Context Root」に **primaveraweb** と入力し、「Next」をクリックします。
- 5 「How do you want to install the application」画面で、既定の設定のまま「Next」をクリックします。



[Application Security Warnings] 画面が表示されたら、
[Continue] をクリックします。

6 「Install New Application」画面で、以下の操作を行います。

- ステップ 1 の「Select installation options」セクションでは、既定の設定をそのまま使用します。
- ステップ 2 の「Map modules to servers」セクションで、「primaveraweb」チェックボックスにマークを付けます。
- ステップ 3 の「Map virtual hosts for web modules」セクションで、「primaveraweb」チェックボックスにマークを付けます。
- ステップ 4 の「Web モジュールのコンテキストルートのマップ」セクションで **/primaveraweb** と入力します。
- ステップ 5 の「Summary」セクションで設定を確認し、「Finish」をクリックします。アプリケーション EAR ファイルが展開します。このプロセスには数分かかることもあります。

- 7 マスター設定に直接保存する場合は、「保存」リンクをクリックします。このプロセスにも数分かかることがあります。

P6 Web Access プロジェクト Gantt チャートのポートレットの設定

- 1 以下の場所からローカルドライブとフォルダ (C:\jsf\ など) に「jsf-api.jar」と「jsf-ri.jar」をコピーします。

```
<websphere home>\AppServer\profiles\<profile name>\
Installed Apps\<cell
name>\primaveraweb.ear\primaveraweb.war\
WEB-INF\lib
```

- 2 管理者コンソールの左側のナビゲーションペーンで「環境」を拡張して、「共有ライブラリ」をクリックします。
- 3 「スコープ」画面で、Cell=<cell name> を選択します。
- 4 画面の下部のテーブルで、「新規」ボタンをクリックします。
- 5 「全般プロパティ」画面で、以下の操作を行います。
 - 「名前」フィールドに「jsf」と入力します。
 - 「クラスパス」フィールドに、[ステップ 1](#) でコピーした JAR ファイルを保存したパスを入力します。例えば、以下のようになります。
C:\jsf\jsf-api.jar
C:\jsf\jsf-ri.jar
 - 「この共有ライブラリに個別のクラスローダーを使用する」の設定にマークを付けます。
 - 「OK」をクリックします。
- 6 左側のナビゲーションペーンで「Applications」を拡張して、「WebSphere enterprise applications」をクリックします。
- 7 「primaveraweb」を探してチェックボックスにマークを付け、「primaveraweb」リンクをクリックします。
- 8 「参照」セクションで、「共有ライブラリの参照」リンクをクリックします。
- 9 「primaveraweb.war,WEB-INF/web.xml」という URI の説明が付いている 2 番目の「primaveraweb」エントリのチェックボックスにマークを付けます。
- 10 テーブルの最上部にある「参照共有ライブラリ」ボタンをクリックします。
- 11 「利用可能」画面で「jsf」ライブラリをハイライトし、「選択」画面に移動します。

- 12 「OK」を2回クリックします。
- 13 マスター設定に直接保存する場合は、「保存」リンクをクリックします。

最終設定作業と展開の完了

- 1 管理者コンソールのメイン画面で、左側のナビゲーションの「Applications」を拡張して「WebSphere enterprise applications」をクリックします。
- 2 「primaveraweb」を検索して、アプリケーションのステータスを確認します。緑色の矢印でない場合は、[Select] 列の上にある [Start] ボタンをクリックします。
- 3 以下を含む <websphere home>%WebSphere%AppServer%profiles%\<profile name>%properties に「commons-logging.properties」というプロパティファイルを作成します。

```
org.apache.commons.logging.LogFactory=org.apache.commons.logging.impl.LogFactoryImpl
```
- 4 P6 Web Access のヘルプ JAR ファイル (P6help.jar) を P6 のメディアまたはダウンロードの Web_Access フォルダから以下の場所にコピーします。
<websphere home>%WebSphere%AppServer%lib
- 5 WebSphere アプリケーションサーバを再起動します。

P6 Web Access 用サーバの起動

以下の手順は、サポートされているアプリケーションサーバに P6 Web Access がインストールされており、153 ページの「[P6 Web Access 用アプリケーションサーバの設定と展開](#)」で説明されている追加手順を完了していることを前提としています。

JBoss 上でのサーバの起動

- Windows では、155 ページの [ステップ 2](#) で作成した「startP6WebAccessinJoss.bat」ファイルをダブルクリックします。
- Linux では、ターミナルを開いて以下のコマンドを入力します。

```
cd /<JBOSS INSTALL LOCATION>/bin  
./run.sh -c primaveraweb
```

WebLogic 上でのサーバの起動

- Windows では、「スタート」 - 「Oracle WebLogic」 - 「User Projects」 - 「<domain>」 - 「サーバの起動」を選択します。

WebLogic のコンソールウィンドウでユーザ名とパスワードの入力を求められた場合は、ドメイン作成時に指定した管理者のユーザ名とパスワードを入力します。

- HP-UX では、<bea_home>/user_projects/<domain> ディレクトリに変更し、startWebLogic.sh スクリプトを実行します。

WebLogic のコンソールウィンドウでユーザ名とパスワードの入力を求められた場合は、ドメイン作成時に指定した管理者のユーザ名とパスワードを入力します。



P6 Web Access がアプリケーションとしてインストールされており、WebLogic のプレコンパイルオプションが有効な場合、WebLogic コンソールにはプレコンパイルの完了時に「サーバは RUNNING モードで立ち上がりました」と表示されます。プレコンパイルの有効化の詳細情報については、WebLogic Server ドキュメントを参照してください。

WebSphere 上でのサーバの起動

- WebSphere の管理者コンソールから「primaveraweb」モジュールを開始します（primaveraweb は既定のモジュール名で、設定中に割り当てられます）。

P6 Web Access のプレコンパイル

P6 Web Access では必須ではありませんが、プレコンパイルを行うとユーザが最初に P6 Web Access ページをロードする時間を短縮できます。

以下の手順は Oracle Primavera がサポートするすべてのアプリケーションサーバに適用され、アプリケーションサーバの実行中に実行する必要があります。

- 1 メディアまたはダウンロードに含まれている **Web_Access** フォルダから P6 Web Access がインストールされているサーバに **precompile_utility** ディレクトリをコピーします。
- 2 コマンドプロンプトを開き、新しく作成された「precompile」ディレクトリにアクセスします。
- 3 以下に類似したコマンドを実行します。

```
precompile -u <base URL> -f <input file>
```

ここで

<base URL> は P6 Web Access ベース URL

<input file> は P6 Web Access EAR ファイル



P6 Web Access EAR ファイルのファイルパスにはスペースを挿入できません。

WebLogic 上で P6 Web Access が標準インストールされていると想定します。

Windows では、コマンドは以下に似たものになります。

```
precompile -u http://localhost:7001/primaveraweb -f  
c:¥<webaccesshome>¥primaveraweb.ear
```

HPUX-11i では、コマンドは以下に似たものになります。

```
java -jar JSPPrecompile.jar -u http://localhost:7001/primaveraweb  
-f <webaccesshome>/primaveraweb.ear
```

P6 Web Access 用サーバの停止

JBoss 上でサーバの停止

Windows コマンドプロンプトで **Ctrl+c** を押します。

WebLogic 上でサーバの停止

WebLogic のターミナル コンソールで **Ctrl+c** を押します。

WebSphere 上でサーバの停止

WebSphere の管理者コンソールから「**primaveraweb**」モジュールを停止します（**primaveraweb** は既定のモジュール名で、設定中に割り当てられます）。

クライアントのブラウザから P6 Web Access にアクセス

ユーザは、アプリケーションサーバのプラットフォームに応じて、以下の URL 構造でクライアントのブラウザから P6 Web Access にアクセスできます。



P6 Web Access の認証モードを選択するには、認証設定ウィザードを使用します (P6 のメディアまたはダウンロードに含まれている `¥database¥ldap-config` フォルダ内にある `LDAPCfgWiz.exe`)。また、認証に必要な P6 Web Access の設定を指定します。設定ウィザードの詳細については、309 ページの「[認証モードの設定](#)」を参照してください。認証設定情報については、192 ページの「[認証設定](#)」を参照してください。

業界選択の詳細については、28 ページの「[P6 の業界タイプ](#)」を参照してください。

JBoss アプリケーションサーバでは、

`http://serverIP:listenport/ContextRoot/login_<industry>`

ここで、<industry> は、業界のユーザ設定によって「cmt」または「it」です。

例： `http://<serverIP>:8080/primaveraweb/login_cmt`

既定の listenport は 8080 です。既定のコンテキストルートは、primaveraweb です。

WebLogic アプリケーションサーバでは、

`http://serverIP:listenport/ContextRoot/login_<industry>`

ここで、<industry> は、業界のユーザ設定によって「cmt」または「it」です。

例： `http://<serverIP>:7001/primaveraweb/login_cmt`

既定の listenport は 7001 です。既定のコンテキストルートは、primaveraweb です。

WebSphere アプリケーションサーバでは、

`http://serverIP:listenport/ContextRoot/login_<industry>`

ここで、<industry> は、業界のユーザ設定によって「cmt」または「it」です。

例： `http://<serverIP>:9080/primaveraweb/login_cmt`

既定の listenport は 9080 です。既定のコンテキストルートは、primaveraweb です。



コンテキストルートは、すべてのサポートされているアプリケーションサーバで設定可能です。コンテキストルートの設定についての情報は、アプリケーションサーバのドキュメントを参照してください。

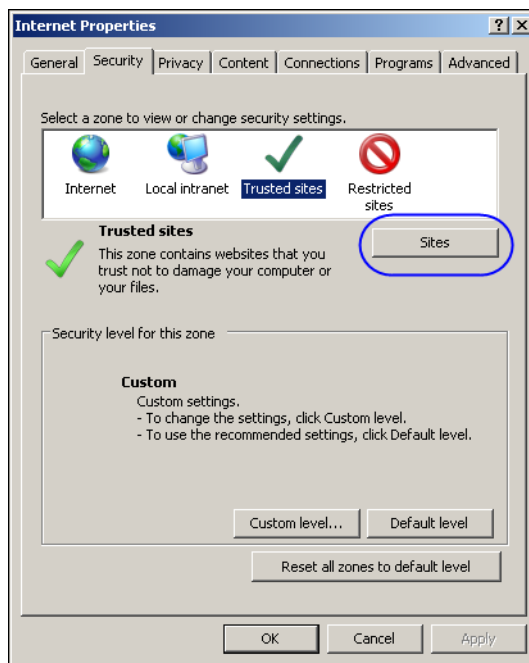
また、URL はアプリケーションサーバの構成によって、大文字小文字の区別がされる場合があります。

クライアントブラウザの構成設定

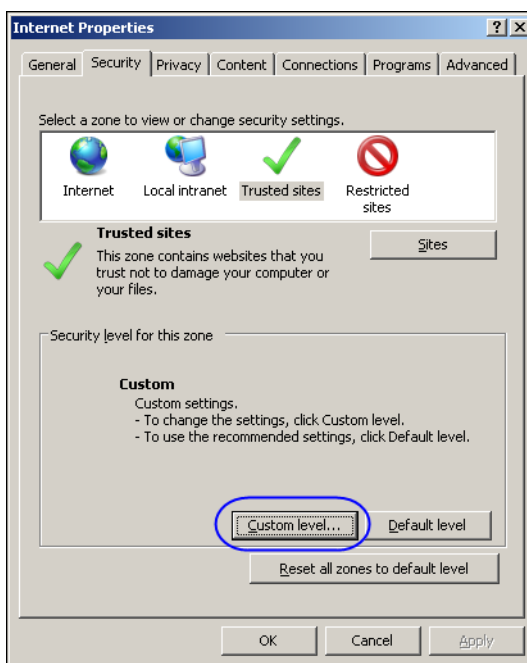
Microsoft Outlook からインポートするための設定変更

特定の Active X コントロールを許可するよう Internet Explorer が設定されていなければ、Microsoft Outlook から P6 Web Access にデータをインポートすることはできません。Microsoft Outlook からインポートする必要がある場合は、各クライアントマシンで以下を実行してください。

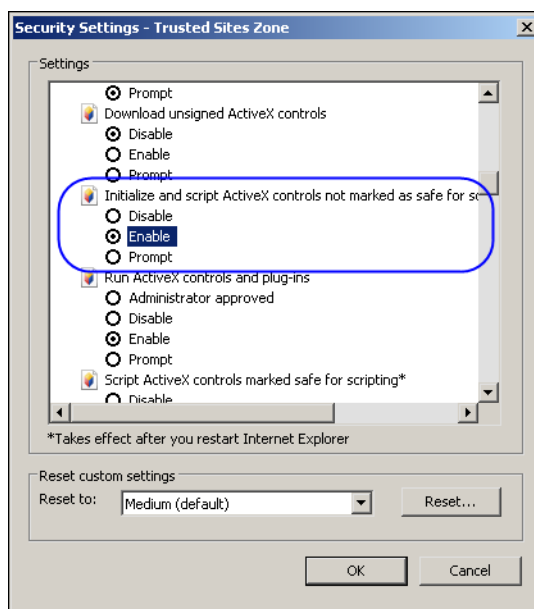
- 1 Windows の [コントロールパネル] から、[インターネットオプション] を選択します。
- 2 セキュリティタブの [信頼済みサイト] をクリックします。
- 3 [サイト] ボタンをクリックして、使用している P6 Web Access URL をゾーンに追加します。



- 4 [信頼済みサイト] ウィンドウを閉じます。
- 5 [レベルのカスタマイズ] ボタンをクリックします。



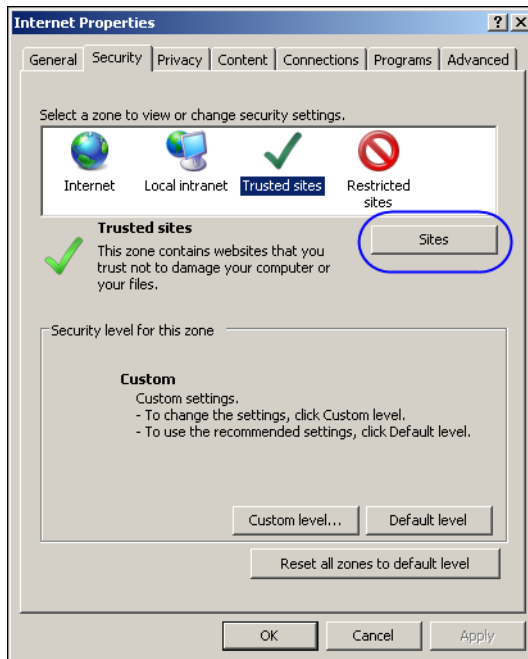
6 [Initialize and script Active X controls not marked as safe for scripting] 設定を有効にします。



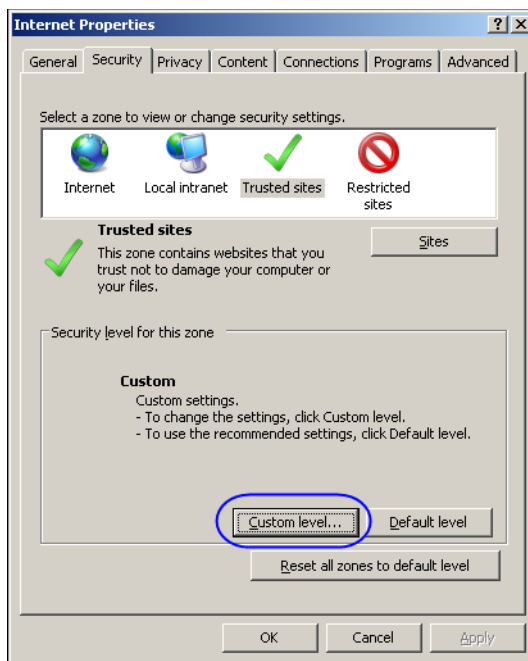
Excel へのエクスポートで発生した問題を解決するための設定変更

Internet Explorer を適切に設定しなければ、Excel にエクスポートするリンクをクリックしても P6 Web Access が反応しないことがあります（開く / 保存ダイアログボックスが表示されません）。この場合は、問題が発生しているクライアントマシンごとに以下を実行します。

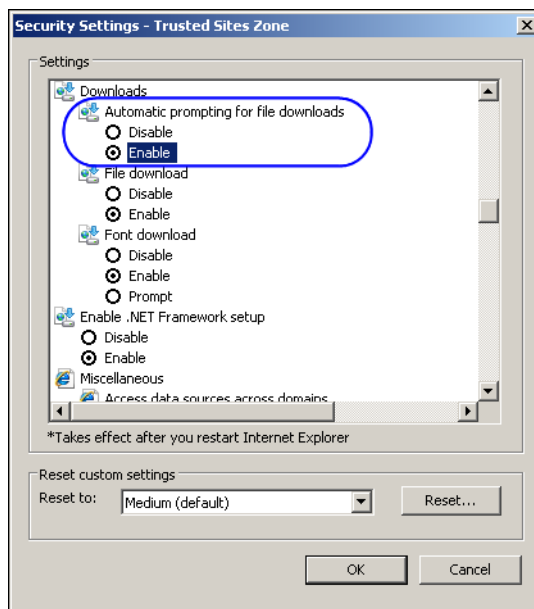
- 1 Windows の [コントロールパネル] から、[インターネットオプション] を選択します。
- 2 セキュリティタブの [信頼済みサイト] をクリックします。
- 3 [サイト] ボタンをクリックして、使用している P6 Web Access URL をゾーンに追加します。



- 4 [信頼済みサイト] ウィンドウを閉じます。
- 5 [レベルのカスタマイズ] ボタンをクリックします。



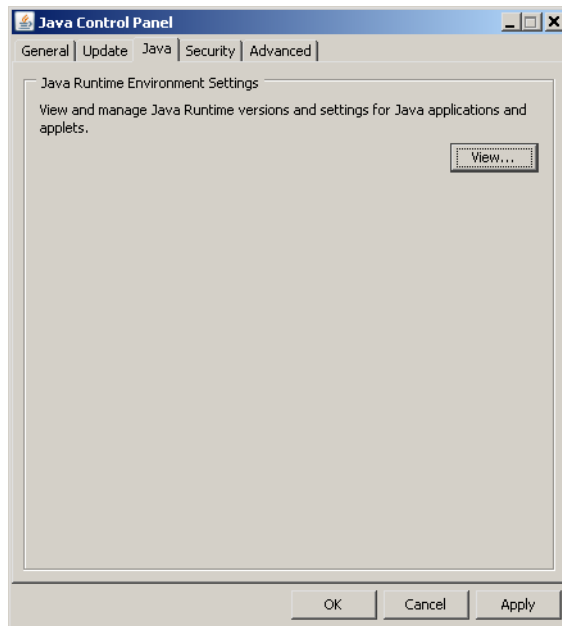
- 6 [ファイルのダウンロード時に自動的にダイアログを表示] 設定を有効にします。



Null ポインタの例外を解決するための設定変更

P6 Web Access の使用中に多数のアクティビティコード値（4 万件以上）をロードすると、Null ポインタの例外を受け取ることがあります。この場合は、P6 Web Access を使用しているクライアントマシンごとに以下を実行します。

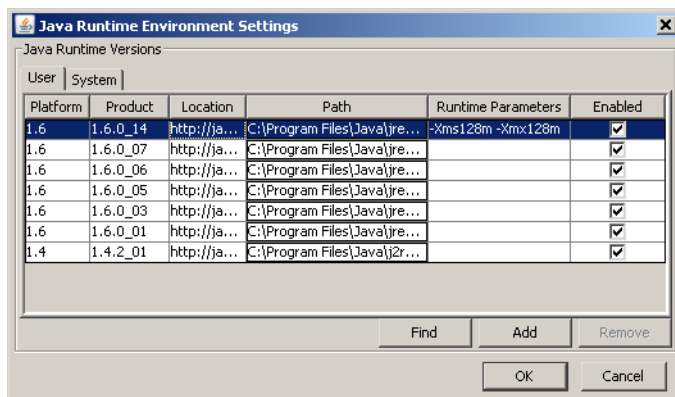
- 1 Windows の [コントロールパネル] で [Java] を選択します。
- 2 Java の [コントロールパネル] で [Java] タブを選択します。
- 3 「Java Runtime Environment の設定」で「表示」をクリックします。



- 4 「Java Runtime Environment の設定」画面の「JRE 1.6.0_14」行で、“-Xms<value>m および -Xmx<value>m”を「ランタイムパラメータ」フィールドに追加します。

設定に応じて値は異なりますが、最初は以下の値を使用するようお勧めします。

-Xms128m -Xmx128m



- 5 「OK」をクリックし、Java の「コントロールパネル」を終了します。

データベース構成設定の変更

Database Configuration Wizard を使って、P6 Web Access をインストールしたときに指定したデータベース接続設定の変更を行うことができます。

インストール時に選択したデータベースには、1 つ以上の P6 コンフィグレーション構成が保存されています。それぞれに設定されたパラメータが保持され、P6 Web Access の動作を制御しています。インストール時に、既存の P6 コンフィグレーション構成、または新規作成を選択します。その後、Database Configuration ウィザードを使い、別の P6 コンフィグレーション構成を選択したり、新規に作成することができます。



P6 コンフィグレーション構成を変更、もしくは新規作成した後、P6 Web Access のアプリケーションサーバを停止・再起動して変更を有効にする必要があります。

JBoss 上でデータベース設定ウィザードを起動

「スタート」メニューから「プログラム」、「Oracle - Primavera P6」、「Primavera P6 Web Access Utilities」、「Database Configuration Setup」を選択します。

WebLogic 上でデータベース設定ウィザードを起動

- Windows では、P6 Web Access の設定時に指定した <webaccesshome> ディレクトリにある dbconfigpv.cmd を実行するか、「スタート」、「プログラム」、「Oracle - Primavera P6」、「Primavera P6 Web Access Utilities」、「Database Configuration Setup」を選択します。
- HP-UX では、P6 Web Access の設定時に指定した <webaccesshome> ディレクトリに移動して、dbconfigpv.sh スクリプトを実行します。

WebSphere 上でデータベース設定ウィザードを起動

- Windows では、P6 Web Access の設定時に指定した <webaccesshome> ディレクトリにある dbconfigpv.cmd を実行するか、「スタート」、「プログラム」、「Oracle - Primavera P6」、「Primavera P6 Web Access Utilities」、「Database Configuration Setup」を選択します。
- Linux では、WebSphere 下の <webaccesshome> ディレクトリに移動して、dbconfigpv.sh を実行します。

P6 Web Access 用の Oracle Universal Content Management と Microsoft SharePoint の設定

P6 Web Access をインストールした後、「Content Repository Administration Application」の設定を入力する前に、Oracle Universal Content Management サーバと Microsoft SharePoint サーバを P6 とともに使用するために設定する必要があります。

以下の手順を完了する方法の詳しい指示については、コンテンツリポジトリアプリケーションに付属するドキュメントを参照してください。

コンテンツリポジトリアプリケーションのモード P6 には、2 つのコンテンツリポジトリ認証モードがあります。認証は、シングルユーザ認証またはマルチユーザ認証のいずれかに対して設定できます。シングルユーザ認証モードでは、すべての P6 ユーザは、リポジトリの構成時に設定されるシングル管理者ユーザログインを使用してリポジトリにアクセスします。マルチユーザ認証モードでは、それぞれの P6 ユーザは個々のログインに基づいて認証されます。

シングルユーザ認証モードは、P6 とリポジトリの両方に対して同等のユーザリストを維持する必要がなく、ユーザに P6 を介してコンテンツリポジトリへの完全なアクセスを提供する場合に有用です。これによって、リポジトリ管理者は、他のすべてのユーザと資格情報を共有する必要がなくなり、リポジトリに対する資格情報の単一のセットを維持するだけで済みます。シングルユーザ認証は、テスト担当者が最小限の手間でアクセスできるテストリポジトリをセットアップする場合にも役立ちます。

マルチユーザ認証モードは、既定のモードです。マルチユーザ認証モードでは、個別のユーザベースでコンテンツリポジトリへのアクセスを制限することによってセキュリティが強化されます。このモードは、ネイティブ監査フィールドを使用するので、ファイルの作成と変更に関する明確な監査ができます。

それぞれの設定の詳細については、「[P6 Web Access の設定](#)」セクションの「データベース設定」サブセクションを参照してください。



マルチユーザ認証モードを使用する場合は、Oracle Universal Content Management のゲストアクセスを無効にする必要があります。ゲストアクセスを有効にし、ゲストユーザが P6 セキュリティグループに所属していない場合、そのユーザは P6 リポジトリの機能を使用できません。

Oracle Universal Content Management の設定

別の記載がある場合を除いて、以下のガイドラインを推奨します。組織のニーズによって、既存の設定を使用するか、または独自の命名規則を使用できます。

- 1 (必須) Universal Content Management サーバの設定ファイルに P6 マシン名または IP アドレスを信頼済みサーバとして追加することによって、P6 データベースに信頼済み接続を確立します。
- 2 (必須) 「Contribution Folders」に一意のパスを追加することによって、Universal Content Management サーバに P6 ドキュメントのホームフォルダを作成します。

例：¥¥Contribution Folders¥¥Production¥¥Oracle Primavera¥¥

- 3 Universal Content Management に P6 セキュリティグループを作成し、P6 ユーザに適切な権限を認可します。セキュリティの考慮事項は、次のとおりです。
 - 「認証モード」に「単一ユーザ」を使用しない場合は、P6 のユーザ名を Universal Content Management のユーザ名と同じにする必要があります。



シングルユーザ認証モードでは、以下のステップ 4 で作成するか、または 199 ページの「[データベース設定]」の「¥¥Database¥¥Instance¥¥Content Repository」サブセクションで指定した管理者ユーザを介して、すべての P6 ユーザを Universal Content Management にログインさせます。

- P6 に関連するすべての Universal Content Management ユーザ名は、Universal Content Management の「ロール」と「ユーザ」に適切に割り当てられている必要があります。迅速にセットアップするために、全特権（読み取り、書き込み、削除、管理）を保持する P6 専用のロールを作成してマップします。
 - P6 に関連するすべての Universal Content Management ユーザ名は、P6 セキュリティグループにアクセスする必要があります。
- 4 P6 セキュリティグループ用に Universal Content Management に管理者ユーザを作成します。P6 ドキュメントへのアクセス、P6 ドキュメントの編成の変更、および「認証モード」に「単一ユーザ」を使用する場合は、管理特権を保持するユーザアカウントが必要です。



「認証モード」に「単一ユーザ」を使用すると、管理者ユーザに P6 セキュリティグループを含む適切なすべてのセキュリティグループへのアクセスが許可されている場合、ユーザは P6 ドキュメントのホームフォルダ以外のドキュメントを参照できます。

- 5 セキュリティアカウントの使用が有効になっている場合は、P6 セキュリティアカウントを作成します。例えば、組織のニーズによって、パフォーマンスおよびストレージ上の理由からセキュリティアカウントをセットアップする必要がある場合があります。上の [ステップ 3](#) と同様のセキュリティの考慮事項は、次のとおりです。
 - 「認証モード」に「単一ユーザ」を使用しない場合、P6 のユーザ名を Universal Content Management のユーザ名と同じにする必要があります。
 - P6 に関連するすべての Universal Content Management ユーザ名は、Universal Content Management の「ロール」と「ユーザ」に適切に割り当てられている必要があります。迅速にセットアップするために、全特権（読み取り、書き込み、削除、管理）を保持する P6 専用のロールを作成してマップします。
 - P6 に関連するすべての Universal Content Management ユーザ名は、P6 セキュリティアカウントにアクセスする必要があります。
- 6 Universal Content Management の P6 ドキュメントのドキュメントタイプを作成します。
- 7 (必須) Universal Content Management で P6 用に以下のメタデータテキストフィールドを作成します。
 - PrmUserId
 - PrmProjectId
 - PrmWorkgroupId
 - PrmSecurityPolicy
 - PrmTemplate (「Enabled」属性と「Searchable」属性をオフにします)
 - PrmCheckedOutUserId
 - PrmCheckedOutDate
 - PrmLocalFilePath (Type = Long Text)
 - PrmAuthorId

プレフィックスとして「Prm」を使用する必要はなく、任意のプレフィックスを使用できます。プレフィックスを使用しない場合は、P6 メタデータのフィールドが既存のメタデータのフィールドと競合しないようにしてください。

- 8 (必須) P6 管理アプリケーションで適切な設定を入力します。設定の詳細については、199 ページの「[\[データベース設定\]](#)」の「¥Database¥Instance¥Content Repository」サブセクションを参照してください。

Microsoft SharePoint の設定

別の記載がある場合を除いて、以下のガイドラインが必要です。組織のニーズによって、独自の名前付け規則を使用できます。

- 1 Microsoft Internet Information Server (IIS) で IIS Admin を使用して「WS_FRPC」(*推奨名*) というサイトを新規作成します。
- 2 P6 のメディアまたはダウンロードに含まれている ¥Tools¥SharePoint_Connector フォルダから **setup.exe** を起動し、[ステップ 1](#) で作成したサイトに P6 Web サービスをインストールします。

- 3 Web サービスのインストール中は、必ず既定の仮想ディレクトリを維持してください。例えば、「**インストールアドレスの選択**」ダイアログボックスで、次のように入力します。

Site = WSFPRPC

Virtual Directory = WS_FRPC

Application Pool = DefaultAppPool

- 4 インストールが完了したら、以下の URL を起動してインストールをテストします。

`http://<host>:<port>/<virtual_dir>/WS_FRPC.asmx`

ここで <host> は SharePoint がインストールされているサーバのマシン名または IP アドレス、<port> は SharePoint が使用しているポート番号 (既定値は 8080)、<virtual_dir> は [ステップ 3](#) の既定の仮想ディレクトリです。

- 5 P6 の媒体またはダウンロードに含まれている ¥Tools¥SharePoint_Connector フォルダから **P6WebAccessLibraryTemplate.stp** を使用して P6 用の SharePoint ドキュメントライブラリを作成します。
- 6 P6 管理アプリケーションで適切な設定を入力します。設定の詳細については、199 ページの「[\[データベース設定\]](#)」の ¥Database¥Instance¥Content Repository サブセクションを参照してください。

管理アプリケーションの使用方法

システム管理者として、ユーザは P6 Web Access の管理アプリケーションを使って、P6 コンフィグレーション構成の確認、変更、追加および削除を行うことができます。P6 コンフィグレーション構成は、ユーザがインストール時に指定した P6 Web Access のデータベースに保存されています。これらの構成には、P6 Web Access のアプリケーションサーバの実行に使われるすべての設定が含まれています。



管理アプリケーションを使って構成設定を変更するのは、経験豊富な管理者に限る必要があります。

P6 Web Access の管理アプリケーションは、ローカルでも、またはブラウザを通して遠隔地からでも実行することができます。管理アプリケーションを起動すると、データベースレベルのユーザ名とパスワードの入力を求められます。

JBoss で管理アプリケーションを起動

P6 Web Access の設定時に指定した <webaccesshome> ディレクトリにある adminpv.cmd を実行するか、「スタート」、「プログラム」、「Oracle - Primavera P6」、「Primavera P6 Web Access Utilities」、「Administration Application」を選択します。

WebLogic で管理アプリケーションを起動

- Windows では、P6 Web Access の設定時に指定した <webaccesshome> ディレクトリにある adminpv.cmd を実行するか、「スタート」、「プログラム」、「Oracle - Primavera P6」、「Primavera P6 Web Access Utilities」、「Administration Application」を選択します。
- HP-UX で管理アプリケーションをローカルで起動するには、P6 Web Access の設定時に指定した <webaccesshome> ディレクトリに移動して、adminpv.sh スクリプトを実行します。
- 管理アプリケーションをリモート起動するには、ブラウザで `https://server IP:listenport/ContextRoot/admin.jsp` にアクセスします。ここで、`serverIP:listenport` は P6 Web Access サーバの IP アドレスと listen ポートです。既定のコンテキストルートは、`myprimavera` です。

P6 Web Access のインストールでは、管理アプリケーションへのリモートアクセス用に既定 URL を設定します。アプリケーションサーバの構成ユーティリティを使って、listen ポート番号やコンテキストルートを変更することができます。

WebSphere で管理アプリケーションを起動

- Windows では、P6 Web Access の設定時に指定した <webaccesshome> ディレクトリにある adminpv.cmd を実行するか、「スタート」、「プログラム」、「Oracle - Primavera P6」、「Primavera P6 Web Access Utilities」、「Administration Application」を選択します。
- Linux で管理アプリケーションをローカルで起動するには、WebSphere をインストールしたディレクトリ下の、<primaveraweb> ディレクトリに移動し、adminpv.sh スクリプトを実行します。
- 管理アプリケーションをリモート起動するには、ブラウザで `https://server IP:listenport/ContextRoot/admin.jsp` にアクセスします。ここで、`serverIP:listenport` は P6 Web Access サーバの IP アドレスと listen ポートです。既定のコンテキストルートは、myprimavera です。

P6 Web Access の設定の確認と変更

P6 Web Access の管理アプリケーションでは、ダイアログボックスの各タブで設定を示します。現在の構成や設定について、ツリーやテーブル表示で示します。ログ表示は、設定の変更、追加、削除履歴を示します。



工場出荷時の既定設定は、編集できません。ユーザ設定項目のみ変更することができます。

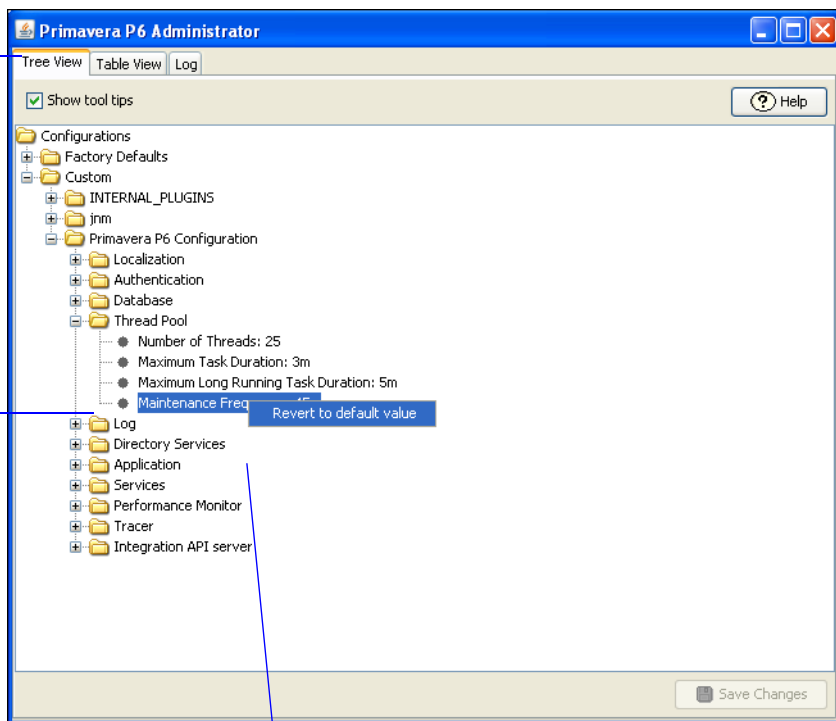
ツリーおよびテーブル表示で、簡単な設定の説明を表示するには、ツールチップのチェックボックスで [Show] をマークします。そしてマウスを設定項目の上に重ねると、ポップアップ説明が表示されます。



赤で示された設定は、期限切れです。Oracle は、これらの設定を更新するようにお勧めします。そのためには、古い設定を右クリックし、「Update to latest version」を選択します。

設定データの
階層表示を
するのに
クリック
します。

設定値の変更
には、設定名
をトリプル
クリックして
新規の値をタ
イプします。
Windows
では、F2 を
押して編集
モードに変更
することも
できます。

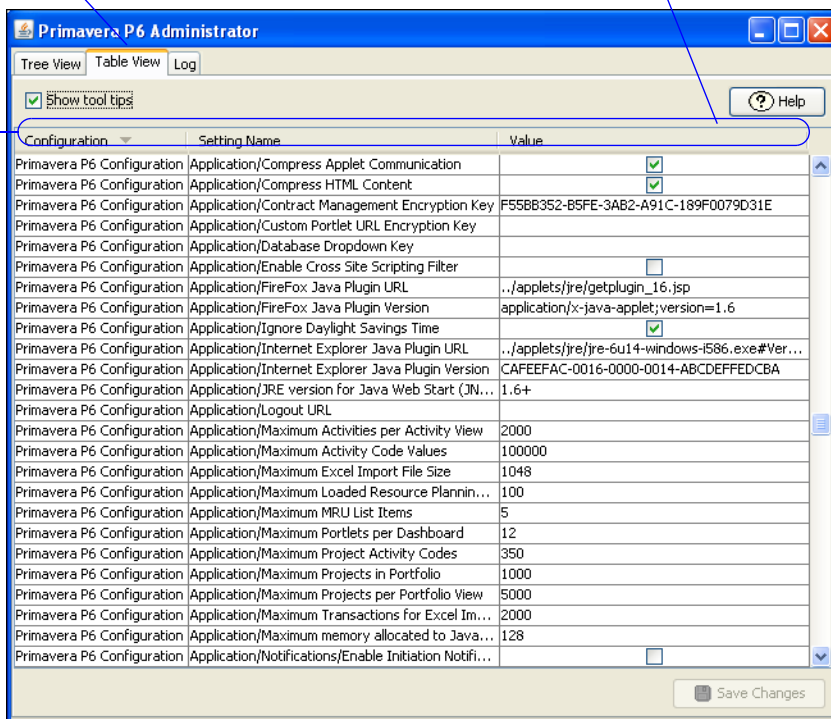


設定を既定値にもどすには、選択して右クリックし、
[Revert to default value] を選択します。

テーブル形式で
設定を表示する
のにクリック
します。

設定値の変更には、設定をクリックして値のカラム
をクリックし、変更する値をタイプします。

テーブルの
ソーティング
には、カラム
の題名をク
リックします。
ソーティング
を行うと複数
の構成に含ま
れる類似の設
定を見やすく
します。



P6 Web Access の設定を追加 新しい設定を作成するには、既存の設定の複製を作成します。

- 設定の複製を作成するには、ツリー表示で設定名を選択し、右クリックして [Duplicate] を選択します。設定に名前を入力して [OK] をクリックします。必要に応じて設定を編集します。
- 工場出荷時の既定設定に基づいて新しい設定を作成するには、ツリー表示で [Factory Defaults] を右クリックして、[Duplicate] を選択します。

データベースインスタンスを設定に追加 新しいデータベースインスタンスを設定に追加するには、既存のインスタンスの複製を作成します。

- データベースインスタンスの複製を作成するには、インスタンスを示すアイコンを選択して右クリックし、[Duplicate] を選択します。新しいインスタンスに一意の名前を入力し、必要に応じてその他の設定を編集します。

P6 Web Access の設定やデータベースインスタンスの削除 設定またはデータベースインスタンスを削除するには、それを選択し右クリックして [Delete] を選択します。

工場出荷時の既定設定は、削除できません。ユーザ設定項目はどれでも削除できますが、すべてを削除することはできません。少なくとも 1 つのユーザ設定がなければなりません。

設定に関連するデータベースインスタンスはどれでも削除できますが、すべてを削除することはできません。各設定には、少なくとも 1 つのデータベースインスタンスがなければなりません。



データベース設定時に指定したデータベースを削除することは、禁止されていません。それを行った場合は、データベース設定ウィザードを実行する必要があります (179 ページの「[データベース構成設定の変更](#)」を参照)。

管理アプリケーションの特殊設定手順

Project Architect ジョブサービスを実行するための P6 Web Access の設定 P6 Web Access で Project Architect ジョブサービスを実行するには、P6 Web Access 設定を変更し、Project Architect を利用する Project Management データベースを、ジョブサービスマシンで指定されている Methodology Management DB Alias に接続する必要があります。

以下のステップを踏んで P6 Web Access を設定し、Project Architect ジョブサービスを実行します。



Methodology Management DB Alias がジョブサービスをインストールしたマシン上にない場合は、データベース設定ウィザードを使って作成または選択する必要があります。Methodology Management DB Alias がすでにジョブサービスマシン上に存在する場合は、以下の手順のステップ 1 をとばしてください。

ジョブサービスのインストールと設定についての情報は、268 ページの「[ジョブサービスおよび分散ジョブサービスのインストール](#)」を参照してください。

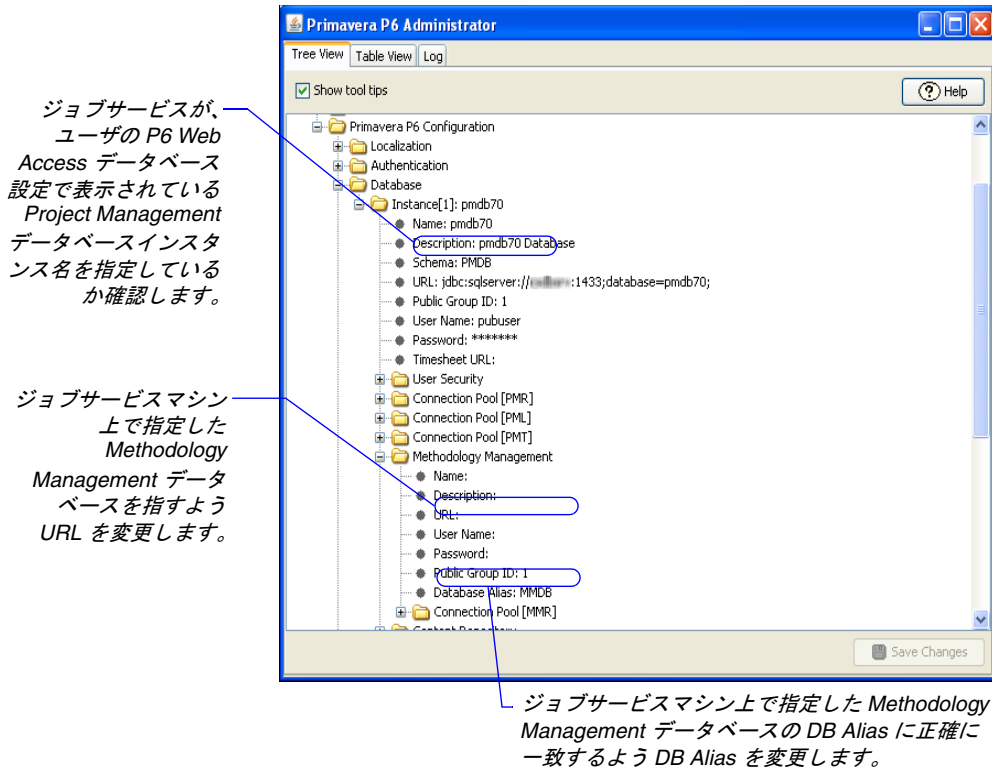


この記述は、すでにジョブサービスがインストールされているものと想定しています。

- 1 必要に応じて、ジョブサービスマシン上でデータベース設定ウィザードを実行し、ジョブサービスマシンを P6 Web Access に関連付けたい Methodology Management データベースに接続するための Methodology Management DB Alias を作成するか選択してください。

データベース接続の設定方法については、304 ページの「[データベース接続設定の変更](#)」を参照してください。

- 2 管理アプリケーションを起動します。
管理アプリケーションの起動方法については、184 ページの「[管理アプリケーションの使用方法](#)」を参照してください。
- 3 適切な P6 コンフィグレーション構成をツリー表示して、以下のロケーションにナビゲートします。Database/Instance/Methodology Management。
- 4 Methodology Management フォルダで URL を変更し、これが [ステップ 1](#) で指定したものと同一 Methodology Management データベースを指すようにします。
- 5 [ステップ 1](#) で指定した Methodology Management データベースの DB Alias に一致するよう DBAlias 値を変更します。



複数のデータベースインスタンスへのアクセスを管理 P6 Web Access では、別の Project Management データベースのデータにアクセスすることができます。P6 Web Access の構成で、複数のデータベースインスタンスをサポートするように設定すると、ログインページでデータベースのドロップダウンリストが表示され、ユーザが接続したいデータベースインスタンスを選択することができます。

管理者は、管理アプリケーションで、URL にデータベースパラメータを要求することによって、特定のデータベースへのユーザアクセスを管理するよう P6 Web Access のサーバを設定することができます。データベースインスタンス名であるデータベースパラメータは、P6 Web Access のサーバ URL に追加され、特定のデータベースインスタンスを指定します。ユーザが指定された URL にアクセスすると、ログインページにデータベースドロップダウンリストは表示されず、データベースパラメータで定義されたデータベースインスタンスのみにログインアクセスすることができます。ユーザが必要なデータベースパラメータを指定せずにログインページ URL にアクセスしようとすると、URL は無効であるとのメッセージが表示され、P6 Web Access の管理者へ問い合わせるよう表示されます。

例えば、以下の URL は、ユーザを「Sample」というデータベースインスタンスにログインします。

`http://serverIP:listenport/login_<industry>?db=Sample`

業界選択の詳細については、28 ページの「**P6 の業界タイプ**」を参照してください。

ここで、<industry> は、業界のユーザ設定によって「cmt」または「it」です。

管理者として、データベースパラメータの要求をバイパスするキーワードを指定することができます。管理者はログインページのデータベースドロップダウンリストのすべてのデータベースにアクセスできます。

P6 Web Access の URL にデータベースパラメータを要求 P6

Web Access の URL にデータベースパラメータを要求するには、次のステップに従います。

- 1 変更する設定で、Application/Database Dropdown Key の設定値を指定します。値を指定すると、サーバ URL にデータベースパラメータの要求が追加されます。
- 2 指定した値は、P6 Web Access サーバにログインする際にデータベース要求をバイパスするキーワードとして使用します。

例えば、以下のようになります。

`https://serverIP:listenport/login_<industry>?db=bypass`

業界選択の詳細については、28 ページの「**P6 の業界タイプ**」を参照してください。

ここで、<industry> は、業界のユーザ設定によって「cmt」または「it」です。

認証設定 P6 Web Access は最大 6 種類の設定を使用して認証をサポートします。

- Authentication/Mode
- Authentication/Web Single Sign-On/User Name Header Key
- Authentication/Web Single Sign-On/Context Path Override
- Authentication/Web Single Sign-On/Server and Port Override
- Authentication/LDAP/SSL Certificate Store
- Authentication/LDAP/SSL Store Password



Authentication/Mode 設定は、P6 Progress Reporter で選択したモードに一致する必要があります。

P6 Web Access の 1 つのサーバインスタンスは 1 つ以上のデータベースの管理をしている可能性があるため、LDAP 設定ウィザードでの認証モードの指定に加え、Authentication/Mode 設定を使用して P6 Web Access サーバで使いたい全体モードを指定することができます。Single Sign On を使用する場合は、さらにポリシーサーバに要求される 3 つの設定を変更する必要があります。P6 Web Access と LDAP サーバ間でセキュアな通信 (SSL) を行うための LDAP 認証では、さらに 2 つの設定が必要になります。

これら各設定のさらなる情報については、次セクション「[P6 Web Access の設定](#)」の認証設定サブセクションを参照してください。



P6 Web Access の設定には、P6 Web Access サーバと同じ認証モードに設定されていないデータベースインスタンスが含まれている可能性があります。ユーザが P6 Web Access サーバとは異なる認証モードに設定されているデータベースへの接続と要求を行う場合は、エラーメッセージが表示されます。ユーザは、P6 Web Access サーバ向けに設定された認証モードに一致したデータベースを選択する必要があります。

カスタムポートレットの設定 P6 Web Access のダッシュボードとプロジェクトワークスペースでは、現在ログオンしているユーザに対象アプリケーションへのパスワードを渡すためのカスタムポートレットを作成することができます。既定では、パスワードは暗号化されていません。パスワードを暗号化するには、Application/Custom Portlet URL Encryption Key 設定を使います。暗号化には、Sun/Blowfish アルゴリズムを使用します。

この設定のさらなる情報については、次セクション「[P6 Web Access の設定](#)」のアプリケーション設定サブセクションを参照してください。



この設定を表示するには、構成を更新する必要があります。そのためには、設定をハイライトして右クリックし、「Update to latest version」を選択します。

Microsoft SQL 2005 データベース上の JBoss と WebLogic の設定

以下は、Microsoft SQL Server 2005 データベースを使用している場合に適用されます。Microsoft SQL Server データベースがローカライズされているか、ローカライズされたオペレーティングシステム上にインストールされている場合は、P6 Web Access 管理アプリケーションで SET DATEFORMAT 設定を使用する必要があります。使用しない場合、Resource Planning や Capacity Analysis をナビゲートする際に SQL エラーが発生します。また、アクティビティ画面でも異変が起きる可能性があります。これらの問題を回避するには、次のステップに従います。

- 1 P6 Web Access 管理アプリケーションで、P6 Web Access で使用している Microsoft SQL Server データベースのデータベースフォルダを探します。
- 2 このフォルダでインスタンスフォルダ (Instance [x]) を拡張し、セッション設定フォルダ (Session Settings) にアクセスします (選択肢は 1 ～ 5 です) 。
- 3 以下の構文を使ってセッション設定を追加します。
set DATEFORMAT ymd
- 4 変更を保存します。
- 5 アプリケーションサーバを再起動すると、変更がすぐに有効になります。

パスワードポリシーの設定と上書き 認証モードが「ネイティブ」に設定されている場合に P6 Web Access を使用すると、管理者はパスワード関連セキュリティを管理できます。アクセスを拒否されるまで何回ログインを試行できるか、またロックアウト後、どれくらい待てば再度ログインを試行できるかなどです。利用可能な設定の詳細については、199 ページの「[データベース設定](#)」の「/Database/Instance/User Security」サブセクションを参照してください。

管理者は必要に応じて、手動でロックアウトを上書きできます。P6 Web Access ユーザをリセットするには以下の手順に従ってください。

- 1 管理スーパーユーザとして P6 Web Access にログインします。
- 2 ブラウザのアドレスラインで「action」よりも後のすべてのテキストを削除して「/useradmin」に替え、ページをリロードします。

例えば、ログイン後の URL の既定のコンポーネントは以下のとおりです。

`http://serverIP:listenport/ContextRoot/action/home`

これを以下に変更します：

`http://serverIP:listenport/ContextRoot/action/useradmin`

- 3 ユーザ管理ページがロードされ、アクティブなユーザおよびロックアウトされているユーザ全員のリストが表示されます。ロックアウトされているユーザについては「Reset User」リンクをクリックします。複数のユーザがロックアウトされている場合は、ページ最上部の「Reset All Users」リンクをクリックします。

イベント通知のセットアップ 管理設定によっては、P6 データベースのオブジェクトを更新または作成するために P6 Web Access、P6 Web Services、または P6 Integration API を使用する場合にイベントをトリガできます。変更によってイベントがトリガされると、P6 Event Notification システムは、ユーザが設定したメッセージキューにイベントメッセージを送信します。P6 製品で Event Notification を使用する計画をしている場合は、以下のステップに従って、JMS (Java Messaging Service)、アプリケーションサーバ、および P6 で Event Notification が動作するようにセットアップします。



始める前に、アプリケーションサーバのクラスパスに JMS ベンダの jar ファイルを追加します。その他の情報および例については、Oracle Primavera Support ナレッジベースを参照してください。

- 1 管理アプリケーションを起動します。
- 2 「Database/Instance/Eventing/Enabled」設定を true に設定します。
- 3 各自の実装に応じて、その他の Database/Instance/Eventing/ を設定します。使用できる設定の詳細については、199 ページの「[\[データベース設定\]](#)」の「Database/Instance/Eventing」サブセクションを参照してください。

P6 Web Access で使用するための OCM (Oracle Configuration Management) の設定

OCM を使用すると、複数の P6 Web Access の実装の管理アプリケーションの設定と管理設定を単一の場所から表示できます。OCM を使用してこれらの設定を表示するには、事前に以下のステップに従って P6 Web Access を設定してください。

- 1 Oracle の eDelivery サイトから OCM バージョン 10.3.2 をダウンロードしてインストールします。

P6 Web Access のインストールプロセス中に OCM のインストールを選択した場合は、バージョン 10.3.1.2.0 からアップグレードするように求められます。既定では、OCM ファイルは、<webaccesshome>%ccr にインストールされます。既定の場所を維持した場合は、[ステップ 7](#)に進みます。

P6 Web Access のインストールとは別に OCM をインストールした場合、または OCM ファイルを別の場所にインストールするように選択する場合は、[ステップ 2](#)に進みます。

- 2 コマンドプロンプトから、ディレクトリを以下の場所に変更します。<OCM home>%ccr%\sysman\admin\discover
- 3 「P6_discover.pl」 ファイルを探して編集します。
- 4 「# \$P6_Home=」 で始まるラインを探します。
- 5 # 文字を削除してこのラインのコメントを解除し、OCM をインストールした場所を入力します。例えば、以下のようになります。
\$P6_Home=D:%OCM%\ccr
- 6 「P6_discover.pl」 ファイルを保存します。
- 7 管理アプリケーションを起動します。P6 Web Access の設定情報を自動的に取得して OCM で使用できるように設定を適宜変更します。これらの設定に関する情報については、221 ページの「[\[サービス設定\]](#)」の「Configuration Management」サブセクションを参照してください。



P6 Web Access の設定情報を手動で取得する場合は、ブラウザを使用して管理アプリケーションをリモートで起動します。ツリー表示で、/Services/Configuration Management ノードを右クリックし、「設定の取得」を選択します。コマンドプロンプトに移動し、ディレクトリを以下の場所に変更します。<OCM home>%ccr%\bin%
次のコマンドを実行します。emCCR collect

8 P6 Web Access の情報の自動取得のために OCM サーバの収集時間を [ステップ 7](#) で指定したように設定します。OCM の収集時間は、P6 の取得時間より後にする必要があります。収集時間を設定するために、コマンドプロンプトを開き、ディレクトリを以下の場所に変更します。<OCM home>%ccr%\bin%

以下のコマンドを実行します（すべて 1 行）。

```
emCCR set collection_interval="FREQ=<interval>;
BYHOUR=<military hour>;BYMINUTE=<minute>"
```

例えば、以下のようになります。

```
emCCR set collection_interval="FREQ=DAILY;
BYHOUR=18;BYMINUTE=20"
```



収集時間が適切に設定されているかどうかを確認するには、コマンドプロンプトに移動し、ディレクトリを以下の場所に変更します。<OCM home>%ccr%\bin%
次のコマンドを実行します。emCCR.bat status

- 9 P6 Web Access アプリケーションサーバを再起動します。

P6 Web Access の設定

管理アプリケーションのツリー表示またはテーブル表示で設定の確認、変更を行うことができます。構成設定は、管理者がインストール時に指定した、P6 Web Access のデータベースに保存されています。

時間設定値（時間に関連した値）はいくつかの方法で指定することができます。

- 単純な数字は、ミリ秒として扱われます。
例えば、240000 は 4 分相当です (240000/60000)。
- <n>d<n>h<n>m<n>s の形式では、「d」は日、「h」は時間、「m」は分、「s」は秒です。すべての入力は、省略可能です。
例えば、次のように入力できます。

1d2h30m20s
4m
1h30s



管理アプリケーションを使って P6 Web Access の構成設定を変更するのは、経験豊富な管理者に限る必要があります。

[ローカル設定]

設定名と説明	既定	有効範囲／値
Localization/System Language サーバストリング定数の言語	en	—
Localization/System Country サーバストリング定数の国	米国	—

[認証設定]

設定名と説明	既定	有効範囲／値
Authentication/Mode クライアント認証に使われるメソッド。	NATIVE	Native、LDAP、WebSSO
Authentication/Web Single Sign-On/User Name Header Key ポリシーサーバで指定した http ヘッダ名です。 指定する値は、P6 Web Access の Web サーバ内のポリシードメイン／領域で作成したポリシーサーバの応答プロパティと一致する必要があります。この応答の値は、smuser=uid のはずです。ここで smuser は、設定可能であり、uid は P6 データベースの USER_Name フィールドにマップされた LDAP サーバ属性に一致しています。	smuser	—
Authentication/Web Single Sign-On/Context Path Override ポリシーサーバの Web サーバから P6 Web Access のサーバに Web 要求を渡すために使用するパス。	/Primavera	—
Authentication/Web Single Sign-On/Server and Port Override ポリシーサーバが管理する Web サーバの完全なドメイン名とポート。	http:// servername.domain.com:82	—
Authentication/LDAP/SSL Certificate Store LDAP サーバ用の SSL certificate を保存する Keystore へのフルパス。	—	—
Authentication/LDAP/SSL Store Password SSL certificate を保有する Keystore のパスワード。	—	—

[データベース設定]

設定名と説明	既定	有効範囲／値
Database/Instance/Name データベースインスタンス名。	—	32 文字まで
Database/Instance/Description データベースインスタンスの説明。	—	128 文字まで
Database/Instance/Schema データベース向けに定義されるスキーマ。	PMDB	—
Database/Instance/URL P6 データベースとの接続を確立するために使用するデータベース URL。	—	—
Oracle の例 : jdbc:oracle:thin:@xx.xxx.xxx.xx:yyyy:zzzz		
SQL の例 : jdbc:sqlserver://xxxx:yyyy;database=zzzz;		
x = IP アドレスまたはホスト名 y = データベース listen ポート z = データベース名		
Database/Instance/Public Group ID データベースとの接続を確立するために使われる公開グループ ID。	1	—
Database/Instance/User Name データベースとの接続を確立するために使用する名前。	pubuser	—
Database/Instance/Password データベースとの接続を確立するために使用するパスワード。	pubuser	—
Database/Instance/Timesheet URL P6 Progress Reporter モジュールを呼び出すための URL。 この設定に入力された URL が有効かどうかを確認するには、設定を右クリックし、「接続のテスト」を選択します。	—	—
形式の例 : http://<サーバ名>:<listen ポート>/pr/		
Database/Instance/User Security/Log Login Attempts Web Access ログで P6 Web Access へのログイン試行をトラッキングするかどうか指定します。	All	All、None、Failed Attempts、Successful Attempts

[データベース設定]

設定名と説明	既定	有効範囲／値
Database/Instance/User Security/Login Lockout Count アカウントがロックされる前にユーザがログインを試行できる回数。設定を「0」にすると、試行回数は無制限になります。回数は、ログインに成功するたびにリセットされます。	5	0-100000
Database/Instance/User Security/Login Lockout Duration P6 Web Access へのログインを阻止される期間。ログインロックアウト回数を超過した時点から始まります。この設定は、ユーザのセッションが管理スーパーユーザによってリセットされると上書きされます。さらなる詳細については、194 ページの「 パスワードポリシーの設定と上書き 」を参照してください。	1h	0 -24d
Database/Instance/User Security/Allow Multiple User Sessions 単一のユーザが同時に Web Access にログインできるかどうかを指定します。「Yes」に設定すると、単一ユーザはどのマシンでも複数回ログインできます。「No」に設定すると、ユーザは 1 度しかログインできなくなります。「Single Machine」に設定すると、要請を行っているマシンの IP アドレスを判定できるようアプリケーションサーバが適切に設定されている限り、ユーザは同じマシンで複数回ログインできます。例えば、アプリケーションサーバがプロキシサーバの後ろにある場合、この設定は「Single Machine」ではなく既定で「Yes」になります。	Yes	Yes、No、Single Machine
Database/Instance/Connection Pool [aaa]/Resize Rate このタイムアウト時間後に、システムはデータベース接続数を最後のデータベース最大同時接続数と同じ値に調整します。 [PMR] は、標準接続プールとして使用します。ビジネスルールエンジンで最もよく使用される接続プールです。 [PML] は、長期接続のプールに使用します。ビジネスルールエンジンでは長期間実行するジョブを計画する際に使用されます。 [PMT] は、トランザクション接続のプールに使用します。ビジネスルールエンジンではクライアントトランザクション要求の際に使用されます。	4m	4m - 12h

[データベース設定]

設定名と説明	既定	有効範囲／値
Database/Instance/Connection Pool [aaa] / Maintenance Frequency リースが最大期間を超えないことを確認する保守の実行頻度。 [PMR] は、標準接続プールとして使用します。ビジネスルールエンジンで最もよく使用される接続プールです。 [PML] は、長期接続のプールに使用します。ビジネスルールエンジンでは長期間実行するジョブを計画する際に使用されます。 [PMT] は、トランザクション接続のプールに使用します。ビジネスルールエンジンではクライアントトランザクション要求の際に使用されます。	1m	10s - 1h
Database/Instance/Connection Pool [aaa] / Lease Request Wait Timeout データベース接続要求が待機する時間。 [PMR] は、標準接続プールとして使用します。ビジネスルールエンジンで最もよく使用される接続プールです。 [PML] は、長期接続のプールに使用します。ビジネスルールエンジンでは長期間実行するジョブを計画する際に使用されます。 [PMT] は、トランザクション接続のプールに使用します。ビジネスルールエンジンではクライアントトランザクション要求の際に使用されます。	30s	5s - 2h
Database/Instance/Connection Pool [aaa] / Maximum Connections サーバとデータベース間の最大接続数。 [PMR] は、標準接続プールとして使用します。ビジネスルールエンジンで最もよく使用される接続プールです。 [PML] は、長期接続のプールに使用します。ビジネスルールエンジンでは長期間実行するジョブを計画する際に使用されます。 [PMT] は、トランザクション接続のプールに使用します。ビジネスルールエンジンではクライアントトランザクション要求の際に使用されます。	50	5 - 15000

[データベース設定]

設定名と説明	既定	有効範囲／値
Database/Instance/Connection Pool [aaa] /Fetch Size データベースドライバに同時に取得する行数を通知。 [PMR] は、標準接続プールとして使用します。ビジネス ルールエンジンで最もよく使用される接続プールです。 [PML] は、長期接続のプールに使用します。ビジネス ルールエンジンでは長期間実行するジョブを計画する際 に使用されます。 [PMT] は、トランザクション接続のプールに使用します。 ビジネスルールエンジンではクライアントトランザク ション要求の際に使用されます。	120	—
Database/Instance/Connection Pool [aaa] /Trace SQL データベースに送出するすべての SQL をトレースします。 [PMR] は、標準接続プールとして使用します。ビジネス ルールエンジンで最もよく使用される接続プールです。 [PML] は、長期接続のプールに使用します。ビジネス ルールエンジンでは長期間実行するジョブを計画する際 に使用されます。 [PMT] は、トランザクション接続のプールに使用します。 ビジネスルールエンジンではクライアントトランザク ション要求の際に使用されます。	false	true/false
Database/Instance/Connection Pool [aaa] / Renewable Free Limit リースの更新に利用可能な最少接続数。 [PMR] は、標準接続プールとして使用します。ビジネス ルールエンジンで最もよく使用される接続プールです。 [PML] は、長期接続のプールに使用します。ビジネス ルールエンジンでは長期間実行するジョブを計画する際 に使用されます。 [PMT] は、トランザクション接続のプールに使用します。 ビジネスルールエンジンではクライアントトランザク ション要求の際に使用されます。	3	3 - 5

[データベース設定]

設定名と説明	既定	有効範囲／値
Database/Instance/Connection Pool [aaa] / Renewable Leases 偽であれば、各接続は MaxLeaseDuration までのみリースされます。 真であれば、データベースステートメントが MaxLeaseDuration 時間に完了されれば、接続リースは更新されます。真の場合は、SQL ステートメントが MaxLeaseDuration 期間内に終了する限り、コードは必要なだけ接続を保持することができます。真の場合、MaxLeaseDuration 期間内に SQL ステートメントが発行されないか、同期間内に 1 つのステートメントの実行が完了しないと、接続は切断されます。 [PMR] は、標準接続プールとして使用します。ビジネスルールエンジンで最もよく使用される接続プールです。 [PML] は、長期接続のプールに使用します。ビジネスルールエンジンでは長期間実行するジョブを計画する際に使用されます。 [PMT] は、トランザクション接続のプールに使用します。ビジネスルールエンジンではクライアントトランザクション要求の際に使用されます。	PMR - false PML - false PMT - true	true/false
Database/Instance/Connection Pool [aaa] / Maximum Lease Duration 切断される前に、データベース接続がリースされる最大時間。 [PMR] は、標準接続プールとして使用します。ビジネスルールエンジンで最もよく使用される接続プールです。 [PML] は、長期接続のプールに使用します。ビジネスルールエンジンでは長期間実行するジョブを計画する際に使用されます。 [PMT] は、トランザクション接続のプールに使用します。ビジネスルールエンジンではクライアントトランザクション要求の際に使用されます。	PMR - 2m PML - 10m PMT - 10m	PMR - 5s - 4h PML - 5s - 6h PMT - 5s - 6h
Database/Instance/Methodology Management/Name このデータベースインスタンス名。	—	—
Database/Instance/Methodology Management/ Description このデータベースインスタンスの説明。	—	—

[データベース設定]

設定名と説明	既定	有効範囲／値
Database/Instance/Methodology Management/URL データベースとの接続を確立するために使用する P6 データベース URL。 Oracle の例 : jdbc:oracle:thin:@xx.xxx.xxx.xx:yyyy:zzzz SQL の例 : jdbc:sqlserver://xxxx:yyyy;database=zzzz; x = IP アドレスまたはホスト名 y = データベース listen ポート z = データベース名	—	—
Database/Instance/Methodology Management/User Name データベースとの接続を確立するために使用する名前。	—	—
Database/Instance/Methodology Management/Password データベースとの接続を確立するために使用するパスワード。	—	—
Database/Instance/Methodology Management/ Public Group ID データベースとの接続を確立するために使われるグループ ID。	1	—
Database/Instance/Methodology Management/ データベース接続名 メソドロジからプロジェクトプランを作成するため、 Project Architect のジョブサービスで使われる DB 接続名。	MMDB	—
Database/Instance/Methodology Management/ 接続プール [MMR]／サイズ変更レート このタイムアウト時間後に、システムはデータベース接続数を最後のデータベース最大同時接続数と同じ値に調整します。	4m	4m - 12h
Database/Instance/Methodology Management/ Connection Pool [MMR] /Maintenance Frequency リースが最大期間を超えないことを確認する保守の実行頻度。	1m	10s - 1h
Database/Instance/Methodology Management/ Connection Pool [MMR] /Lease Request Wait Timeout データベース接続要求が待機する時間。	30s	5s - 2h

[データベース設定]

設定名と説明	既定	有効範囲／値
Database/Instance/Methodology Management/Connection Pool [MMR] /Maximum Connections サーバとデータベース間の最大接続数。	50	5 - 15000
Database/Instance/Methodology Management/Connection Pool [MMR] /Fetch Size データベースドライバに同時に取得する行数を通知。	120	—
Database/Instance/Methodology Management/Connection Pool [MMR] /Trace SQL データベースに送出するすべての SQL をトレースします。	false	true/false
Database/Instance/Methodology Management/Connection Pool [MMR] /Renewable Free Limit リースの更新に利用可能な最少接続数。	3	3 - 5
Database/Instance/Methodology Management/Connection Pool [MMR] /Renewable Leases 偽であれば、各接続は MaxLeaseDuration までのみリースされます。 真であれば、データベースステートメントが MaxLeaseDuration 時間に完了されれば、接続リースは更新されます。真の場合は、SQL ステートメントが MaxLeaseDuration 期間内に終了する限り、コードは必要なだけ接続を保持することができます。真の場合、MaxLeaseDuration 期間内に SQL ステートメントが発行されないか、同期間内に 1 つのステートメントの実行が完了しないと、接続は切断されます。	false	true/false
Database/Instance/Methodology Management/Connection Pool [MMR] /Maximum Lease Duration 切断される前に、データベース接続がリースされる最大時間。	2m	5s - 4h
Database/Instance/Content Repository/Type P6 でコンテンツリポジトリのデータをホストするために使用するアプリケーション。	なし	JackRabbit、Oracle、SharePoint、なし

コンテンツリポジトリのタイプを選択した後に、選択したタイプに適している以下の設定を入力します。

[データベース設定]

設定名と説明	既定	有効範囲／値
Database/Instance/Content Repository/Apache JackRabbit/URL	—	—
JackRabbit データベースとの接続を確立するために使用する URL。		
Oracle の例 : embedded://jdbc:oracle:thin:@xx.xxx.xxx.xx:yyyy:zzzz		
SQL の例 : embedded://jdbc:sqlserver://xxxx:yyyy;database=zzzz;		
x = IP アドレスまたはホスト名 y = データベース listen ポート z = データベース名		
上の例では、コンテンツリポジトリがローカルであることを示すために、「embedded」が使用されます。これは、コンテンツリポジトリの設定に必要です。		
Database/Instance/Content Repository/Apache JackRabbit/Database User Name	—	—
JackRabbit データベースとの接続を確立するために使用する名前。既定では、Oracle では「admuser」、SQL では「sa」です。		
Database/Instance/Content Repository/Apache JackRabbit/Database Password	—	—
JackRabbit データベースとの接続を確立するために使用するパスワード。既定では、Oracle では「admuser」、SQL では「sa」です。		
Database/Instance/Content Repository/Apache JackRabbit/Repository Home	—	—
JackRabbit サーバでコンテンツリポジトリのファイルを格納する場所。場所を指定するか名前を入力すると、Bootstrap ホームディレクトリにフォルダが作成されます。		
Database/Instance/Content Repository/Apache JackRabbit/Admin User Name	—	—
コンテンツリポジトリのアプリケーション名。		
Database/Instance/Content Repository/Apache JackRabbit/Admin Password	—	—
コンテンツリポジトリのアプリケーションスーパーユーザのパスワード。		

[データベース設定]

設定名と説明	既定	有効範囲／値
Database/Instance/Content Repository/Apache JackRabbit/Enable Connection Pooling 「true」で、コンテンツリポジトリへの共有データベース接続プールを提供します。c3po 接続プールを利用します。	true	true/false
Database/Instance/Content Repository/Apache JackRabbit/Maximum Connections コンテンツリポジトリ接続プールとデータベース間の最大接続数。	25	2-5000
Database/Instance/Content Repository/Apache JackRabbit/Autovue/VueServlet URL AutoVue VueServlet をホストするサーバの URL。 注：P6 Web Access に対応した AutoVue のバージョンについては、『Tested Configurations』ドキュメントを参照してください。	—	—
Database/Instance/Content Repository/Apache JackRabbit/Autovue/Enable 「true」で AutoVue の使用を有効にします。	false	true/false
Database/Instance/Content Repository/Oracle Universal Content Management/Host Universal Content Management サーバのマシン名または IP アドレス。	—	—
Database/Instance/Content Repository/Oracle Universal Content Management/Port Universal Content Management サーバのポート番号。既定は 4444 です。	—	—
Database/Instance/Content Repository/Oracle Universal Content Management/Oracle Home 181 ページの ステップ 2 で指定されている、Universal Content Management サーバ上の P6 コンテンツリポジトリファイルのパス。	—	—
例： ¥¥Contribution Folders¥¥Production¥¥OraclePrimavera¥¥		
Database/Instance/Content Repository/Oracle Universal Content Management/Oracle Security Group 181 ページの ステップ 3 で指定されている、P6 ドキュメントのセキュリティグループ名。	—	—

[データベース設定]

設定名と説明	既定	有効範囲／値
Database/Instance/Content Repository/Oracle Universal Content Management/Oracle Security Account 182 ページの ステップ 5 で指定されている、P6 ドキュメントのセキュリティアカウント名。	—	—
Database/Instance/Content Repository/Oracle Universal Content Management/Oracle Document Type 182 ページの ステップ 6 で指定されている、P6 ドキュメントの Universal Content Management ドキュメントタイプ。	—	—
Database/Instance/Content Repository/Oracle Universal Content Management/Metadata Prefix 182 ページの ステップ 7 で指定されている、P6 メタデータフィールドに追加されているプレフィックス。	—	—
Database/Instance/Content Repository/Oracle Universal Content Management/Admin User 181 ページの ステップ 4 で指定されている、管理権限を持つ Universal Content Management ユーザ名。この設定は必須です。	—	—
Database/Instance/Content Repository/Oracle Universal Content Management/Authentication Mode Universal Content Management サーバへのアクセスに使用される認証モード。これらの条件が満たされない場合、P6 ユーザはコンテンツリポジトリ機能を使用できません。「複数ユーザ」が選択されている場合、すべての P6 コンテンツリポジトリ関連のユーザ名が対応する Universal Content Management ユーザ名と一致している必要があります。例えば、「Joe」という名前の P6 ユーザの場合、Universal Content Management にも「Joe」という対応する名前を持っている必要があります。「単一ユーザ」が選択されている場合、上記の設定で指定されている管理者ユーザが P6 ホームフォルダ外のドキュメントを参照するには、必要なすべてのセキュリティグループにアクセスできる必要があります。	複数ユーザ	複数ユーザ、単一ユーザ
Database/Instance/Content Repository/Oracle Universal Content Management/Autovue/VueLink URL AutoVue VueLink をホストするサーバの URL。 注 : P6 Web Access に対応した AutoVue のバージョンについては、『Tested Configurations』ドキュメントを参照してください。	—	—

形式の例 :
`http://<vuelinkpath>/csiApplet.jsp`

[データベース設定]

設定名と説明	既定	有効範囲／値
Database/Instance/Content Repository/Oracle Universal Content Management/AutoVue/Enable 「true」で AutoVue の使用を有効にします。	false	true/false
Database/Instance/Content Repository/SharePoint/Login Name 管理権限を持つ SharePoint ユーザ名。この設定は必須です。	—	—
Database/Instance/Content Repository/SharePoint/Password SharePoint ログイン名のパスワード。	—	—
Database/Instance/Content Repository/SharePoint/Authentication Mode SharePoint コンテンツリポジトリデータベースへの接続に使用されるモード。これらの条件が満たされない場合、P6 ユーザはコンテンツリポジトリ機能を使用できません。「複数ユーザ」が選択されている場合、すべての P6 コンテンツリポジトリ関連のユーザ名が対応する SharePoint ユーザ名と一致している必要があります。例えば、「Joe」という名前の P6 ユーザの場合、SharePoint にも「Joe」という対応する名前を持っている必要があります。「単一ユーザ」が選択されている場合、上記の設定で指定されている管理者ユーザが P6 ホームフォルダ外のドキュメントを参照するには、必要なすべての SharePoint ライブラリにアクセスできる必要があります。	複数ユーザ	複数ユーザ、単一ユーザ
Database/Instance/Content Repository/SharePoint/Host Name SharePoint サーバのマシン名または IP アドレス。	—	—
Database/Instance/Content Repository/SharePoint/Domain SharePoint サーバが存在するドメイン。	—	—
Database/Instance/Content Repository/SharePoint/Document Library URL 183 ページの ステップ 5 で作成されている SharePoint 上の P6 ドキュメントライブラリの URL。この URL には、コンテンツリポジトリサーバのマシン名（または IP アドレス）と、コンテンツリポジトリライブラリのパスが含まれます。	—	—

形式の例：

http://<host>/<library path>

[データベース設定]

設定名と説明	既定	有効範囲／値
Database/Instance/Content Repository/SharePoint/Web Service URL 183 ページ の ステップ 4 で指定されている、P6 を SharePoint に接続するのに使用される Web Service の URL。この URL には、コンテンツリポジトリサーバのマシン名（または IP アドレス）とポート番号、および Web Service 名が含まれます。	—	—
形式の例： http://<host>:<port>/<virtual_dir>		
Database/Instance/Content Repository/SharePoint/External Document Library URL 外部ドキュメントライブラリの URL。この設定は、P6 以外のドキュメントライブラリに接続する必要がある場合にのみ必須です。	—	—
形式の例： http://<host>:<port>/<virtual_dir>		
Database/Instance/Content Repository/SharePoint/Autovue/VueLink URL AutoVue VueLink をホストするサーバの URL。 注：P6 Web Access に対応した AutoVue のバージョンについては、『Tested Configurations』ドキュメントを参照してください。	—	—
形式の例： http://<vuelinkpath>/vue.aspx		
Database/Instance/Content Repository/SharePoint/Autovue/Enable 「true」で AutoVue の使用を有効にします。	false	true/false

[データベース設定]

設定名と説明	既定	有効範囲／値
--------	----	--------

Database/Instance/Workflow Repository/URL

ワークフローリポジトリデータベースとの接続を確立するために使用するデータベース URL。

Oracle の例 :

jdbc:oracle:thin:@xx.xxx.xxx.xx:yyyy:zzzz

SQL の例 :

jdbc:sqlserver://xxxx:yyyy;database=zzzz;

x = IP アドレスまたはホスト名

y = データベース listen ポート

z = データベース名

Database/Instance/Workflow Repository/User Name

データベースとの接続を確立するために使用する名前。これは既定で、Oracle では「admuser」、SQL では「sa」になっています。

Database/Instance/Workflow Repository/Password

データベースとの接続を確立するために使用するパスワード。これは既定で、Oracle では「admuser」、SQL では「sa」になっています。

Database/Instance/Workflow Repository/Enable Connection Pooling

ワークフローシステムへの共有データベース接続プールを提供します。c3po 接続プールを利用します。

Database/Instance/Workflow Repository/Maximum Connections

ワークフローリポジトリ接続プールとデータベース間の最大接続数。

Database/Instance/Workflow Repository/Timeout

削除される前に接続がプールされ続ける秒数（ただし使用されない）。ゼロを入力すると、アイドル状態の接続は切断されません。

Database/Instance/Workflow Repository/Connection Test Period

アイドル状態のすべての接続がテストされる時間（秒）。ゼロを入力すると、接続はテストされません。

—	—
—	—
true	true/false
25	1-5000
1m	5s-1h
5m	5s-1d

[データベース設定]

設定名と説明	既定	有効範囲／値
Database/Instance/Session Settings/Setting 1-5 カーソルの共有、ルールベースモード、SQL トレースなどを確立するために使われる、「セッションの変更」コマンドこれらのフィールドの無効な設定は無視されます。	—	alter session set _ = _
Database/Instance/Cost Based Optimization Settings/有効 真の場合は、コストベースの最適化を有効にします。	false	true/false
Database/Instance/Cost Based Optimization Settings/Dump Matching SQL 特定の SQL ステートメントの QUERYLIB テーブルで整合性のある SQL をダンプする場合は、真に設定します。 特定の SQL ステートメントの QUERYLIB テーブルで整合性のない SQL をダンプする場合は、偽に設定します。 これらのエントリを表示するには、ログレベルを INFO に設定する必要があります。	false	true/false
Database/Instance/Eventing/Enabled 「true」で、P6 Web Access、P6 Web Services、および P6 Integration API に対するイベントの送信を可能にします。	false	true/false
Database/Instance/Eventing/Interval イベント通知システムが、メッセージキューにイベントを送信する頻度を決定する間隔。小さい値を指定すると、イベント通知システムがメッセージキューにイベント発生をレポートする頻度が高くなります。	5m	1s-10m
Database/Instance/Eventing/Job Events Wait Interval ジョブが処理を完了ステータス、失敗ステータス、またはキャンセルステータスで終了するまでイベント通知システムが待機する時間。指定時間より処理に時間がかかるジョブは、完了、失敗、キャンセルの各ステータスに最終的になってもイベントをトリガしません。	5m	10m-30m
Database/Instance/Eventing/Job Events Monitor Interval イベント通知システムが、完了ステータス、失敗ステータス、またはキャンセルステータスのジョブがないか、ジョブサービスを監視する頻度を決定する間隔。小さい値を指定すると、イベント通知システムがジョブのステータスを監視する頻度が高くなります。	5m	15s-10m
Database/Instance/Eventing/Max Queue Size イベントのキューに割り当てるメモリ容量。これを超えると、イベントが即座に発行されます。	1000	10-5000

[データベース設定]

設定名と説明	既定	有効範囲／値
Database/Instance/Eventing/Show Costs 「true」で、イベント通知のコストフィールドの表示を有効にします。	false	true/false
Database/Instance/Eventing/Connection Factory JMS Connection Factory の JNDI 名。	—	—
Database/Instance/Eventing/Destination Name イベントを発行するキューまたはトピックの JNDI 名。	—	—
Database/Instance/Eventing/Configuration 項目の変更と特別操作のプロセスがイベント通知をトリガするためのオプション。右クリックし、ノードを選択してから、「設定」を選択し、目的のオプションを選択します。これらのオプションの詳細については、『 <i>P6 Web Services リファレンスマニュアル</i> 』を参照してください。 注：「タイムシート」項目にのみ、通知更新機能があります。	—	—
Database/Instance/AIA/Enabled 「true」で AIA コンポーネントとの統合を有効にします。	false	true/false
Database/Instance/AIA/URL AQ 機能を実行している Oracle データベースインスタンスの URL。 Oracle の例： jdbc:oracle:thin:@xx.xxx.xxx.xx:yyyy:zzzz SQL の例： jdbc:sqlserver://xxxx:yyyy;database=zzzz; x = IP アドレスまたはホスト名 y = データベース listen ポート z = データベース名	—	—
Database/Instance/AIA/Username AQ キューオーナーの既定のユーザ名。	—	—
Database/Instance/AIA/Password AQ キューオーナーの既定のユーザ名のパスワード。	—	—

[データベース設定]

設定名と説明	既定	有効範囲／値
Database/Instance/AIA/Queue Name AIA メッセージを受信する AQ キューの名前。	AIA_ProjP6EP PMJMSQueue	—
Database/Instance/AIA/System Id AIA が P6 を識別するために使用するシステム識別コード。	P6-001	—
Database/Instance/AIA/Target System Id AIA が、サポートされている Oracle ERP アプリケーションを識別するために使用する外部システム識別コード。 例： JDE-001（JDEdwards の場合） EBS-001（E-Business Suite の場合）	—	—

[スレッドプール設定]

設定名と説明	既定	有効範囲／値
Thread Pool/Number of Threads サーバスレッド数。	25	2-300
Thread Pool/Maximum Task Duration 1 つのタスクにスレッドを使用することができる最大時間。	3m	10s - 24d
Thread Pool/Maximum Long Running Task Duration 長時間実行タスクにスレッドを使用することができる最大時間。	5m	10s - 24d
Thread Pool/Maintenance Frequency スレッドの時間超過を確認する頻度。	45s	15s - 24d

[ログ設定]

設定名と説明	既定	有効範囲／値
Log/Console Logger/Severity Level コンソールロガーのログ重要度レベル。	エラー	デバッグ、情報、警告、エラー
範囲は、包含関係にあります。例えば、「デバッグ」ですべてのメッセージをログすることを選び、「警告」には警告とエラーレベルのメッセージを含むことができます。		
Log/Console Logger/Enabled コンソールロガーを有効にします。	false	true/false
Log/File Logger/Archive Size ログファイルがアーカイブされるようになるまでの最小サイズ (Kb)。	1024	1024 - 2073600000
Log/File Logger/Severity Level HTML ロガーのログ重要度レベル。	エラー	デバッグ、情報、警告、エラー
範囲は、包含関係にあります。例えば、「デバッグ」ですべてのメッセージをログすることを選び、「警告」には警告とエラーレベルのメッセージを含むことができます。		
Log/File Logger/Number of Archive Files 使用される最大ログファイル数。既定ファイル名は、WebAccessLog0.html から WebAccessLog5.html です。	6	2 - 2073600000
Log/File Logger/HTML HTML としてログ。	true	true/false

[ログ設定]

設定名と説明	既定	有効範囲／値
Log/File Logger/Enabled HTML ロガーを有効にします。 ログファイルは、以下のロケーションの WebAccessLogs フォルダに作成されます。 Windows 上の JBoss では、 <webaccesshome>%WebAccessLogs Oracle Enterprise Linux 上の JBoss では、 /mount_point/<webaccesshome>/AppServer/ WebAccessLogs Windows 上の WebLogic では、 <webaccesshome>%WebAccessLogs Windows 上の WebSphere では、 <webaccesshome>%WebAccessLogs Oracle Enterprise Linux 上の WebSphere では、 /mount_point/WebSphere/AppServer/WebAccessLogs	true	true/false
Log/Email Logger/SMTP Host E メールメッセージを送信する SMTP サーバ。	—	—
Log/Email Logger/From Email Address 送信メッセージをログしたい E メールアドレスに設定します。	—	—
Log/Email Logger/To Email Address 送信メッセージをログする宛先の E メールアドレスに設定します。	—	—
Log/Email Logger/Email subject 既定の E メール件名です。	P6 Web Access エラー	—
Log/Email Logger/Enabled E メールロガーを有効にします。	false	true/false
Log/Asynchronous パフォーマンス向上のため、メッセージを非同期にログします。	true	true/false

[ディレクトリサービス設定]

設定名と説明	既定	有効範囲／値
Directory Services/Provider URL イベント処理用に使用される JNDI プロバイダの URL。	—	—
Directory Services/Initial Context Factory イベント処理用 JNDI 接続の初期コンテキストファクトリのクラス名。 例： weblogic.jndi.WLInitialContextFactory	—	—
Directory Services/Security Principal イベント処理用 JNDI プロバイダとの接続に使用されるプリンシパル。	—	—
Directory Services/Security Credential イベント処理用 JNDI プロバイダとの接続に使用される資格情報。	—	—
Directory Services/Security Level イベント処理用ディレクトリサービスへの認証に使用されるセキュリティレベル。	SIMPLE	NONE、SIMPLE、STRONG
Directory Services/Lookup イベント処理用ディレクトリ接続の検証時に使用される検索。	—	—

[アプリケーションの設定]

設定名と説明	既定	有効範囲／値
Application/Prototype User 新規 P6 Web Access ユーザの既定ダッシュボードとグローバル設定の作成と保存を行うために利用されるプロトタイプユーザログイン。	—	—
Application/Ignore Daylight Savings Time 夏時間を有効にするには、「偽」と設定します。	true	true/false
Application/Internet Explorer Java Plugin URL Internet Explorer ユーザが、Java Plug-in (JRE) をダウンロードするための URL。	設定時にインストールされるプラグイン版 1.6.0_14 に既定設定されます。	—
Application/FireFox Java Plugin URL Firefox ユーザが、Java Plug-in (JRE) をダウンロードするための URL。	設定時にインストールされるプラグイン版 1.6.0_14 に既定設定されます。	—

[アプリケーションの設定]

設定名と説明	既定	有効範囲／値
Application/Internet Explorer Java Plugin Version Internet Explorer のアプレットに使われる JRE のバージョン。	—	—
Application/FireFox Java Plugin Version Firefox のアプレットに使われる JRE のバージョン。	—	—
Application/JRE Version for Java Web Start (JNLP) Java Web Start が Timesheet Approval をスタンドアローンアプリケーションとして、または Project Management クライアントとして起動するときに使用する Java バージョン。	1.6+	
Application/Maximum Transactions for Excel Import .xls または .csv ファイルから一度にインポートすることができる、最大トランザクション数（アクティビティまたはリソース）。	2000	100 - 2000
Application/Maximum Excel Import File Size インポート試行の際、アップロードされる最大の .xls または .csv サイズ (KB)	1048	64 - 4096
Application/Allow Auto-Summarize Option リソーススタッフユーザプリファレンスで自動サマリを許容するには、「真」と設定します。	true	true/false
Application/Database Dropdown Key ログインページでデータベース選択制御を可能にするキーワード。URL パラメータ、db=keyword として渡されます。キーワードを不要にするときは、これを空白文字列にします。	—	—
Application/Logout URL ユーザが P6 Web Access のバナー内のログアウト・終了アイコンをクリックして終了したときに特定の URL に転送します。有効な URL なら何でも使用できます。URL が指定されない場合、P6 Web Access は、ユーザを P6 Web Access 起動ページに転送します。	—	—
Application/Compress Applet Communication アプレットとサーバ間の通信を圧縮する場合は、真に設定します。	true	true/false
Application/Compress HTML Content html、js、css ファイル、および Ajax コンテンツを始めとする P6 Web Access で生成された HTML 関連のコンテンツを圧縮する場合は、真 (true) と設定します。	true	true/false
Application/Maximum Projects in Portfolio フィルタを使ってポートフォリオを作成する場合の、最大プロジェクト作成数。	1000	1 - 100000

[アプリケーションの設定]

設定名と説明	既定	有効範囲／値
Application/Maximum Loaded Resource Planning Projects リソース計画集計表で開くことができる最大プロジェクト数。	100	1 - 1000
Application/Maximum Portlets per Dashboard ダッシュボードホームページのダッシュボードに表示することができる、最大ポートレット数。	12	1 - 50
Application/Maximum Projects per Portfolio View ダッシュボードのポートフォリオ分析タブのポートフォリオ画面およびポートフォリオ表示ポートレットに表示することができる最大プロジェクト数。	5000	1 - 20000
Application/Maximum Activities per Activity View プロジェクトセクションのアクティビティタブに表示することができる最大アクティビティ数。5000 を超える場合、Java Applets 設定（以下）に割り当てられる最大メモリは 128 以上でなくてはなりません。	2000	1 - 15000
バージョン 1.6.0_10 よりも前の JRE を使用している場合、表示される最大アクティビティ数は 5000 になります。 Oracle ではユーザがアーンドバリューまたはベースライン関連情報を表示する必要がある場合には最大値を 5000（以下）に設定するようお勧めします。さもなければ、データベースのタイムアウトが発生します。		
Application/Maximum memory allocated to Java Applets Java Applets で使用できる最大メモリ容量（メガバイト）。アクティビティ表示設定（上記）ごとの最大アクティビティ数が 5000 よりも大きい場合、メモリ割当は 128 以上に設定する必要があります。	64	64-1024
この設定は、JRE バージョン 1.6.0_10（以降）を使用している場合にのみ有効です。		
Application/Maximum MRU List Items 最近使用（MRU）リストに表示できる最大項目数。	5	1 - 10
Application/Maximum Project Activity Codes [アクティビティコード] セクションの [プロジェクト] タブで選択、表示できるプロジェクトの最大数。	350	1-350
Application/Maximum Activity Code Values アクティビティコードごとに作成または選択できるアクティビティコード値の最大数。	100000	1-1m

[アプリケーションの設定]

設定名と説明	既定	有効範囲／値
Application/Custom Portlet URL Encryption Key カスタムポートレットユーザパスワード用の暗号キー。キーを割り当てると、カスタムポートレットの表示のため URL の一部として渡されるパスワードを暗号化します。値を割り当てない場合は、パスワードは暗号化されません。値は、どんな英数字または、文字列でも構いません。暗号化には、Sun/Blowfish アルゴリズムを使用します。	—	—
Application/Transaction Monitor Execution Interval トランザクションがオーファンになっていないことを確認する、トランザクション監視のジョブ実行頻度。	10m	1s - 24d20h31m23s647
Application/Enable Cross Site Scripting Filter クロスサイトスクリプトフィルタを有効または無効にします。「true」に設定すると、ブラウザからの安全でない http 要求、および要求されたドキュメントを含む、P6 Web Access からの安全でないレスポンスを P6 がチェックするのを許可します。一般的には、P6 Web Access により明示的に生成されなかった Javascript を含む要求とレスポンスは、安全でないとみなされます。安全でないページ要求には、すべてエラーメッセージが表示されます。Internet Explorer 7 では、安全でないドキュメントをダウンロードしようとする、エラーメッセージが表示されます。Internet Explorer 8 と Firefox では、ユーザは、P6 Web Access ブラウザで直接ドキュメントを表示するのではなく、ドキュメントファイルをダウンロードするように促されます。この設定の値を変更した後、サーバを再起動する必要はありません。	false	true/false
Application/Notifications/Enable Issue Notifications 問題点が追加または変更された場合、自動通知を有効または無効にします。	false	true/false
Application/Notifications/Enable Invitation Notifications 招待が追加された場合、自動通知を有効または無効にします。	false	true/false
Application/Notifications/Enable Initiation Notifications 招待が保留された場合の、自動通知を有効または無効にします。	false	true/false

[アプリケーションの設定]

設定名と説明	既定	有効範囲／値
Application/Notifications/Override Notification Email from User 常にシステムの E メール発信者アドレスを使用する場合は、真に設定します。通知を発信するユーザの E メールアドレスが設定されていてそれを使用する場合は、偽に設定します。	false	true/false
Application/Notifications/Notification from Email User NotificationsFromEmailOverride が真か、ユーザの E メールアドレスが設定されていないときに、使われる通知の発信 E メールアドレス	—	—
Application/Contract Management Encryption Key P6 と Contract Management バージョン 13 間の通信用暗号キー。既定のキーは、「Oracle Primavera」という文字列に基づいています。適当な文字列を入力すると、それが UUID (Universally Unique Identifier) に変換されます。UUID は、Contract Management への接続に必要なパスワードを暗号化するのに使用されます。暗号化には、Sun/Blowfish アルゴリズムを使用します。	F55BB352-B5FE-3AB2-A91C-189F0079D31E	—

[サービス設定]

設定名と説明	既定	有効範囲／値
Services/Module Access Service/Update Rate ライセンス計数に関してビジネスルールエンジンがデータベースと同期する頻度。	30s	100 - 1m
Services/Module Access Service/Expiration Check Rate ライセンスの有効期限を確認する頻度。	2m	500 - 15m
Services/Timestamp Service/Refresh Rate テーブル変更通知が必要か、データベースがクエリを受ける頻度。	1m	15s - 1h
Services/Registry Service/Refresh Rate ビジネスルールエンジンのステータスでデータベースを更新する頻度。	1m30s	15s - 1h
Services/Registry Service/Stale Period ビジネスルールエンジンの動作停止を示す休止時間	4m	1m - 10m

[サービス設定]

設定名と説明	既定	有効範囲／値
Services/Registry Service/Port 動作停止のビジネスルールエンジンの再生要求を受け付ける TCP/IP ポート。	9192	1024 - 65535
Services/Next Key Service/Refresh Rate nextkey キャッシュがリフレッシュされる頻度。	1m	15s - 1h
Services/Next Key Service/Maximum Cached Keys テーブルごとのキャッシュされる最大 nextkey	10	1 - 100
Services/Performance/Use Enterprise Summary リソースとロールにエンタープライズレベルのサマリデータを使用します。	false	true/false
<p>この設定では、リソース管理ヒストグラムを作成するのに、EPS レベルのレコードか、プロジェクトレベルのレコードを使用するのかを指定します。真の場合は、ヒストグラムに 1 つだけ (EPS レコード) のレコードを使うので性能がよくなります。偽の場合は、ヒストグラム図を作成するのに、より多くのレコード (プロジェクトレコード) を使用するので、性能は遅くなります。しかし、偽に設定してプロジェクトレコードを使用したときの方が、ヒストグラムデータはより正確になることに注意してください。</p>		
Services/Performance/Maximum Summary Node Count リソース使用または、リソース分析のような表示に示すサマリデータのしきい値。ノードに含まれる子要素の数がこの値を超えた場合は、データは表示されません。	1000	1-50000
Services/Web Scheduler/Enabled 真の場合は、P6 Web Access から Web スケジューラーを使ってジョブのスケジュールを行います。偽の場合は、スケジュールには、ジョブサービススケジューラーを使用します。	true	true/false
Services/Web Scheduler/Scheduling Interval Web スケジューラーが次のジョブをスケジュールするまで待機する時間。	5m	1s - 24d20h31m23s647
Services/Web Scheduler/Concurrent Schedulers このサーバでスケジュールのために使われるプロセス (アクティブなスケジューラー) 数。値が 0 (ゼロ) の場合は、このサーバでスケジュールが行われないことを示します。	2	0-20
Services/Web Scheduler/Active Scheduler Mode 真の場合は、ジョブはスケジュールされるまで継続的に処理されます。偽の場合は、各ジョブはスケジュールされた間隔で処理されます。	true	true/false

[サービス設定]

設定名と説明	既定	有効範囲／値
Services/Web Scheduler/ASAP Cleanup Rate 完了したスケジューラジョブがデータベースから削除される頻度。	1d	1h - 24d20h31m23s647
Services/Store Period Performance/Enabled 期間実績を保存するサービス。真の場合は、この値が指定の報告期間に保存されます。	true	true/false
Services/Store Period Performance/Execution Interval 期間進捗ジョブをチェックするのにサービスが待機する時間。	5m	1s - 24d20h31m23s647
Services/Store Period Performance/Concurrent Tasks このサーバで期間実績サービスのために使われるプロセス（アクティブなスケジューラ）数。値が 0（ゼロ）の場合は、このサーバでサービスが受けられないことを示します。	2	0 - 20
Services/Sync Actual This Period/Enabled 実際の値と ActualThisPeriod 値を同期するサービス。真の場合は、当期（ThisPeriod）の実際のユニット数とコストを再計算します。	true	true/false
Services/Sync Actual This Period/Execution Interval SyncActualThisPeriod ジョブをチェックするまでサービスが待機する時間。	5m	1s - 24d20h31m23s647
Services/Sync Actual This Period/Concurrent Tasks このサーバで SyncActualThisPeriod サービスのために使われるプロセス数。値が 0（ゼロ）の場合は、このサーバでサービスが受けられないことを示します。	2	0 - 20

[サービス設定]

設定名と説明	既定	有効範囲／値
Services/Project Hierarchy Cache/Cache Policy 使用するキャッシュポリシー。キャッシュポリシーは、キャッシュ内ののデータ量を計り、メモリを空けるためどのデータを削除するかを決めます。	PRR	FIFO, LRU, JVMVM, PRR, PRFIFO, PRLRU, PRCC
許容値は、 FIFO (First In First Out (先入れ先出し) プロジェクトは、メモリに保存された順序で消去されます) LRU (Least Recently Used (最近の使用頻度が最も少ない) プロジェクトがより使用頻度が高いプロジェクトより先にキャッシュから消去されます) JVMVM (Java Virtual Machine Managed (Java バージナルマシン管理) - は、キャッシュ要素をソフト参照に使用します。ソフト参照で使われるメモリは、JVM で必要と判断されます) PRR (キャッシュから消去されるプロジェクトは無作為に選ばれます) PRFIFO (Periodic Refresh First In First Out - FIFO と同じですが、ポリシーは保守頻度に基づいて実行されます) PRLRU (Periodic Refresh Least Recently Used - LRU と同じですが、ポリシーは保守頻度に基づいて実行されます) PRCC (Periodic Refresh Clear Cache- 保守頻度ポリシーに従い、CacheLimit を無視してキャッシュ全体を消去します。)		
Services/Project Hierarchy Cache/Cache Limit メモリに保存する最大プロジェクト数。	5000	1000 - 30000
Services/Project Hierarchy Cache/Maintenance Frequency 指定されたキャッシュポリシーを適用する頻度。キャッシュポリシーの適用では、キャッシュにより使われているメモリの再要求が行われる可能性があります。	5h	1m - 24d
Services/Collaboration Synchronization Service/Synchronization Interval コラボレーション同期サービスが実行される間隔。同期サービスにより、削除されたプロジェクトのドキュメントやワークフローが削除されます。	1h	1m - 24d20h31m23s647
Services/Asynchronous Jobs/Purge Interval 長期に実行されるジョブレコードをデータベースから除去する頻度。	1h	0 - 24d20h31m23s647
Services/Asynchronous Jobs/Grace Time パージ時に消去されるべき長期実行ジョブレコードの最小経過時間。	1d	0 - 24d20h31m23s647

[サービス設定]

設定名と説明	既定	有効範囲／値
Services/Mail Service/Email Notification Server タイムシートの承認用の E メール通知サーバのホスト名または IP アドレス。	—	—
Services/Mail Service/SMTP Port SMTP サーバの TCP/IP ポート。	25	1 - 65535
Services/Mail Service/Send Interval 待ち合わせのメールメッセージが送出される頻度。	1m	0 - 24d20h31m23s647
Services/Mail Service/Maximum Queue Length メールメッセージ待ち合わせキューの最大長。	250	0 - 2147483647
Services/Mail Service/Authorized User Name このメールサーバからメールを送出するときに使用するアカウント名。	—	—
Services/Mail Service/Authorized User Password このメールサーバからメールを送出するときに使用するアカウントのパスワード。	—	—
Services/Import/Export Options/Temporary File Location XML のインポート / エクスポート中に一時ファイルを保存する場所。	—	—
Services/Import/Export Options/Maximum file size XML のインポート / エクスポートの最大ファイルサイズ。	—	64KB - 1MB
Services/Import/Export Options/ASAP Cleanup Rate 完了および失敗したスケジューラジョブがデータベースから削除される頻度。	1d	1h - 24d
Services/Configuration Management/Configuration Capture Enabled P6 Web Access が、設定済みコレクション時間に構成設定を収集するのを許可します。	false	true/false
Services/Configuration Management/Automatic Capture Time 毎日設定をキャプチャする時間。OCM (Oracle Configuration Management) のコレクション時間は、少なくともこのキャプチャ時間の数分後に発生するように設定する必要があります。	12AM	ドロップダウン選択

[性能監視設定]

設定名と説明	既定	有効範囲／値
Performance Monitor/Enabled 真の場合、性能監視パケットが送出されます。	false	true/false
Performance Monitor/Monitor Host 性能監視パケットの送出先 IP または マシン名。	localhost	—
Performance Monitor/Monitor Port 性能監視パケットの送出先ポート。	6990	1024 - 65535
Performance Monitor/Update Interval 性能監視パケットが送出される頻度。	1s	250 - 1m

[トレース設定]

設定名と説明	既定	有効範囲／値
Tracer/Enabled 真の場合は、デバッグメッセージはトレーサアプリケーションに送出されます。	false	true/false
Tracer/Server Name トレーサ情報の送出先のホスト名または、IP アドレス。	localhost	—
Tracer/Port トレーサソケット接続に使うポート。	9210	1024-65535
Tracer/Use Background Send Thread 真の場合は、バックグラウンドスレッドを使って TCP メッセージをトレーサに送出します。	true	true/false

[Integration API サーバの設定]

設定名と説明	既定	有効範囲／値
Integration API server/RMI/Registry Port RMI レジストリのポート。値は通常、少なくとも 1024 に設定されます。	9099	1024 - 65535
Integration API server/RMI/Enable RMI サーバを有効にする設定。	true	true/false
Integration API server/RMI/Enable Compression 圧縮サービスモードを有効にする設定。	true	true/false
Integration API server/RMI/Enable SSL SSL サービスモードを有効にする設定。	true	true/false
Integration API server/RMI/Enable Standard Service 標準サービスモードを有効にする設定。	true	true/false
Integration API server/RMI/Enable HTTP Service HTTP トンネルモードを有効にする設定。	false	true/false
Integration API server/RMI/Enable HTTPS Service セキュアな HTTP (SSL) トンネルモードを有効にする設定。	false	true/false
Integration API server/RMI/Compression Service Port 圧縮サービスモードを使用するポートです。0 の設定は、使用可能などのポートも使われることを示します。サーバがファイアウォールを超えてアクセスされる場合は、これを特定のポートに設定しなければなりません。	0	0 - 65535
Integration API Server/RMI/SSL Service Port SSL サービスモードに使用するポートです。0 の設定は、使用可能などのポートも使われることを示します。サーバがファイアウォールを超えてアクセスされる場合は、これを特定のポートに設定しなければなりません。	0	0 - 65535
Integration API Server/RMI/Standard Service Port 標準サービスモードを使用するポートです。0 の設定は、使用可能などのポートも使われることを示します。サーバがファイアウォールを超えてアクセスされる場合は、これを特定のポートに設定しなければなりません。	0	0 - 65535

[Integration API サーバの設定]

設定名と説明	既定	有効範囲／値
Integration API Server/RMI/HTTP Service Port HTTP トンネルモードに使用するポートです。0 の設定は、使用可能などのポートも使われることを示します。	0	0 - 65535
Integration API Server/RMI/HTTPS Service Port セキュアな HTTP トンネルモードに使用するポートです。0 の設定は、使用可能などのポートも使われることを示します。	0	0 - 65535
Integration API Server/Session Timeout アイドル状態のクライアント接続が切断されるまでの時間。	120	1 -24d

アプリケーションサーバプラグインの実装

P6 Web Access の検証済みの環境リストについては、P6 のメディアまたはダウンロードファイルに含まれている P6 ¥Documentation¥ <language>¥Tested Configurations フォルダを参照してください。

JBoss、WebLogic および WebSphere アプリケーションサーバには、さまざまなプラグインが提供されています。これにより、アプリケーションサーバが提供する以上の Web サーバのフロントエンドを設定することができます。Web サーバのプラグインを設定する手順については、それぞれのアプリケーションサーバのドキュメントを参照してください。

分散ジョブサービスの設定

本章の内容：

分散ジョブサービスの概要

分散ジョブサービスのインストール

Windows ファイアウォールの
無効化

分散ジョブサービスのアクセス権の
設定

分散ジョブサービスの DCOM の
設定

コントローラと DJS サーバの設定

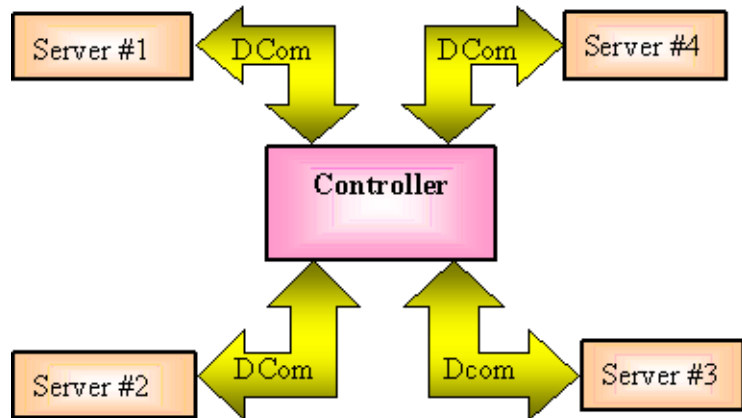
ジョブサービスレジストリの設定

分散ジョブサービス (DJS) は、同時に複数のジョブサービスサーバでジョブを独立に実行するために使用します。複数のマシンにジョブを分散し、分散ジョブサービスを管理するため、コントローラサーバを設定することができます。

分散ジョブサービスの概要

分散ジョブサービス (DJS) は、制御マシンが複数のジョブサービスを実行するマシン (サーバ) を管理する、ジョブサービスの拡張機能です。非分散ジョブサービスは、単一のマシンでジョブが実行されます。非分散ジョブサービスを複数のマシンにインストールすることは、各サービスが各マシンで独立に実行されることになります。

分散ジョブサービスでは、指定されたサーバは、以下の図に示されるように DCOM 通信によるコントローラからの要求でジョブを実行します。これにより、ジョブサービスの負荷は複数のマシンに分散されます。必要に応じてコントローラもジョブを実行することができます。



本セクションで述べる準備のほか、Project Architect ジョブサービスの実行には、P6 Web Access 用のデータベースを設定する必要があります。190 ページの「Project Architect ジョブサービスを実行するための P6 Web Access の設定」を参照してください。

コントローラと DJS サーバのインストールと設定の準備

コントローラとサーバに DJS をインストールし、設定する前に以下の作業を行います。

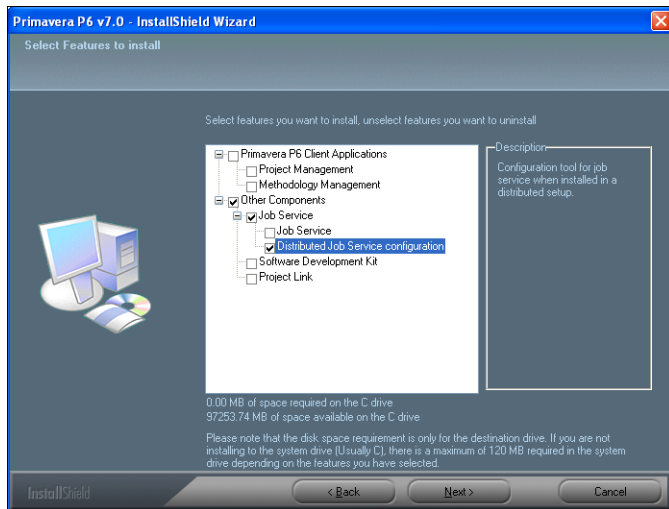
- コントローラとすべての DJS サーバで、環境変数の「Temp」と「TMP」変数を定義します (ユーザ変数とシステム変数の両方)。
- コントローラとすべての DJS サーバのシステムクロックを同期させ、ログファイルに同一のタイムスタンプが用いられるようにします。

分散ジョブサービスのインストール

分散ジョブサービスのインストール前に、制御サービスと DJS サーバ（最大 10 台）を特定します。268 ページの「[ジョブサービスおよび分散ジョブサービスのインストール](#)」で説明されているように、ジョブサービスを各マシンにインストールします。コントローラでは、次図に示すように、分散ジョブサービスオプションを選択します。インストールが完了したら、このセクションに戻り、ユーザアクセスを設定します。



Oracle は、コントローラとすべての関連サーバを同じネットワークドメインに置くことを推奨します。また、各マシンの OS は、Windows Server 2003、Windows Server 2008 または Windows XP で、ファイアウォールは無効にしておかなければなりません。



Windows ファイアウォールの無効化

Windows ファイアウォールは、Windows 2003 サーバと XP では既定で有効になっていますが、DCOM 接続機能を妨げます。コントローラと各 DJS サーバでファイアウォールを無効にする必要があります。

Windows ファイアウォールを無効にするには、以下のステップを実行します。

- 1 Windows のコントロールパネルから、Windows ファイアウォールを選択します。
- 2 [Windows ファイアウォール] ダイアログの [全般] タブで、[無効] を選択し、[OK] をクリックします。

分散ジョブサービスのアクセス権の設定

DCOM と DJS の設定前に、ジョブサービスの起動、レジストリとコントローラのパス情報へのアクセス、ネットワークにわたるアプリケーションへのアクセスが可能な権限をもったユーザを作成する必要があります。

コントローラと DJS サーバが属するドメインを制御するサーバで、以下のステップを実施します。

- 1 ユーザグループ（例えば、PrmAdmins）を作成します。
- 2 コントローラと各 DJS サーバに対し、作成したユーザグループにユーザ名を追加します。例えば、以下のようになります。

コントローラ名 : ControllerUser

サーバ 1 の名前 (DCOM サーバ) : Server1User

サーバ 2 の名前 (DCOM サーバ) : Server2User

サーバ 3 の名前 (DCOM サーバ) : Server3User

- 3 コントローラと各 DJS サーバで、作成したグループをローカル管理者グループに追加します。
- 4 [DCOM 設定] ダイアログの[セキュリティ] タブで、作成したグループを各カスタム許可に追加します。

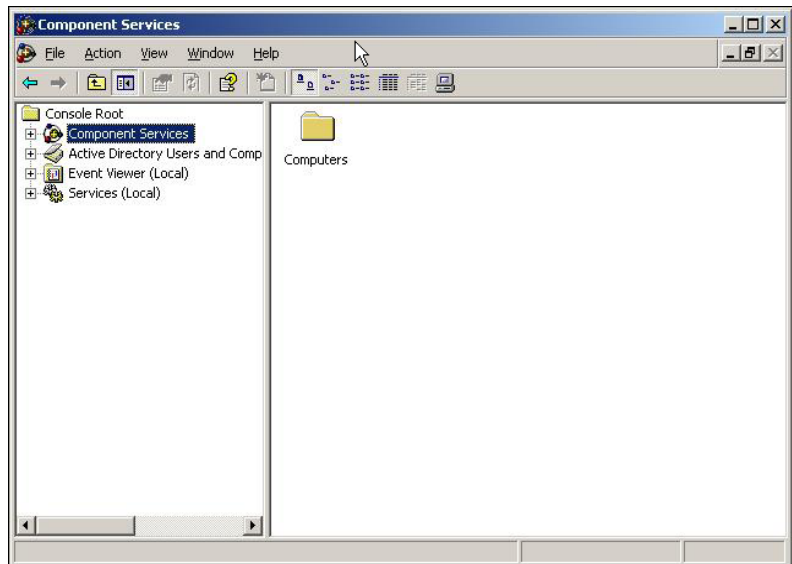


上記の例は、マルチユーザの場合です。シングルユーザアクセスの設定も可能です。例えば、シングルドメインユーザ（例えば、ControllerUser）を作成し、そのユーザをコントローラと各 DJS サーバのローカル管理者グループに追加することができます。その上で、DCOM の設定時に上記の PrmAdmins ユーザグループの代わりに ControllerUser を使用します。

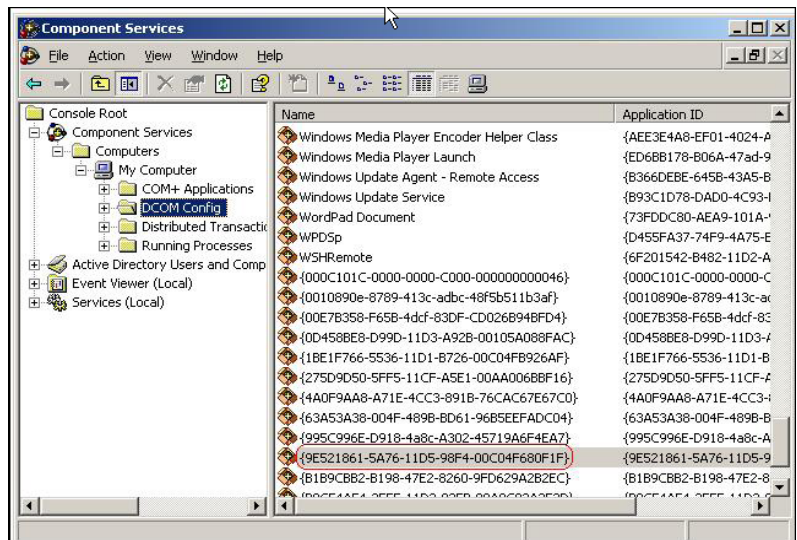
分散ジョブサービスの DCOM の設定

Windows Server 2003、Windows Server 2008 または Windows XP Professional 上で実行される分散ジョブサービス用に DCOM を設定するには、コントローラと各 DJS サーバで以下のステップを実施します。

- 1 コマンドライン（または、スタートからユーティリティの実行）で、**dcomcnfg** を実行します。[コンポーネントサービス] ダイアログが表示されます。

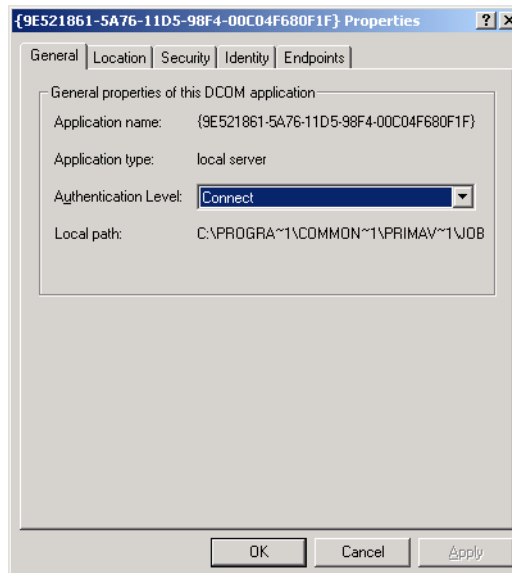


- 2 [コンポーネントサービス] ダイアログで、左パネルのツリーの [コンポーネントサービス]、[コンピュータ]、[マイコンピュータ]、[DCOM の構成] をクリックして、展開します。



3 右パネルの **{9E521861-5A76-11D5-98F4-00C04F680F1F}** エントリを右クリックして[プロパティ]を選択します。

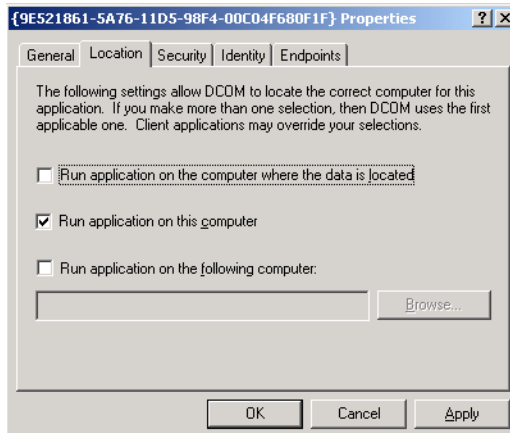
4 [プロパティ] ダイアログ、[全般] タブで [認証レベル] に「接続」を設定します。



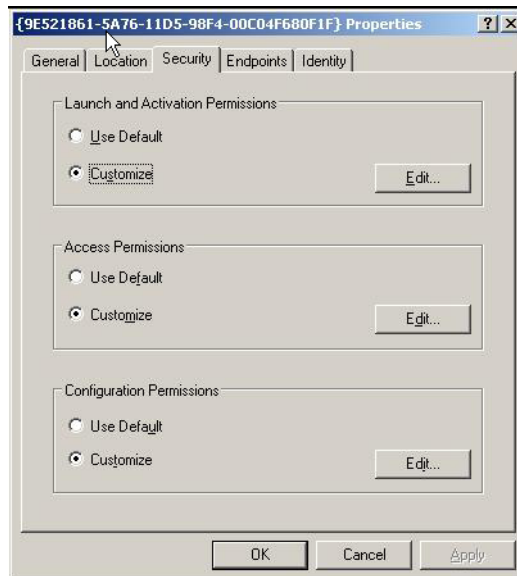


コントローラとすべての DJS サーバは、必ず同じ認証レベルに設定してください。[分散 COM 設定プロパティ] ダイアログの[既定のプロパティ] タブで、既定の認証レベルに「接続」を設定することもできます。

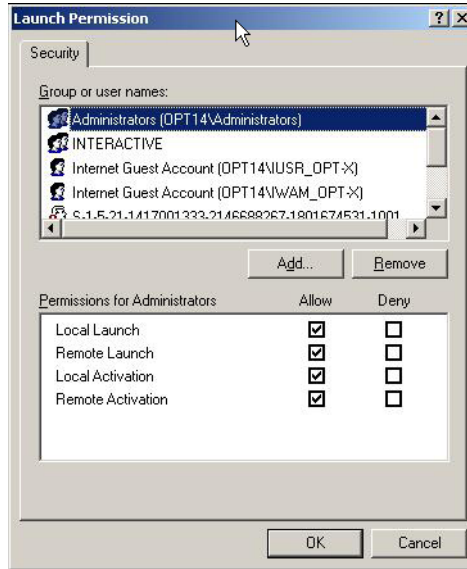
- 5 [プロパティ] ダイアログの[場所] タブで[このコンピュータでアプリケーションを実行する] というオプションを選択します。



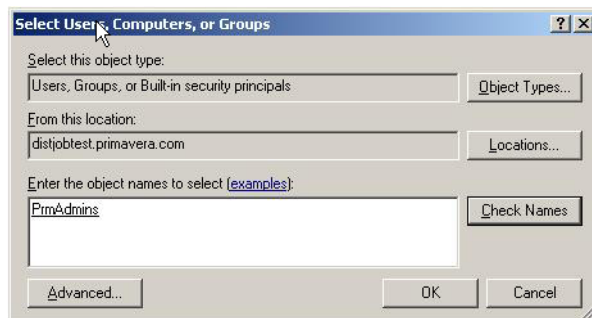
- 6 [プロパティ] ダイアログ、[セキュリティ] タブで、次図に示すようにすべての許可タイプでカスタマイズオプションを選択します。



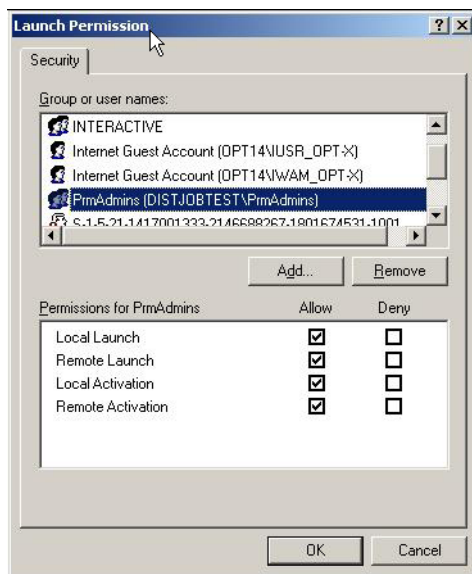
- 7 [プロパティ] ダイアログ、[セキュリティ] タブで、起動とアクティベーション許可に関する [編集] ボタンをクリックします。
- 8 [起動許可] ダイアログ、[セキュリティ] タブで、[Add] をクリックします。



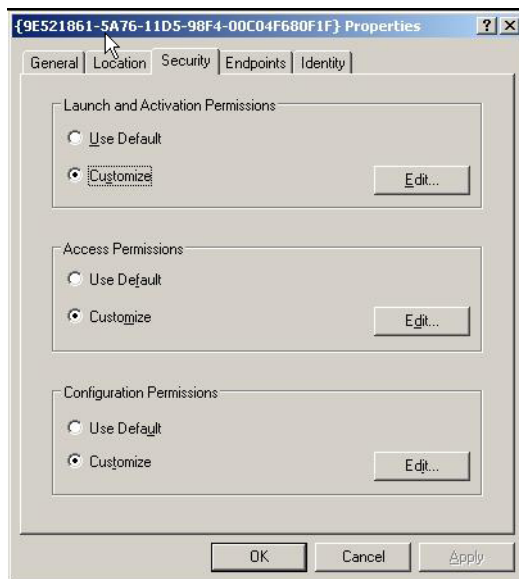
- 9 ユーザ、コンピュータまたはグループの選択ダイアログで、前に作成したグループ名（例えば、PrmAdmins）を入力します。「OK」をクリックします。



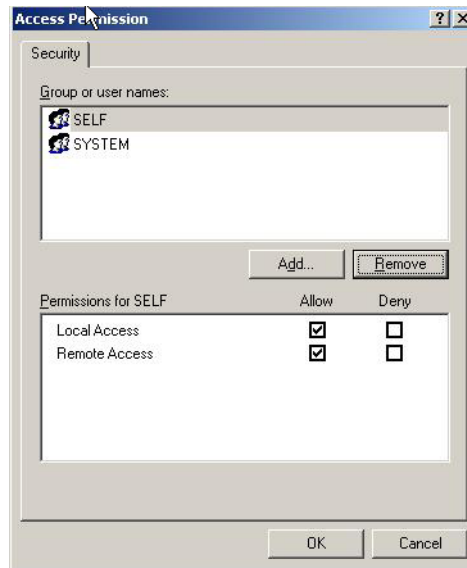
- 10 [起動許可] ダイアログ、[セキュリティ] タブで、追加したユーザグループ（例えば、PrmAdmins）を選択し、次図に示すように、すべての許可に対して「許可」を選択します。「OK」をクリックします。



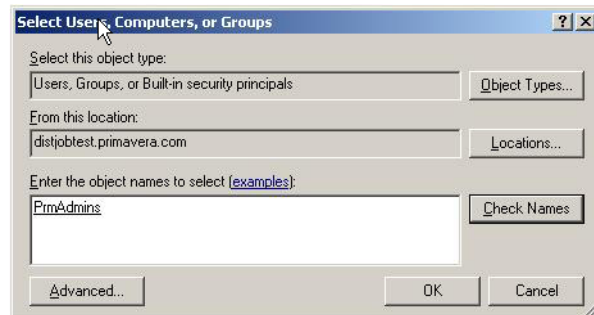
- 11 [プロパティ] ダイアログ、[セキュリティ] タブで、アクセス許可の [編集] ボタンをクリックします。



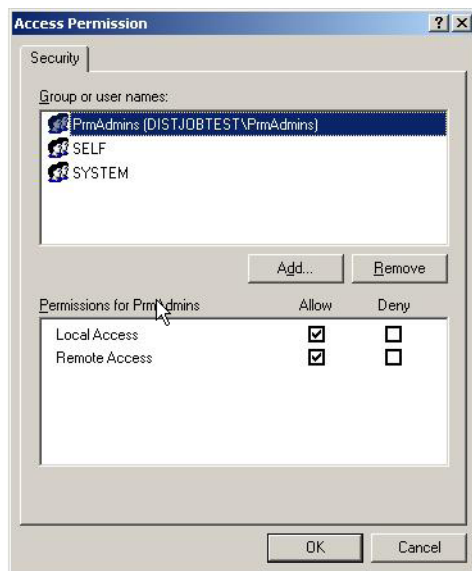
- 12 [アクセス許可] ダイアログ、[セキュリティ] タブで、[Add] をクリックします。



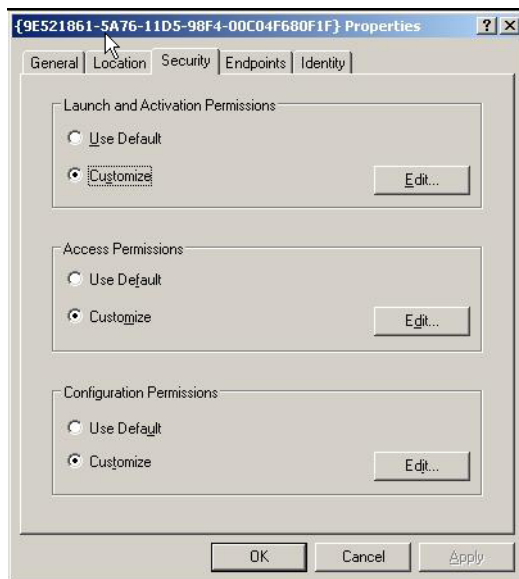
- 13 [ユーザ、コンピュータまたはグループの選択] ダイアログで、前に作成したグループ名（例えば、PrmAdmins）を入力します。「OK」をクリックします。



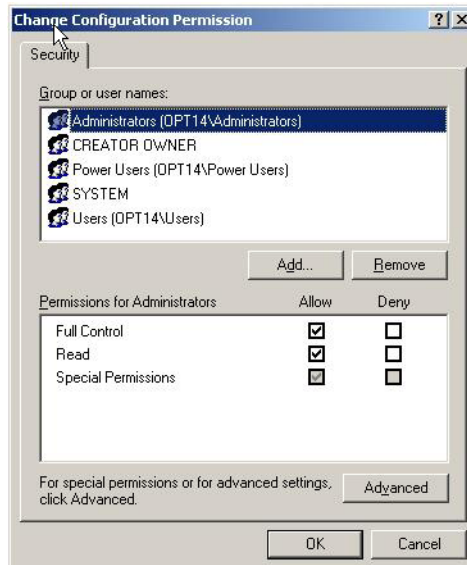
- 14 [アクセス許可] ダイアログ、[セキュリティ] タブで、追加したユーザグループ（例えば、PrmAdmins）を選択し、次図に示すように、すべての許可に対して「許可」を選択します。そして [OK] をクリックします。



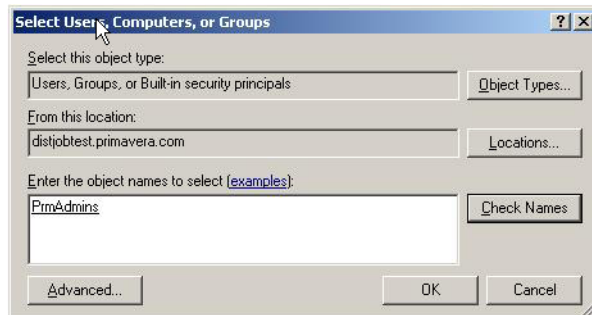
- 15 [プロパティ] ダイアログ、[セキュリティ] タブで、構成のアクセス許可の [編集] ボタンをクリックします。



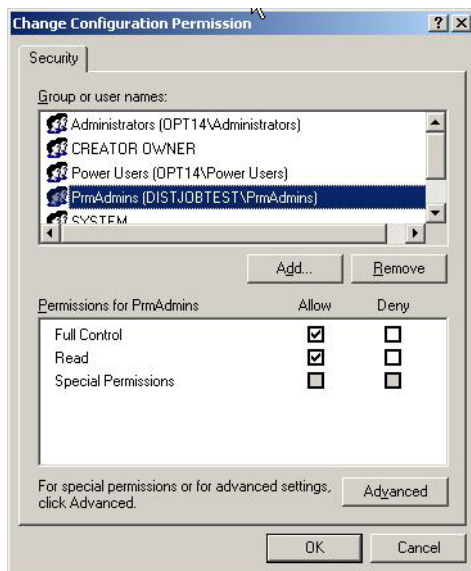
- 16 [権限の構成を変更する] ダイアログの [セキュリティ] タブで、[Add] をクリックします。



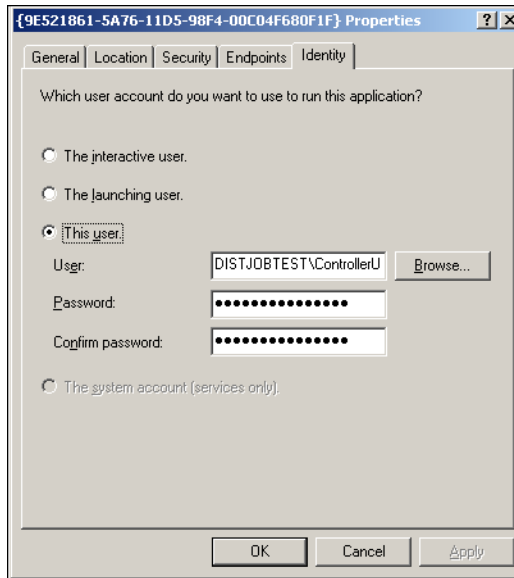
- 17 [ユーザ、コンピュータまたはグループの選択] ダイアログで、前に作成したグループ名（例えば、PrmAdmins）を入力します。「OK」をクリックします。



- 18 [権限の構成を変更する] ダイアログ、[セキュリティ] タブで、追加したユーザグループ（例えば、PrmAdmins）を選択し、次図に示すように許可を設定します。そして [OK] をクリックします。



- 19 [プロパティ] ダイアログ、[ID] タブで「このユーザ」オプションを選択します。使用中のマシンで管理者特権をもつユーザのパスワードを入力します。

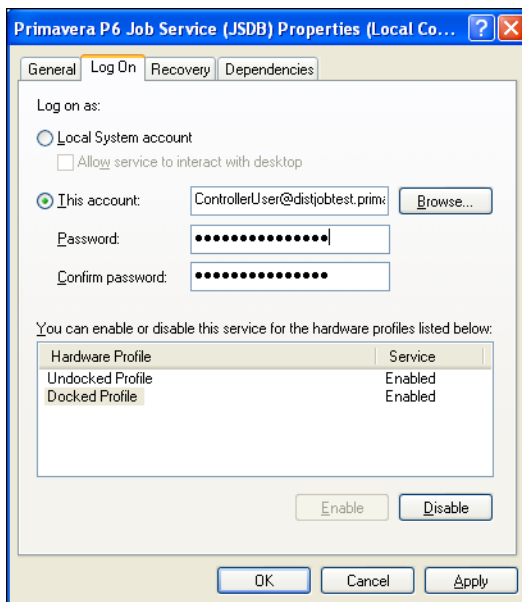


- 20 [OK] をクリックしてダイアログを閉じます。
- 21 コントローラで、サービスコントロールパネルを起動します。
- 22 「サービス」ダイアログボックスで、「P6 ジョブサービス (JSDB)」をダブルクリックし、「プロパティ」ダイアログボックスを開きます。

- 23 [プロパティ] ダイアログで、[このアカウント] を選択し、コントローラの管理者ユーザのパスワードを入力します。



21 ~ 23 のステップにより、DJS はすべてのサーバに対する起動ユーザとして DCOM 設定で指定した管理者名とパスワードを使用します。



- 24 [OK] をクリックしてダイアログを閉じます。

コントローラと DJS サーバの設定

分散ジョブサービス設定ツールを使って、コントローラと DJS サーバを設定します。手順に従って、設定ツールにアクセスし、コントローラと DJS サーバを設定してください。

- 1 コントローラで、以下の場所から DistributedJobsAdmin.exe を実行します。C:\Program Files\Common Files\Primavera Common\JobService\JSConfig。

[Distributed Job Service Configuration] ダイアログが開きます (次図に示す)。

Select the Job Service executable (PrmJobSvXXXX.exe) for this machine using the Browse button. Add additional Job Services with the same executable name from other Servers. You can change the status of each Server. Click Save Settings when finished. You may use the Test or Test All button to test the connection for one or all Job Services.

Controller	Status	Job service location on controller
AGENT-4	Enabled	

Servers	Status	Job service location on Servers

Maximum number of Web Access or API jobs
(Cannot be greater than sum of enabled machines) 1

- 2 [Distributed Job Service Configuration] ダイアログで、[Browse] をクリックします。C:\Program Files\Common Files\Primavera Common\JobService フォルダにナビゲートし、PrmJobSvXXXX.exe を選択します。ここで、XXXX はデータベース接続の DB 接続名 (この例では、XXXX は次図に示すように JSDB です)。

3 [Distributed Job Service Configuration] ダイアログで、[Add] をクリックします。一覧の各サーバで該当の PrmJobSvXXXX.exe を選択します。

次図のような、[Distributed Job Service Configuration] ダイアログが開きます。

DJS を無効にするには、そのマシンで [Disabled] を選択します。この例では、コントローラはジョブを他のサーバで実行しますが、自身では実行しません。

Select the Job Service executable (PrmJobSvXXXX.exe) for this machine using the Browse button. Add additional Job Services with the same executable name from other Servers. You can change the status of each Server. Click Save Settings when finished. You may use the Test or Test All button to test the connection for one or all Job Services.

Controller	Status	Job service location on controller
\\AGENT-4	Disabled	C:\Program Files\Common Files\Primavera Common\JobService\prmJobSvXXXX.exe

Servers	Status	Job service location on Servers
\\agent-6	Enabled	\\agent-6\c\$\Program Files\Common Files\Primavera Common\JobService\prmJobSvXXXX.exe
\\agent-5	Enabled	\\agent-5\c\$\Program Files\Common Files\Primavera Common\JobService\prmJobSvXXXX.exe
\\agent-2	Enabled	\\agent-2\c\$\Program Files\Common Files\Primavera Common\JobService\prmJobSvXXXX.exe

Maximum number of Web Access or API jobs (Cannot be greater than sum of enabled machines)

Close

Browse


Add

Remove


Save Settings

Test

TestAll

 すでに設定ツールを使用していれば、以前に設定したすべてのサーバがサーバの一覧に表示されます（前図の下部）。

4 コントローラおよび各 DJS サーバのステータス（有効／無効）を設定します。

 DJS はどのマシンでも無効に設定することができます（例えば、DJS サーバだけでジョブを実行し、コントローラでは実行しない）。ただし、無効に設定したマシンにおいても、他に有効なマシンがない場合（例えばネットワーク障害）は、ジョブが実行されます。

5 [Test] をクリックし、DCOM 設定と PrmJob のインストールが各マシンで正しく動作していることを検証します。

-
- 6 [Maximum Number of Web Access or API jobs] フィールドに、0 から有効な DJS マシン数までの間の値を入力します。



[Maximum Number of Web Access or API jobs] の値に応じて、一度に実行できる P6 Web Access ジョブ数が決まります。この値は、Project Management モジュールでジョブサービスダイアログを使って設定する、反復ジョブには影響しません。

-
- 7 [Save Settings] をクリックして閉じます。
- 8 コントローラとすべての DJS サーバを再開します。



コントローラが再開すると、ジョブスケジューリングの活動がイベントビューワに表示されます。すべてのジョブのログファイルは、コントローラのそれぞれのフォルダに置かれます（その他のサーバにはありません）。



コントローラと DJS サーバの再起動後に 236 ページの「[分散ジョブサービスの DCOM の設定](#)」で実施した DCOM 設定を変更する場合は、変更したマシンを再起動する必要があります。

ジョブサービスレジストリの設定

(分散) ジョブサービスに適用するレジストリ設定とサマライザサービスを編集することができます (ジョブサービスと Project Management モジュールの両方で)。

(分散) ジョブサービスレジストリ設定の編集 スタート、ユーティリティの実行で「regedit」とタイプして、レジストリエディタを開きます。レジストリエディタで、次のディレクトリにナビゲートします。

My Computer¥HKEY_LOCAL_MACHINE¥
SYSTEM¥CurrentControlSet¥Services¥PrmJobSvXXXX¥Parameters
(ここで、XXXX はデータベース接続の DB 接続名です)。

以下の表にジョブサービスレジストリ設定の要約を示します。

[ジョブサービスの設定]

設定名と説明	既定	有効範囲／値
EstablishDBConnectionRetryCount スタートアップ時に接続を試みる回数。	3	1-10
MaxNumRecurringJobs 同時に実行できる反復 (Project Management) ジョブの最大数。	4	1- (最大数なし)
MaxNumNonRecurringJobs 同時に実行できる非反復 (P6 Web Access) ジョブの最大数。	1	1-5
NonRecurringJobCleanupRate 完了した P6 Web Access のジョブがデータベースから除去される頻度 (秒) (1 分から 7 日間)。	3600	60-604800

[ジョブサービスの設定]

設定名と説明	既定	有効範囲／値
NonRecurringJobRefreshRate P6 Web Access のジョブがデータベースからロードされる頻度（秒）。	5	1-3600
RecurringJobRefreshRate Project Management ジョブがデータベースからロードされる頻度（秒）。	600	60-1440
DeleteRemoteLog [test purposes only] 偽に設定されている場合、ログファイル「Prm*.tmp」は削除されません。	1（真）	0（偽） 1（真）

サマライザジョブのさらなる情報は、272 ページの「サマライザジョブと P6 Web Access について」を参照してください。

サマライザジョブのため、レジストリ設定を編集 スタート、ユーティリティの実行で「regedit」とタイプして、レジストリエディタを開きます。レジストリエディタで、次のディレクトリにナビゲートします。

My Computer¥HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Primavera。

以下の設定のどれでも DWORD として設定し、既定の値を推奨値に変更することができます。



以下の設定は、ジョブサービスと Project Management モジュールに適用されます。通常、これらは性能の向上のために変更します。

[サマライザ設定]

設定名と説明	既定	有効範囲／値
NumProjectsSummarizedAtATime ジョブサービスまたは Project Management モジュールで同時に集計できるプロジェクト数。最適な性能を確保するには、Oracle はこの値を 20 にすることを推奨します。	1	1-xx
PreQuerySummarizablePct サマライザが分析するプロジェクトの集計に必要なしきい値のパーセンテージ 下記に示す等式の値がしきい値より下回った場合、各プロジェクトは個別に集計対象となります。等式の値がしきい値より上回った場合は、すべてのプロジェクトが同時に集計と分析の対象となります。これを決定付けする等式を次に示します。 集計すべきプロジェクト数／ユーザがアクセスできるプロジェクト数 *100。	50	0-100
MaxDurationToSummarize 集計のためのアクティビティまたはアクティビティに割り当てられる、最大残り時間または元々の最大時間（時間）。アクティビティまたはアクティビティの割り当ての残り時間がこのしきい値より長い場合は、集計中無視されます。すべてのアクティビティが確実に集計されるようにするため、Oracle は設定値を 100000 とすることを推奨します。	-1	-



次の設定も使用できます。しかし、これらの値は性能試験のとき以外、通常変更する必要はありません。

[サマライザ設定]

設定名と説明	既定	有効範囲／値
--------	----	--------

EnterpriseSummaries 真の場合は、EPS ノートが要約されます。	0 (偽)	0 (偽) 1 (真)
---	-------	----------------

Project Management モジュールのみに適用します。

注：ジョブサービスは常に EPS ノードを集計します。

ResourceSummaries 真の場合、リソースは集計されます。	1 (真)	0 (偽) 1 (真)
---	-------	----------------

ジョブサービスと Project Management モジュールに適用されます。

ForceEnterpriseSummaries 真の場合は、プロジェクトが集計されなくてもエンタープライズレベルの要約を強制します。	0 (偽)	0 (偽) 1 (真)
---	-------	----------------

ジョブサービスのみに適用します。

EnterpriseCommit 処理したデータの行数に基づき、EPS サマリレコードのデータベースへのコミットする頻度を制御します。大規模のジョブを集計する場合に、性能を向上するのに便利です。	ジョブサービスには、1- (最大数なし) 1000 Project Management モジュールには値なし
---	---

処理が完了すると EPS サマリレコードに値はコミットされません。

値を割り付けると、ジョブサービスと Project Management モジュールの両方に適用されます。

PrmJobLogMemoryUsage 真の場合は、PrmJob のメモリ利用をメガバイトでログします。	0 (偽)	0 (偽) 1 (真)
---	-------	----------------

ジョブサービスのみに適用します。

[サマライザ設定]

設定名と説明	既定	有効範囲／値
RetrySleep 接続不良の場合に行うリトライの間隔（ミリ秒）。 ジョブサービスのみに適用します。	60000	-
MaxRetries 接続不良の場合の、最大リトライ回数。 ジョブサービスのみに適用します。	10	-
DumpSettings 真に設定すると、集計ジョブのためすべての設定を Job.txt ファイルにログします。 ジョブサービスのみに適用します。	0（偽）	0（偽） 1（真）

[サマライザ設定]

設定名と説明	既定	有効範囲／値
PreLoadTASKSUMFINForEPS EPS 全体を集計する前に全プロジェクトの TASKSUMFIN レコードをプレロードします。 「load on demand」アプローチを使う際は、偽に設定します。この場合、メモリは保存されますが、TASKSUMFIN レコードの SQL クエリ数が増えるため、速度はかなり落ちます。 ジョブサービスと Project Management モジュールの報告期間集計に適用されます。週または月ごとの集計パフォーマンスには影響しません。	1 (真)	0 (偽) 1 (真)
PreLoadTASKSUMFINForProject プロジェクトを集計する前に各プロジェクトの TASKSUMFIN レコードをプレロードします。 「load on demand」アプローチを使う際は、偽に設定します。この場合、メモリは保存されますが、TASKSUMFIN レコードの SQL クエリ数が増えるため、速度はかなり落ちます。 ジョブサービスと Project Management モジュールの報告期間集計に適用されます。週または月ごとの集計パフォーマンスには影響しません。	1 (真)	0 (偽) 1 (真)
PreLoadTRSRCSUMFN プロジェクトを集計する前に各プロジェクトの TRSRCSUMFN レコードをプレロードします。また、EPS 全体の集計中、一度にひとつのリソースまたはロールの TRSRCSUMFN レコードすべてをプレロードします。 「load on demand」アプローチを使う際は、偽に設定します。この場合、メモリは保存されますが、TRSRCSUMFN レコードの SQL クエリ数が増えるため、速度はかなり落ちます。 ジョブサービスと Project Management モジュールの報告期間集計に適用されます。週または月ごとの集計パフォーマンスには影響しません。	1 (真)	0 (偽) 1 (真)

P6 クライアントのインストール および設定

内容：

クライアントモジュールとその他のコン
ポーネントのインストール

自動データベースアップグレード

無人セットアップの作成と実行

データベース構成設定の変更

認証モードの設定

本

パートを読んで、P6 クライアントモジュール、その他のコンポーネントおよびスタンドアローン版のインストールと設定を行います。最初の「[クライアントモジュールとその他のコンポーネントのインストール](#)」の章では、各モジュールとコンポーネントをクライアントワークステーションに設定する方法を説明します。P6 の旧バージョンからアップグレードする場合は、「[自動データベースアップグレード](#)」を参照してください。ソフトウェアを自動インストール（無人セットアップ）する場合は、「[無人セットアップの作成と実行](#)」を参照してください。

モジュールのインストール後、「[データベース構成設定の変更](#)」を参照し、Configure Connection ツールと Administration Configuration ツールを使用してデータベース接続情報を変更し、プライベートデータベースパスワードとユーザパスワードを変更する方法を理解します。ユーザがモジュールにアクセスする認証方法については「[認証モードの設定](#)」を参照します。

クライアントモジュールとその他のコンポーネントのインストール

本章の内容：

データベースクライアントソフトウェアのインストール

旧バージョンのアンインストール

設定ウィザードの実行

クライアントモジュールのインストール

ジョブサービスおよび分散ジョブサービスのインストール

ソフトウェア開発キットのインストール

ProjectLink のインストール

スタンドアローン版のインストールまたはアップグレード

P3 と Project Management モジュール間でデータ転送されるように P6 を設定

本章では、P6 のクライアントモジュール（Project Management および Methodology Management）、その他のコンポーネント（ジョブサービス、ソフトウェア開発キット、ProjectLink）、スタンドアローン版のインストール方法を学びます。プロジェクト要員が使用するクライアントまたはデスクトップコンピュータで、設定ウィザードを実行します。

P6 のクライアントモジュールをインストールする前に、サーバのインストールと設定を完了させておいてください。設定ウィザードは、クライアントモジュールのインストールに、データベースサーバと接続する必要があります。

データベースクライアントソフトウェアのインストール

P6 のクライアントモジュールをインストールする前に、使用するデータベースのクライアントソフトウェアをインストールします。データベースクライアントソフトウェアは、クライアントコンピュータがネットワーク経由でサーバコンピュータのデータベースへの接続を可能にします。

Microsoft SQL Server Project Management モジュールをクライアントコンピュータにインストールする際、P6 モジュールに接続する必要がある **Microsoft SQL Server** クライアントファイルも自動的にインストールされます。

Microsoft SQL Server のインストール CD を使ってクライアントネットワークユーティリティをインストールすることもできます。このプロセスに詳しくない場合は、データベース管理者に連絡してください。



SQL Server 2005 の listen ポートを既定値 (1433) から変更した場合、P6 を各クライアントにインストールした後に各クライアントマシンに Microsoft SQL Server 2005 下位互換コンポーネント (SQL Server2005_BC.msi) をインストールすることが必要になります。

次の場所から、Microsoft SQL Server 2005 下位互換コンポーネントの更新版をインストールできます。

<http://www.microsoft.com/downloads/details.aspx?FamilyID=d09c1d60-a13c-4479-9b91-9e8b9d835cdc&DisplayLang=en>

Oracle/Oracle Database Express Edition Oracle のインストール CD を使って、アプリケーションユーザを設定し、Oracle Net Services のクライアントファイルをユーザのネットワークに合わせて設定します。このプロセスに詳しくない場合は、データベース管理者に連絡してください。

Oracle Database Express Edition (Oracle Database XE) を使用する場合、P6 のスタンドアローンバージョンをインストールする際に必要なすべてのファイルが自動的にインストールされます。



すべてのクライアントは既定のネットワークプロトコルとして、TCP/IP を使用するよう設定してください。



パスで変更できる環境で TNSPING.EXE のロケーションを必ず参照してください。



TNSNAMES.ORA ファイルは、共有ロケーションではなくクライアント（ローカル）マシンの Oracle ホームフォルダにあるはずです。

旧バージョンのアンインストール

以前のバージョンからアップグレードする場合、ジョブサービス以外のすべてのクライアントモジュールがインストールプロセス中に自動的にアップグレードされます。

P3 とデータをやり取りする場合は、P6 クライアントをインストールする前に必要なファイルの登録を解除する方法について、Oracle Primavera サポートナレッジベースを参照してください。インストール後については、284 ページの「[P3 と Project Management](#) モジュール間でデータ転送されるように P6 を設定」を参照してください。

ジョブサービスのバージョン 7.0 にアップグレードする場合は、以下の指示に従ってジョブサービスの旧バージョンをアンインストールする必要があります。

画面で特に指示がない場合でも、アプリケーションのアンインストールと次のアプリケーションのインストールの間にコンピュータを再起動することを推奨します。

ジョブサービスの以前のバージョンのアンインストール

- 1 [スタート]、[設定]、[コントロールパネル]、[プログラムの追加または削除] をクリックします。
- 2 Primavera の項目を選択して、変更 / 削除をクリックします。
- 3 インストールウィザードの「ようこそ」画面で、[変更] を選択します。
- 4 「インストールする機能の選択」画面で、[ジョブサービス] の選択を外し、[次へ] をクリックします。
- 5 「プログラムのインストール準備完了」画面で [インストール] をクリックします。

設定ウィザードの実行

ソフトウェアを手動でインストールしたくない場合は、無人セットアップを実行することができます。295 ページの「**無人セットアップの作成と実行**」を参照してください。

設定ウィザードを実行して、クライアントモジュール (Project Management と Methodology Management)、その他のコンポーネント (ジョブサービス、ソフトウェア開発キット、ProjectLink) およびスタンドアローン版をインストールします。インストールプロセスの最初のいくつかのステップは、これらすべての P6 アプリケーションで共通です。本セクションでは、このステップを説明します。本セクションのステップを完了したら次セクションに進み、希望のモジュールやコンポーネントをインストールする手順に従ってください。

1 つまたはそれ以上のモジュールをインストールします。設定ウィザードには、ユーザが選択するモジュールおよびコンポーネントのインストールに必要なディスク容量が表示されます。

P6 のクライアントモジュールを Windows XP Professional、Windows Vista にインストールするには、管理者権限が必要です。



バージョン 5.0 以降が現在インストールされている場合には、設定ウィザードが、現在のインストールをバージョン 7.0 にアップグレードします。



クライアントコンピュータには、TCP/IP ネットワークプロトコルがインストールされていなければなりません。



P6 アプリケーションをインストールすると、MDAC 2.8 (英語版) がインストールされていない場合は、自動的にインストールされます。P6 アプリケーションを英語版でないオペレーティングシステムにインストールする場合は、P6 のインストール前に適切な言語版の MDAC 2.8 をインストールしておくことをお勧めします。P6 インストーラは既存の MDAC 2.8 を上書きしません。正しい MDAC 版をダウンロードするには、<http://www.microsoft.com/downloads> にアクセスしてください。



P3 のデータをインポートおよびエクスポートするには、P3 アプリケーションが必要です。P6 設定ウィザードを実行する前に、P3 がインストールされていることを確認してください。P6 のインストール後の追加設定手順については、284 ページの「**P3 と Project Management モジュール間でデータ転送されるように P6 を設定**」を参照してください。P6 の後に P3 をインストールする場合は、インストール完了後に必要なファイルを手動で登録する手順について、Oracle Primavera サポートナレッジベースを参照してください。

クライアントモジュール、その他のコンポーネント、スタンドアローン版のインストールの最初のステップ

- 1 P6 のメディアまたはダウンロードファイルに含まれる Client_Applications フォルダで **setup.exe** をダブルクリックします。



ウィザードの各ダイアログボックスでは、[次へ] をクリックして次ステップへ進みます。ウィザードを終了するには、いつでも [Cancel] をクリックします。

- 2 「ようこそ」画面で、「次へ」をクリックします。
- 3 「Industry Selection」ダイアログボックスで、業界を選択します。

選択する業界により、アプリケーションの既定値、計算設定、およびクライアントモジュールと共にインストールされるサンプルデータが決定されます。業界タイプの詳細については、28 ページの「[P6 の業界タイプ](#)」を参照してください。



旧バージョンからのアップグレードを行う場合は、既存のインストールに基づいて業界タイプが自動的に選択されます。必要に応じて、別の業界を選択できます。

- 4 「Select Type」ダイアログボックスで、以下を選択します。
 - **Primavera Client Applications** クライアントモジュールのみをインストールしたい場合 (Project Management と Methodology Management)。共有ネットワークデータベース上でクライアントモジュールを実行する場合は、このインストールタイプを選択します。このインストールタイプを選択すると、Project Management データベースおよび Methodology Management データベースはマシン上にインストールされません。
 - **Primavera Standalone** Project Management モジュールおよび Methodology Management モジュールのスタンドアローン版をインストールしたい場合。Project Management データベースおよび Methodology Management データベースをマシン上にインストールしたい場合に、このインストールタイプを選択します。
 - **Custom** クライアントモジュールとその他のコンポーネントを指定したい場合 (ジョブサービス、ソフトウェア開発キット、ProjectLink を含む)。



その他のコンポーネントを個別にインストールする詳細手順については、本章の該当セクションを参照してください。

- 5 Choose Destination Location** ダイアログボックスで、クライアントモジュールのインストール先フォルダを入力または選択します。

既定のインストール場所は、次のとおりです。
<local drive>¥Program Files¥Oracle¥Primavera P6¥

- 6 Choose Destination Location (Common)** ダイアログボックスで、Primavera 共通ファイルのインストール先フォルダを入力または選択します。

既定で、共通ファイルはインストール時に作成された Primavera 共通フォルダにインストールされます。別のフォルダを選ぶこともできます。

- 7** インストールしたいモジュールやコンポーネントのインストール手順が説明されているセクションに進みます。

クライアントモジュールには、266 ページの「[クライアントモジュールのインストール](#)」に進みます。

ジョブサービスには、268 ページの「[ジョブサービスおよび分散ジョブサービスのインストール](#)」に進みます。

ソフトウェア開発キットには、275 ページの「[ソフトウェア開発キットのインストール](#)」に進みます。

ProjectLink には、278 ページの「[ProjectLink のインストール](#)」に進みます。

スタンドアローン版には、280 ページの「[スタンドアローン版のインストールまたはアップグレード](#)」に進みます。



これらのコンポーネントは別々にインストールする必要はありません。すべてのコンポーネントを一度にインストールできます。インストール手順は、セクション別になっており、特定のコンポーネントにのみ関連する管理者情報が記載されています。

クライアントモジュールのインストール

Project Management や Methodology Management モジュールのインストールには、以下のステップを実行します。



以下の手順は、クライアントモジュールのみをインストールすること、および264 ページの「[クライアントモジュール、その他のコンポーネント、スタンドアローン版のインストールの最初のステップ](#)」に詳説のステップが完了しているものと想定しています。

1 つあるいは複数のモジュールをインストール

- 1 「**Select Features to install**」 ダイアログボックスで、適宜、各チェックボックスをマークあるいはクリアします。
- 2 「**Select Program Folder**」 ダイアログボックスで、P6 クライアントアイコンを含める「スタート」メニューのプログラムフォルダを入力あるいは選択します。

変更しない場合は、これらのアイコンは「プログラム」、「Oracle - Primavera P6」に保存されます。

- 3 **Install** をクリックしてインストールを開始します。

インストールが完了すると、データベースとの接続を設定するよう促されます。

- 4 「**Select Driver Type**」 ダイアログボックスで、P6 データベースのドライバタイプを選択します。

Project Management モジュールをインストールしている場合は、Project Management データベースへのクライアントの接続を設定しなければなりません。Methodology Management モジュールをインストールしている場合は、Methodology Management データベースへの接続を設定しなければなりません。両方をインストールしている場合は、先ず Project Management データベース接続の設定を行うよう促されます。

- 5 [**Configure SQL Server Connection**] ダイアログボックスまたは、[**Configure Oracle Connection**] ダイアログボックスで、データベース接続の設定を行います。

Microsoft SQL Server を設定する場合は、データベースのホスト名とデータベース名を入力します。データベース名は、データベースの作成時に指定されています。例えば、PMDb です。ホスト名は Microsoft SQL Server がインストールされているコンピュータの名前または IP アドレスです。

Oracle を設定の場合は、Oracle のデータベース名をタイプします。

- 6 **パブリックログオン情報の入力**ダイアログボックスで、管理者が定義したパブリックログオン情報を入力します。例えばユーザ名は pubuser、グループ ID は 1 などです。
- 7 **Validate Database Connection** ダイアログボックスで、[**Next**] をクリックし、データベース接続の試験を行います。
- 8 **Finish** をクリックし、データベース接続設定を終了します。

接続が不成功の場合は、[**Back**] をクリックして設定を変更します。

Project Management と Methodology Management モジュールの両方をインストールすることを選択した場合は、再びデータベース設定ウィザードが開き、Methodology Management データベースとの接続設定を行うことができます。

- 9 **Finish** をクリックし、インストールを終了します。

ジョブサービスおよび分散ジョブサービスのインストール

ジョブサービスでは、Project Management モジュールの特定機能の自動化が行えます。実績の適用、バッチレポートの実行、プロジェクトのエクスポート、プロジェクトのスケジュール計算、プロジェクトの集計を行うことができます。これらの作業は、指定された間隔でバックグラウンドで実行されます。ジョブサービスは、Windows 2003/2008 のサービスとして実行され、実行できるジョブ数に制限はありません。各ジョブは、それぞれ個別の実行スケジュールで動作します。ジョブは、Project Management モジュールで定義され、組織の Project Management データベースに保存されます。

複数の Project Management データベースで作業する場合でも、本セクションで説明するように、ジョブサービスの複数のインスタンスをインストールすることにより、1 台の Windows 2003/2008 サーバマシンからすべてのデータベースのジョブを実行することができます。

分散ジョブサービスについてのさらなる情報は、231 ページの「[分散ジョブサービスの設定](#)」を参照してください。

Project Architect のジョブサービスを実行するには、ジョブサービスのインストールに加え、P6 Web Access のデータベースを設定する必要があります。190 ページの「[Project Architect ジョブサービスを実行するための P6 Web Access の設定](#)」を参照してください。

別々のサーバで同時に複数のジョブを実行したい場合は、ジョブサービスを管理する制御サーバに分散ジョブサービスをインストールし、ジョブサービスサーバにジョブを分散することができます。

ジョブサービスのインストール

ジョブサービスおよび／または分散ジョブサービスのインストールには、以下のステップを実行してください。



以下の手順は、ジョブサービスのみをインストールすること、および 264 ページの「[クライアントモジュール、その他のコンポーネント、スタンドアロン版のインストールの最初のステップ](#)」に詳説のステップが完了しているものと想定しています。

- 1 Select Features to install** ダイアログボックスで、**Other Components**、**Job Service** を展開し、インストールするジョブサービスのタイプを選択します。

以下の場合には、**Job Service** を選択します。

- 非分散ジョブサービスをインストールしたい場合（1 つのサーバのみ）
- 分散ジョブサービスを使用したいが、インストールしようとしているマシンが制御サーバでない場合。

分散ジョブサービスを利用したい場合で、インストールしようとしているマシンが制御サーバの場合は、**Distributed Job Service configuration** を選択します。



英語以外の言語でジョブサービスジョブを実行したい場合は、ジョブサービスマシンに Project Management モジュールをインストールする必要があります。ジョブサービスと同時にインストールすることも、後日インストールすることもできます。アプリケーションのインストール後の詳細な手順については、273 ページの「[ジョブサービスに別の言語を指定](#)」を参照してください。



設定は、ユーザにコンピュータの管理者権限があるか確認します。ユーザに管理者権限がない場合は、設定ウィザードは終了します。

- 2 **Job Service Alias** ダイアログボックスの **DB 接続名** フィールドに、JSDB のようなデータベース接続名を入力します。DB 接続名には、ダッシュを使わないでください。エラーになります。

複数のサービスを追加する場合は、[Add] ボタンをクリックします。

ジョブサービスの複数のインスタンスを作成すると、1 台の Windows 2003/2008 サーバマシンで、すべての Project Management データベースの複数のジョブサービスを実行できるようになります。各データベースで 1 つのジョブサービスインスタンスを作成します。

ジョブサービスを使用して複数のデータベースでジョブを実行することについてのさらなる情報は、271 ページの「[複数のデータベースでジョブサービスを実行](#)」を参照してください。



複数のジョブサービスインスタンスをインストールする場合は、先ずすべての既存のジョブサービスを停止する必要があります。

ジョブサービスは、データベースサーバへの接続に DB 接続名を使います。

- 3 プログラムフォルダを入力または選択します。
- 4 **Install** をクリックしてインストールを開始します。
- 5 **Select Driver Type** ダイアログボックスの、**Job Services driver type** フィールドでデータベースサーバタイプを選択します。Oracle または Microsoft SQL Server。
- 6 Oracle に接続する場合は、「**Configure ORACLE Connection**」ダイアログボックスで、TNSNAMES.ORA ファイルにある Oracle 接続文字列タイプ（データベース名）を入力します。

Microsoft SQL Server に接続している場合、「**Configure SQL Server Connection**」ダイアログボックスで、データベース名を入力し、サーバコンピュータ名を指定します。

7 Enter Public Login ダイアログボックスで、管理者が定義したパブリックログイン情報を入力します。例えばユーザ名は pubuser、グループ ID は 1 などです。

8 Validate Database Connection ダイアログボックスで、**Next** をクリックし、データベース接続を検証します。
指定の DB 接続名が作成されます。

9 接続は成功しました！ ダイアログボックスで、**終了** をクリックします。

ジョブサービス接続名をテストするよう促されます。



分散ジョブサービス環境で、サーバマシンにインストールしている場合は、以下のステップの [Test] ボタンはクリックしないでください。

10 Yes をクリックし、データベース接続をテストします。

テストが失敗しても、インストールを継続することができます。

11 Finish をクリックします。

ジョブサービスがコンピュータにインストールされ、データベースとの接続が成功すると、サービスは定期的に、Project Management モジュールでスケジュールされたユーザ定義のジョブを実行します。Windows 2008 Server を使用している場合は、以下の必要な設定手順を参照してください。

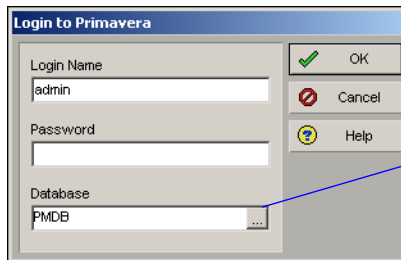
ジョブサービス用に Windows 2008 Server を設定 ジョブサービスをインストールした後、Windows 2008 Server に対して以下の設定が必要です。

- 1 コマンドライン（または、スタートからユーティリティの実行）で、**dcomcnfg** を実行します。[コンポーネントサービス] ダイアログが表示されます。
- 2 「コンポーネントサービス」ダイアログボックスで、左パネルのツリーの「コンポーネントサービス」、「コンピュータ」、「マイコンピュータ」、「DCOM の構成」をクリックして、展開します。
- 3 右パネルの {9E521861-5A76-11D5-98F4-00C0F680F1F} エントリを右クリックして [プロパティ] を選択します。

- 4 「プロパティ」 ダイアログボックスの「ID」 タブで「このユーザ」 オプションを選択します。使用中のマシンで管理者特権をもつユーザのパスワードを入力します。
- 5 「OK」 をクリックしてダイアログボックスを閉じます。
- 6 Windows のコントロールパネルから、**管理ツール**、**サービス** を選択します。
- 7 「**Primavera P6 Job Service**」 をダブルクリックします。
- 8 「**Primavera P6 Job Service プロパティ**」 ダイアログボックスで、「**ログオン**」 タブを選択します。
- 9 アカウントオプションを選択し、管理者ユーザのアカウントおよびパスワードを入力します。
- 10 **適用**、**OK** をクリックします。

複数のデータベースでジョブサービスを実行

すべての Project Management データベースでそれぞれのジョブサービスインスタンスをインストールすると、1 台の Windows 2003/2008 サーバマシンで、すべてのデータベースについて実績の適用、バッチレポートの実行、プロジェクトのエクスポート、プロジェクトのスケジュールまたは集計を行うことができます。Project Management モジュールにログインし、集計したい Project Management データベースの 1 つを選択します。



集計したいデータベースの
1 つの接続名を選択。

Project Management モジュールで、[ツール]、[ジョブサービス] を選択します。そして、そのデータベースで実行したいジョブサービスを追加します。さらに別の Project Management データベースにジョブサービスを設定したい場合は、Project Management モジュールを終了します。再度ログインし、データベース接続名を選択することで、別の Project Management データベースを選択します。ジョブサービスダイアログボックスで、現在開いているデータベースを追加します。

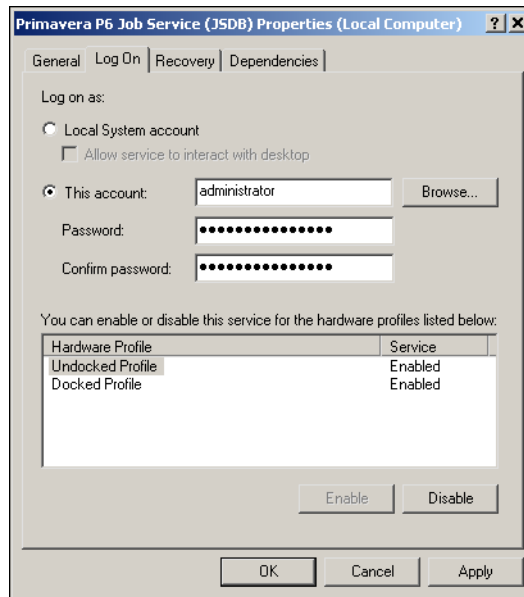
サマライザジョブと P6 Web Access について 集計データを使う P6 Web Access のリソース管理機能は、作製されたリソースレコードに依存しています。各レコードは、リソースごとに割り当てられたジョブの総和です。企業レコードを最新状況に維持するため、プロジェクトを集計する際には、以下の方法に従います。

- P6 Web Access 内からプロジェクトを集計します。サマライザジョブは常に、選択されたプロジェクトの企業リソースレコードを更新します。
- クライアント・サーバモジュールで、Admin Superuser としてログインし、指定プロジェクトのすべてのリソースについて企業リソースレコードサマライザジョブを作成します。
- クライアント・サーバモジュールで、集計にメニューオプションを使用する場合は、作成すべき企業リソースレコードにレジストリキーが存在している必要があります。キーを作成するには、HKEY_LOCAL_MACHINE/SOFTWARE/Primavera 下で EnterpriseSummaries を DWORD として追加し、設定値を (1) に変更します。

サマライザジョブのレジストリ設定についてのさらなる情報は、251 ページの「サマライザジョブのため、レジストリ設定を編集」を参照してください。

直接プリンタにジョブを送出するようにジョブサービスを設定
直接プリンタにジョブを送出するには、一般システムアカウントではなく、管理者アカウントでジョブサービスを実行する必要があります。ジョブサービスが実行されるマシンで、以下のステップを実行し、管理者ユーザ名とパスワードを使ってジョブサービスにログインします。

- 1 Windows のコントロールパネルから、**管理ツール**、**サービス**を選択します。
- 2 「**Primavera P6 Job Service**」をダブルクリックします。
- 3 「**Primavera P6 Job Service プロパティ**」ダイアログで、「**ログオン**」タブを選択します。
- 4 **アカウントオプション**を選択し、管理者ユーザのアカウントおよびパスワードを入力します。



5 適用、OK をクリックします。

ジョブサービスに別の言語を指定 ジョブサービスのジョブからの出力言語を指定することができます。英語以外の言語を指定するには、以下のステップを実行します。

- 1 前セクションの「[直接プリンタにジョブを送出するようにジョブサービスを設定](#)」を実施し、システムアカウントではなく、管理者アカウントを使ってジョブサービスにログインします。
- 2 ジョブサービスをインストールした際に Project Management モジュールをインストールしなかった場合（[ページ 268](#) のステップ 1 に説明）、ジョブサービスマシンに Project Management モジュールをインストールします。

Project Management モジュールのインストール手順の詳細については、266 ページの「[クライアントモジュールのインストール](#)」を参照してください。

- 3 Project Management モジュールのインストールとデータベース設定の後、「スタート」メニューから、「プログラム」、「Oracle - Primavera P6」、「Project Management」を選択して、モジュールを起動します。

- 4 ジョブサービスにログインしたときに使用した管理者アカウントと同じアカウントを使って、Project Management モジュールにログインします。
- 5 「ようこそ」ダイアログボックスで、「グローバルデータのみを開く」を選択します。
- 6 ツール、言語の設定を選択し、希望の言語を選択します。



ジョブサービスでは、ステップ 1 でログインした管理者アカウントを使用してジョブサービスを実行し続ける限り、選択した言語でジョブを実行することができます。ローカルシステムアカウントを使って違う言語でジョブサービスジョブを実行することはできません。

ソフトウェア開発キットのインストール

ソフトウェア開発キット (SDK) によって、P6 データを外部アプリケーションで使うことができるようになります。データのほかに、SDK はアプリケーションのビジネスルールおよび計算値を提供し、アプリケーションのセキュリティを強化します。SDK は、Project Management データベースへの接続に、Open Database Connectivity (ODBC) 標準をサポートしています。OLE DB などの ODBC 準拠インタフェースもサポートします。



Integration API (Application Programming Interface) は、Project Management データベースに直接接続するために使うこともできます。このツールでは、Java でクライアントコードを書き込む必要があります。詳細については、『Integration API アドミニストレータガイド』を参照してください。



P6 Web Services では、XML や SOAP、WSDL などの標準ファイル形式を利用して、P6 の Project Management 機能を他のアプリケーションにスムーズに統合できます。詳細については、『P6 Web Services アドミニストレータガイド』を参照してください。

ソフトウェア開発キットのインストール

以下のステップを実行して、ソフトウェア開発キットをインストールします。



以下の手順は、クライアントモジュールのみをインストールすること、および264 ページの「[クライアントモジュール、その他のコンポーネント、スタンドアロン版のインストールの最初のステップ](#)」に詳説のステップが完了しているものと想定しています。

- 1 **Select Features to install** ダイアログボックスで、**Other Components** を展開し、**Software Development Kit** を選択します。
- 2 **Install** をクリックします。
- 3 以降のプロセスに関する説明を読み、**OK** をクリックします。

SDK で使う DB 接続名の PMSDK を作成します。その次に、Primavera P6 SDK という名の、ODBC ユーザデータソース名 (DSN) を作成します。ODBC DSN では、Project Management データベースへの接続に、DB 接続名を使用します。

4 **ドライバタイプの選択** ダイアログボックスで、データベースサーバのドライバタイプを選択します。Oracle または Microsoft SQL Server/SQL Express を選択することができます。

5 データベースタイプに、要求される接続情報を入力します。

Oracle の設定では、**ORACLE 接続の設定** ダイアログボックスで、Oracle の接続文字列をタイプします。

Microsoft SQL Server または SQL Server Express に接続する場合は、**Configure SQL Server Connection** ダイアログボックスで、データベース名とサーバコンピュータ名をタイプします。

6 **Enter Public Information** ダイアログボックスで、管理者が定義したパブリックログイン情報を入力します。例えばユーザ名は pubuser、グループ ID は 1 などです。

7 **Validate Database Connection** ダイアログボックスで、**Next** をクリックし、データベース接続を検証します。

8 **Connection Successful** ダイアログボックスで、接続が成功の場合は、PMSDK という名の DB 接続名が作成されました。**Finish** をクリックします。

接続が不成功の場合は、**Back** をクリックし、データベース情報を再入力します。

9 **Primavera Software Development Kit Setup** ダイアログボックスで、データベースに対する ODBC 接続値を確認して、**OK** をクリックします。

ODBC DSN 名、**Primavera P6 SDK** が作成されました。

Primavera Software Development Kit Setup

Define the mapping between the ODBC Data Source name (ODBC name) and the associated Database name.

OK Cancel

ODBC Name: Primavera P6 SDK

Description:

Driver: Primavera Software Development Kit

Properties

If the alias specified below is not configured, press the button below to configure the alias.

Create database alias...

Property	Value
Database alias	PMSDK
Engine	Project Management
Filename for log messages	C:\temp\PMSDK.LOG
Options for logging messages	terse
Public group id for database alias	1
Public password for database alias	pubuser
Public username for database alias	pubuser

Remarks:

☐ SQL Describe Param Support

SDK がコンピュータにインストールされると、ODBC DSN を使用して Project Management データベースに接続することができません。SDK ドキュメントは、¥Program Files¥Common Files¥Primavera Common¥PMSDK¥Doc にあります。



SDK にアクセスするには、Admin Superuser アクセス権があるユーザとして追加されるか、「SDK 経由で グローバル/プロジェクトデータの表示」権限が割り当てられる必要があります。



Windows Vista マシンでは、SDK および SDK を使うあらゆるアプリケーションを管理者モードで実行する必要があります。



SDK ドキュメントは、Web ブラウザで表示することができます。ドキュメントの目次を見るには、INDEX.HTM ファイルを開きます。

ProjectLink のインストール

ProjectLink は、Microsoft Project (MSP) ユーザが P6 のエンタープライズ機能に接続している間に MSP 環境で作業を行えるようにするプラグインです。MSP ユーザは、MSP アプリケーション内から Project Management データベースを開いたり、プロジェクトを当該データベースに保存したりすることができます。

ProjectLink では、MSP ユーザは MSP 環境から P6 のリソース管理を起動することができます。ProjectLink によって、ユーザは MSP を日常的なプロジェクト管理に使用できるほか、P6 アプリケーション内で利用できるエンタープライズ機能にアクセスすることもできるようになります。

ProjectLink のインストール

以下のステップに従い、ProjectLink をインストールします。



以下の手順は、ProjectLink のみをインストールすること、および 264 ページの「クライアントモジュール、その他のコンポーネント、スタンドアロン版のインストールの最初のステップ」に詳説のステップが完了しているものと想定しています。

- 1 **Select Features to install** ダイアログボックスで、**Other Components** を展開し、**Project Link** を選択します。
- 2 プログラムフォルダを入力または選択します。
- 3 **Install** をクリックします。
- 4 ダウンロードが完了したら、**Finish** をクリックします。

インストールが正しく行われると、Primavera P6 ProjectLink が Microsoft Project のツールバーに表示されます。また、Microsoft Project で、「ツール」、「Primavera P6 ProjectLink」を選び、ProjectLink のダイアログボックスにアクセスすることもできます。ProjectLink ヘルプは、インストールしたプログラムと同じフォルダに自動的にインストールされます。Windows の「スタート」メニューから ProjectLink ヘルプにアクセスするには、ProjectLink のダイアログボックスにある「ヘルプ」アイコンをクリックします。

ProjectLink へのアクセスの確保

ProjectLink へのアクセスは、マシン固有ではなく、ユーザ固有です。マシンに ProjectLink をインストールしたユーザだけが、そのマシンでの ProjectLink を利用することができます。例えば、通常、コンピュータには複数のユーザが定義されています（例えば、管理者、すべてのユーザ、<ユーザ名>などです）。ProjectLink が「Administrator」ユーザとしてインストールされていた場合は、「Administrator」だけが Microsoft Project で ProjectLink の表示・アクセスが可能となります。ほかのユーザがそのマシンにログインしても ProjectLink は表示されません。

ユーザが自分のコンピュータで ProjectLink にアクセスできるようにするには、前セクションで説明したインストールウィザードを使って、ユーザが物理的に ProjectLink をインストールできるようにしなければなりません。各ユーザが物理的に ProjectLink をインストールすることが不可能な場合（例えば、管理者がすべてのユーザのインストールを行う場合）は、ProjectLink のインストール後に以下のステップを実行することで、管理者以外のユーザが ProjectLink にアクセスできるようにします。

- 1 ProjectLink がインストールされているコンピュータに、ProjectLink のインストールで使ったものと同じログイン情報でログインします（例えば、「Administrator」）。
- 2 [スタート] から [ユーティリティの実行] で、**regedit** をタイプし、[OK] をクリックします。
- 3 レジストリエディタで、次のディレクトリにナビゲートします。
HKEY_CURRENT_USER¥Software¥Microsoft¥Office¥MSProject¥Addins
- 4 PMAAddin.PrimaveraAddin フォルダを選択します。
- 5 [レジストリ]、[レジストリファイルのエクスポート] を選択します。
- 6 レジストリファイルをコンピュータのユーザがアクセスできる場所にエクスポートします（例えば、c:¥<user>¥My Documents）。
- 7 コンピュータにユーザのログイン情報でログインします。
- 8 2 と 3 のステップを繰り返します。
- 9 [レジストリ]、[レジストリファイルのインポート] を選択します。
- 10 ステップ 6 でエクスポートしたレジストリファイルをインポートします。

これで、ユーザが自マシンで ProjectLink にアクセスできるようになります。

スタンドアローン版のインストールまたはアップグレード

開始する前に、コンピュータが Windows XP Professional (sp3) または Windows Vista (sp2) で動いていることを確認してください。P6 を 1 つの製品として使用するにしても、ネットワークインタフェースカードまたはモデムがコンピュータに搭載され、TCP/IP ネットワーキングソフトウェアが実行されていなければなりません。



Oracle は、アップグレード前にデータベースのバックアップコピーをとるようにお勧めします。



データベースの更新前にはチェックアウトされたプロジェクトがないか、プロジェクトにチェックインして確かめてください。



P6 を Windows XP または Vista にインストールする場合は、コンピュータの管理者権限が必要です。さらなる詳細については、ネットワーク管理者に問い合わせるか、Oracle Primavera サポートナレッジベースを参照してください。



64 ビット版のオペレーティングシステムにインストールしていることが検出された場合、Oracle 11g クライアント (32 ビット版) をインストールする必要があるというメッセージが表示され、セットアップは続行されます。このメッセージは、11g がすでにマシン上にインストールされている場合でも表示されます。この手順が終了したら、[64 ビットインストールについての追加情報](#)を参照してください。



P6 バージョン 5.0 からアップグレードしている場合、設定ウィザードは P6 アプリケーションをアップグレードしますが、MSDE P6 データベースはアップグレードしません。代わりに、Oracle Database Express Edition (Oracle Database XE) がインストールされます。その場合、MSDE から Oracle Database XE に P6 データを移行する必要があります。詳細については、Oracle Primavera サポートナレッジベースを参照するか、Oracle グローバルカスタマーサポートに問い合わせてください。

PRMBackGroundAgent P6 によるバージョン 7.0 スタンドアローンアップグレード中のメッセージ P6 のバージョン 7.0 へのスタンドアローンアップグレード中に Primavera Background Agent Service である PRMBackGroundAgent が実行されている場合には、次のメッセージが表示される可能性があります。

「インストールを続行するには、以下のアプリケーションを閉じておく必要があります。」

メッセージの後に、閉じる必要のあるアプリケーションのリストは表示されません。「無視」ボタンをクリックすると、中断なくインストールを続行できます。

スタンドアローンアップグレード中にこのメッセージが表示されないようにするには、PRMBackGroundAgent エージェントを停止します。

- 1 「スタート」>「コントロールパネル」を選択します。
- 2 「管理ツール」を開きます。
- 3 「サービス」を開きます。
- 4 「サービス（ローカル）」リストで、Primavera Background エージェントを選択します。
- 5 このサービスに対して「停止」をクリックします。

スタンドアローンインストール用のユーザとデータベース接続名
スタンドアローン版を初めてインストールする場合、または P6 バージョン 5.0 からアップグレードする場合には、Oracle Database Express Edition (Oracle Database XE) がインストールされます。既定で、Project Management と Methodology Management の両方について、3 人のユーザが作成されます。

- Project Management の既定のユーザは ADMPRM\$PM、PRIVPRM\$PM、および PUBPRM\$PM です。
- Methodology Management の既定のユーザは ADMPRM\$MM、PRIVPRM\$MM、および PUBPRM\$MM です。
- 既定のデータベース接続名は ORAPMDB と ORAMMDB です。

P6 バージョン 5.0 からアップグレードする場合には、MSDE から Oracle Database XE にデータベースを移行する必要があります。詳細については、Oracle Primavera サポートナレッジベースを参照するか、Oracle グローバルカスタマーサポートに問い合わせてください。

P6 バージョン 6.0 以降の既存のインストールをアップグレードする場合には、Microsoft SQL Server Express と、既存の既定のデータベースユーザと接続名を使い続けることができます。

スタンドアローン版のインストール／更新

P6 のスタンドアローン版のインストール／アップグレードを行うには、以下のステップを実行します。



以下の手順は、スタンドアローン版のみをインストールまたはアップグレードすること、および 264 ページの「**クライアントモジュール、その他のコンポーネント、スタンドアローン版のインストールの最初のステップ**」に詳説のステップが完了しているものと想定しています。

- 1 コンピュータに初めてスタンドアローン版をインストールする際には、「**インストールする機能の選択**」ダイアログボックスで、サンプルプロジェクトをインストールしたい場合は、「**サンプルプロジェクト**」の横のチェックボックスにマークします。
- 2 P6 アイコンを配置する「スタート」メニューのプログラムフォルダ名を選択します。

変更しない場合は、これらのアイコンは「プログラム」、「Oracle - Primavera P6」に保存されます。
- 3 インストールシナリオによっては、クライアントモジュールのインストール後、データベースに対するパスワードを入力するか、または作成するように求められます。
 - P6 バージョン 6.0 以降からのスタンドアローン版のアップグレードで、Microsoft SQL Server Express へのログイン用の既定パスワード (“Prima123Vera”) を維持している場合は、パスワードの入力を求められません。
 - P6 バージョン 6.0 以降からのスタンドアローン版のアップグレードで、パスワードが Microsoft SQL Server の既定以外のパスワードである場合には、カスタムパスワードを入力するよう求められます。カスタムパスワードは、入力後、そのまま残されます。
 - このコンピュータに初めてスタンドアローン版をインストールする際、Oracle Database Express Edition (Oracle Database XE) がすでにインストールされている場合には、Oracle Database XE の管理 (システム) ユーザ用パスワードを入力するよう求められます。
 - このコンピュータに初めてスタンドアローン版をインストールする際、Oracle Database Express Edition (Oracle Database XE) がまだインストールされていない場合には、Oracle Database XE の管理 (システム) ユーザ用パスワードの作成は求められません。パスワードを入力した後、「**実行**」をクリックし、Oracle Database XE をインストールします。



Oracle Database XE 用にユーザが作成したパスワードについては、Oracle グローバルカスタマーサポートでは把握しておりませんので、各自、覚えておくようにしてください。Oracle Database XE の管理（システム）ユーザに対して使用されるパスワードは、Project Management と Methodology Management の既定ユーザ用のパスワードにもなります。マルチバイト文字の Oracle データベースのパスワードは、サポートされていません。

- 4 「Install」をクリックして、インストール／アップグレードを完了します。

セットアッププログラムは、インストール中に Project Management と Methodology Management データベースのインストール／アップグレードも行います。新規インストールでは、セットアッププログラムは Oracle Database XE もインストールして設定します。

- 5 **InstallShield Wizard Complete** ダイアログボックスで、コンピュータの再起動を今すぐ行うか後で行うかを選択し、**Finish** をクリックします。インストールが完了したら、ソフトウェアを使用するのにコンピュータの再起動が必要です。これが 64 ビットインストールである場合には、64 ビットインストールについての以下の追加情報を参照してください。
- 6 「スタート」、「プログラム」、「Oracle - Primavera P6」、希望のモジュールの選択でモジュールを起動します。

64 ビットインストールについての追加情報 すでに説明したとおり、64 ビット版 P6 のインストールには、このインストールの前または後のいずれかに、Oracle 11g をインストールする必要があります。

インストールシナリオによっては、次の調整が必要になります。

- P6 の後に Oracle 11g をインストールする場合には、`tnsnames.ora` ファイルを Oracle XE ディレクトリから Oracle 11g ディレクトリにコピーします。
- P6 の前に Oracle 11g をインストールする場合には、Oracle XE が既定の Oracle application アプリケーションになります。Oracle XE の `tnsnames.ora` ファイルの内容を含むように Oracle 11g の `tnsnames.ora` ファイルを編集します。Oracle XE ではなく Oracle 11g クライアントをポイントするように、環境変数に指定されている Oracle パスを変更する必要があります。

P3 と Project Management モジュール間でデータ転送されるように P6 を設定

P3 のインポート／エクスポート機能を使用するには、P6 と同じマシンに、P3 をインストールしておく必要があります。加えて、以下の手順に従い、必要な DLL ファイルを登録しておく必要があります。

- 1 コマンドプロンプトを開きます。
- 2 ディレクトリを ra32.dll ファイルの場所に変更します。
既定では、このパスは C:¥Program Files¥Common Files¥Primavera Common¥Ra です。
- 3 「regsvr32 ra32.dll」 のコマンドを実行します。



P6 がインストールされている同じマシンに P3 をインストールしない場合や、64 ビット版オペレーティングシステムを使用している場合には、P3 ユーザーに P6 共有ファイルから使用できる P3 / XER インポート／エクスポートユーティリティを使用させるという方法もあります。
既定の場所は ¥Program Files¥Common Files¥Primavera Common¥Convert です。さらなる詳細については、Oracle Primavera サポートナレッジベースを参照してください。

自動データベースアップグレード

本章の内容：

[アップグレードプロセスの概要](#)

[Oracle データベースの P6 へのアップグレード](#)

[Microsoft SQL Server データベースの P6 へのアップグレード](#)

5.0 またはそれ以降がインストールされている場合は、本章の手順に従ってデータベースを 7.0 にアップグレードしてください。P6 の新バージョンでプロジェクトデータを引き続き使用するには、データベースをアップグレードする必要があります。ウィザードが自動的にデータベースのアップグレードを行います。

Oracle では、本章で説明されているようにデータベースを自動的にアップグレードするようお勧めしますが、手動でデータベースをアップグレードしたい場合の手順は、P6 のメディアまたはダウンロードファイルに含まれている

¥Documentation¥<language>¥Technical

Documentation¥Manual Upgrades フォルダに記載されています。

スタンドアローンインストールをアップグレードする場合は、280 ページの「[スタンドアローン版のインストールまたはアップグレード](#)」を参照してください。

アップグレードプロセスの概要

既存の P6 データベース（バージョン 5.0 またはそれ以降）を P6 のバージョン 7.0 にアップグレードできます。新バージョンで機能するためには、Project Management および Methodology Management データベースの両方をアップグレードしなければなりません。

スタンドアローンインストールでのアップグレードには、280 ページの「スタンドアローン版のインストールまたはアップグレード」を参照してください。

データベースウィザードを使用して、自動的にデータベースをアップグレードすることができます。ウィザードでは、必要なスクリプトを実行してデータベース構造をアップグレードし、アップグレードプログラムを使って新バージョンに必要なデータを追加します。



現在 Interwoven/iManage または Apache JackRabbit を使用しており P6 Web Access バージョン 6.2 またはそれ以降にアップグレードする場合、プロジェクトワークフロー、プロジェクトプロセス、ニュース、ディスカッション、イベント、ドキュメントデータは利用できなくなります。このデータが必要な場合は、Oracle グローバルカスタマーサポートに連絡してデータの移行や移行ツールに関する情報を入手してください。Oracle では、バージョン 6.2 またはそれ以降にアップグレードする前にデータを移行することをお勧めします。また、移行後、すべての Apache JackRabbit 管理アプリケーション設定をリセットする必要があります。

5.0 またはそれ以降からのアップグレード 以下に、P6 バージョン 7.0 へのアップグレードに必要なステップの概要を示します。

- アップグレードプロセスを開始する前に、Project Management および Methodology Management データベースのバックアップをとり、不測の事態でデータを喪失しないようにします。
- データベースウィザードを実行し、既存の Project Management および Methodology Management データベースをアップグレードします。
 - 現在、P6 で Oracle を使用している場合は、288 ページの「Oracle データベースの P6 へのアップグレード」を参照してください。
 - 現在、P6 で Microsoft SQL Server を使用している場合は、291 ページの「Microsoft SQL Server データベースの P6 へのアップグレード」を参照してください。
- 新データベースをテストして、アップグレードが正しく行われたことを確認します。
- 本ガイドで説明されているように、新しい Progress Reporter および追加のコンポーネントをインストールします。

権限 P6 Project Management モジュールに含まれる次の権限は、新規または変更されたものです。現在、旧バージョンを使用している場合は、必要に応じてこれらをユーザに割り当てます。

新規のグローバル権限**新規のプロジェクト権限**

XER、MPP、MPX、および P3 の ERP システムとの統合を許可
Project Management データのインポート
ポート
XLS のインポート

プライベートデータベースのログインパスワード P6 バージョン 6.2.1 から、プライベートデータベースのログインパスワードは、新しい、より強力な暗号化アルゴリズムを使用しています。バージョン 6.2 またはそれ以前の P6 で作成されたプライベートデータベースのログインパスワードは、バージョン 6.2.1 またはそれ以降で既存のパスワードを変更するかまたはリセットするまで、従来の暗号化アルゴリズムを引き続き使用します。既存のプライベートデータベースのログインパスワードを変更またはリセットする方法については、306 ページの「[管理タスクの実行](#)」を参照してください。



新しい暗号化アルゴリズムによって、ユーザのログインとパスワードは影響を受けません。

Oracle データベースの P6 へのアップグレード

Primavera 5.0 またはそれ以降のデータベースを P6 のバージョン 7.0 で使用する場合は、以下の一連のステップを実行してデータベースをアップグレードする必要があります。このステップは、経験あるデータベース管理者が行うことをお勧めしますが、それは必ずしも必要ではありません。

ウィザードでは、必要なスクリプトを実行してデータベース構造をアップグレードし、アップグレードプログラムを使って新バージョンに必要なデータを追加します。Project Management および Methodology Management データベースをアップグレードしなければなりません。

Oracle の要求事項 Oracle データベースのアップグレードには以下を注意してください。

- Oracle 10.2 より前のバージョンを使用している場合、アップグレードは正しく行われません。
- LOB テーブルスペース（例えば、PMDB_LOB1）のデータファイルは、自動拡張（AUTOEXTEND）に設定しておく必要があります。予測サイズは正確ではありません。データファイルが固定サイズの場合は、データファイル変換が正しく行われない可能性があります。
- 既存のデータベースに、コードページ WE8ISO8859P1 を使用していてユーロ記号を使いたい場合は、データベースを次のステートメントを使用して WE8MSWIN1252 に変換する必要があります。
ALTER DATABASE CHARACTER SET WE8MSWIN1252;
- SSL プロトコルを使用する場合は、設定手順について Oracle データベースのドキュメントおよび Oracle Primavera サポートナレッジベースを参照してから、データベースウィザード（dbsetup）を実行してください。

Oracle の Project Management または Methodology Management データベースのアップグレード

- 1 データベースのオフラインバックアップ（cold backup）および完全エクスポートを実施します。

Oracle データベースのバックアップ方法が不確かな場合は、アップグレード作業を停止してください。データベース管理者、データベースのベンダ、または Oracle グローバルカスタマーサポートの協力を得て、データベースのアップグレードを実行する前にバックアップを行ってください。また、必要な場合に備えて、データベースのバックアップコピーからの復元プロセスについてよく理解しておいてください。

- 2 P6 のメディアまたはダウンロードファイルに含まれている Database フォルダで **dbsetup.bat** (Linux の場合は **dbsetup.sh**) をダブルクリックして、データベースウィザードを起動します。



dbsetup.bat ファイルは、マッピングされたドライブから実行する必要があります。



Linux の場合は、**JAVA_HOME** Environment 変数を **dbsetup.sh** ファイルに追加してから実行します。例えば、以下のようになります。**export JAVA_HOME = /usr/jre 1.6.0_14**

3 Primavera P6 ダイアログボックスで、

- **Upgrade an existing database** を選択します。
- サーバタイプとして、**Oracle** を選択します。
- 組織に該当する**業界タイプ**を選択します。

業界タイプの詳細については、28 ページの「**P6 の業界タイプ**」を参照してください。

4 Connection Information ダイアログボックスの

- **Administrative User Name** フィールドで管理者ユーザ、例えば **admuser** としてデータベースにログオンします。ユーザ名には **DBA** 権限が付与されていて、アプリケーションテーブルのオーナーである必要があります。また、データベースは 10.2 以上の **Oracle** 互換パラメータセットでなければなりません。
- **Administrative Password** フィールドで、入力したユーザ名に関連のあるパスワードを入力します。
- **Database Host Address** フィールドに、サーバのマシン名または **Oracle** がインストールされている **IP** アドレスを入力します。
- **Database Host Port** フィールドに、**Oracle** が使用しているポート番号を入力します。既定値は 1521 です。
- **Database Name (SID)** フィールドに **Oracle SID** を入力します。これは、ユーザまたはその **DBA** が **Oracle** クライアントを設定した際に作成された **TNSNAMES.ORA** ファイルにあります。

5 Upgrade Options ダイアログボックスで、データベースの権限ユーザ名またはパブリックユーザ名を選択します (privuser、pubuser など)。

モジュールアクセスに関する情報については、356 ページの「**Project Management モジュールでユーザを追加**」を参照してください。

Project Management モジュールアクセス権を持っているユーザ全員に **Web Access** プロジェクトへの権限を付与する場合には、「既存の **Project Management** ユーザに **Web Project** アクセス権を付与する」をマークします。



P6 バージョン 7.0 より以前には、Project Management モジュールアクセス権を持つユーザには、P6 Web Access のプロジェクトセクションへの権限も与えられていました。セキュリティ上の理由により、P6 バージョン 7.0 から、Project Management モジュールアクセスには、Project Management モジュールにログインする権利のみが付与されるようになりました。

- 6 「Ready to Begin Upgrading Data」ダイアログボックスで、既存データベースの現在のバージョンが正しくリストされていることを確認します。**Yes, upgrade my database** を選択してから、**Upgrade** をクリックします。

アップグレードプロセスには、サイズによって数分かかることがあります。

- 7 プロセスを完了したら、**Upgrading Database...** ダイアログボックスで、**Next** をクリックします。
-



データベースをアップグレードできなかった場合は、ユーザのホームディレクトリにある PrimaveraDatabaseSetup.log を参照してください (「C:\Documents and Settings\Administrator」など)。さらに詳細なサポートが必要な場合は、Oracle グローバルカスタマーサポートまでご連絡ください。

- 8 Methodology Management モジュールを使う場合は、**Finish** ダイアログボックスで **Next** をクリックして、再度データベースウィザードを実行します。その他の場合は、**Finish** をクリックしてウィザードを終了します。

以上の手順で P6 のバージョン 7.0 でデータベースを使用することができます。

Microsoft SQL Server データベースの P6 へのアップグレード

Primavera 5.0 またはそれ以降のデータベースを P6 のバージョン 7.0 で使用する場合は、次の一連のステップを実行してデータベースをアップグレードする必要があります。これらのステップを実行するのに、経験あるデータベース管理者が行う必要はありません。

ウィザードでは、必要なスクリプトを実行してデータベース構造をアップグレードし、アップグレードプログラムを使って新バージョンに必要なデータを追加します。

Project Management および Methodology Management データベースの両方をアップグレードしなければなりません。

Microsoft SQL Server データベースのアップグレード

- 1 現在のデータベースの完全なバックアップを実行します。

SQL Server データベースのバックアップ方法が不確かな場合は、アップグレードを停止してください。データベース管理者、データベースのベンダ、または Oracle グローバルカスタマーサポートの協力を得て、データベースのアップグレードを実行する前にバックアップを行ってください。また、必要な場合に備えて、データベースのバックアップコピーからの復元プロセスについてよく理解しておいてください。

- 2 P6 のメディアまたはダウンロードファイルに含まれている Database フォルダで **dbsetup.bat** をダブルクリックして、データベースウィザードを起動します。



dbsetup.bat ファイルは、マッピングされたドライブから実行する必要があります。



ウィザードの各ダイアログボックスでは、[次へ] をクリックして次ステップへ進みます。

- 3 Primavera P6 ダイアログボックスで、

- **Upgrade an existing database** を選択します。
- サーバタイプとして、**Microsoft SQL Server** を選択します。
- 組織に該当する **業界タイプ** を選択します。

業界タイプの詳細については、28 ページの「[P6 の業界タイプ](#)」を参照してください。

4 Connection Information ダイアログボックスの

- **Administrative User Name** フィールドに、Microsoft SQL Server システム管理者名を入力し、サーバに登録します。Microsoft SQL Server インストール時に既定値を選んだ場合は、システム管理者名を SA のままにしておきます。
- **Administrative Password** フィールドに、このシステム管理者のパスワードを入力します。Microsoft SQL Server インストール時に既定値を選択した場合は、パスワードフィールドを空白のままにしておきます。
- **Database Host Address** フィールドに、サーバのマシン名または Microsoft SQL Server がインストールされている IP アドレスを入力します。
- **Database Host Port** フィールドに、Microsoft SQL Server が使用しているポート番号を入力します。既定値は 1433 です。
- **Database Name** フィールドに、アップグレードする既存のデータベース名を入力します。

モジュールアクセスに関する情報については、356 ページの「**Project Management モジュールでユーザを追加**」を参照してください。

- 5 Project Management モジュールアクセス権を持っているユーザ全員に Web Access プロジェクトへの権限を付与する場合には、「**Upgrade Options**」ダイアログボックスの「Grant existing Project Management users Web Project access」をマークします。



P6 バージョン 7.0 より以前には、Project Management モジュールアクセス権を持つユーザには、P6 Web Access のプロジェクトセクションへの権限も与えられていました。セキュリティ上の理由により、P6 バージョン 7.0 から、Project Management モジュールアクセスには、Project Management モジュールにログインする権利のみが付与されるようになりました。

- 6 「**Ready to Begin Upgrading Data**」ダイアログボックスで、既存データベースの現在のバージョンが正しくリストされていることを確認します。**Yes, upgrade my database** を選択してから、**Upgrade** をクリックします。

アップグレードプロセスには、サイズによって数分かかることがあります。

- 7 プロセスを完了したら、**Upgrading Database...** ダイアログボックスで、**Next** をクリックします。



データベースをアップグレードできなかった場合は、ユーザのホームディレクトリにある PrimaveraDatabaseSetup.log を参照してください（「C:\Documents and Settings\Administrator」など）。さらに詳細なサポートが必要な場合は、Oracle グローバルカスタマーサポートまでご連絡ください。

- 8 Methodology Management モジュールを使う場合は、**Finish** ダイアログボックスで **Next** をクリックして、再度データベースウィザードを実行します。その他の場合は、**Finish** をクリックしてウィザードを終了します。

Microsoft SQL Server データベースの設定

- 1 以下の指示に従って、アップグレードされたデータベースの分離レベルが「read committed snapshot」に設定されていることを確認してください。

- Microsoft SQL Server Management Studio を開きます。
- アップデートされたデータベース用に新しいクエリ画面を開き、以下のコマンドを実行します。

dbcc useroptions

- オプション設定カラムで**分離レベル**を探し、値が「**read committed snapshot**」に設定されていることを確認します。
- 値が「**read committed snapshot**」に設定されている場合は、**ステップ**に進みます。値が「**read committed**」に設定されている場合は、**ステップ 2**に進みます。

- 2 以下のコマンドを実行して、分離レベルの設定を修正します。

alter database <database name> set read_committed_snapshot on



データベースの変更コマンドを実行している接続のみがデータベースで許可されます。コマンドの実行が完了するまで、データベースで他の接続を開くことはできません。

以上の手順で P6 のバージョン 7.0 でデータベースを使用することができます。

無人セットアップの作成と実行

本章の内容：

無人セットアップファイルの作成

無人セットアップの実行

本セクションでは、P6 アプリケーションの無人セットアップの作成と、クライアントコンピュータで無人セットアップを実行する手順を提供します。無人セットアップによって、管理者は毎回設定プロセスを実行することなく、P6 アプリケーションをクライアントコンピュータにインストールすることができます。また、各ユーザが確実に同じ P6 設定を受けられる利点もあります。



スタンドアローン設定では、無人セットアップは使えません。

無人セットアップファイルの作成

無人設定では、管理者は設定ウィザードの設定プロンプトに答えずに P6 モジュールをクライアントコンピュータにインストールすることができます。インストールについてのすべての設定詳細は、無人セットアップファイルを最初に作成するときに指定します。インストールするクライアントモジュールを選択し、**Project Management** データベースへの接続を設定し、プログラムファイルがコピーされるべきコピー先フォルダを指定します。無人インストールは、すべてのクライアントモジュールが全く同じ設定になることを確実にします。

無人セットアップを作成するには、コマンドラインを入力して、自動的に応答ファイルを作成し、**P6** の設定ウィザードを起動します。応答ファイルは、設定プロセスで管理者が指定する設定を記録します。完了すると応答ファイルは、管理者権限のあるユーザがアクセスできるネットワーク場所にコピーすることができます。

無人セットアップは、管理者により、適切なコマンドラインを投入してクライアントコンピュータ上で実行します。無人セットアップは、応答ファイルで指定した設定に従って、**P6** をサイレントインストールします。

無人セットアップの実行方法についての情報は、300 ページの「**無人セットアップの実行**」を参照してください。



設定ウィザードは、無人セットアップファイルを作成し直したり、別々の構成のファイルを複数作成するのに使用することができます。

無人セットアップファイルの作成

- 1 P6 がインストールされていないコンピュータを選びます。
- 2 P6 のメディアまたはダウンロードファイルに含まれている Client_Applications フォルダの内容をローカルマシンのフォルダにコピーします。

Oracle は、新規フォルダを作成することをお勧めします（例えば、P6_Install）。フォルダ名にはスペースを入れないでください。
- 3 [Start], [Run] を選択してコマンドラインを開きます。「cmd」と入力して [OK] をクリックします。
- 4 P6 のインストールファイルをコピーしたディレクトリにアクセスするコマンドラインを入力します。例えば、以下のようになります。

```
cd c:\P6_install
```



次のステップで、応答ファイルを作成するコマンドを入力します。そして記録モードで、P6 の設定を起動します。応答ファイルが、P6 設定の進行に従い選択を記録します。管理者権限を持つユーザは、この作成した応答ファイルを使って P6 をインストールすることができます。応答ファイル名には制限がありませんが、Oracle は、「setup.iss」と名づけるようにお勧めします。

- 5 以下のコマンドラインを入力し、応答ファイルを作成して、P6 の設定を記録モードで起動します。ここで「pathname」はステップ 4 でアクセスしたディレクトリです（例えば、P6_install）。

```
setup /r /f "c:\pathname\setup.iss"
```



f1 と引用符 " の間にスペースは入れないでください。

P6 のセットアップは自動的に起動されます。Welcome ダイアログボックスで、推奨のコメントを読み Next をクリックします。



ウィザードの各ダイアログボックスでは、[次へ] をクリックして次ステップへ進みます。

- 6 組織に該当する業界タイプを選択します。

業界タイプの詳細については、28 ページの「P6 の業界タイプ」を参照してください。

- 7 **Setup Type** ダイアログボックスで、[**Custom**] を選択します。
- 8 **Choose Destination Location** ダイアログボックスで、既定インストールフォルダを受け入れるかブラウズをクリックし、別のフォルダを指定します。
- 9 **Choose Destination Location (common files)** ダイアログボックスで、Primavera の共通ファイル場所を受け入れるかブラウズをクリックし、別のフォルダを指定します。
- 10 **Select Features to install** ダイアログボックスで、管理者権限のあるユーザがこの無人セットアップをクライアントマシンで実行するときに、インストールすべき各アプリケーションの横にあるチェックボックスをマークします。

ソフトウェア開発キットだけを選択した場合は、Project Management と Methodology Management モジュールのコンポーネントもインストールされます。



無人セットアップの作成では、ジョブサービスや分散ジョブサービスは含めるべきではありません。例外は、無人セットアップをジョブサービスまたは分散ジョブサービスサーバに使用するサーバマシンでのみ無人セットアップを実行するために作成する場合だけです。

- 11 ジョブサービスまたは分散ジョブサービスを前のステップで含めることを選択した場合は、ジョブサービスデータベースのデータベース接続名を入力あるいは選択します。
- 12 「**Select Program Folder**」 ダイアログボックスで、P6 プログラムアイコンの既定場所を受け入れるか、別のフォルダ名を選択またはタイプします。
- 13 **Ready to Install the Program** ダイアログボックスで、インストールをクリックし、インストールーションを開始します。
- 14 インストールが完了すると、データベースとの接続を設定するよう促されます。設定する接続と促される順番は、ステップ 10 でインストールすることを選択したアプリケーションによります。



ジョブサービスまたは分散ジョブサービスを無人セットアップに含めることを選択した場合は、ジョブサービスデータベースを先ず設定することを促されます。「はい」をクリックします。ジョブサービスデータベースの設定後は、データベース接続のテストを行うよう促されます。「Yes」をクリックし、接続をテストするか、「No」を選択して、引き続きデータベース接続設定を継続します。

プロンプトで求められた場合は、[Yes] をクリックして Project Management または Methodology Management データベースの接続を設定します。

- 15 **Select Driver Type** ダイアログボックスで、**Project Management** ドライバタイプフィールドの一覧からデータベースタイプを選択します。
- 16 ユーザが SQL Server を使って接続する場合は、**Configure SQL Server Connection** ダイアログボックスでサーバのホスト名とデータベース名を入力します。ホスト名は Microsoft SQL Server がインストールされているコンピュータの名前または IP アドレスです。データベース名は、データベースの作成時に指定されています。例えば、PMDB です。
ユーザが Oracle を使用して接続する場合は、**Configure ORACLE Connection** ダイアログボックスで Oracle 接続文字列、例えば PMDB を入力します。



データベース情報の入力前に、無人セットアップを実行する管理者権限をもったすべてのユーザが、指定されたデータベースへのアクセス権をもっていることを確認します。

- 17 **パブリックログオン情報の入力**ダイアログボックスで、管理者が定義したパブリックログオン情報を入力します。例えばユーザ名は pubuser、グループ ID は 1 などです。
- 18 **「Validate Database Connection」** ダイアログボックスで、「Next」をクリックし、データベース接続の試験を行います。
接続ができない場合は、元に戻り設定を変えます。
- 19 **Connection Successful** ダイアログボックスで、[Finish] をクリックします。
- 20 **Methodology Management** モジュールを無人インストールに含めることを選択した場合は、14 ～ 19 のステップを繰り返して、Methodology Management データベースを設定します。
- 21 ステップ 2 で作成したフォルダの内容をコピーして、無人セットアップを実行する必要があるすべてのコンピュータにアクセスできるネットワーク場所に、貼り付けます。このフォルダには、P6 Client_Applications の内容と「setup.iss」応答ファイルが含まれます。

クライアントマシンへの無人セットアップに関する手引きについては、次セクションを参照してください。

無人セットアップの実行

無人セットアップは、前のセクション（296 ページの「[無人セットアップファイルの作成](#)」）で管理者が作成した、インストールすべきモジュールやデータベース接続の設定、インストール先フォルダなどの情報を含む設定ファイルを使う、特別なインストールプログラムです。この設定ファイルは通常、「setup.iss」と名づけられますが、設定ファイルを作成した管理者によって別の名前が付けられているかもしれません。

無人セットアップを実行することは、時間と労力の節約につながり、また設定時には全 P6 クライアントモジュールが確実に同一の設定になります。「setup.iss」（または、その同等）ファイルがネットワークサーバに保存されていれば、そのサーバにネットワーク接続されているどのクライアントコンピュータからでも、無人セットアップを実行することができます。



「setup.iss」（またはその同等）ファイルと P6 Client_Applications フォルダの内容は、ネットワークサーバの同じフォルダに保存しておく必要があります。

管理者として P6 をクライアントマシンに無人セットアップする場合はいくつかのインストールオプションがあります。例えば、各マシンで物理的に無人セットアップを実行するか、指定するクライアントマシンで無人セットアップを実行するスクリプトを書くか、管理者権限のあるユーザに指示してそのコンピュータで無人セットアップを実行させることができます。



次の手順は、管理者またはクライアントコンピュータのオーナーが、物理的に無人セットアップをクライアントコンピュータで実行することを想定します。また、例として、必要なファイルを含むフォルダは「P6_install」、設定ファイルは「setup.iss」、ログファイルは「setup.log」と名づけられていることとします。無人セットアップを作成した管理者は、別の名前を指定しているかもしれません。

無人セットアップの実行

- 1 クライアントコンピュータで、[Start]、[Run] を選択してコマンドラインを開きます。「cmd」とタイプして[OK]をクリックします。
- 2 P6 Client_Applications フォルダ、「setup.iss」ファイル、「setup.log」ファイルの内容を含むネットワークサーバのディレクトリへアクセスするコマンドラインを入力します。例えば、以下のようになります。

```
cd e:\P6_install
```

無人セットアップファイルの場所が分からない場合は、システム管理者に問い合わせてください。

- 3 無人セットアップを実行するコマンドラインを入力します。ここで `pathname` は、ステップ 2 でアクセスしたディレクトリ（例えば、`P6_install`）です。例えば、以下のような状況を想定してください。

```
setup.exe /s /f1"%e:\pathname\setup.iss" /f2"c:\pathname\setup.log"
```



f1 と f2 と引用符 " の間にスペースは入れないでください。

P6 のインストールは自動的に起動されます。ダイアログボックスは表示されませんが、P6 のタスクバーアイコンがインストールの進行中を示します。タスクバーのアイコンが閉じるとインストールの完了です。

- 4 ファイルが正しくインストールされたことを、ローカルドライブの適切なフォルダにナビゲートして確認します。

既定では、P6 アプリケーションは

`c:\Program Files\Oracle\Primavera P6` にインストールされます。無人セットアップを設定した管理者は、別の既定インストールフォルダを指定していた可能性があります。

P6 アプリケーションがインストールされていないか、P6 アプリケーションが実行できない場合は、システム管理者に問い合わせてください。すべてのエラーは、「setup.log」ファイル（またはその相当）に記録されます。

データベース構成設定の変更

本章の内容：

[データベース接続設定の変更](#)
[管理タスクの実行](#)

データベース設定ウィザードを使って、P6 クライアントモジュールのデータベース接続設定の変更ができます。本章では、データベース接続設定の変更、ユーザパスワードの変更、プライベートデータベースのログイン名とパスワードの管理方法を説明します。

データベース接続設定の変更

データベースサーバの設定が変更された場合は、データベース設定ウィザードを使って、クライアントモジュールの接続設定の変更を行います。例えば、データベースが新しいサーバに移動された場合、データベース設定ウィザードを実行して、新しいサーバへの接続を設定します。



データベース接続設定を変更するには、データベース設定ウィザードがモジュールの初期化 (INI) ファイルにアクセスできなければなりません。このファイルは、モジュールのフォルダにあります。例えば Project Management モジュールの INI ファイルは、PM.INI です。ウィザードがモジュールの INI ファイルを見つけれない場合、ブラウズして指定するよう指示されます。

データベース設定の変更

- 1 クライアントコンピュータのデスクトップから、「スタート」をクリックして、「プログラム」、「Oracle - Primavera P6」、「Help and Utilities」、「Database Configuration」を選びます。
- 2 **Welcome** ダイアログボックスで、**Next** をクリックします。



ウィザードの各ダイアログボックスでは、[次へ] をクリックして次ステップへ進みます。

- 3 どうしますか? ダイアログボックスで、**データベース接続の設定**を選択します。
- 4 **データベース接続名の選択**ダイアログボックスで、例えば PMDB のように、該当のデータベースを選択します。
- 5 **接続名の選択 / 作成**ダイアログボックスで、データベースの接続名とドライバタイプを選択します。

接続名またはデータベースドライバを変更する場合は、新しい接続名（例えば、PMDB）をタイプするか、新しいドライバタイプを選択します。

- 6 データベースの新しい接続設定をタイプします。

クライアントコンピュータが、Oracle データベースまたは Oracle XE データベースに接続する場合は、「**ORACLE 接続構成**」ダイアログボックスで、TNSNAMES.ORA ファイルに含まれる接続文字列をタイプします。

クライアントコンピュータが、Microsoft SQL Server または SQL Server Express に接続する場合は（P6 バージョン 6.2.1 以前からのアップグレード）、「**SQL Server 接続の設定**」ダイアログボックスで、サーバのホスト名とデータベース名をタイプします。データベース名は、データベースの作成時に指定されています。例えば、PMDB です。ホスト名は Microsoft SQL Server がインストールされているコンピュータの名前または IP アドレスです。

- 7 パブリックログオン情報の入力**ダイアログボックスで、管理者が定義したパブリックログオン情報を入力します。例えばユーザ名は pubuser、グループ ID は 1 などです。

モジュールのユーザは、公開ログインを使ってデータベースに接続します。

- 8 データベース接続の有効化**ダイアログボックスで、**次へ**をクリックし、データベース接続の試験を行います。

接続テストが失敗した場合は、エラーを無視するか、[戻る]をクリックして設定を変更します。

- 9 接続は成功しました！**ダイアログボックスで、**終了**をクリックします。

モジュールに新しい DB 接続名を作成した場合は、モジュールの INI ファイルはその変更を反映して更新されます。1 台のクライアントコンピュータに複数のモジュールがインストールされた場合、1 つのモジュールの DB 接続名の変更は他のモジュールに影響しません。

DB 接続名のデータベース接続設定を変更し、複数のモジュールがデータベースへのアクセスにその接続名を共有している場合は、変更はその接続名を共有しているすべてのモジュールに影響します。

管理タスクの実行

データベース設定ウィザードを使用して、ユーザパスワードを変更したり、プライベートデータベースのログインを管理したりします。

データベース設定ウィザードを使用して、モジュールにユーザがログインするときのパスワード変更を行うことができます。このログインは、データベースログインではなく、**Project Management** モジュールを使って管理される **P6 ログイン**であることに注意してください。

プライベートデータベースログインは、主に管理者によって、データベースに直接アクセスするために使われます。例えば、データベースにアクセスするために使用する特権ユーザのログインは、プライベートデータベースログインです。データベース設定ウィザードを使用して、既存のログインを変更するか、あるいは新規のログインを作成することができます。



Oracle Primavera は、P6 バージョン 6.2.1 からプライベートデータベースのログインパスワードにより強力な暗号化アルゴリズムを提供します。P6 バージョン 6.2.1 またはそれ以降で作成または変更されたすべてのプライベートデータベースのログインパスワードは、新しい暗号化アルゴリズムを使用します。6.2 またはそれ以前のバージョンで作成されたすべてのプライベートデータベースのログインパスワードは、既存のパスワードをリセットまたは変更するまで、以前の暗号化アルゴリズムを引き続き使用します。新しい暗号化アルゴリズムを使用する場合は、既存パスワードのリセットまたは変更手順について、307 ページの「[プライベートデータベースログインの管理](#)」を参照してください。

データベース設定ウィザードの実行 ユーザパスワードの変更であれ、プライベートデータベースログインの管理であれ、大部分の管理タスクに必要なステップは同じです。これらのタスクを実行するには、以下のステップに従います。

- 1 クライアントコンピュータのデスクトップから、「スタート」をクリックして、「プログラム」、「Oracle - Primavera P6」、「Help and Utilities」、「Database Configuration」を選びます。
- 2 **Welcome** ダイアログボックスで、**Next** をクリックします。



ウィザードの各ダイアログボックスで、[Next] をクリックして次ステップへ進みます。

- 3 どうしますか？ダイアログボックスで、**管理業務**を選択します。
- 4 **管理タスクの選択**ダイアログボックスで、目的の管理タスクを選択します。アプリケーションユーザパスワードを変更するか、プライベートデータベースのログインを管理します。
- 5 **データベース接続名の選択**ダイアログボックスで、目的のデータベースを選択します。
- 6 **データベース構成**ダイアログボックスで特権データベースユーザの名前とパスワードを入力します。
このログインには、データベースの管理権限が必要です。
- 7 以下から、実行しようとしている管理タスクに対応する手順に従います。

ユーザパスワードの変更

パスワードポリシーのさらなる情報については、390 ページの「既定設定の定義」を参照してください。

モジュールのログインを選択し、新パスワードを設定します。パスワード最小要件は、Project Management モジュールと Methodology Management モジュール（「管理設定」の「全般」タブ）で有効/無効を設定できるパスワードポリシーのステータスによって決まります。

パスワードポリシーが有効である場合は、このテキストがパスワード最小要件を示します。パスワードポリシーが無効な場合は、このテキストは表示されません。

[OK]、[終了]をクリックし、ウィザードを閉じます。

プライベートデータベースログインの管理

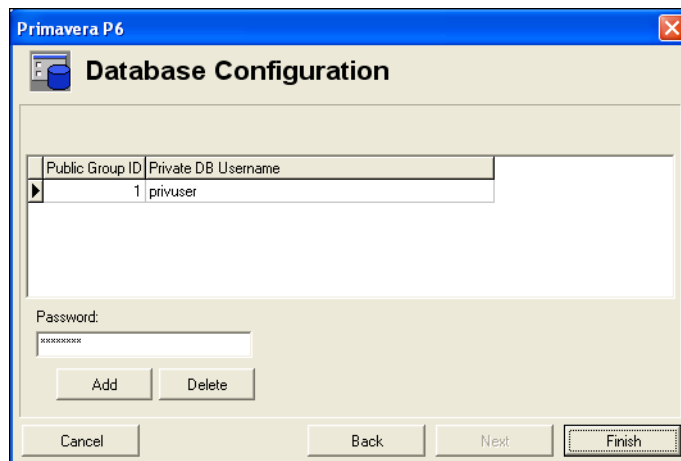
プライベートデータベースログインについての説明を読み、[Next] をクリックします。

ログインの設定を変更するには、該当のセルをクリックし、変更の値をタイプします。新ログインを追加するには、[追加] をクリックします。ログインを削除するには、ログインを選択して、[削除] をクリックします。

すべての新しいまたは変更されたプライベートデータベースのログインパスワードは、P6 バージョン 6.2.1 で導入された新しい暗号化アルゴリズムを使って暗号化されます。P6 バージョン 6.2 またはそれ以前のバージョンから P6 バージョン 7.0 にアップグレードした場合は、すべての既存のプライベートデータベースのログインパスワードは、変更またはリセットを行わない限り、引き続き旧暗号化アルゴリズムのままになります。既存のプライベートデータベースのログインパスワードをリセットすると、新しい暗号化アルゴリズムを使用するようにパスワードが更新されます。

既存のプライベートデータベースのログインパスワードを維持したまま、新しい暗号化アルゴリズムを使用するようにリセットするには、

- 1 既存ログインを選択します。
- 2 「Password」 フィールドで、パスワードを選択し、Delete キーを押します。
- 3 「Password」 フィールドに、削除した同じパスワードをタイプします。



[Finish] をクリックし、ウィザードを閉じます。

認証モードの設定

本章の内容：

[P6 における認証](#)

[プロセスの概要](#)

[認証方法の選択](#)

[Project Management モジュールの
設定](#)

[ログイン手順および認証](#)

本章では、P6 の認証モードについての説明および、認証を実施するために必要なステップを概述し、クライアント・サーバおよび Web モジュールで設定ウィザードを使用して使用する認証モードを指定する方法について説明します。また、Project Management モジュールの設定手順についても詳述します。

P6 における認証

通常、組織では、ユーザがソフトウェアアプリケーションにアクセスする際、認証と承認のメカニズムで管理されます。簡単に言って、認証は、ユーザの資格を検証するもので、承認は特定のリソースまたはデータへのアクセスを管理するために使用されます。

P6 は 3 種類の認証モードをサポートします。ネイティブ (P6 固有の認証方法)、シングルサインオンおよび LDAP です。

■ ネイティブ

ネイティブ認証は、すべての P6 モジュールでの既定モードです。このモードでは、ユーザが P6 モジュールにログインを行おうとすると、P6 データベースを認証機関としてモジュールにより直接認証します。

■ シングルサインオン

Web アプリケーションへのアクセス管理を提供する、シングルサインオン認証は P6 Progress Reporter と P6 Web Access で利用可能です。このモードでは、ユーザが P6 モジュール (保護リソース) にログインしようとする、Web エージェントが要求を遮りユーザにログイン証書を求めます。ユーザの証書は、ポリシーサーバに渡されユーザデータストアに対し認証されます。シングルサインオンでは、ユーザは 1 回のログオンだけで、ブラウザのセッション中すべての Web アプリケーションに対して認証されます (すべての Web アプリケーションが同じポリシーサーバで認証される場合)。

■ LDAP (Lightweight Directory Access Protocol)

LDAP は、ディレクトリベースの認証で、クライアント・サーバおよび Web アプリケーションで利用可能です。このモードでは、ユーザが P6 モジュールにログインしようとする、ユーザの資格は LDAP 準拠のディレクトリサーバデータベースで確認されます。さらに、Oracle Primavera は Oracle Internet Directory および Microsoft Windows Active Directory への LDAP 参照をサポートします。これにより、別のドメインへの拡張を認証できます。



Oracle Internet Directories については、ディレクトリが匿名検索を許可するように設定されている場合にのみ機能します。



Project Management モジュールがシングルサインオンまたはLDAP 認証で設定されている場合は、すべての Project Management モジュールのアプリケーション（Update Baseline、Schedule Comparison、Claim Digger など）または P6 Integration API を使うその他の Oracle Primavera アプリケーション（Oracle Primavera Risk Analysis など）は、API AdminApp Java ユーティリティを使って、シングルサインオンまたはLDAP 認証に設定されていなければなりません。API の詳細については、P6 のメディアまたはダウンロードファイルに含まれている ¥Web_Services¥Integration API フォルダ内の『Oracle Primavera P6 Integration API アドミニストレータガイド』を参照してください。P6 Web Services は、LDAP 認証を使用できるように設定することもできます。P6 Web Services の詳細については、『P6 Web Services アドミニストレータガイド』を参照してください。

認証方法にかかわらず、P6 は Project Management または Methodology Management データベースを使ってユーザ認証を管理します。ユーザ認証に関する詳細については、329 ページの「[ユーザ管理とセキュリティ管理](#)」を参照してください。

プロセスの概要

既定で、P6 モジュールはネイティブ認証を使ってインストールされます。P6 クライアント・サーバモジュールのインストール後に、別の認証方法を選択することができます。

認証方法を指定するには、

認証設定ウィザードを実行するマシンには、*Borland Database Engine* およびデータベースクライアントソフトウェアがインストールされている必要があります。

- 認証設定ウィザードを実行し、Project Management データベース (PMDB) および、該当する場合は Methodology Management データベース (MMDB) に対する認証モードを選択します。必要に応じて、Project Management モジュールを設定します。
- Progress Reporter Administrator の設定 この情報については、113 ページの「[P6 Progress Reporter のインストール](#)」を参照してください。
- P6 Web Access 管理設定の設定 この情報については、139 ページの「[P6 Web Access のインストール](#)」を参照してください。



旧バージョンの P6 ソフトウェアからのアップグレードの場合は、認証設定ウィザードを実行する前に、285 ページの「[自動データベースアップグレード](#)」の手順を参照してください。

認証モードはデータベース主導です。したがって、認証設定ウィザードでは、データベース接続設定を最初に指定する必要があります。その後、データベースをアクセスするモジュールの認証モードを選択します。

ウィザードは、クライアント・サーバモジュールと Web モジュールを別々に選択するように指示しますが、ネイティブ認証を選択する場合は、P6 の製品群の中では統一した認証でなければなりません。つまり、クライアント・サーバでも Web モジュールでもネイティブモードを使用しなければなりません。LDAP 認証は、クライアント・サーバでも Web モジュールでも使用できます。また、LDAP クライアント・サーバ認証は、Web モジュールのみで使用するシングルサインオンと組み合わせることができます。

LDAP 認証では、設定ユーティリティでも LDAP サーバの指定、LDAP 属性の P6 データベースフィールドへのマッピング、ユーザのプロビジョニングを行うことができます。

認証方法の選択

P6 のインストールが完了したら、認証設定ウィザードを使って認証方法を設定します。それには以下の 1 つまたはそれ以上のステップが必要になります。

- 認証モードの選択
- LDAP サーバの設定
- LDAP ユーザ情報の P6 データベースへのプロビジョニング

クライアント・サーバや Web モジュールで選択した認証モードに従い、ウィザードが該当するステップをガイドします。クライアント・サーバであっても Web モジュールであっても、P6 モジュールを最初に LDAP モードを使うように設定するときにユーザのプロビジョニングを行います。LDAP 認証モードを一度設定したあとは、あとで必要に応じて認証設定ウィザードを実行して、ユーザ情報をプロビジョニングし直すことができます。

認証設定ウィザードは、P6 のメディアまたはダウンロードファイルに含まれている ¥Database¥ldap_config フォルダ内にあります。このウィザードはメディアまたはネットワーク内の場所から直接実行できます。

認証モードの選択と LDAP サーバの設定

- 1 P6 のメディアまたはダウンロードファイルに含まれている ¥Database¥ldap_config フォルダで LDAPCfgWiz.exe をダブルクリックします。
- 2 LDAP 情報をプロビジョニングしたいデータベース接続名を選択し、データベースユーザ名とパスワードをタイプします。

The screenshot shows the 'Authentication Configuration' dialog box with the 'Setup Database Alias' tab selected. The dialog has a title bar with a close button. Below the title bar is a section header 'Authentication Configuration' with a database icon. The main area is titled 'Setup Database Alias' and contains the instruction: 'Select the Alias you want to configure for authentication. Please enter the database user name and password.' Below this is a table with two columns: 'Alias' and 'Connection Type'. The table has two rows: 'MMDB' with 'SQLServer' and 'PMDB' with 'SQLServer'. The 'PMDB' row is selected. To the right of the table are two text input fields: 'DB User Name:' and 'DB User Password:'. At the bottom are four buttons: 'Cancel', 'Previous', 'Next', and 'Finish'.

Alias	Connection Type
MMDB	SQLServer
PMDB	SQLServer



上記で入力したパスワードに誤りがある場合でも、プライベートデータベースへのアクセスを許可する有効なドメイン証明書があれば、データベースにログインできます。

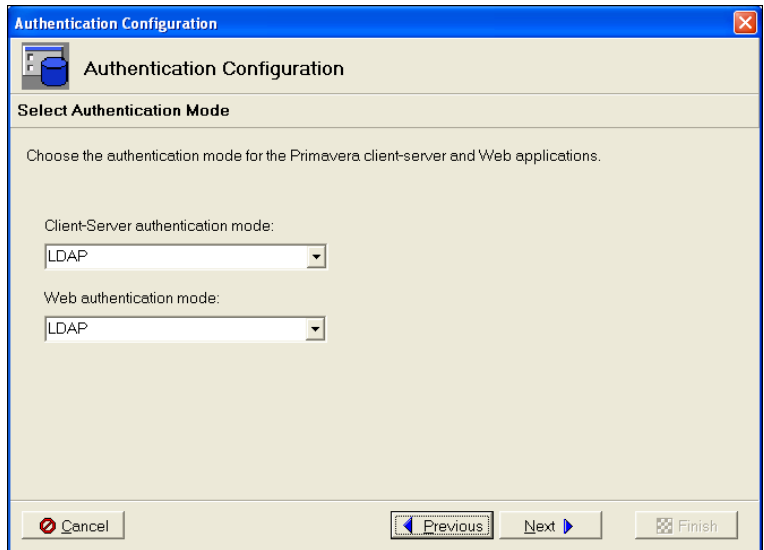
3 認定モードの設定を選択します。

The screenshot shows the 'Authentication Configuration' dialog box with the 'Authentication Mode or Import User Information?' tab selected. The dialog has a title bar with a close button. Below the title bar is a section header 'Authentication Configuration' with a database icon. The main area is titled 'Authentication Mode or Import User Information?' and contains the instruction: 'To configure or update an authentication mode, select Configure an authentication mode. To import user information from your LDAP server to the Primavera database, select Import user information from an LDAP server.' Below this is the question 'What would you like to do?' followed by two radio button options: 'Configure an authentication mode' (which is selected) and 'Import user information from an LDAP server'. At the bottom are four buttons: 'Cancel', 'Previous', 'Next', and 'Finish'.



インポートオプションは、以前にデータベースがLDAP またはシングルサインオンモードで設定されているときだけ有効になります。

- 4 クライアント・サーバおよび Web モジュールで認証モードを選択します。

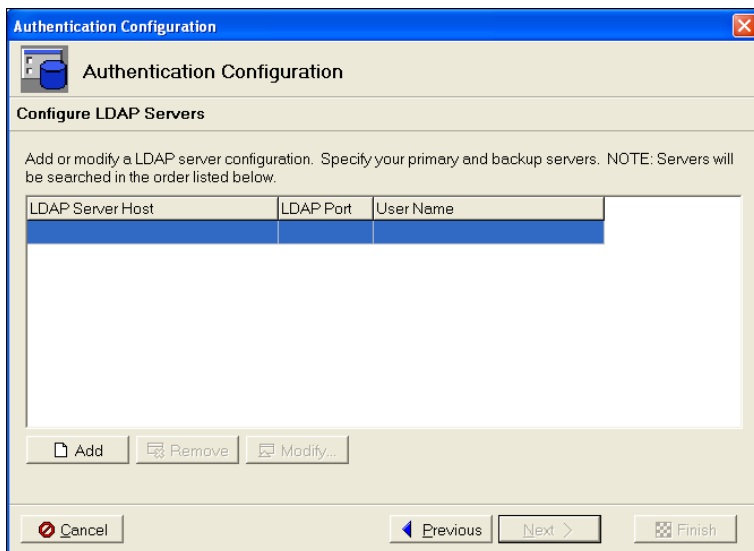


ネイティブを選択した場合は、[Finish] ボタンが有効になり、ウィザードを終了することができます。

その他の認証モードの選択では、引き続きウィザードを使って、以下のステップに述べるさらなる情報を設定します。

- 5 新規に LDAP サーバを [Add] するには、追加をクリックします。

以前に設定した LDAP サーバが表示されている場合は、情報を変更するか、サーバのエントリを削除します。



The image shows a Windows-style dialog box titled "Authentication Configuration". It has a blue title bar with a close button. Below the title bar is a section with a folder icon and the text "Authentication Configuration". Underneath is a section titled "Configure LDAP Servers". A note reads: "Add or modify a LDAP server configuration. Specify your primary and backup servers. NOTE: Servers will be searched in the order listed below." Below the note is a table with three columns: "LDAP Server Host", "LDAP Port", and "User Name". The table is currently empty. Below the table are three buttons: "Add", "Remove", and "Modify...". At the bottom of the dialog are four buttons: "Cancel", "Previous", "Next", and "Finish".

LDAP Server Host	LDAP Port	User Name
------------------	-----------	-----------

- 6 [General] タブで、LDAP ディレクトリサーバのホスト名または IP アドレス、listen ポート、ベースディレクトリノードを指定します。

ベースディレクトリノードでは、ログイン時にモジュールユーザの検索開始位置である、ディレクトリ情報ツリー (DIT) の場所を指定します。ベースディレクトリノードはまた、プロビジョニング機能がディレクトリサーバユーザの検索を開始する場所です。

LDAP サーバとの安全な通信には、SSL プロトコルが推奨されます。LDAP サーバとの通信に SSL プロトコルを使う場合は、[Enable SSL] チェックボックスをマークします。

これにより、別のドメインへの拡張を認証できます。参照を使用するには、[Chase Referrals] チェックボックスをマークします。



P6 Web Access で SSL を選択した場合は、SSL 証書を保存するキーストア場所とパスワードを示す 2 つの設定を行う必要があります。P6 Web Access の設定についての詳細は、139 ページの「[P6 Web Access のインストール](#)」を参照してください。



Oracle Internet Directory および Microsoft Windows Active Directory への参照がサポートされています。Oracle Internet Directories については、ディレクトリが匿名検索を許可するように設定されている場合にのみ機能します。

LDAP Configuration for LDAP://:389

General | Login (Optional)

Please enter the host name or IP Address and port number for the LDAP Directory Server.

Host Name or IP Address: LDAP Port (Default 389):

Please enter the LDAP directory node where the searches should begin.
NOTE: Primavera users should reside directly under this branch or its subordinate branches.

Base Directory Node:

☐ Enable SSL
☐ Chase Referrals

OK Cancel Test

LDAP サーバが匿名検索を許容しない場合は、[Login] タブをクリックします。[General] タブで指定したベースディレクトリノードを検索するアクセス権がある、LDAP サーバユーザのユーザ名とパスワードをタイプします。

LDAP Configuration for LDAP://:389

General | **Login (Optional)**

If your LDAP directory does not support anonymous searches, enter the username and password of the LDAP server user who has search access to the directory branch configured under the General tab.

NOTE: The username must be the fully qualified username.
Example: uid=admin,ou=people,dc=mycompany,dc=com

User Name:

Password:

OK Cancel Test

LDAP サーバの設定が完了したら、[OK] をクリックするか、あるいは LDAP サーバとの接続を検証するため、[Test] をクリックし、接続が成功したあと [OK] をクリックします。

USER_NAME は必須フィールドであり、マッピングが必要です。また削除することはできません。
LDAP ストアと Project Management/Methodology Management データベース間では、4 つのフィールドまでのマッピングができます。

- 7 LDAP サーバを選択します。その後、LDAP 属性の列で、P6 の Project Management/Methodology Management データベースの USER_NAME フィールドに対応する、LDAP ストアのターム/フィールドを指定します。

オプションで、E メールアドレス、実際の名前、職場の電話番号の LDAP ターム/フィールドを指定します。フィールドを追加するには、[Add] をクリックします。フィールドを削除するには、対象フィールドを選択し、[Remove] をクリックします。



LDAP の正しいタームが確かでない場合は、LDAP ディレクトリサーバの管理者に確認してください。

Authentication Configuration

Create Mappings

Highlight the appropriate LDAP server:

LDAP Server

Select a database field from the drop-down list and enter the corresponding LDAP attribute. NOTE: Field mappings for primary and backup servers should be synchronized to avoid data loss.

Database Field Name	LDAP Attribute
EMAIL_ADDR	mail
ACTUAL_NAME	name
OFFICE_PHONE	telephoneNumber

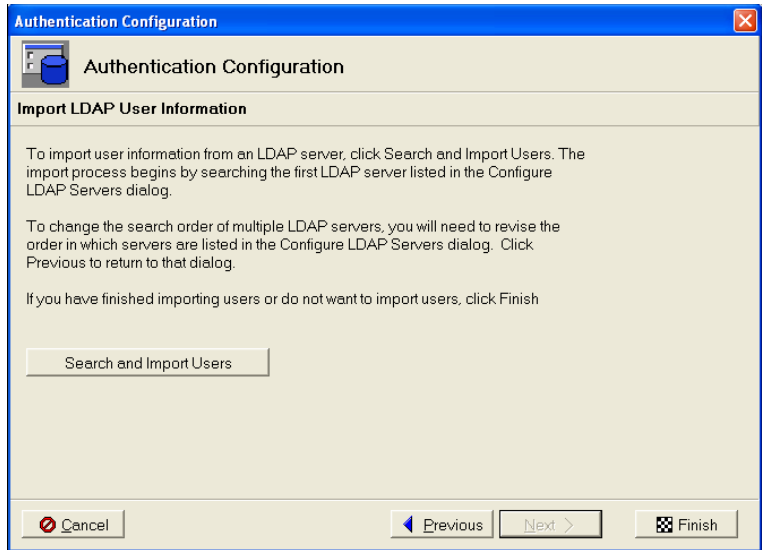
[Add] [Remove]

[Cancel] [Previous] [Next] [Finish]

- 8 LDAP ユーザ情報を P6 データベースにプロビジョニングするには、「Next」をクリックします。LDAP ディレクトリサーバの検索、あるいは LDIF ファイルをインポートしてユーザを設定することができます。

ウィザードを終了するには、[Finish] をクリックします。

- 9 [Search and Import Users] をクリックして、ユーザをインポートします。



ユーザをプロビジョニングすると、変更されたレコードで P6 データベースが更新され、新ユーザが追加されます。しかし、LDAP ディレクトリまたは LDIF ファイルから削除されたユーザは、P6 データベースからは自動削除されません。これらのユーザは、手動で削除する必要があります。

- 10 LDIF ファイルからインポートするには、[Load LDIF] をクリックし、インポートしたいファイルへナビゲートして [OK] をクリックします。

LDAP サーバからインポートするには、既存の検索を行うか、新たな検索を定義します。

以前に定義した検索が 1 つまたは複数存在している場合は、一番最近に実行した検索が [Search Name] ドロップダウンリストの次に表示されます。現在の検索を開始するには、[Run Search] をクリックします。結果は「Available users」セクションに表示されます。新規検索を指定するには、[Define Criteria] をクリックします。

The screenshot shows the 'Import LDAP Users' dialog box. It has a title bar with standard window controls. Below the title bar is a section titled 'LDAP User Search Criteria'. This section contains a 'Search Name' dropdown menu, a 'Current LDAP Server' text field (showing 'LDAP://10.140.158.174:9389'), and two buttons: 'Define Criteria' and 'Run Search'. To the right of this section are four buttons: 'Close', 'Import Users', 'View Errors', and 'Load LDIF'. Below the search criteria section are two list boxes: 'Available:' and 'Selected:'. Each list box has a 'Clear' button next to it. Between the two list boxes are four arrow buttons: '>', '>>', '<<', and '<'. The 'Available:' list box has a table header with columns 'User Name', 'Actual Name', 'E-Mail Address', and 'Office F'. The 'Selected:' list box has a similar header. At the bottom left of the dialog is an 'Idle' status indicator.

[Search Name]
ドロップダウン
リストで選択し
たフィルタに基
づき、検索を開
始します。

現在の検索名が
表示されます。

クリックして、選
択
したユーザ情報
を
P6 データベースに
保存します。

クリックし
て、現在の検
索結果また
は、現在選択
中のユーザを
削除します。

検索を実行したあとは、P6 データベースに
追加する既存のユーザを選択し、右矢印ボ
タンをクリックします。選択中のユーザリス
トからユーザを削除するには、左矢印ボ
タンをクリックします。二重矢印をクリッ
クすると、表示されたすべてのユーザを一
度に追加または削除できます。

クリックすると、選択された
ユーザについて P6 データ
ベースと LDAP ストア間でレ
コードを比較します。ステ
ータスは、背景色で示されま
す。白は一致を示し、青は
データベースレコードが
LDAP ストアと異なっている
ことを、赤はユーザレコード
がデータベースに存在しない
ことを示します。

[Define Criteria] をクリックすると、[Select/Define Searches] ダイアログボックスが表示され、検索の追加、変更、削除ができます。

- 検索を追加するには、追加をクリックします。検索には固有の名前をタイプします。検索基準フィールドでは、ユーザが使いたい LDAP 検索フィルタを指定します。基準を指定したあとは、[Save] をクリックし、[Close] をクリックします。



検索フィルタの文法は、RFC 2254 に記述されているルールに沿わなければなりません。

- 検出名または基準を変更するには、既存情報を編集し、[Save]、[Close] をクリックします。
- 検索を削除するには、それを選択し、[Remove]、[Close] をクリックします。

Search Name	Search Criteria
all	uid=*

ユーザのプロビジョニング後は、インポートされたユーザに P6 ユーザアカウントを設定する必要があります。セキュリティ設定とモジュールアクセスを Project Management または Methodology Management モジュールを通して割り当てます。

- 11 [Import LDAP Users] ダイアログボックスでユーザ情報のインポートが済んだら、[Close] をクリックします。認証設定ウィザードを終了するには、[Finish] をクリックします。

LDAP ユーザ情報の P6 データベースへのプロビジョニング



ユーザをプロビジョニングすると、変更されたレコードで P6 データベースが更新され、新ユーザが追加されます。しかし、LDAP ディレクトリまたは LDIF ファイルから削除されたユーザは、P6 データベースからは自動削除されません。これらのユーザは、手動で削除する必要があります。

- 1 P6 のメディアまたはダウンロードファイルに含まれている ¥Database¥ldap_config フォルダで LDAPCfgWiz.exe ファイルをダブルクリックします。
- 2 LDAP 情報をプロビジョニングしたいデータベース接続名を選択し、データベースユーザ名とパスワードをタイプします。

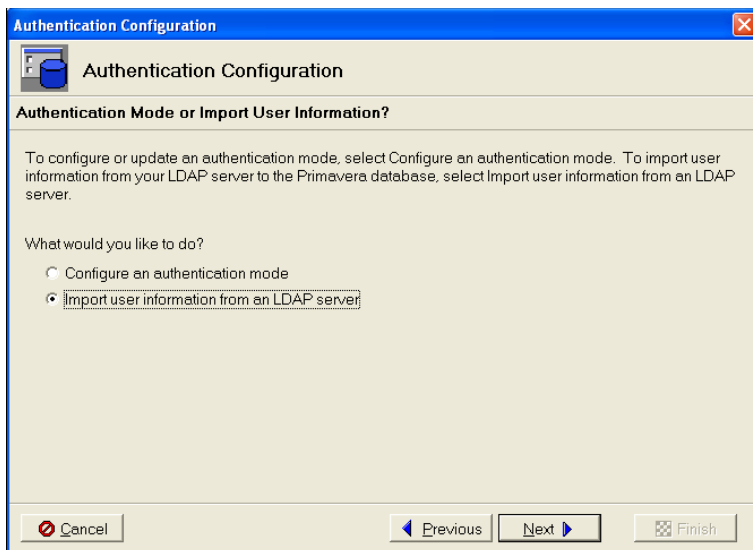
Alias	Connection Type
MMDB	SQLServer
PMDB	SQLServer

DB User Name:

DB User Password:

Buttons: Cancel, Previous, Next, Finish

- 3 ユーザ情報をインポートするよう選択します。



インポートオプションは、以前にデータベースがLDAP またはシングルサインオンモードで設定されているときだけ有効になります。

- 4 ユーザのプロビジョニングを含む認証の設定方法を説明する「[認証方法の選択](#)」のステップ 9 から 11 (318 ページから開始) に従います。

Project Management モジュールの設定

Project Management モジュールには、Update Baseline および Schedule Comparison または Claim Digger の各ツールが含まれています。これらの機能を LDAP モードで使えるようにするには、管理設定を変更する必要があります。以下のステップを実行します。

P6 Web Access の認証設定についての詳細は、192 ページの「[認証設定](#)」を参照してください。

- 1 Project Management をインストールするサーバ上で ¥Program Files¥Common Files¥Primavera Common¥Java に進み、**admin.cmd** を実行して管理アプリケーションを起動します。
- 2 Custom/INTERNAL_PLUGINS/Authentication/Mode 設定の値が **LDAP** になっていることを確認してください。

ログイン手順および認証

P6 モジュールのログイン手順は、選択した認証モードにより異なります。

ネイティブモードでは、

- P6 モジュールでは、「ログイン」ダイアログボックスを表示し、ユーザ名とパスワードの入力を促します。ネイティブモードでは、管理設定で選択したパスワードポリシーに応じてパスワードの使用はオプションです。

LDAP モードでは、

- すべての P6 モジュール（Project Management、Methodology Management、P6 Progress Reporter、P6 Web Access、ソフトウェア開発キット）ではログインパスワードが要求されます。

さらに、パスワードは LDAP ディレクトリで保存され認証されるので、P6 モジュールでのユーザのパスワード変更機能は、無効となっています。

シングルサインオンモードでは、

- Progress Reporter では、[Primavera P6 ログイン] ダイアログボックスは表示されません。その代わり、ログイン証書が要求され、SiteMinder で検証されます。ユーザが認証されると、Progress Reporter の起動ページが表示されます。
- P6 Web Access では、ログイン証書が要求され、SiteMinder で検証されます。ユーザが認証されると、P6 Web Access の起動ページが表示され、ユーザはデータベースと言語を選択することができます。

P6 Progress Reporter と P6 Web Access のユーザパスワード変更機能は無効になり、パスワードは、ディレクトリサーバのユーザストアで保存、認証されます。

P6 アプリケーション管理

内容：

ユーザ管理とセキュリティ管理

Project Management での管理設定と分類
の定義

Methodology Management での管理設定
と分類の定義

P6 Progress Reporter の実装



パートでは、必要な P6 コンポーネントをすべてインストールした後のセキュリティおよび設定方法について説明します。

「[ユーザ管理とセキュリティ管理](#)」を参照し、Project Management モジュールを使ってユーザアカウントを設定する方法を学びます。

「[Project Management での管理設定と分類の定義](#)」では、Project Management モジュールのすべてのプロジェクトに適用される一連のパラメータと値の適用方法について説明します。また、本章では、通貨と報告期間の定義方法についても説明します。

「[Methodology Management での管理設定と分類の定義](#)」では、Methodology Management モジュールのすべてのメソッドロジに適用される一連のパラメータと値の適用方法について説明します。

P6 Progress Reporter をインストールした場合は、「[P6 Progress Reporter の実装](#)」を参照してユーザとタイムシートを設定し、Timesheet Approval へのアクセスを設定します。

ユーザ管理とセキュリティ管理

本章の内容：

P6 のセキュリティについて

プロセスの概要

グローバル設定の定義

プロジェクト設定の定義

Project Management モジュールで
ユーザを追加

OBS ノードとプロジェクト設定の
割り当て

EPS への OBS ノードの割り当て

リソースへのユーザアクセスの定義

P6 Web Access 機能へのユーザア
クセスの定義

Methodology Management モ
ジュールのセキュリティ設定

P6 では、組織全体で同時に多くのユーザが作業することを可能にします。データの未承認の変更を防ぐため、アクセスを統制するグローバルおよびプロジェクトセキュリティ設定を作成することができます。その後、ユーザ設定を行い、組織ブレイクダウンストラクチャ (OBS) ノードにユーザ、プロジェクト設定およびエンタープライズプロジェクトストラクチャ (EPS) ノードを割り当てます。さらにリソースセキュリティを設定し、P6 Web Access 機能へのアクセスを定義することができます。

本章を読んで、P6 におけるユーザの設定とセキュリティの実施方法について学習してください。

P6 のセキュリティについて

P6 製品群のコンポーネントの利用者はすべて、適切なモジュールアクセス権を保有する「ユーザ」として登録されている必要があります。さらにセキュリティ権限によって、各ユーザのデータへのアクセス権が決まります。Project Management、Progress Reporter モジュール、P6 Web Access のセキュリティ管理には、Project Management モジュールを使います。Methodology Management モジュールは、それ自身のセキュリティを管理します。

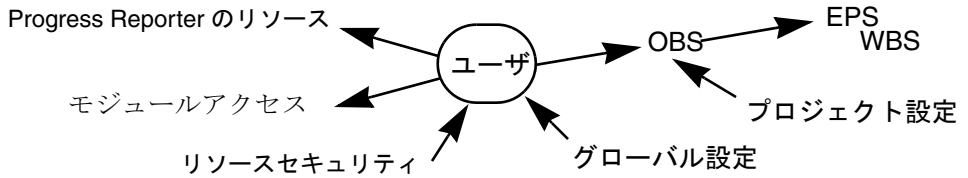
Methodology Management モジュールは、メソッドロジデータへのアクセス権を統制するためそれ自身のユーザとセキュリティ設定を使用します。382 ページの「**Methodology Management** モジュールのセキュリティ設定」を参照してください。

データの各レベルでのセキュリティを確保するため、Project Management モジュールは 2 セットのセキュリティ設定を提供します。

- **グローバル設定**は、ユーザのアプリケーション全体にわたるアクセス権情報と設定を定義します。例えば、エンタープライズプロジェクトストラクチャ (EPS)、リソース、ロール、コストアカウントなどです。各ユーザには、グローバル設定が定義されていなければなりません。
- **プロジェクト設定**は、プロジェクト固有の情報へのアクセス権を定義します。Project Management モジュールでは、各ユーザにプロジェクト設定がされていなくても構いません。しかし、プロジェクト設定やグローバル設定がされているか、管理スーパーユーザでない限り、ユーザはプロジェクトにアクセスできません。

グローバル情報へのアクセスを制限する一連の設定を作成し、各ユーザに適したグローバル設定を割り当てることができます。同様に、各プロジェクトへの権限を制限するため、組織ブレイクダウNSTラクチャ (OBS) ノード経由で各ユーザに適したプロジェクト設定を割り当てます。会社で EPS を作成する場合、EPS の各ノードとプロジェクトに OBS ノード、つまり責任者を特定する必要があります。この OBS ノードの割り当てによって、EPS レベル（およびそれ以下のレベル）へのユーザのアクセス権が決定されます。さらに、責任者である OBS ノードをプロジェクト内の各ワークブレイクダウNSTラクチャ (WBS) に割り当てることによって、特定のプロジェクトデータへのアクセスを制限することができます。また、リソースセキュリティを実施することで、リソースデータへのユーザアクセスを制限することもできます。

以下の図は、ユーザ、OBS、EPS および WBS の関係を示します。ユーザが時間を更新するために Progress Reporter モジュールにアクセスする場合、ユーザは Project Management モジュールでリソースに関連付けられている必要があります。



P6 用語集

ユーザとセキュリティの管理をよりよく理解するため、以下の P6 用語集を利用してください。

ユーザ Project Management、Methodology Management、Progress Reporter の各モジュール、および P6 Web Access を含む P6 コンポーネントにアクセスする必要があるすべての人。

リソース アクティビティを実行するための人、材料、および／または機器。Project Management モジュールで、組織の全プロジェクトにわたり、必要なリソースを含むリソース階層を構築することができます。リソースは、Project Management モジュールのアクティビティに割り当てられ、実際の作業時間を報告するため、Progress Reporter モジュールを使用するように設定されます。

OBS 組織でプロジェクトを担当するマネージャを示すグローバルな階層構造です。OBS は通常、ビジネスを構成しているトップレベルからさまざまなレベルの人員にいたるまで、組織の管理構造を反映します。OBS はロールベースにも名前ベースにもすることができます。

EPS 組織内のプロジェクトブレイクダウンを示す階層。最高レベル（ルート）のノードは、社内部門やプロジェクトのフェーズ、場所、その他、組織のニーズを満たす主要なグループを示すことができます。一方、プロジェクトは常に階層構造の最低レベルに属します。組織内のプロジェクトはすべて、EPS ノードに含まれている必要があります。

WBS プロジェクト実行中にプロジェクトによって作成される製品およびサービスの階層構造。Project Management モジュールでは、プロジェクトは WBS において最高レベルに置かれます。一方、製品またはサービスを作り出すのに必要な個別のアクティビティは最低レベルとなります。EPS の各プロジェクトは、それぞれ WBS をもっています。

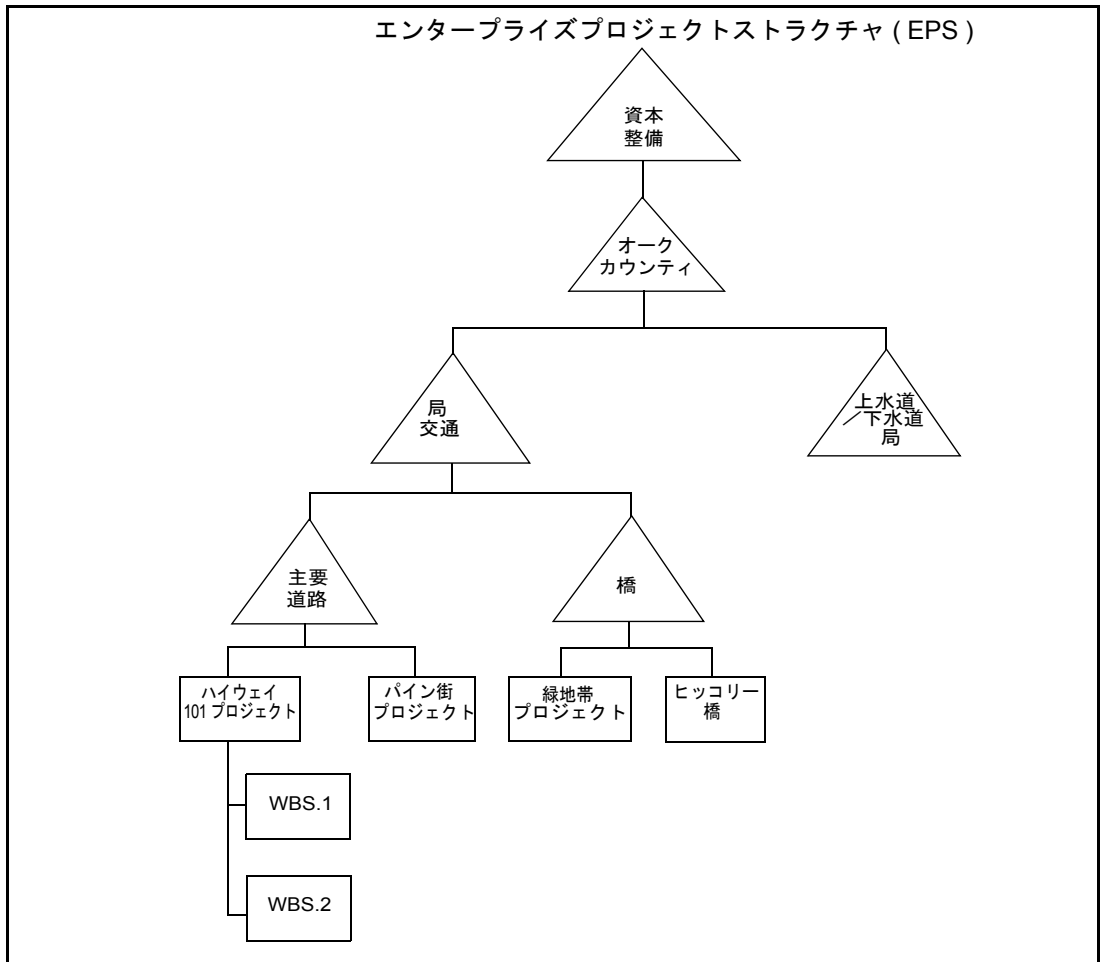
OBS は、リソースプールとは異なります。リソースはアクティビティに割り当てられますが、OBS ノードは EPS ノードおよびプロジェクトに関連付けられます。EPS ノードに対応する OBS ノードは、階層でそのブランチに含まれるすべての作業に責任をもつマネージャです。このため、OBS は、異なった分野を担当する複数のプロジェクトマネージャを含む、より大きなプロジェクトを支援します。

Project Management モジュールにアクセスする必要があるユーザでも、管理構造の中で責任がないユーザは OBS に含まれる必要はありません。同様に、ユーザはリソース階層の 1 部になるこ

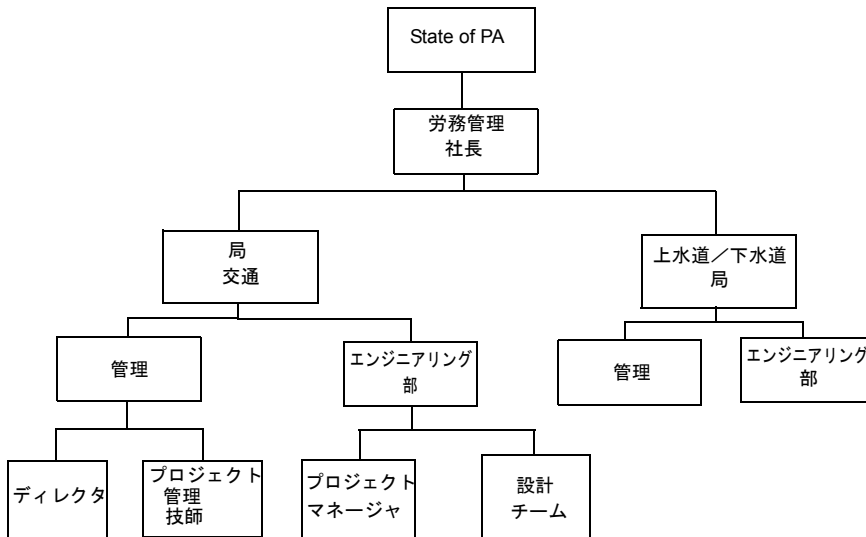
ともならないこともあります。例えば、ユーザがアクティビティに割り当てられており、Progress Reporter モジュールで Timesheets の更新をする必要がある場合、そのユーザはリソース階層に含まれる必要があります。しかし、Web Project Management アプリケーションにアクセスする必要がある幹部はリソースプールの 1 部ではありません。

リソース、OBS、EPS および WBS のさらなる情報については、Project Management リファレンスマニュアルを参照してください。

下図に、オークカウンティの資本整備プロジェクトにおける EPS サンプルと対応する OBS を示します。



組織ブレイクダウストラクチャ (OBS)

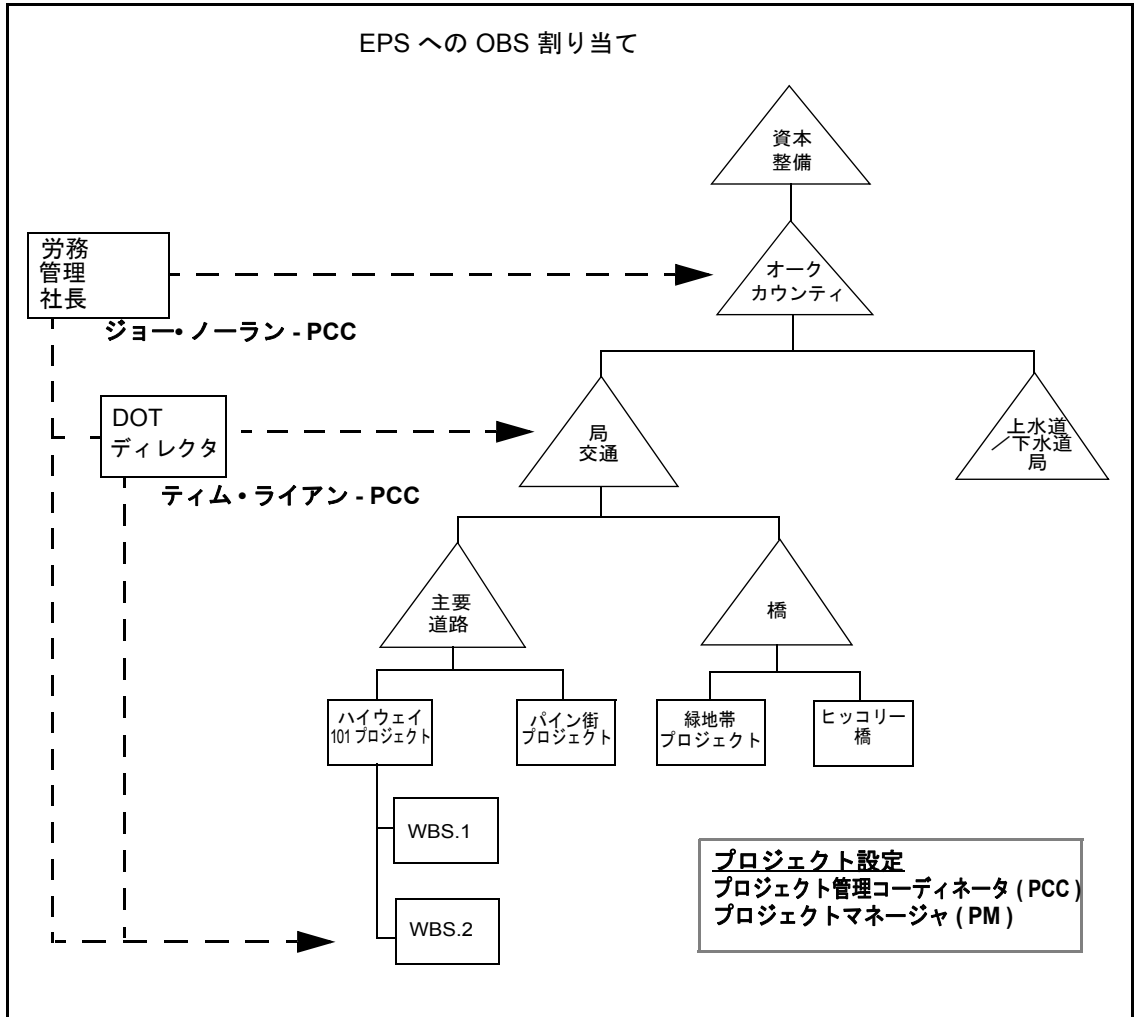


この構造を定義したら、OBS にそれぞれのロールでユーザを対応させることができます。さらにそれを EPS の各レベルに割り当てることができます。OBS に割り当てる EPS レベルにより、対応するユーザがアクセスできるノード／プロジェクトが決まります。例えば、OBS ノードを EPS のルートノードに割り当てると、その OBS ノードに関連付けられたユーザは EPS 全体のプロジェクトにアクセスすることができます。OBS ノードを EPS の 1 つのブランチに割り当てると、それに関連付けられたユーザは、そのブランチ内のプロジェクトのみにアクセスすることができます。

各 OBS ノードに関連付けられたプロジェクト設定で、ユーザがアクセスできるプロジェクトのデータ項目を特定します。各 EPS レベルに割り当てることができるのは 1 つの OBS ノードです。

例えば、2 つのプロジェクト設定が定義されたとします。1 つは管理権も始め、すべてのデータの編集を許容するものです (プロジェクト管理コーディネータ設定)。もう 1 つは、すべてではないがほとんどのプロジェクトデータの表示と編集を可能とするものです (Project Management モジュール設定)。労務管理の社長である、ジョー・ノーランがプロジェクト管理コーディネータ設定に割り当てられます。OBS ノードの労務管理社長は、EPS のオークカウンティノードに責任マネージャとして割り当てられます。これは、ジョー・ノーランがオークカウンティのすべてのノードとプロジェクトへのアクセス権をもっていることを示します。

ティム・ライアンが交通局 (DOT) のディレクタであれば、彼に DOT 下のすべてのプロジェクトのプロジェクト管理コーディネータ権が割り当てられます。



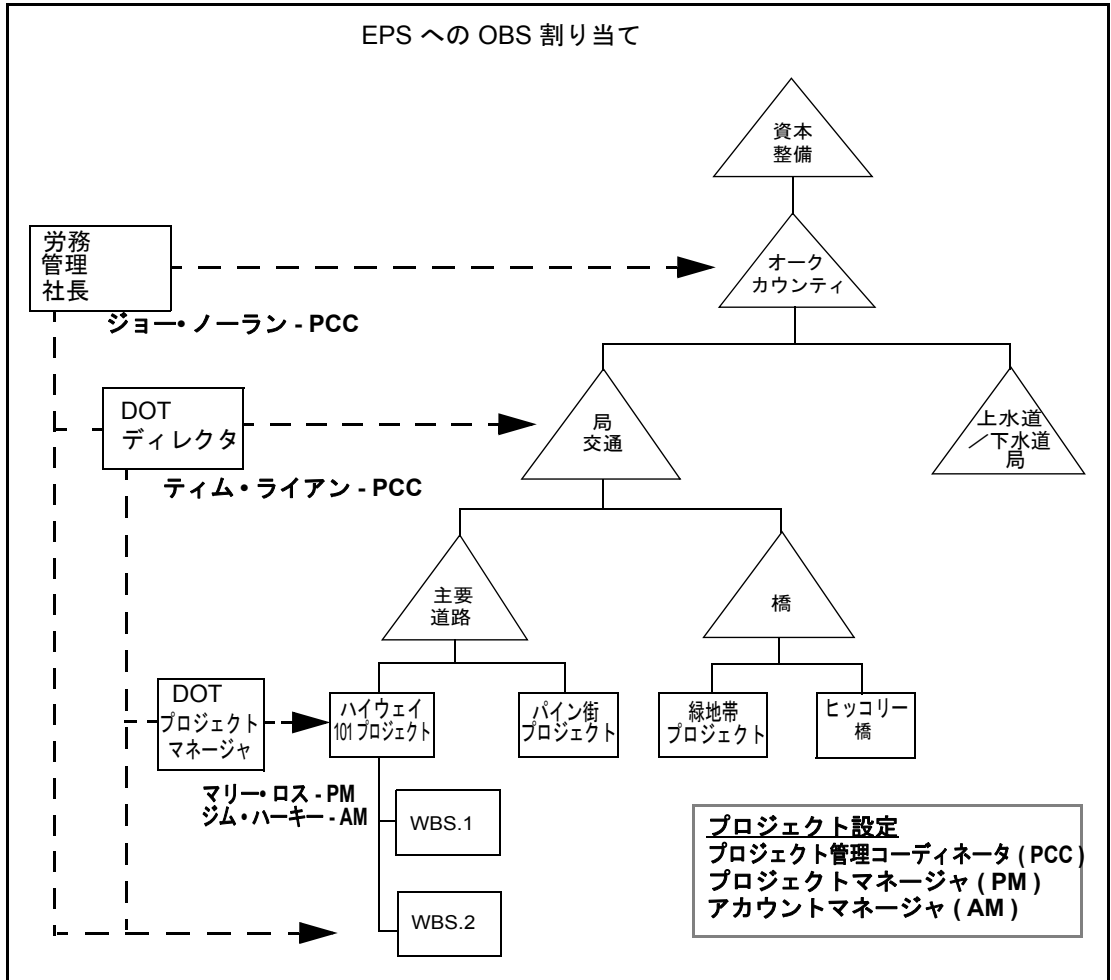
また、OBS ノードをプロジェクトおよび／または WBS レベルに割り当てることでさらにアクセスを管理することができます。前の例で、マリー・ロスがエンジニアリング部門のプロジェクトマネージャでハイウェイ 101 プロジェクトの責任者であれば、彼女をその OBS ノードにプロジェクトマネージャの設定で割り当てることができます。その場合は、彼女はそのプロジェクトだけの編集アクセス権をもつことになります。

ほかの例として、設計チームがハイウェイ 101 プロジェクトの設計部分だけのアクセスが必要だとします。その場合、設計チームにハイウェイ 101 プロジェクトのプロジェクト設計に関連した **WBS** ブランチだけを割り当てることができます。

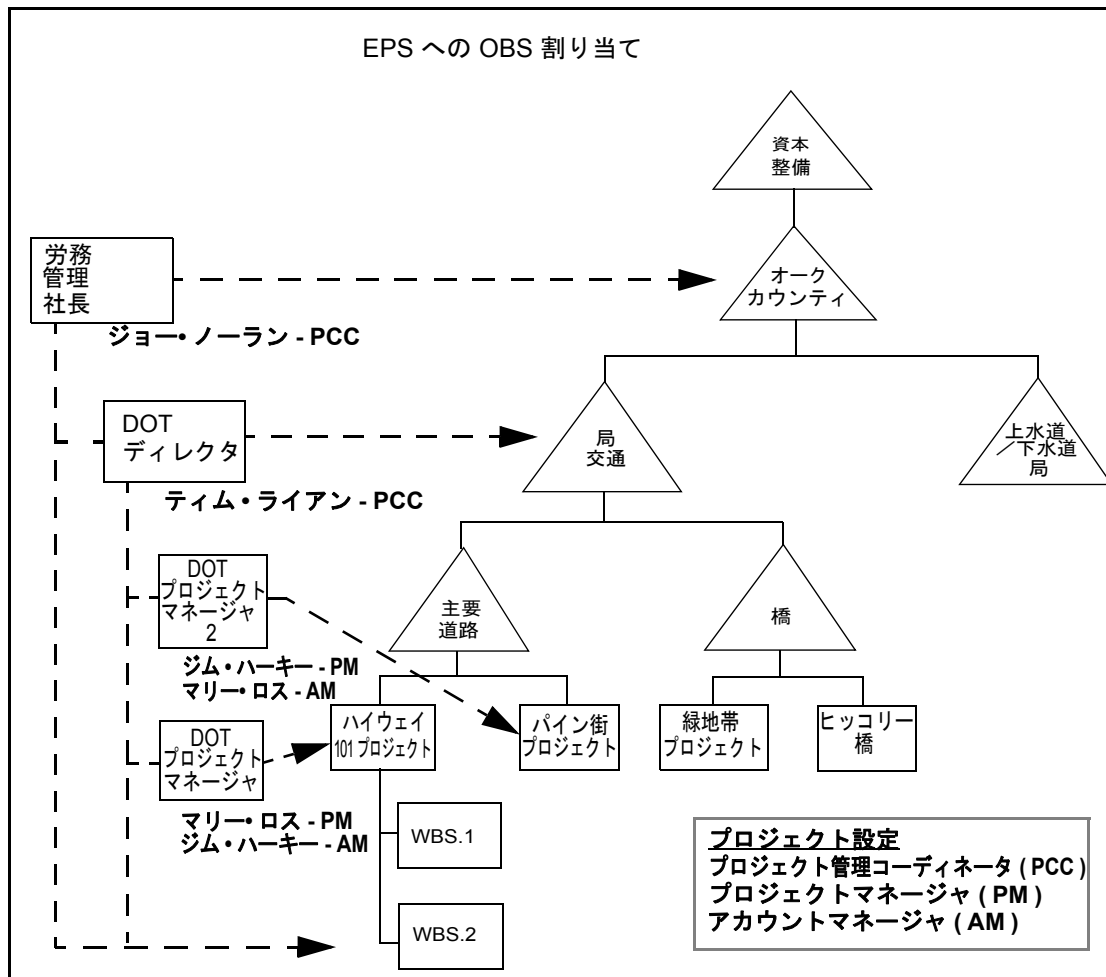
複数のユーザを同じ **OBS** ノードに割り当てることもできます。また、各ユーザを複数の **OBS** ノードに割り当てることもできます。この柔軟性により、複数の責任マネージャ (**OBS** ノード) に同じ **EPS** ブランチまたはプロジェクトへのアクセス権を与えることができます。そして同じユーザが複数の **EPS** ノードとプロジェクトにわたってアクセスすることを管理できます。

例えば、ハイウェイ 101 プロジェクトに責任のあるエンジニアリング部門のプロジェクトマネージャ、マリー・ロスが、パイン街プロジェクトにもアクセスする必要があるとします。但し、彼女がアクセスや編集できるのは財務データのみに制限したいとします。また、エンジニアリング部門のもう 1 人のプロジェクトマネージャ、ジム・ハーキーがパイン街プロジェクトにも責任があるとします。彼は、パイン街プロジェクトに対してプロジェクトマネージャアクセス権が必要です。しかし、彼はマリーのハイウェイ 101 プロジェクトの財務情報もレビューする必要があります。

先ず、プロジェクトコストと財務データの表示・編集権を指定する別のプロジェクト設定（アカウントマネージャ設定）を作成します。その次に以下の割り当てを行います。



ジム・ハーキーにパイン街プロジェクトのプロジェクトマネージャ権を付与し、マリー・ロスにパイン街プロジェクトのアカウントマネージャ権を付与するには、OBS に別のノードを追加する必要があります。



これらの割り当てにより、ジム・ハーキーとマリー・ロスは主担当プロジェクトのプロジェクトマネージャ権をもち、副担当プロジェクトのアカウントマネージャ権を持ちます。

次セクションでは、P6 でユーザを設定し、セキュリティを管理する方法を説明します。

プロセスの概要

組織全体のプロジェクト管理には、いくつもの複数の場所で同時進行中のプロジェクトとチームを管理する構造的アプローチが必要になります。よい結果を生むには、事前の計画と組織要員の協力が必須です。P6 を使ってプロジェクトを正しく管理するには、まずユーザを組織し、Project Management モジュールで構造を確立する必要があります。それには、組織ブレイクダウンストラクチャ (OBS)、エンタープライズプロジェクトストラクチャ (EPS)、リソース階層が含まれます。ユーザと構造を設定した後、プロジェクトデータへのアクセスの許容と制限を行うセキュリティの設定を実施できます。

Methodology Management モジュールは、独自のセキュリティモデルを使って **Methodology Management** データベースへのアクセスを管理します。382 ページの「**Methodology Management** モジュールのセキュリティ設定」を参照してください。

以下のステップに、P6 におけるユーザとセキュリティの管理に関する、ガイドラインと全般プロセスを示します。ストラクチャは、会社全体に適用されるグローバルなもののなので、いくつかのステップは多くの参加者からの情報が必要になります。会社の実施計画に従って、順番を変えることができます。また、これらプロセスのいくつか、例えばリソースセキュリティの定義やユーザインターフェイス画面は、組織のニーズによってオプションとして選ぶことができます。

1 Project Management モジュールにおける、グローバルセキュリティとプロジェクトセキュリティ設定の策定

グローバルデータとプロジェクト固有データへのアクセス権を決定する標準設定を定義します。このステップは管理者によって、実行されることが最適です。341 ページの「[グローバル設定の定義](#)」と 349 ページの「[プロジェクト設定の定義](#)」を参照してください。

2 Project Management モジュールでユーザを追加

P6 コンポーネントにアクセスする必要があるすべてのユーザを追加しなければなりません。少なくとも、各ユーザにはログイン名、モジュールアクセスおよびグローバル設定を割り当てる必要があります。さらなる詳細については、356 ページの「[Project Management モジュールでユーザを追加](#)」を参照してください。

『Project Management リファレンスマニュアル (PMRefMan.pdf)』はオンラインで利用でき、P6 のメディアまたはダウンロードファイルに含まれている ¥Documentation¥ <language>¥Product Manuals フォルダからアクセスできます。Adobe Acrobat Reader を使って情報を表示します (ドキュメンテーションフォルダも利用できます)。

管理者も Project Management モジュールデータの設定を行うことができます。389 ページの「Project Management での管理設定と分類の定義」を参照してください。

- 3 会社に合わせて OBS を設定し、OBS の各ノードに該当するユーザとプロジェクト設定を割り当てます。

会社の管理構造を明らかにし、プロジェクトの責任者となる人たちの役割と名前、遂行すべき職務を含めます。さらなる情報については、*Project Management* リファレンスマニュアルの「組織ブレイクダウNSTラクチャの設定」を参照してください。また、370 ページの「[OBS ノードとプロジェクト設定の割り当て](#)」も参照してください。

- 4 会社の EPS を設定し、各ノードに責任マネージャ (OBS) を割り当てます。

組織で共通の、ユーザ会社固有のプロジェクト構造を明らかにします。さらなる情報については、*Project Management* リファレンスマニュアルの「エンタープライズプロジェクトストラクチャの設定」を参照してください。

- 5 組織全体でプロジェクトを遂行するのに必要なリソースを定義し、Progress Reporter モジュールを使う場合は、リソースをユーザにリンクします。

さらなる情報については、*Project Management* リファレンスマニュアルの「リソースとロールの定義」を参照してください。また、本章に後述されている 356 ページの「[Project Management モジュールでユーザを追加](#)」も参照してください。

- 6 リソースデータへのユーザアクセスを定義します。

376 ページの「[リソースへのユーザアクセスの定義](#)」を参照してください。

- 7 会社内の機能ロールからの要求により、P6 Web Access 機能へのアクセスを提供するユーザインターフェイス画面を定義します。

380 ページの「[P6 Web Access 機能へのユーザアクセスの定義](#)」を参照してください。

- 8 EPS へプロジェクトを追加し、各プロジェクトに WBS を定義します。

このステップは、プロジェクトマネージャが行います。プロジェクトマネージャは、それぞれのプロジェクトにおいて、特定の OBS ノードを WBS レベルに割り当てることによってさらにセキュリティを管理することができます。詳細については『*Project Management* リファレンスマニュアル』を参照してください。

本章のここ以降で、このプロセスについてのさらなる情報を説明します。

グローバル設定の定義

グローバル設定では、リソース、グローバルコード、OBS などのアプリケーション全体を通しての情報や設定に対するユーザアクセスを定義します。Project Management モジュールでは、各ユーザにグローバル設定を割り当てる必要があります。

Project Management モジュールでは、定義するグローバル設定数に制限はありません。Project Management モジュールでは、2つの予め定義されたグローバル設定が提供されています。管理スーパーユーザとグローバル権限無しのユーザです。管理スーパーユーザの設定では、すべてのグローバル情報とすべてのプロジェクトへの完全なアクセスが許容されます。この設定は、P6 モジュールのインストール時に、Admin ユーザに割り当てられます。セキュリティの理由により、管理スーパーユーザの付与はすべてのデータにアクセスする必要のある個人のみに制限することが重要です。



少なくとも、1人は管理スーパーユーザ設定を割り当てる必要があります。この設定に割り当てられた人が1人だけの場合は、Project Management モジュールでそのユーザの削除をすることはできません。

グローバル権限無しの設定では、グローバルデータのアクセスが制限されます。この設定は、Progress Reporter モジュールのみのユーザで、Project Management モジュールにアクセスする必要のない人に割り当てます。Project Management モジュールへの権限があるユーザにこの設定が割り当てられた場合は、そのユーザは Project Management モジュールにログインすることはできますが、プロジェクトデータにアクセスすることはできず、グローバルデータに対しては読み取り専用となります。ユーザにこの設定と OBS ノードの両方が割り当てられた場合は、ユーザは、OBS ノードで定義されたプロジェクトデータにアクセスできますが、その他のグローバルデータへのアクセスは制限されます。

各グローバル設定を設定する場合、管理スーパーユーザはユーザにセキュアコードの追加、削除、編集、割り当て、表示の機能を指定することができます。セキュアコードによって、権限がないユーザに対し、プロジェクト、アクティビティ、リソースコードを非表示にすることができます。また、セキュリティ設定の編集権をもつユーザは、その他のユーザに対し、権限の編集、割り当て、表示を制限することができます。例えば、管理職はセキュアコードによってプロジェクト承認プロセスを追跡することができますが、その他の人は編集したり場合によっては見ることもできません。

セキュアコードは階層的に構築することができます。言い換えると、ユーザに追加・削除の権限が与えられると、そのユーザには自動的に編集、割り当て、表示権限が与えられます。ユーザに編集権が与えられると、そのユーザには、自動的に表示権が付与されます。ユーザに割り当て権が与えられると、そのユーザには、自動的に表示権が付与されます。



Project Management モジュールは、ユーザが編集したり割り当てて一連のコードを制限しません。セキュリティ権を付与すると、同じセキュリティ権限はすべてのコードに適用されます（セキュアとしても非セキュアとしても）。ユーザに権限の追加・削除、編集、割り当て、表示権を指定すると、そのユーザはすべての既存コードに対して追加・削除、編集、割り当て、表示を行うことが可能になります。

グローバル設定の作成 Project Management モジュールで、[管理]、[セキュリティ設定] を選択します。[グローバル設定] を選択し、[追加] をクリックします。新しい設定名をタイプします。新しい設定を既定のグローバル設定とするには、[既定] チェックボックスをマークします。[権限] エリアで、適宜 [権限あり] チェックボックスにマークし、設定に権限を付与します。

グローバル設定
を選択します…

…そして、その設
定に付与された権
限を確認します。

クリックすると、
権限をアルファ
ベット順に表示
できます。

グローバル設定の割り当てに関する情報については、356 ページの「Project Management モジュールでユーザを追加」を参照してください。

以下の表で、各グローバル権を定義します。:



以下に、グローバル権限を機能別にまとめた表を示します。権限は、[セキュリティ設定] ダイアログボックスで表示される順に掲載してあります。[セキュリティ設定] ダイアログボックスで権限をアルファベット順に表示するには、前の画面に示す権限バーをクリックします。



P6 で新規に追加された、あるいは変更された権限については、アスタリスク (*) が付記されています。

権限名	権限の定義
グローバルチェンジ定義の編集	すべてのユーザに使用可能な、グローバル変更仕様の作成、編集および削除を行います。
管理設定および分類の編集	[管理設定] と [管理分類] ダイアログボックスで定義の管理設定と管理分類を変更します。[通貨] ダイアログボックスで通貨データの編集を行います。
リソースの削除	Project management データベースからリソースを削除します。この権限には「リソースの追加」権と「リソースの編集」権が自動的に付与されます。
リソースの追加	リソースを作成します。この権限には「リソースの編集」権が自動的に付与されます。
リソースの編集	リソースデータの編集を行います。レポートで、リソースの単価（「リソースコストの表示」グローバル権も付与されている場合）およびリソーススキルレベル（リソースのロール熟達度）を表示します。
リソース - ロール技能の表示	リソースとロール熟達度の表示、グループ化・ソーティング、フィルタおよびレポートを行います。P6 Web Access を利用してリソースやロール熟達度で情報を表示したり検索を行うユーザには、この権限が必要です。
タイムシートの承認	リソースマネージャとして、Timesheet Approval アプリケーションで提出されたタイムシートをレビュー、承認または却下します。
コストアカウントの編集	コストアカウントの作成、編集、削除を行います。
XER、MPP、MPX、および P3* の Project Management データのインポート	XER、MPP、MPX、P3 形式のプロジェクト、リソース、ロールをインポートします。新規プロジェクトのインポートと作成については、ユーザには EPS でのプロジェクト作成権も必要です。さらに、XER 形式または P3 形式からプロジェクトを更新するプロジェクトのスーパーユーザでなければなりません。
XML のインポート	Project Management モジュールから XML および Microsoft Project XML 形式でプロジェクトをインポートします。新規プロジェクトのインポートと作成については、ユーザには EPS でのプロジェクト作成権も必要です。
XLS* のインポート	XLS ファイルからプロジェクト、リソース、およびロールをインポートします。ユーザは、XLS 形式からプロジェクトを更新するプロジェクトのスーパーユーザでもある必要があります。

権限名	権限の定義
グローバルレポートの編集	グローバルレポートの作成、編集、削除。レポートグループとグローバルレポートバッチの編集。レポートウィザードで作成または変更されたグローバルレポートの保存。
グローバルトラッキングレイアウトの編集	Project Management モジュールでグローバルトラッキングレイアウトの作成、編集、削除を行います。
ロールの編集	グローバルロールの作成、編集、削除を行います。
グローバルアクティビティコードの編集	P6 Web Access と Project Management の双方でグローバルアクティビティコードの名前を編集します。この権限によって、自動的にグローバルアクティビティコード値の追加、編集、削除も可能になります。
グローバルアクティビティコードの追加	P6 Web Access と Project Management の双方でグローバルアクティビティコードとコード値を追加します。この権限によって、自動的に既存のグローバルアクティビティコードとコード値の編集も可能になります。
グローバルアクティビティコードの削除	P6 Web Access と Project Management の双方でグローバルアクティビティコードとコード値を削除します。この権限によって、自動的にグローバルアクティビティコードとコード値の追加と編集も可能になります。
問題点フォームの編集	P6 Web Access における問題点フォームと問題点フォーム分類の追加、編集、削除を行います。
グローバルカレンダーの編集	グローバルカレンダーおよびシフトの作成、編集、削除を行います。
リソースカレンダーの編集	リソースカレンダーおよびシフトの作成、編集、削除を行います。
セキュリティ設定の編集	プロジェクトセキュリティ設定の作成、編集、削除を行います。
ユーザの編集	Project Management モジュールユーザの追加、編集、削除を行います。
タイムシート期間の編集	Timesheets バッチの作成および削除を行います。
アクティビティ/リソース割当のグローバルレイアウト/フィルタの編集	アクティビティとリソース割当のグローバルレイアウト、表示、フィルタの作成、編集および削除を行います。

権限名	権限の定義
OBS の編集	グローバル OBS 階層の作成、編集、削除を行います。
プロジェクトコードの編集	プロジェクトコード名を編集します。この権限によって、自動的にプロジェクトコード値の追加、編集、削除も可能になります。
プロジェクトコードの追加	新規のプロジェクトコードとコード値を追加します。この権限によって、自動的に既存のコードとコード値の編集も可能になります。
プロジェクトコードの削除	プロジェクトコードとコード値を削除します。この権限によって、自動的にプロジェクトコードとコード値の追加と編集も可能になります。
リソースコードの編集	リソースコード名を編集します。この権限によって、自動的にリソースコード値の追加、編集、削除も可能になります。
リソースコードの追加	新規のリソースコードとコード値を追加します。この権限によって、自動的にリソースコードとコード値の編集も可能になります。
リソースコードの削除	グローバルリソースコードとコード値を削除します。この権限によって、自動的にリソースコードとコード値の追加と編集も可能になります。
グローバルポートフォリオの編集	Project Management モジュールと P6 Web Access で、グローバルポートフォリオの作成、編集、削除を行います。
グローバル外部アプリケーションの管理	グローバル外部アプリケーションリストの管理を行います。
資金調達先の編集	資金調達先ディクショナリの資金調達先を作成、編集、削除します。
Project Architect の実行	Project Architect ウィザードを実行します。ウィザードによって、 Project Management モジュールユーザが Methodology Management モジュールからインポートしたメソドロジに基づき新規プロジェクトを作成すること、および既存プロジェクトにメソドロジを追加することが可能になります。

権限名	権限の定義
リソースとロールコストの表示	労務と非労務リソースコストおよびロールの単価を表示します。ユーザにこの権限が付与されていない場合は、 Project Management モジュールのすべてのロール、労務、材料、非労務リソースの金額表示エリアには、ダッシュが表示され、編集もできません。リソースについては、そのようなエリアには、時間当たりのリソース価格、アクティビティ画面のリソース設定値、トラッキングレイアウトの金額が含まれます。ロールについては、この対象エリアは [ロール] ダイアログボックスでの単価になります。
ジョブサービスの管理	ジョブサービスの管理。実績の適用、一括レポート、エクスポート、スケジューリング、サービスの要約を指定の間隔で実行するように設定します。
パーソナルリソースカレンダーの編集	ユーザに「グローバルカレンダーの編集」、「リソースカレンダーの編集」の権限がない場合、ユーザ自身のリソースカレンダーを編集することを可能にします。 P6 Web Access で「アポイントメントのインポート」機能にアクセスするには、この権限または「グローバルカレンダーの編集」、「リソースカレンダーの編集」が必要です。
プロジェクト要求の作成	新規プロジェクト要求をレビューするために、予め定義されたワークフロープロセスを開始します。使用可能なワークフロープロセスを定義するテンプレートを作成するには、別の権限（プロジェクト要求の編集）が必要です。
プロジェクト要求テンプレートの編集	新規プロジェクト要求をレビューするためにワークフロープロセスを定義するテンプレートを作成、編集、変更します、
セキュアコードの追加と削除	すべてのグローバルおよび EPS レベルのセキュアアクティビティコードとコード値、すべてのグローバルセキュア問題点コードとコード値の作成、編集、割り当て、表示、削除を行います。
セキュアコードの編集	グローバルおよび EPS レベルのセキュアアクティビティコードとコード値、すべてのグローバルセキュア問題点コードとコード値の作成、編集、割り当て、表示を行います。
セキュアコードの割当	グローバルおよび EPS レベルのセキュアアクティビティコードとコード値、すべてのグローバルセキュア問題点コードとコード値の割り当て、表示を行います。

権限名	権限の定義
セキュアコードの表示	グローバルおよび EPS レベルのセキュアアクティビティコードとコード値、すべてのグローバルセキュア問題点コードとコード値の表示を行います。
ユーザインタフェース画面の編集	P6 Web Access のユーザインタフェース画面の作成、編集、削除を行います。この権限によって、P6 Web Access および Project Management モジュール双方でユーザにユーザインタフェース画面を割り当てる権限が得られます。
SDK 経由でグローバル/プロジェクトデータの表示	スーパーユーザ権限なしに読み取り専用モードで SDK にアクセスします。
グローバルリソース/ロールチームの編集	グローバルリソースチームとロールチームの作成、編集、削除を行います。リソースチーム、ロールチームとは、リソースやロールの集合です。リソースチーム、ロールチームは P6 Web Access で活用できます。
リソースカーブの編集	リソース分散カーブの作成、編集、削除を行います。
ユーザ定義フィールドの編集	ユーザ定義フィールドの作成、編集、削除を行います。この権限がない場合は、ユーザ定義フィールドの表示のみができます。P6 Web Access では、管理ページのプロジェクトユーザ定義フィールドセクションへのアクセスが可能となり、プロジェクトユーザ定義フィールドの作成、編集、削除ができます。
プロジェクト/WBSのグローバルレイアウト/ポートフォリオ画面の追加/編集	グローバルプロジェクトと WBS レイアウトの作成、編集、削除を行います。P6 Web Access で、ポートフォリオ画面の作成、編集、削除を行います。この権限は、P6 Web Access の [ポートフォリオ]>[ポートフォリオ分析] ページに加えられた表示の変更を保存する際に必要です。
Microsoft Project テンプレートの編集	Microsoft Project からデータをインポートあるいはエクスポートするのに使用する、Microsoft Project テンプレートの作成、編集、削除を行います。
ステップテンプレートの編集	複数のアクティビティに対する一連の共通ステップを追加するのに使用する、アクティビティステップテンプレートの作成、編集、削除を行います。
グローバル問題点コードの追加	P6 Web Access で新規問題点コードと問題点コード値を作成します。
グローバル問題点コードの編集	P6 Web Access で問題点コードと問題点コード値を編集します。

権限名	権限の定義
グローバル問題点コードの削除	P6 Web Access で問題点コードと問題点コード値を削除します。この権限によって、自動的にグローバル問題点コードと問題点コード値の追加と編集も可能になります。
報告期間の編集	報告期間ディクショナリの報告期間を作成、編集、削除します。期間データの編集を行うには、ユーザには「期間パフォーマンスの編集」プロジェクト権も割り当てられている必要があります。
グローバルシナリオの編集	P6 Web Access で、グローバルシナリオの作成、編集、削除を行います。
グローバルダッシュボードの編集	P6 Web Access で、グローバルダッシュボードの作成、編集、削除を行います。
スコアカードからプロジェクトを編集	P6 Web Access でポートフォリオ表示ポートレットとポートフォリオ分析ページのスコアカードからプロジェクトの追加、編集、削除を行います。この権限は、[ポートフォリオ分析] ページで行われたデータの変更を保存する際に必要です。スコアカードのプロジェクトデータを編集するには、ユーザには「財務以外のプロジェクト詳細編集」プロジェクト権限も割り当てられている必要があります。スコアカードのプロジェクトコストデータを編集するには、ユーザには「WBS 財務情報の編集」プロジェクト権限も割り当てられている必要があります。スコアカードにプロジェクトを追加するには、ユーザには「EPS 以下でプロジェクトの作成」プロジェクト権も割り当てられている必要があります。スコアカードからプロジェクトを追加するには、ユーザには「EPS 以下でプロジェクトの削除」プロジェクト権も割り当てられている必要があります。

プロジェクト設定の定義

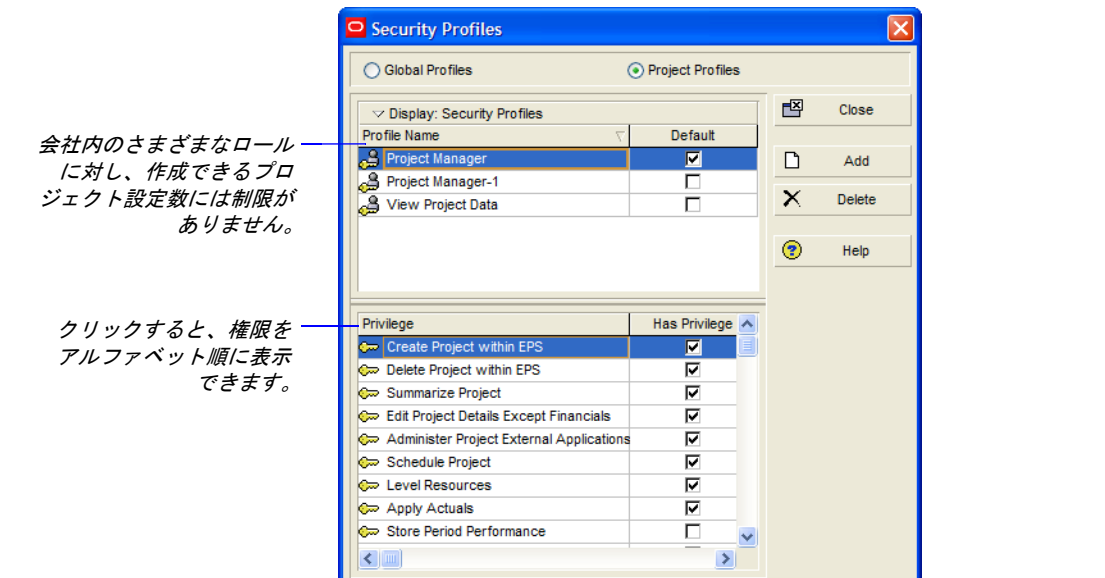
プロジェクト設定は、ロールベースの設定で、例えばベースライン、WBS、しきい値などのように特定の権限を制限します。Project Management モジュールでは、各ユーザにプロジェクト設定がされていなくても構いません。しかし、プロジェクト設定やグローバル設定がされているか、管理スーパーユーザでない限り、ユーザはプロジェクトにアクセスできません。

Project Management モジュールでは、定義するプロジェクト設定数に制限はありません。Project Management モジュールでは、予め定義されたプロジェクト設定として、プロジェクトスーパーユーザを提供します。プロジェクトスーパーユーザの設定では、プロジェクト内のノードへの完全なアクセスが許容されます。

OBS ノードへのユーザ割り当てに関するさらなる情報は、370 ページの「[OBS ノードとプロジェクト設定の割り当て](#)」を参照してください。

プロジェクト設定は、OBS の割り当てによりユーザに適用されます。Project Management モジュールでは、すべての EPS と WBS ノードおよびプロジェクトが責任 OBS に割り当てられていることが必要です。OBS 割り当てに対するプロジェクト設定／ユーザ割り当てと EPS/WBS に対する OBS 割り当ての組み合わせによって、ユーザがアクセスできるプロジェクトとデータが決まります。

プロジェクト設定の作成 [管理]、[セキュリティ設定] を選択します。「プロジェクト設定」を選択し、「追加」をクリックします。新しい設定名をタイプします。新しい設定を既定のプロジェクト設定とするには、[既定] チェックボックスをマークします。[権限] エリアで、適宜 [権限あり] チェックボックスにマークし、設定に権限を付与します。



プロジェクトのすべての局面での書き込みと読み取りを許容するには、プロジェクトのルート OBS ノードにユーザを割り当て、プロジェクトスーパーユーザをその OBS に割り当てます。

以下の表で、各プロジェクト権限を定義します。

以下に、各権限を機能別にまとめた表を示します。権限は、[セキュリティ設定] ダイアログボックスで表示される順に掲載してあります。[セキュリティ設定] ダイアログボックスで権限をアルファベット順に表示するには、前の画面に示す権限バーをクリックします。

P6 で新規に追加された、あるいは変更された権限については、アスタリスク (*) が付記されています。

権限名	権限の定義
EPS 以下でプロジェクトの作成	EPS 内でプロジェクトの作成、コピー、貼り付けを行います。
EPS 以下でプロジェクトの削除	EPS 内でプロジェクトの削除、切り取り、貼り付けを行います。
プロジェクトの集計	EPS 内のすべてのプロジェクトデータを集計します。
財務情報以外のプロジェクト詳細編集	プロジェクト詳細の [設定] タブで、[全般]、[日付]、[既定]、[リソース] フィールドを編集します。プロジェクトベースラインを選択するために、1 人のユーザにはこの権限が付与されている必要があります。

権限名	権限の定義
プロジェクト外部アプリケーションの管理	外部アプリケーションへのリンクを管理します。
スケジュール計算	プロジェクトのスケジュールを立てます。
リソースの平準化	プロジェクトのリソースを平準化します。
実績の適用	プロジェクトのアクティビティに実績を適用します。
期間締切	プロジェクトの当報告期間に工数実績とコスト実績を保存します。この権限を付与するには、そのユーザに「接続以外のアクティビティ情報の追加/編集」プロジェクト権が割り当てられている必要があります。
期間実績の編集	労務と非労務単位と労務、非労務、材料、経費コストの期間成績を編集します。この権限を付与するには、そのユーザに「プロジェクトコスト/財務情報の表示」プロジェクト権が割り当てられている必要があります。
プロジェクトベースラインの保守	プロジェクトのベースラインを追加、保存、削除します。 P6 Web Access でプロジェクトベースラインを追加するには、ユーザにこの権限と「財務情報以外のプロジェクト詳細編集」プロジェクト権限が割り当てられている必要があります。
ベースラインの更新の実行	ベースラインの更新ユーティリティを使い、プロジェクトのベースラインを新しいプロジェクトデータで更新します。
プロジェクトベースラインの割当	プロジェクトにそのプロジェクトベースラインを選択します。プロジェクトベースラインの選択のためには、ユーザに「財務情報以外のプロジェクト詳細編集」プロジェクト権が割り当てられている必要があります。
プロジェクトドキュメントの編集	プロジェクト成果物とドキュメントの作成、編集、削除を行います。 P6 Web Access で、ドキュメントへの項目の関係付け、ドキュメントアクセスレベルの変更、フォルダの追加と削除、プロジェクトドキュメントレビューの開始を行います。この権限のほか、コンテンツリポジトリはドキュメントのアクセスレベル変更や、フォルダの追加と削除、プロジェクトドキュメントレビューの開始を実行できるよう設定する必要があります。

権限名	権限の定義
プロジェクトテンプレートドキュメントの追加／編集	P6 Web Access で、プロジェクトテンプレートドキュメントの作成、編集、削除、チェックアウト、レビューの開始を行います。ユーザには、「プロジェクトドキュメントの編集」権限も必要です。この権限のほか、コンテンツリポジトリは、プロジェクトテンプレートドキュメントのレビューをチェックアウトしたり開始したりできるよう設定する必要があります。
プロジェクトコスト／財務情報の表示	プロジェクトのすべての金額を表示します。ユーザにプロジェクトコストの表示を許可しない場合は、Project Management では、金額を表示するすべての機能は3本のダッシュ(---)で置き換わり、ユーザは編集することができません。リソース価格／時間の表示機能は、「リソースとロールコストの表示」グローバル権限で管理されます。
プロジェクトアクティビティコードの編集	プロジェクトアクティビティコード名を編集します。この権限によって、自動的に P6 Web Access および Project Management モジュールの両方でグローバルアクティビティコード値の追加、編集、削除も可能になります。
プロジェクトアクティビティコードの追加	P6 Web Access と Project Management の双方でプロジェクトのアクティビティコードを作成します。
プロジェクトアクティビティコードの削除	P6 Web Access と Project Management の双方でプロジェクトデータベースからのプロジェクトのアクティビティコードを削除します。
EPS アクティビティコードの編集	EPS レベルのプロジェクトアクティビティコード名を編集します。この権限によって、自動的に P6 Web Access および Project Management モジュールの両方で EPS レベルのアクティビティコード値の追加、編集、削除も可能になります。
EPS アクティビティコードの追加	P6 Web Access と Project Management の双方で EPS レベルのアクティビティコードを作成します。この権限によって、自動的に既存の EPS レベルアクティビティコードの編集も可能になります。
EPS アクティビティコードの削除	P6 Web Access と Project Management の双方で EPS レベルのアクティビティコードを削除します。この権限によって、自動的に既存の EPS レベルアクティビティコードの追加と編集も可能になります。
しきい値の監視	プロジェクトのしきい値監視を実行します。

権限名	権限の定義
プロジェクト Web サイト発行	プロジェクト Web サイトを発行します。
プロジェクトレポートの編集	プロジェクトレポートとプロジェクトレポートバッチを編集します。
プロジェクトカレンダーの編集	プロジェクトカレンダーの作成、編集、削除を行います。
グローバルチェンジの実行	グローバルチェンジを実行し、アクティビティ詳細情報を更新します。
チェックイン／チェックアウト	Project Management モジュールからのプロジェクトのチェックインおよびチェックアウトを行います。
問題点フォームの割当	P6 Web Access で、問題点フォームをプロジェクトに割り当てます。
レポートでタイムシートを表示	P6 Web Access の My Reports ポートレットからプロジェクトのリソースすべてのタイムシートについてレポートを実行します。この権限は、 Timesheet Approval アプリケーションへのアクセス権を授与するものではありません。
Contract Management データのインポート／表示	Contract Management データのインポートと表示を行います。
財務情報以外の WBS 詳細編集	WBS 階層（ WBS ノードの追加／削除／移動）、ノートの入力、アーンドバリュー、進捗（ステップ）、ワーク成果物とドキュメント、日付の編集を行います。
WBS 財務情報の編集	プロジェクトレベルの WBS 予算ログ、資金調達先、支出計画、および財務データを編集します。リソース割当を含むアクティビティレベルでのコストデータの編集をします。
財務情報以外の EPS 財務	EPS 階層の編集（ EPS ノードの追加／削除／移動）、 EPS ノートブックの編集、財務情報以外のすべての EPS 関連データの編集を行います。
EPS 財務情報の編集	EPS 予算ログ、資金調達先、支出計画を編集します。
トップダウン見積	プロジェクトのトップダウン見積を実行します。
プロジェクトマネージャとしてタイムシートの承認	プロジェクトのタイムシートをレビューして承認または却下します。

権限名	権限の定義
経費の編集	プロジェクトの経費の作成、編集、削除を行います。
しきい値、問題点およびリスクの編集	プロジェクトしきい値、問題点、リスクの作成、編集、削除を行います。
アクティビティ接続の編集	プロジェクトのアクティビティ接続関係の作成、編集、削除を行います。
接続以外のアクティビティ情報の追加／編集	アクティビティ接続関係以外のプロジェクトアクティビティ情報の作成と編集を行います。アクティビティ ID を編集するには、「アクティビティ ID の編集」プロジェクト権限も付与されている必要があります。
アクティビティ リソース要求の実施	P6 Web Access のアクティビティにリソース要求を割り当てます。
タイムシート実績を含むアクティビティ	プロジェクトアクティビティを削除します。
タイムシート実績を含むプロジェクトデータの削除	タイムシート実績が適用されたプロジェクトアクティビティを削除します。ユーザは、「プロジェクトアクティビティの削除」の権限も必要です。
ワークグループの作成	P6 Web Access で新規ワークグループを追加します。
ワークグループの削除	P6 Web Access でワークグループを削除します。
プロジェクトワークスペースとワークグループ設定の修正	P6 Web Access で、プロジェクトワークスペースとワークグループ設定をカスタマイズします。
リソース計画の割当の編集	Web Resource Management モジュールにおいて、プロジェクトまたは WBS レベルでリソース割り当ての実行、削除、変更を行います。ユーザは、検索基準の定義とリソース割り当ての検索を行うことができます。この権限がないユーザにとっては、その特定プロジェクトまたは WBS 用のリソース計画ページにあるリソース割り当て情報は、読み取り専用となります。プロジェクトレベルのセキュリティ権限は WBS レベルにまで影響するので、プロジェクトの 1 つの WBS にリソースを割り当て、その他に割り当てないことも可能です。

権限名	権限の定義
Contract Management プロジェクトのリンクの編集	Oracle Primavera Contract Management プロジェクトへのリンクを作成、編集、削除します。
アクティビティ ID の編集	アクティビティの ID を変更します。アクティビティ ID を編集するには、「接続関係以外のアクティビティ情報の追加／編集」プロジェクト権限も付与されている必要があります。
リソース計画のロール割当の編集	Web Resource Management モジュールにおいて、プロジェクトまたは WBS レベルでロール割り当ての実行、削除、変更を行います。ユーザは、ロール割り当ての検索基準を定義することもできます。この権限がないユーザにとっては、その特定プロジェクトまたは WBS 用のリソース計画ページにあるロール割り当て情報は、読み取り専用となります。プロジェクトレベルのセキュリティ権限は WBS レベルにまで影響するので、プロジェクトの 1 つの WBS にロールを割り当て、その他に割り当てないことも可能です。
リソース計画確定済みフラグの編集	Web Resource Management モジュールのリソース計画ページにおけるプロジェクトまたは WBS レベルのコミットされたリソースとロール割り当てを特定します。この権限には、「リソース計画の割当の編集」権限も必要です。
未来の期間を編集	P6 Web Access と Project Management モジュールの計画工数と残工数（最早）のフィールドに将来期間値を入力または編集します。この権限をユーザに割り当てるには、先ずそのユーザに「接続関係以外のアクティビティ情報の追加／編集」プロジェクト権限を割り当てる必要があります。そうしないとこの権限を選択することはできません。
プロジェクトレベルレイアウトの追加／編集	アクティビティ、割り当て、または WBS 表示にてプロジェクトレベルレイアウトの作成、編集および削除を行います。
ERP システムとの統合を許可 *	プロジェクトデータを統合 Oracle ERP システムに送信します。 P6 Web Access の「Projects」>「Activities」ページから、「ERP へ送信」ツールバーアイコンを使用します。これは、プロジェクトレベルの権限であり、各 WBS レベル固有の権限ではありません。

Project Management モジュールでユーザを追加

セキュリティ設定によって、「ユーザ」ダイアログボックスからユーザの追加と削除および P6 コンポーネントへのユーザアクセスの管理を行うことができます。独自のセキュリティデータを使用する Methodology Management モジュールを例外として、すべての P6 のコンポーネントにアクセスする必要のある人に対して、Project Management モジュールにユーザを追加する必要があります。

少なくとも各ユーザには、ログイン名、グローバル設定、モジュールアクセス（コンポーネントとアクセスレベル）が必要です。E メールアドレスやオフィスの電話番号などのその他のユーザ情報も提供することができます。

会社の OBS が確立しており、OBS ノードに割り当てられるユーザが決まっていれば、「ユーザ」ダイアログボックスの「プロジェクトアクセス」タブで割り当てを実施することができます。370 ページの「[OBS ノードとプロジェクト設定の割り当て](#)」を参照してください。



会社がユーザ情報を LDAP ディレクトリに集中管理している場合は、P6 ユーザを LDAP ストアからプロビジョニングして追加することができます。さらなる詳細については、309 ページの「[認証モードの設定](#)」を参照してください。ユーザをプロビジョニングしたあと、各ユーザにセキュリティ設定とモジュールアクセスを割り当てする必要があります。

会社が P6 Web Access を使っている場合は、新規ユーザを追加する前に既定のプロトタイプユーザを作成することができます。プロトタイプユーザでは、既定のダッシュボードとグローバル設定を定義し、P6 Web Access の全ユーザに適用することができます。さらなる詳細については、367 ページの「[プロトタイプユーザの追加と P6 Web Access の既定設定の定義](#)」を参照してください。

新規ユーザの追加 [管理]、[ユーザ] を選択します。「追加」をクリックします。

- [管理設定] でパスワードポリシーが有効になっていない場合は、[全般] タブをクリックしてユーザのログイン名と個人名を入力し、[パスワード] をクリックします。ユーザのパスワードをタイプし、さらにもう一回パスワードをタイプし直して確認します。「OK」をクリックします。ユーザが Progress Reporter モジュールにアクセスをする場合は、ここでユーザを Project Management モジュールのリソースに関連付けることができます。あるいは、リソースを追加するときに、リンクを作成することができます。「連絡」タブをクリックし、ユーザの E メールアドレスと電話番号をタイプします。
- [管理設定] でパスワードポリシーが有効になっている場合は [ユーザの追加] ダイアログボックスが表示されます。ログイン名、個人名、新規パスワードの入力、新規パスワードの確認の各フィールドに入力する必要があります。「OK」をクリックします。ユーザが Progress Reporter モジュールにアクセスをする場合は、ここでユーザを Project Management モジュールのリソースに関連付けることができます。あるいは、リソースを追加するときに、リンクを作成することができます。「連絡」タブをクリックし、ユーザの E メールアドレスと電話番号をタイプします。



管理設定の詳細については、390 ページの「[既定設定の定義](#)」を参照してください。



Project Management モジュールがLDAP 認証モードで実行されている場合は、[追加] をクリックすると、ダイアログが現れ、ユーザ名を入力してそれをLDAP ストアと照合するよう求められます。テストをクリックすると、LDAP ストアにユーザが存在していれば、実際の名前、E メールアドレス、電話番号フィールドで埋められます。これは認証設定ツールでそれらのフィールドが事前に対応付けされている場合です。ユーザを追加するには、[追加] をクリックします。[テスト] をクリックしてユーザがLDAP ストアに見つからない場合は、ユーザを追加できない旨を通知するメッセージが表示されます。

P6 コンポーネントにアクセスする必要があるユーザのリストを表示します

P6 コンポーネントにログインする必要のある名前を特定します
コンポーネント

Project Management モジュールがLDAP 認証モードで実行されている場合は、[パスワード] ボタンは表示されません。

ユーザが Progress Reporter モジュールにアクセスする場合は、ユーザは Project Management モジュールのリソースにリンクされていなければなりません。

Login Name	Personal Name	Global Profile	Resource
Oliver	Oliver Rock	<Admin Superuser>	OR.Olivi
phil	phil	<Admin Superuser>	
admin	admin	Administrator	
Bruce	Bruce (V.P. of Construction)	Administrator	
TomO	Tom Orow	Administrator	

各 P6 モジュールへのアクセス権が割り当てられたユーザ数を示す「数」ダイアログボックスを表示します。

リソースとユーザの関連付け [管理]、[ユーザ] を選択します。
[全般] タブをクリックして、[リソース ID/ リソース名] フィールドで [ブラウズ] ボタンをクリックし、選択したユーザのリソースを選択します。リソースがすでに他のユーザと関連付けられている場合は、関連付けを置き換えるよう指示されます。
Project Management モジュールでは、リソースは 1 人のユーザとだけ関連付けられることが許容されます。これによって、Project Management と Progress Reporter の両方のモジュールで、プロジェクトリソースとユーザに単一のログイン名が維持されるようにしています。この関連付けは、リソース詳細の [Progress Reporter] タブで設定することもできます。

さらなる詳細については、341 ページの「[グローバル設定の定義](#)」を参照してください。

グローバル設定の割当 グローバル設定は、リソースとロールのように、アプリケーションにわたる機能へのユーザアクセスを決定付けます。Project Management モジュールでは、各ユーザにグローバル設定がされていることが要求されます。[管理]、[ユーザ] を選択します。グローバル設定を割り当てたいユーザを選択します。「グローバルアクセス」タブをクリックして、ユーザのグローバル設定を選択します。

[グローバル設定] 列をダブルクリックして、選択したユーザに適した設定を選ぶこともできます。

管理スーパーユーザ設定では、すべてのグローバルとプロジェクトデータの読み書きが許容されます。

ユーザへのリソースアクセス設定の定義についての情報は、376 ページの「[リソースへのユーザアクセスの定義](#)」を参照してください。ユーザへユーザインタフェース表示を割り当てることについての情報は、380 ページの「[P6 Web Access 機能へのユーザアクセスの定義](#)」を参照してください。

Login Name	Personal Name	Global Profile	Resource
admin	admin	<Admin Superuser>	
steve	steve	<Admin Superuser>	
phil	phil	<Admin Superuser>	
Bruce	Bruce (V.P. of Construction)	Administrator	
TomD	Tom Drow	Administrator	

Global Security Profile: <Admin Superuser>

Specify the resources that the user will be able to access

☒ All Resource Access

Resource Access: [User Icon] [...]

User Interface Views: [...]

☒ Enable user to modify view settings



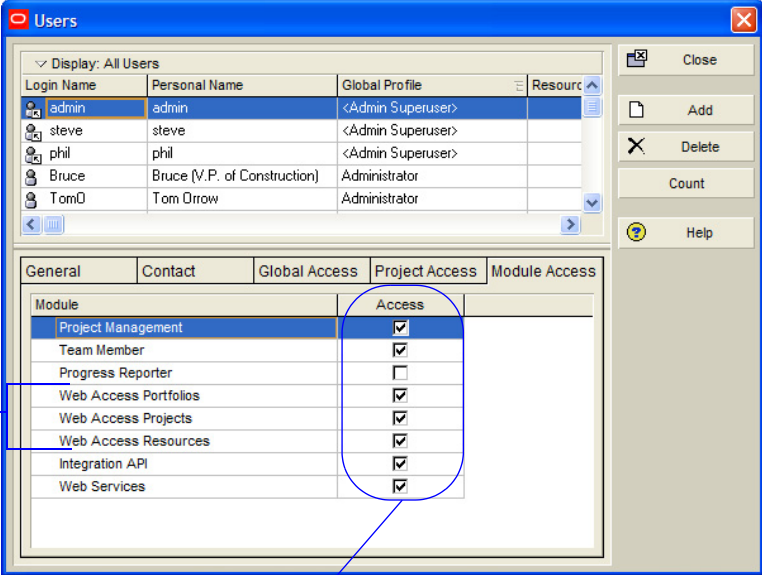
グローバル設定、< グローバル権限なし > は、Progress Reporter モジュールへのアクセスのみのユーザに割り当てます。これらのユーザには、「Team Member」または「Progress Reporter」のいずれかのモジュールアクセスによって、P6 Progress Reporter にログインできる権限も与えられている必要があります。

モジュールアクセスの割り当て P6 にアクセスする各ユーザには、適切なモジュールログイン権限が割り当てられている必要があります。



以前の P6 リリースからアップグレードする場合、既存の管理スーパーユーザ (Admin Superuser) はそのままモジュールログイン権限を保持します。新しい管理スーパーユーザには、適切なモジュールログイン権限を割り当てる必要があります。

[管理]、[ユーザ] を選択します。P6 モジュールアクセスを設定するユーザを選択します。「モジュールアクセス」タブをクリックします。ユーザがアクセスする各コンポーネントに対して、「アクセス」列のチェックボックスをマークします。ユーザが、該当する P6 コンポーネントに対する有効なユーザでない場合は、チェックボックスをクリアします。



これらのモジュールアクセスオプションは、P6 Web Access (ポートフォリオ、プロジェクトおよびリソース) の各機能エリアへのログイン権を制御します。

選択したユーザの、該当する P6 コンポーネントへのモジュールアクセスを示すため、マークあるいはクリアします。

コンポーネントのチェックボックスにマークすることで、ユーザは以下にアクセスすることができるようになります。



Progress Reporter、Integration API、Web Services 以外のすべてのモジュールアクセス権では、P6 Web Access のダッシュボードホームページにアクセスできます。ただし、ダッシュボードホームページで利用できるポートレットとダッシュボードアクションメニュー項目では、各ユーザのセキュリティ権限が必要です。

- **Project Management** — Project Management モジュールへのアクセスを提供します。

- **Team Member** — P6 Progress Reporter へのアクセスを提供し、ダッシュボードや「プロジェクト」セクションを含む制限された P6 Web Access の機能（ワークスペースおよび「アクティビティ」ページのみ利用可）が提供されます。P6 Web Access 機能へのアクセスは、さらにユーザの OBS アクセスやプロジェクトとの関連、つまりユーザがアクティビティにリソースとして割り当てられているか、アクティビティオーナーとして指定されているか、あるいはプロジェクトへ招待されているか、によって決まります。Team Member モジュールアクセスについてのさらなる詳細情報については、362 ページの「[Team Member ログイン権により可能となるユーザアクセス](#)」を参照してください。
- **Progress Reporter** — P6 Progress Reporter へのアクセスを提供し、ユーザにアポイントメントのインポート機能のみの P6 Web Access ログインが提供されます（設定されている場合のみ利用可）。Progress Reporter モジュールへのログイン権を必要とするユーザーに対しては、Team Member または Progress Reporter のいずれかのモジュールアクセスを付与する必要があります。
- **Web Access ポートフォリオ** — P6 Web Access の以下の機能へのアクセスを提供します。ポートフォリオセクション、プロジェクトパフォーマンスポートレット、ダッシュボードセクションのポートフォリオ表示ポートレットおよびドキュメント管理機能（コンテンツリポジトリが設定されている場合）。
- **Web Access プロジェクト** — P6 Web Access の以下の機能へのアクセスを提供します。プロジェクトセクション、ダッシュボードセクションのプロジェクトパフォーマンスポートレット、ドキュメント管理機能（コンテンツリポジトリが設定されている場合）。
- **Web Access リソース** — P6 Web Access の以下の機能へのアクセスを提供します。リソースセクション、ダッシュボードセクションのリソースポートレット、ドキュメント管理機能（コンテンツリポジトリが設定されている場合）。
- **Integration API** — API のみへのアクセスを提供します。API を使うと、Project Management モジュールに Java から直接アクセスできます。
- **Web Services** — P6 Web Services へのアクセスを提供します。これにより、XML、SOAP、WSDL などの標準ファイル形式を利用して、P6 の Project Management 機能を他のアプリケーションにスムーズに統合できます。P6 Web Services を利用すると、オペレーティングシステムやプログラミング言語に関係なく、P6 プロジェクト管理データをアプリケーション間で共有できるようになります。



Progress Reporter、Integration API、Web Services 以外のすべてのモジュールアクセス権は、Primavera P6 ProjectLink へのアクセスを提供します。Primavera P6 ProjectLink のプロジェクトデータへのアクセスは、モジュールアクセスに関わらずセキュリティ権限の設定およびプロジェクトへの OBS アクセスによって決まります。



SDK やジョブサービスなど、P6 製品によってはモジュールアクセスを必要としません。



Web Access Portfolios、Web Access Projects、または Web Access Resources アクセス権があるユーザは、Team Member モジュールアクセスなしに P6 Web Access のプロジェクトデータを表示することができます。この場合、ユーザは、プロジェクトのアクティビティにリソースとして割り当てられているか、プロジェクトに招待を受けているか、あるいはプロジェクトのオーナーとして OBS アクセスがあるときに、そのプロジェクトのデータを表示できます

Team Member ログイン権により可能となるユーザアクセス

Team Member ログイン権は、P6 Progress Reporter およびいくつかの P6 Web Access 機能へのアクセスを提供します。以下のセクションで、Team Member ユーザがアクセスすることができる P6 Web Access 機能を説明します。



このセクションで説明する情報は、Team Member モジュールアクセスが唯一のログイン権限としてユーザに割り当てられていることを想定しています。Team Member モジュールアクセスがユーザに割り当てられている唯一のログイン権でない場合、ユーザは割り当てられている他のモジュールアクセス権によって有効になっている機能のほかに、このセクションで説明されている機能すべてにアクセスできます。

通常、Team Member モジュールアクセスのあるすべてのユーザは以下の操作が可能です。

- プライベートおよびマルチユーザダッシュボードの作成
- プライベートおよびマルチユーザポートフォリオの作成 (ダッシュボードアクションメニューからのみ)
- インポート指定
- プライベートおよびマルチユーザアクティビティ表示の作成
- グローバルおよびプロジェクト設定の策定

プロジェクトに対する OBS アクセス権によって、Team Member モジュールアクセスのあるユーザは、以下の操作を行うことも可能です。

- プロジェクト問題点の追加 / 編集
- リソース割付の追加 / 編集
- アクティビティステップの追加
- アクティビティ日付の編集
- アクティビティステータスの編集
- アクティビティ接続関係の追加 / 編集 / 削除
- アクティビティ経費の追加 / 編集
- アクティビティノートトピックの追加 / 編集
- ユーザ定義フィールドの追加 / 編集
- プライベートドキュメントの追加



プロジェクトへの招待ユーザは、本セクションで述べたように、プロジェクトに対する OBS アクセス権のない Team Member ユーザと同等のプロジェクトデータにアクセスすることができます。P6 Web Access では、必要なモジュールアクセスと権限があるユーザは、「プロジェクト」セクションの「招待ユーザ」ページ、またはワークグループの「招待ユーザ管理」ページでプロジェクトにユーザを招待することができます。



Team Member モジュールアクセスのみをもつユーザにユーザインターフェイス画面を割り当てた場合、その表示設定は無視されます。Team Member ユーザが利用できる機能は常にモジュールアクセス権によって制御されます。ユーザインターフェイス画面割当の詳細については、380 ページの「[P6 Web Access 機能へのユーザアクセスの定義](#)」を参照してください。

ダッシュボード

P6 Web Access の「ダッシュボード」セクションでは、Team Member ユーザはプライベートとマルチユーザダッシュボード、プライベートとマルチユーザポートフォリオの作成、およびタイムシートの承認（必要なセキュリティ権限内）を行うことができます。ダッシュボードポートレットは、指定ダッシュボードフィルタの基準を満たす、ユーザが関連するプロジェクトデータを表示します。ユーザのプロジェクトへの関連性、OBS アクセス、セキュリティ権限が相まってプロジェクトデータの表示および編集アクセス権が決まります。Team Member は、OBS アクセス経由、アクティビティのリソースとしての割り当て、プロジェクト参加への招待、ミラープロジェクトでアクティビティオーナーとしての割り付けによって、プロジェクトに関連付けられます。



ミラープロジェクト機能およびアクティビティオーナー機能は、アクティビティリソースとして割り当てられておらず、Progress Reporter アプリケーションを状況報告に使わない Team Member ユーザのアクティビティ進捗情報の収集やレビューのために合わせて使用することができます。さらなる詳細については、Project Management ヘルプの「ミラープロジェクトとアクティビティオーナー機能を使用してアクティビティステータスを収集、レビューする」を参照してください。

Team Member ユーザは、以下のダッシュボードポートレットにアクセスすることができます（特記のない限り全機能が使用できます）。

- プロジェクト
- ワークグループ
- アクティビティ

- リスク ユーザはリスクを表示できますが、追加することはできません。
- 問題点 プロジェクトの **OBS** アクセス権がないユーザは問題点の表示はできますが、追加することはできません。必要なセキュリティ権限があれば、プロジェクトの **OBS** アクセス権がないユーザでも問題点を追加することができます。
- コミュニケーションセンター
- ドキュメント ユーザはプライベートドキュメントの追加のみができます。このポートレットは、ユーザのモジュールアクセスに関わりなく、コンテンツリポジトリを **P6 Web Access** で使用できるよう設定した場合にのみ利用できます。
- カレンダー
- マイレポート
- アクション要求
- プロジェクト / ドキュメントワークフロー
- コストワークシート
- カスタムポートレット

その他のポートレットは、**Team Member** ユーザには利用できません。

プロジェクト

P6 Web Access の「プロジェクト」セクションで、**Team Member** ユーザは「プロジェクトを開く」ダイアログボックス、「アクティビティ画面の管理」ページ、「プロジェクトワークスペース」、および「アクティビティ」ページにアクセスすることができます。

[**プロジェクトを開く**] ダイアログは、**EPS**、ポートフォリオ、またはプロジェクトコード別に整理できます。各グループカテゴリ内のダイアログには、ユーザが **OBS** アクセス権をもっているすべてのプロジェクト、アクティビティリソースとしてユーザが割り当てられているすべてのプロジェクト、ユーザがアクティビティオーナーとしてリフレクションプロジェクトで指定されているすべてのプロジェクト、ユーザが招待されているすべてのプロジェクトが表示されます。ユーザは、グローバルナビゲーションバーのプロジェクトアクションメニューから [**プロジェクトを開く**] を選択すると [**プロジェクトを開く**] ダイアログにアクセスできます。

「アクティビティ画面の管理」 ページで、Team Member ユーザはプライベートおよびマルチユーザアクティビティ表示を作成、編集することができます。ユーザは、グローバルナビゲーションバーのプロジェクトアクションメニューから[アクティビティ画面の管理]を選択すると[アクティビティ画面の管理] ページにアクセスできます。

プロジェクトセクションのアクティビティページには、ユーザがリソースとして、またはアクティビティオーナーとしての割り当てで関連付けられている、すべてのアクティビティが表示されます。アクティビティに関連付けられているが、OBS アクセス権がないユーザは、データの表示、印刷、エクスポートはできますが、プロジェクトデータの変更を伴う機能にアクセスすることはできません。例えば、テーブルのアクティビティデータの編集、Gantt チャートの変更、またはアクティビティ詳細の変更はできません。プロジェクトの OBS アクセス権および必要なセキュリティ権限があるアクティビティ関連ユーザは、アクティビティへのアクセス、アクティビティの追加と編集、アクティビティテーブルのフィールド編集、Gantt チャートバーの変更、接続関係の確立、情報の印刷、エクスポートおよびインポートが可能です。



Team Member ユーザは、アクティビティの削除または WBS ノードの追加 / 編集はできません。

プロジェクトワークスペースでは、Team Member ユーザは、以下のポートレットにアクセスすることができます（特記のない限り全機能が使用できます）。

- プロジェクトドキュメントーユーザは、プロジェクトドキュメントの表示、ダウンロード、チェックアウトができますが、追加はできません。詳細なドキュメント管理機能は、ユーザのモジュールアクセス権に関わりなく、コンテンツリポジトリを P6 Web Access で使用できるよう設定した場合にのみ利用できます。
- プロジェクトリスクーユーザはプロジェクトリスクの表示はできますが、リスクを追加することはできません。
- プロジェクト問題点ープロジェクトへの OBS アクセス権がないユーザは表示はできますが、プロジェクト問題点を追加したり編集することはできません。プロジェクトへの OBS アクセス権のあるユーザは、必要なプロジェクト権限がある限り、問題点の追加および編集ができます。
- プロジェクトノートーユーザはプロジェクトノートの表示はできますが、追加または編集はできません。
- 超過割りリソース

- 遅延中のクリティカルアクティビティ ユーザは、プロジェクトで遅延中のすべてのアクティビティを表示することができます。プロジェクトへの **OBS** アクセス権のないユーザにとって、このポートレットでアクセスするすべてのアクティビティ詳細は読み取り専用となります。プロジェクトへの **OBS** アクセス権のあるユーザは、適切なセキュリティ権限があり、アクティビティリソースであるか、アクティビティオーナーであればこのポートレットでアクセスするアクティビティ詳細の編集ができます。
- マイルストーンステータス ユーザはプロジェクトのすべてのマイルストーンアクティビティを表示することができます。プロジェクトへの **OBS** アクセス権のないユーザにとって、このポートレットでアクセスするすべてのアクティビティ詳細は読み取り専用となります。プロジェクトへの **OBS** アクセス権のあるユーザは、適切なセキュリティ権限があり、アクティビティリソースであるか、アクティビティオーナーであればこのポートレットでアクセスするアクティビティ詳細の編集ができます。
- プロジェクトレポート
- コミュニケーションセンター
- プロジェクトカレンダー ユーザは、選択した週に予定されているすべてのプロジェクトアクティビティを表示することができます。プロジェクトへの **OBS** アクセス権のないユーザにとって、このポートレットでアクセスするすべてのアクティビティ詳細は読み取り専用となります。プロジェクトへの **OBS** アクセス権のあるユーザは、適切なセキュリティ権限があり、アクティビティリソースであるか、アクティビティオーナーであればこのポートレットでアクセスするアクティビティ詳細の編集ができます。
- ワークグループ
- カスタムポートレット
- **Contract Management** ポートレット ユーザは、**P6 Web Access** が **Contract Management** にアクセスするように設定されており、**P6 Web Access** プロジェクトが **Contract Management** プロジェクトにリンクされていれば、すべての **Contract Management** ポートレットを表示することができます。

その他すべてのプロジェクトワークスペースポートレットは **Team Member** ユーザには利用できません。

新規ユーザの既定ユーザインタフェース表示の作成についての情報は、380 ページの「[P6 Web Access 機能へのユーザアクセスの定義](#)」を参照してください。

プロトタイプユーザの追加と P6 Web Access の既定設定の定義

管理者として、プロトタイプユーザを作成し、これによって既定のグローバルダッシュボードの作成とすべての新規 P6 Web Access ユーザに適用するグローバル設定の選択を行うことができます。プロトタイプユーザ設定の定義と、ユーザインタフェース画面の定義を併せることで、P6 Web Access の新規ユーザに対し組織のビジネスニーズにカスタマイズされた、一貫したインタフェースを確保することができます。以下のステップを実行すると、作成したプロトタイプユーザ設定は、追加する各新規 P6 Web Access ユーザに自動的にコピーされます。



プロトタイプユーザ設定を作成しない場合は、ユーザが初めてログインしたときに表示するダッシュボードを決定するために、新しいユーザのための既定の「新規ユーザのユーザインタフェース表示」が使用されます。「新規ユーザのユーザインタフェース表示」が設定されていない場合、ユーザが初めてログインする際に、ダッシュボード設定を選択するように求められます。

プロトタイプユーザ設定の作成には、以下を行います。

- 1 Project Management モジュールで、[管理]、[ユーザ] を選択します。
- 2 追加をクリックします。ユーザ表に、(新規ユーザ) 行が追加されます。
- 3 [ログイン名] 列、あるいは [全般] タブのログイン名フィールドにプロトタイプユーザのログイン名をタイプします（例えば、prototype_user）。
- 4 グローバル設定列で、グローバル設定（例えば、管理スーパーユーザ）を選択します。これが、プロトタイプユーザに適切な既定ダッシュボードとグローバル設定を新規ユーザに設定できるようにします。

グローバル設定の割り当てに関するさらなる情報については、358 ページの「[グローバル設定の割当](#)」を参照してください。

- 5 P6 Web Access に、新規プロトタイプユーザとしてプロトタイプユーザに設定したログイン名でログインします。

ダッシュボードの管理またはダッシュボード設定ページで[ヘルプ]をクリックし、ダッシュボードの作成詳細、ダッシュボードで表示されるポートレットの選択、ユーザアクセスの指定を表示します。

- 6 グローバルナビゲーションバーのダッシュボードアクションメニューで、[ダッシュボードの管理]をクリックし、各新規 P6 Web Access ユーザに表示される既定グローバルダッシュボードを作成します。作成するすべてのダッシュボードがグローバルダッシュボードとなるよう、ダッシュボード設定の[アクセス]タブでアクセスタイプとして[すべてのユーザ]を必ず選択してください。



myPrimavera 5.0 から P6 Web Access にアップグレードする場合 :

アップグレード後、新規ユーザを追加する前にプロトタイプユーザとして P6 Web Access にログインし、プロトタイプユーザ用に選択されたダッシュボードがすべてグローバルであることを確認します。これを行わない場合、プロトタイプに依存しているユーザはアップグレード後にダッシュボードを表示できないことがあります。



既定により、ダッシュボードで表示できるポートレットの最大数は 12 です。この設定は、P6 管理アプリケーションで変更することができます。変更すべき P6 構成の「ダッシュボードごとの最大ポートレット数」の設定はアプリケーションフォルダにあります。さらなる詳細については 197 ページの「[P6 Web Access の設定](#)」を参照してください。

myPrimavera 5.0 から P6 Web Access にアップグレードする場合 :

アップグレード後は 12 個のポートレットのみが選択されます。プログラムは自動的に、幅広、幅狭、カスタムポートレットの順序でポートレットを選択します。

- 7 P6 Web Access の右上にある[設定]をクリックします。[グローバル]タブで、新規ユーザに適用したいグローバル設定を指定します。完了したら[保存]、[閉じる]をクリックします。
- 8 P6 Web Access をログアウトします。
- 9 P6 管理アプリケーションにログインします。
- 10 プロトタイプユーザを追加したい設定（例えば、Primavera 設定）を展開し、アプリケーションフォルダを展開します。
設定変更についての情報は、186 ページの「[P6 Web Access の設定の確認と変更](#)」を参照してください。
- 11 PrototypeUser 設定を選択し、F2 を押してフィールドを編集します。
- 12 作成したプロトタイプのユーザログイン名をタイプし、[変更の保存]をクリックし、管理アプリケーションを終了します。

- 13 Project Management モジュールで、[管理]、[ユーザ]を選択し、作成したプロトタイプユーザのログイン名を選択します。「モジュールアクセス」タブで、未承認ログインを防ぐため「アクセス」の下すべてのボックスをクリアします。
-

OBS ノードとプロジェクト設定の割り当て

プロジェクトとデータへのアクセスの制限や許諾のため、ユーザにプロジェクト設定を割り当てる必要があります。プロジェクト設定は、ロールベースの設定で、例えばベースライン、WBS、しきい値などのように特定の権限を制限します。プロジェクト設定は、1 つまたは複数の OBS 割り当てにより、ユーザにリンクされます。EPS と各プロジェクトの WBS の各レベルに OBS ノードを割り当てることで、責任を個別のプロジェクトとプロジェクト内の作業に割り当てます。

OBS ノードに対するユーザ割り当てと EPS/ プロジェクト /WBS に対する OBS 割り当ての組み合わせによって、ユーザが表示できるプロジェクトとプロジェクトデータが決まります。ユーザが割り当てられている各 OBS ノードについては、ユーザに割り当てられたプロジェクトセキュリティ設定 (OBS 割り当てごと) によってユーザが表示または編集できるプロジェクトデータがさらに詳細に決まります。



OBS はプロジェクトと WBS の双方のレベルで割り当てられるため、プロジェクトとその WBS ノードの OBS 割り当ては異なる場合があります。この場合、ユーザの OBS 割り当て / プロジェクトセキュリティ設定のみが WBS ノード (プロジェクトと同じ OBS 割り当て) に適用されます。OBS 割り当てがプロジェクトとは異なる WBS ノードの場合、WBS ノードと同じ OBS ノードに割り当てられていないユーザはデータを読み取ることしかできません。プロジェクトとは異なる OBS が割り当てられている WBS ノードに対する権利 (読み取り以上の権利) をユーザに授与するには、WBS ノードが割り当てられているものと同じ OBS ノードにユーザを割り当てた後、新しい OBS 割り当て用に適切なプロジェクトセキュリティ設定を選択する必要があります。

プロジェクト設定の割り当てに関する情報については、349 ページの「[プロジェクト設定の定義](#)」を参照してください。

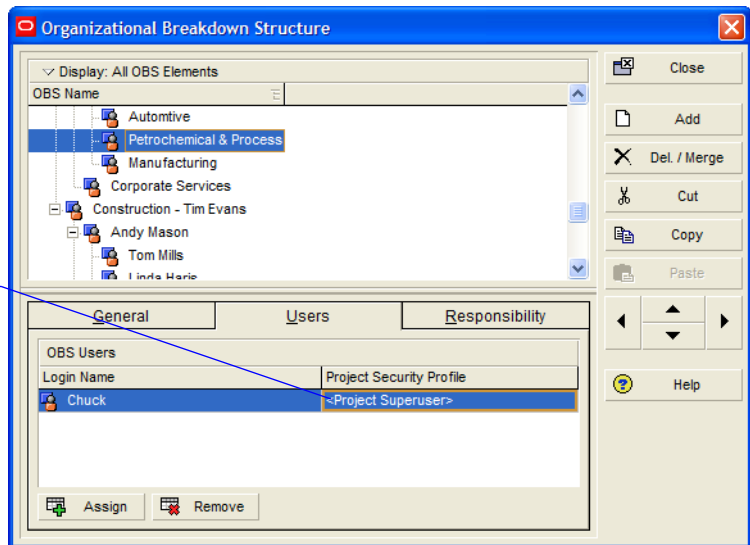
[ユーザ] ダイアログボックスで、ユーザの追加時にユーザに OBS ノードと対応するプロジェクト設定を割り当てることができます。あるいは、OBS の作成時に、[OBS] ダイアログボックスで割り当てを行うことができます。



Project Management モジュールでは、各ユーザにプロジェクト設定がなされていることは必要としませんが、ユーザはプロジェクト設定またはグローバル設定があるか、管理スーパーユーザでない限りプロジェクトにアクセスすることはできません。

ユーザとプロジェクト設定の OBS ノードへの割り当て 「エンタープライズ」、「OBS」を選択します。[ユーザ] タブをクリックします。指定したいユーザとプロジェクト設定の [OBS ノード] を選択して、[割り当て] をクリックします。指定した OBS ノードに関連付けるユーザを選択し、[選択] ボタンをクリックします。既定のプロジェクト設定がユーザと関連付けられています。プロジェクト設定をダブルクリックし、予め定義されている一覧から別のプロジェクト設定を選択します。

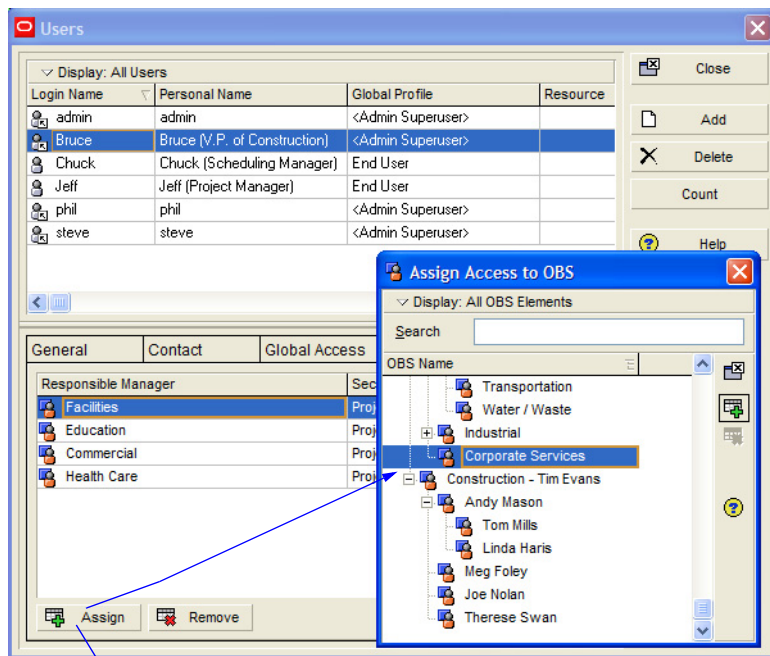
ダブルクリックして別のプロジェクト設定を選択します。ユーザにプロジェクトのすべての側面での読み書きの権限を与えるには、プロジェクトスーパーユーザを選択します。



OBS ノードとプロジェクト設定のユーザへの割当 最初にユーザを追加するときに、OBS ノードとプロジェクト設定をユーザに割り当てることもできます。[管理]、[ユーザ] を選択します。[プロジェクトアクセス] タブをクリックします。OBS ノードとプロジェクト設定を割り当てたいユーザを選択し、[割り当て] をクリックします。ユーザに関連付けられた OBS ノードを選んで「選択」ボタンをクリックします。既定のプロジェクト設定がユーザと関連付けられています。プロジェクト設定をダブルクリックし、予め定義されている一覧から別の設定を選択します。



OBS ノードが、EPS のいくつかのプロジェクトの責任マネージャの場合は、その OBS ノードに関連付けられたどのユーザも該当するすべてのプロジェクトへアクセスできます。



クリックして、選択したユーザに関連付けられる OBS ノードを割り当てます。ユーザには、さまざまなプロジェクトにおけるロールによって、1 つ以上の OBS 割り当てを行うことができます。



ある OBS ノードにプロジェクト情報へのユーザアクセスを拒否するには、責任マネージャの名前を選択し、[削除] をクリックします。

EPS への OBS ノードの割り当て

EPS についてのさらなる情報については、*Project Management リファレンスマニュアル*の「エンタープライズプロジェクトストラクチャの設定」を参照してください。

Project Management モジュールでは、プロジェクトのデータベースはエンタープライズプロジェクトストラクチャ (EPS) と呼ばれる階層構造で構成されます。EPS は、必要に応じて組織の作業と平衡できるよう多くのレベルやノードに細分化できます。最高レベル (ルート) のノードは、社内部門やプロジェクトのフェーズ、場所、その他、組織のニーズを満たす主要なグループを示すことができます。一方、プロジェクトは常に階層構造の最低レベルに属します。組織内のプロジェクトはすべて、EPS ノードに含まれている必要があります。

EPS 階層構造内のノードに対するユーザのアクセスや権限は、EPS のプロジェクトを担当する経営陣を示すグローバル OBS によって実行されます。OBS の各マネージャは、EPS の 1 エリアおよび WBS 階層の特定のレベルにノードまたはプロジェクトで関連付けられています。

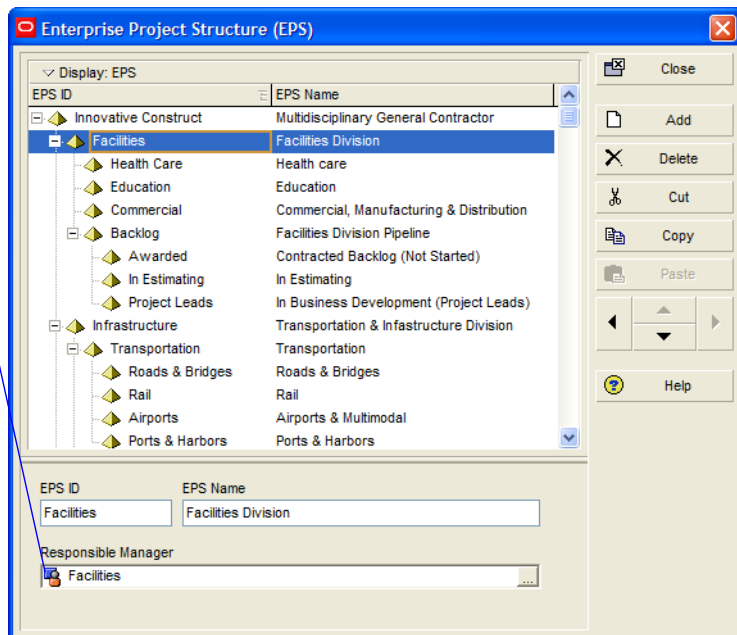
ユーザを追加し、OBS ノードとプロジェクト設定に関連付けると、EPS を定義し責任マネージャ (OBS ノード) を各レベルに割り当てることができます。EPS の各ノードに責任マネージャを指定しなければなりません。

EPS への OBS ノードの割当 プロジェクト構造を作成するときに、EPS の各レベルに責任マネージャ（OBS ノード）を割り当てることができます。[エンタープライズ]、[エンタープライズプロジェクトストラクチャ]を選択します。EPS ノードを選択し、責任マネージャフィールドで[ブラウズ]ボタンをクリックし、適切な OBS ノードを選択します。責任マネージャとして関連付けられたユーザには、選択されたノードとそのブランチのすべてのノード/プロジェクトのアクセス権があります。プロジェクト内でアクセスできる特定のデータは、OBS ノードに対応するプロジェクト設定により決まります。



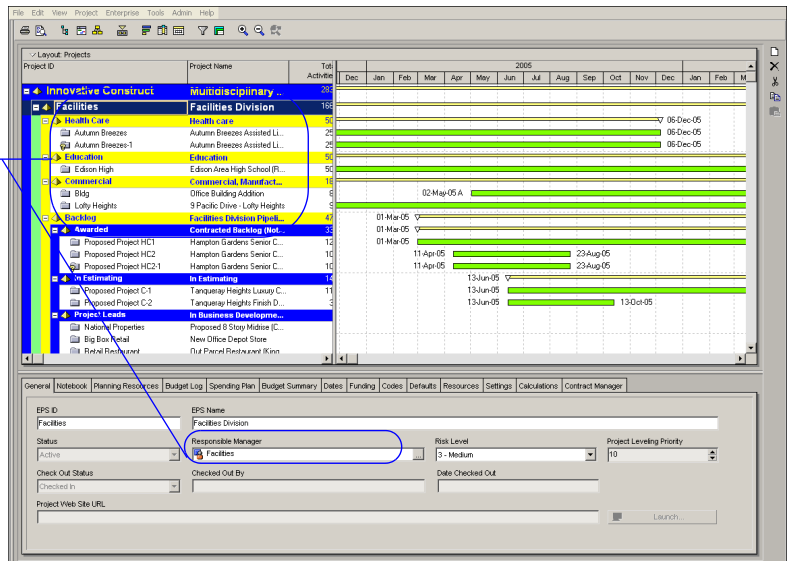
EPS の同じノードに複数のユーザが責任を負う場合は、それらのユーザを対象の OBS ノードに割り当てなければなりません。

セキュリティ権と特権を有効にするため、EPS の各ノードに責任マネージャを指定しなければなりません。Project Management モジュールは、設定しない限り、OBS ルートをすべてのノードの既定として使います。



「プロジェクト」画面でも責任マネージャを割り当て／レビューすることもできます。[エンタープライズ]、[プロジェクト] を選択し、[全般] タブをクリックします。

この OBS ノードに割り当てられたユーザは、Apex プロジェクトノードとそれ以下のすべてのノード／プロジェクトにアクセスすることができます。



EPS と OBS 構造を定義し、EPS レベルでセキュリティを設定できたら、プロジェクトマネージャは階層に自身のプロジェクトを追加し始めることができます。プロジェクト内でさらにセキュリティ管理を行うには、プロジェクトマネージャは WBS レベルに、特定の OBS ノードを割り当てることができます。さらなる情報については、*Project Management* リファレンスマニュアルの「エンタープライズプロジェクトストラクチャの設定」と「ワークブレイクダウンストラクチャのレビュー」を参照してください。

リソースへのユーザアクセスの定義

リソースセキュリティによって、リソースへのユーザアクセスを制限することができます。各ユーザは、リソース階層で、すべてのリソースへのアクセス権、限られた数のリソースへのアクセス権、あるいはまったくアクセス権なしに設定することができます。アクセスを限られた数のリソースに制限するには、各ユーザのルートリソースを、リソース階層の 1 つのリソースに割り当てることで指定します。階層の割り当てられたリソース位置でユーザのリソースアクセス権が決まります。ユーザがログインすると、リソース階層は割り当てられたリソースとその子階層が表示されます ユーザのルートリソース外のリソースは表示されません。



リソースアクセスが制限されたユーザでも、適切なプロジェクト権限があれば、すべての現在のすべてのプロジェクトリソース割り当てを表示し編集することができます。

各ユーザには、以下の 3 種のリソースアクセス権の 1 つが割り当てられます。

- **すべてのリソースアクセス権**では、リソースセキュリティが無効となり、すべてのリソースへのアクセスが許容されます。これは、アップグレードされるユーザには既定のオプションです。管理スーパーユーザには、オプションの選択にかかわらず、常にすべてのリソースアクセス権があります。
- **リソースアクセス権なし**では、すべてのリソースへのアクセスができません。これは、新規ユーザには既定のオプションです。リソースアクセス権がないので、ユーザはリソースディクショナリでまったくグローバルリソースデータを表示することができません。
- **リソースノード**では、1 つの選ばれたリソースと、リソース階層でのそのすべての子リソースにアクセスすることができます。このアクセスが制限されたユーザは、アクセス権があるリソースのグローバルリソースデータを表示することができます。



各ユーザには、1 つのリソースノードだけを割り当てることができます。複数のリソースノードを割り当てることはできません。

以下の例で、様々なユーザにルートリソースが割り当てられる
ているときのリソースアクセスの決定の仕方を示します。

USER1 にアクセス制限があり、ルートリ
ソース SADM が割り当てられている場合、
USER1 はリソースディクショナリにある
これらのリソースのみを見ることができ
ます。

USER2 にアクセス制限があり、ルートリ
ソース SJPP が割り当てられている場合、
USER2 はリソースディクショナリにある
これらのリソースのみを見ることができ
ます。

USER3 にリソースアクセス権がまったく
無い場合は、USER3 はリソースディク
ショナリのリソースをまったく見ること
ができません。

SYSDEV Systems Development	
MIS Management Information Systems	
SADM System Administration	
JSAN John Sanford	
FWIL Frederick Williams	
RCAR Robert Carroll	
EJOH Edward Johnson	
MLAW Mary Lawrence	
IDEV In-House Development	
DHAN Donna Hansen	
CNOR Charles North	
SARN Susan Arnold	
BMCA Bob McArthur	
SUPP Help Desk Support	
FTAN Fred Tanner	
JSPN Jon Spooner	
PM Project Office	
JMCD John McDougal	
FLEE Frank Lee	
JBRU John Brunner	
HCUR Haskell Curry	
AKIR Alanzo Kirche	
GSCH Gretchen Schantz	

リソース階層の設定に関する情報については、**Project Management リファレンスマニュアル**の「リソースとロールの定義」を参照してください。

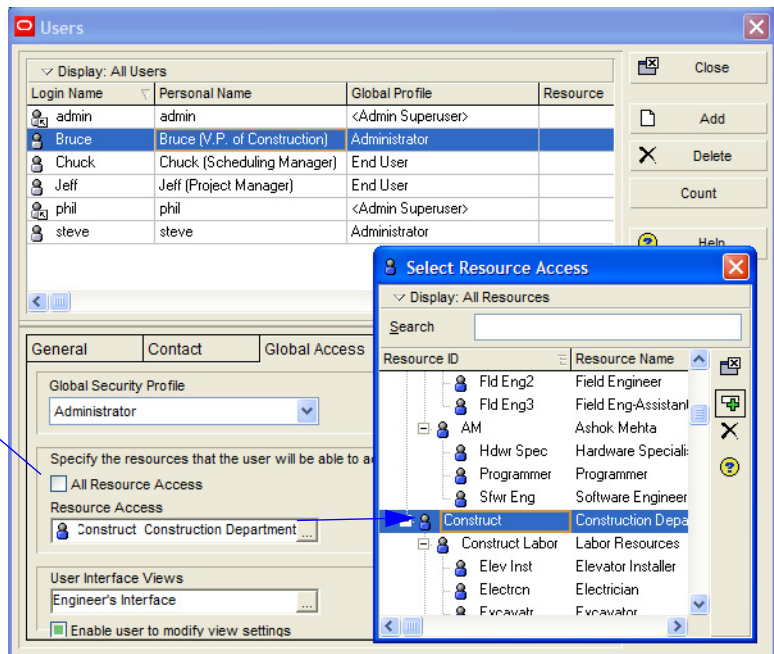
リソースセキュリティの実行 リソースセキュリティを実行するには、先ず各ユーザを単一のリソースノードに割り当てることできるように、リソース階層を設定する必要があります。例えば、リソースセキュリティを使い、同じ部門または地域に属していないユーザのリソースへのアクセスを制限することができます。この場合、各部門または地域ごとに別のブランチをもつリソース階層を作成します。リソース階層の作成が完了すると、以下のステップに従って、リソースセキュリティを実施することができます。

- 1 Project Management モジュールで、[管理]、[ユーザ] を選択します。

ユーザダイアログが、リソースアクセス条件に適合したユーザのリストを表示します。

「全リソースアクセス」および「リソースアクセス」の列を表示し、リソースアクセス設定の入力あるいは編集ができます。これら2つの列には、[グローバルアクセス] タブと同じリソースセキュリティ情報が表示されます。

ユーザに全リソースへのアクセス権を付与したい場合は、そのユーザを選択し、[全リソースアクセス] を選択します。ユーザのリソースアクセス権を特定のリソースノードに制限したい場合は、[ブラウズ] ボタンをクリックして、ユーザにアクセス権を与えたいリソースノードを選択します。



- 2 [グローバルアクセス] タブを選択します。
- 3 リソースセキュリティを設定したいユーザを選択します。
1 度には1 人のユーザだけを選択できます。

管理スーパーユーザではリソースアクセス設定は無視されます。管理スーパーユーザは、常に全リソースのアクセスができます。

- 4 選択したユーザのリソースアクセスを以下のように設定します。
 - 選択したユーザに全リソースアクセスを付与するには、[全リソースアクセス] チェックボックスをマークします。
 - 選択したユーザのリソースアクセスを単一のリソースノードに制限する場合は、[全リソースアクセス] チェックボックスのマークを外します。その後、「リソースアクセス」フィールドの [ブラウズ] ボタンをクリックし、リソースを選択します。
 - 選択したユーザにリソースアクセス権を付与したくない場合は、[全リソースアクセス] チェックボックスのマークを外し、「リソースアクセス」フィールドでリソースが選択されていないことを確認します。

P6 Web Access 機能へのユーザアクセスの定義

ユーザインタフェース画面と P6 Web Access でのユーザインタフェース画面の作成と割当に関する詳細手順については、P6 Web Access のヘルプを参照してください。

モジュールアクセスとセキュリティ権限に加え、ユーザインタフェース画面を使って P6 Web Access 機能へのアクセスをさらに管理することができます。ユーザインタフェース画面は、あらかじめ定義されたタブ、ページおよびアクションメニュー項目のセットであり、その画面を割り当てられたユーザは、P6 Web Access の各セクション（ダッシュボード、ポートフォリオ、プロジェクト、リソース）にアクセスすることができます。組織の中で各ロールによって遂行される職務に対応する、ユーザインタフェース画面を複数作成することができます。あるいは、各個別ユーザのニーズを満たすユーザインタフェース画面を作成することもできます。ユーザインタフェース画面は、P6 Web Access でのみ定義することができますが、ユーザに割り当てるのは、P6 Web Access および Project Management モジュールのどちらから行うことができます。



最低 1 つのユーザインタフェース画面を P6 Web Access ユーザの既定表示として指定しなければなりません。既定画面は、ユーザインタフェース画面が割り当てられていない新規ユーザのみに適用され、機能へのユーザアクセスを制限します。ユーザインタフェース画面が割り当てられていない既存の P6 Web Access ユーザは、全機能へのアクセスが可能です。

P6 Web Access で、ユーザインタフェース画面を作成する場合は、ユーザインタフェース画面に対応する機能が簡単に区別できるようにわかりやすい名前をつけます。

ユーザインタフェース画面の作成は、セキュリティを強化し、ユーザがプロジェクト作業とプロジェクト管理を実行する際、機能へのアクセスがより簡単にできるようになる便利な方法です。例えば、幹部はすべてのプロジェクト情報にアクセスする必要はありませんが、その 1 部にアクセスする必要があります。例えば、幹部はすべてのプロジェクト情報にアクセスする必要はありませんが、その 1 部にアクセスする必要があります。

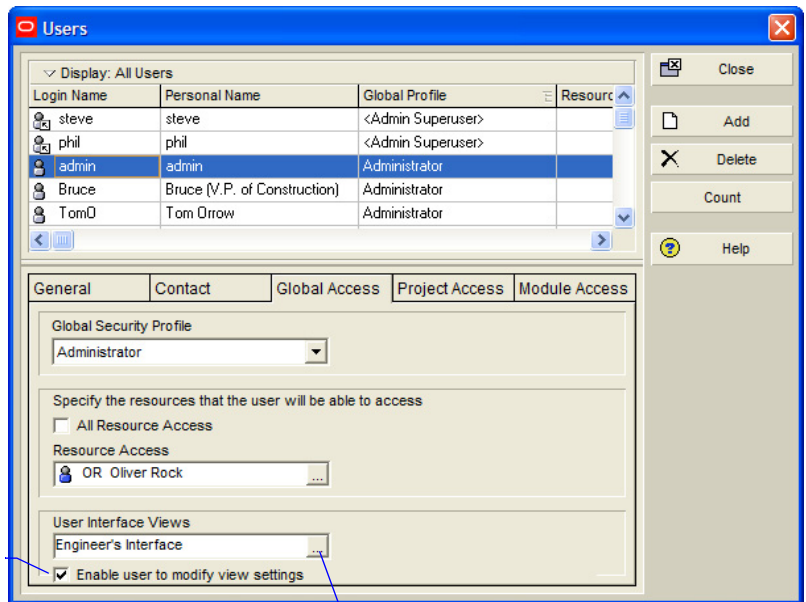


ユーザに付与されたモジュールアクセスとセキュリティ権限の設定は、常にユーザに割り当てられたユーザインタフェース画面に優先します。例えば、ユーザに Web Access Resources モジュールアクセスがあり、Web Access Portfolios モジュールアクセス権はない場合、このユーザのユーザインタフェース画面で Portfolios 機能が有効になっていたとしても、このユーザは、P6 Web Access アプリケーションの Portfolios セクションの機能にはアクセスできません。さらに、Team Member モジュールアクセスのみをもつユーザにユーザインタフェース画面を割り当てた場合、その表示設定は無視されます。Team Member ユーザが利用できる機能は常にモジュールアクセス権によって制御されます。Team Member ユーザが利用できる機能についてのさらなる情報は、362 ページの「[Team Member ログイン権により可能となるユーザアクセス](#)」を参照してください。

また、ユーザインタフェース画面を使って、会社で使わない P6 Web Access 機能を非表示にすることができます。例えば、会社が時間の報告に P6 Progress Reporter を使っていない場合はダッシュボードセクションの [タイムシート承認] アクションメニュー項目を非表示にできます。

Project Management モジュールでユーザインタフェース画面をユーザに割り当て [管理]、[ユーザ] を選択します。ユーザインタフェース画面を割り当てたいユーザを選択して、[グローバルアクセス] タブをクリックします。ユーザインタフェース画面セクションで、[ブラウズ] ボタンをクリックして、[ユーザインタフェース画面] を選択します。ユーザに、P6 Web Access の表示設定で、個人のユーザインタフェース画面設定の変更を許可する場合は、[ユーザによる画面オプションの変更を許可] チェックボックスをマークします。

ユーザインタフェース画面で、P6 Web Access のカスタマイズを行うことに加え、プロトタイプユーザを作成し、既定のダッシュボードとグローバル設定の指定を行うことができます。367 ページの「[プロトタイプユーザの追加と P6 Web Access の既定設定の定義](#)」を参照してください。



このチェックボックスをマークし、選択されているユーザに、割り当てられている画面での設定の変更を許可します。ユーザがユーザインタフェース画面設定を変更しても、同じ画面に割り当てられた他のユーザの設定には影響しません。

クリックして、ユーザインタフェース画面を選択します。

Methodology Management モジュールのセキュリティ設定

Methodology Management モジュールは、独自のユーザ、グローバル設定、メソドロジ設定を使用して、Methodology Management データへのアクセスを管理します。このセキュリティデータは、Methodology Management データベースに保存されます。

Project Management と Methodology Management モジュール間ではセキュリティデータは共有していません。Methodology Management では、独自の OBS、ユーザ、グローバル設定、メソドロジ設定とモジュールアクセスを使用します。

Methodology Management におけるセキュリティモデルは、Project Management モジュールとは異なっています。同時に開けるのは、1 つのメソドロジのみで、EPS はありません。ユーザとメソドロジ設定は、OBS ノードに割り当ててすることはできません。メソドロジ設定は、ユーザに直接割り当てられ、メソドロジへのユーザアクセスを許容します。

本セクションでは、Methodology Management モジュールでのセキュリティ設定とユーザの作成プロセスを説明します。

グローバル設定の作成 Methodology Management モジュールで、[管理]、[セキュリティ設定] を選択します。[グローバル設定] を選択し、[追加] をクリックします。新しい設定名をタイプします。新しい設定を既定のグローバル設定とするには、[既定] チェックボックスをマークします。[権限] エリアで、適宜 [権限あり] チェックボックスにマークし、設定に権限を付与します。

グローバル設定
を選択します…

…そして、その設
定に付与された権
限を確認します。

クリックする
と、権限をアル
ファベット順に
表示できます。

Privilege	Has Privilege
Edit Security Profiles	<input type="checkbox"/>
Edit Users	<input type="checkbox"/>
Edit Admin Preferences and Categories	<input checked="" type="checkbox"/>
Create New / Copy Methodology	<input checked="" type="checkbox"/>
Edit Resources	<input checked="" type="checkbox"/>
Edit Roles	<input checked="" type="checkbox"/>
Edit Work Products and Documents	<input checked="" type="checkbox"/>
Import Global / Methodology Information	<input checked="" type="checkbox"/>
Edit Reports	<input checked="" type="checkbox"/>

以下の表で、各グローバル権を定義します。



以下に、各権限を機能別にまとめた表を示します。権限は、[セキュリティ設定] ダイアログボックスで表示される順に掲載してあります。[セキュリティ設定] ダイアログボックスで権限をアルファベット順に表示するには、前の画面に示す権限バーをクリックします。



P6 で新規に追加された、あるいは変更された権限については、アスタリスク (*) が付記されています。

権限名	権限の定義
セキュリティ設定の編集	セキュリティ設定情報を変更します。
ユーザの編集	Methodology Management モジュールユーザの作成と削除、およびユーザアクセス許可を変更します。
管理設定および分類の編集	[管理設定] ダイアログボックスで定義された、管理設定の変更を行います。[管理分類] ダイアログボックスで定義された管理分類の作成、変更、削除を行います。[通貨] ダイアログボックスで通貨データの編集を行います。
メソドロジの新規作成／コピー	メソドロジの作成、インポートまたはコピーを行います。
リソースの編集	リソース階層のノードの作成、削除、変更を行います。
ロールの編集	ロール情報の作成、削除、変更を行います。
作業成果物とドキュメントの編集	作業成果物とドキュメントレコードの作成、削除、変更を行います。
グローバル／メソドロジ情報のインポート	グローバルおよびメソドロジ情報をインポートします。
レポートの編集	レポートの作成、編集、削除とレポートウィザードでレポートを保存します。
アクティビティ属性の編集	アクティビティ属性の作成、変更、削除を行います。
アクティビティコードの編集	グローバルアクティビティコードとコード値の作成、変更、削除を行います。
見積ファクタの編集	見積ファクタの作成、変更、削除を行います。
リソース単価の表示	リソース価格を表示します。
アクティビティレイアウト／フィルタの編集	グローバルアクティビティレイアウトとフィルタの作成、削除、変更を行います。
OBS の編集	組織ブレイクダウンストラクチャ情報の作成、削除、変更を行います。

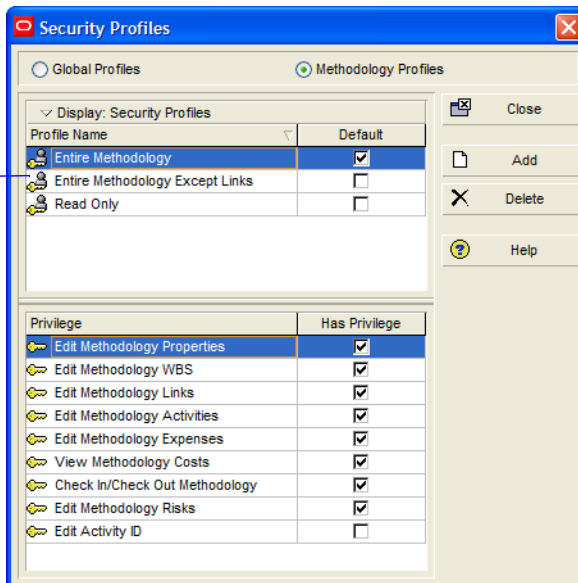
権限名

権限の定義


メソドロジ/リソース コード編集	メソドロジコードとリソースコードの作成、削除、変更を行います。
ユーザ定義フィールド の編集	ユーザ定義フィールドの作成、編集、削除を行います。この権限のないユーザは、ユーザ定義フィールドの表示はできません。
ステップテンプレート の編集	複数のアクティビティに対する一連の共通ステップを追加するのに使用する、アクティビティステップテンプレートの作成、編集、削除を行います。

メソドロジ設定の作成 [管理]、[セキュリティ設定]を選択します。[メソドロジ設定]を選択し、[追加]をクリックします。新しい設定名をタイプします。新しい設定を既定のメソドロジ設定とするには、[既定] チェックボックスをマークします。[権限] エリアで、適宜 [権限あり] チェックボックスにマークし、設定に権限を付与します。

会社内のさまざまな
ロールに対し、作成
できるメソドロジ設
定数には制限があり
ません。




以下の表で、各メソドロジ権を定義します。

 P6 で新規に追加された、あるいは変更された権限については、アスタリスク (*) が付記されています。

権限名	権限の定義
メソドロジ属性の編集	[メソドロジプロパティ] ダイアログボックスに定義されたように、メソドロジプロパティの作成、削除、変更を行います。
メソドロジ WBS の編集	メソドロジのワークブレイクダウンストラクチャ (WBS) ノードとバージョンの作成、削除、変更を行います。
メソドロジリンクの編集	ユーザに、リンクする両方のメソドロジに対してこの権限があれば、メソドロジリンクの作成、削除、変更を行います。
メソドロジアクティビティの編集	アクティビティとアクティビティ情報の追加、変更、削除を行います。
メソドロジ経費の編集	経費の追加、変更、削除を行います。
メソドロジコストの表示	メソドロジコスト情報を表示します。
メソドロジコストのチェックイン／チェックアウト	Methodology Management モジュールからのメソドロジのチェックインおよびチェックアウトを行います。
メソドロジリスクの編集	メソドロジリスクの作成、削除、変更を行います。
アクティビティ ID の編集	メソドロジアクティビティ ID の編集を行います。

新規ユーザの追加 [管理]、[ユーザ] を選択します。「追加」をクリックします。

- [管理設定] でパスワードポリシーが有効になっていない場合は、[全般] タブをクリックしてユーザのログイン名と個人名を入力し、[パスワード] をクリックします。ユーザのパスワードをタイプし、さらにもう一回パスワードをタイプし直して確認します。「OK」をクリックします。
- [管理設定] でパスワードポリシーが有効になっている場合は [ユーザの追加] ダイアログボックスが表示されます。ログイン名、個人名、新規パスワードの入力、新規パスワードの確認の各フィールドに入力する必要があります。「OK」をクリックします。

 管理設定の詳細については、414 ページの「既定設定の定義」を参照してください。



Methodology Management モジュールがLDAP 認証モードで実行されている場合は、[追加] をクリックすると、ダイアログが現れ、ユーザ名を入力してそれをLDAP ストアと照合するように求められます。テストをクリックすると、LDAP ストアにユーザが存在していれば、実際の名前、E メールアドレス、電話番号フィールドで埋められます。これは認証設定ツールでそれらのフィールドが事前に対応付けされている場合です。ユーザを追加するには、[追加] をクリックします。[テスト] をクリックしてユーザがLDAP ストアに見つからない場合は、ユーザを追加できない旨を通知するメッセージが表示されます。



会社がユーザ情報をLDAP ディレクトリに集中管理している場合は、P6 ユーザをLDAP ストアからプロビジョニングして追加することができます。さらなる詳細については、309 ページの「[認証モードの設定](#)」を参照してください。ユーザをプロビジョニングしたあと、各ユーザにセキュリティ設定を割り当てる必要があります。

Methodology Management
モジュールにアクセス権の
あるユーザの一覧を表示し
ます

Methodology Management
モジュールにログインする
のに必要な名前を明らかに
します

Methodology Management
モジュールがLDAP 認証
モードで実行されている場
合は、[パスワード] ボタン
は表示されません。

Display: All Users	Login Name	Personal Name	Global Profile
(New User)	(New User)	All Except Users & Profiles	
admin	Administrator	<Admin Superuser>	
phil	Administrator	<Admin Superuser>	
steve	Administrator	<Admin Superuser>	

General

Methodology Profiles

Login Name

Personal Name

(New User)

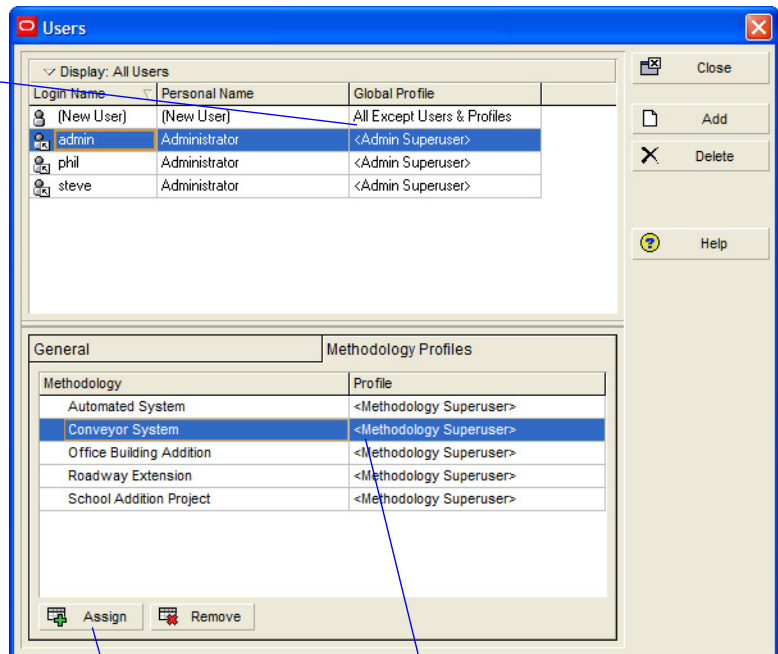
(New User)

Password

モジュールアクセス Methodology Management モジュールでは、モジュールアクセスを割り当てる必要はありません。Project Management モジュールのユーザへは、Methodology Management モジュールへのアクセス権が自動的に付与されます。

グローバル設定とメソドロジ設定の割当 グローバル設定は、リソースやロールなどのグローバルデータに対するユーザのアクセス権を決めます。メソドロジ設定は、メソドロジデータに対するユーザアクセスを制限します。Methodology Management モジュールでは、各ユーザにグローバル設定がされていることが要求されます。メソドロジを開くには、ユーザはそのメソドロジに対するメソドロジ設定が割り当てられていなければなりません。[管理]、[ユーザ] を選択します。グローバル設定とメソドロジ設定を割り当てたいユーザを選択します。[メソドロジ設定] タブをクリックします。

[グローバル設定] 列をダブルクリックして、選択したユーザに適した設定を選ぶことができます。



クリックして、ユーザがアクセスに必要なメソドロジを選択します…

…[設定] 列をダブルクリックして、選択したユーザにメソドロジ設定を選びます。



Methodology Management モジュールには管理スーパーユーザグローバル設定も含まれます。これには、すべてのグローバル情報とメソドロジへの完全なアクセスが許容されています。



メソドロジスーパーユーザ設定は、メソドロジのすべての側面での読み書き権限が与えられています。管理スーパーユーザ権限のあるユーザには、自動的にすべてのメソドロジに対するメソドロジスーパーユーザアクセス権が付与されています。ユーザが新規メソドロジを作成すると、そのユーザには自動的にそのメソドロジに対するメソドロジスーパーユーザ設定が与えられます。

Project Management での管理設定と分類の定義

本章の内容：

既定設定の定義

標準的な分類と値の定義

通貨の定義

報告期間の定義

Project Management では、エンタープライズプロジェクトストラクチャ(EPS)のあらゆるプロジェクトに適用されるパラメータや値をモジュール全体で定義できます。この設定を使うと、特定のプロジェクト管理要件や規格を満たすようモジュールをカスタマイズできます。このような設定はあらゆるユーザが閲覧できますが、これを編集する特別なセキュリティ権限を得られるのは1人だけです。

本章では、指定できる設定のタイプについて説明します。「管理設定」は、既定の設定です。「管理分類」は、あらゆるプロジェクトに適用される標準的な値です。また、「通貨」には、データベースにコストを保存するための基本通貨と、ウィンドウやダイアログボックスにコストを表示するための表示通貨があります。

また、本章では、報告期間を定義し、報告期間ごとにアクティビティや割当の進捗状況を計画、記録する方法についても説明します。

既定設定の定義

「管理設定」の各フィールドの詳細な情報が必要な場合は、「管理設定」ダイアログボックスの「ヘルプ」をクリックしてください。

「管理設定」ダイアログボックスを利用すると、プロジェクト管理コーディネータによる既定の設定を指定できます。「管理」、「管理設定」を選択します。

全般情報「全般」タブを使うと、カレンダー上の週の最初の日など一般的な既定オプションを指定できます。また、リソースやプロジェクト、アクティビティコード、ルール、WBS ノードで階層レベルを分離するために使用する文字を変更することもできます。

グローバル、プロジェクト、リソースカレンダーの週の初日

あらゆるプロジェクトにおける新規アクティビティの既定所要期間。新規アクティビティの追加プロセスを簡素化

チェックマークを入れると、新しいまたは変更したパスワード用に強力なパスワードポリシーを有効にできます。クリアになっている場合、パスワードは 0 ～ 20 字の文字または数字になります。

Code Separator
Specify the character for separating concatenated codes. It is also the default WBS code separator for new projects.

Code Separator

Starting Day of Week
Specify the starting day of the week for calendars.

First day of week

Activity Duration
Specify the default duration for new activities.

Default Duration

Password Policy
The Password Policy requires a minimum length of 8 characters and at least one number and one letter in a user's password.

☐ Enable password policy

ルールやリソースコード、プロジェクトコード、コストアカウント、アクティビティコードで階層レベルを分離する文字。あらゆる新規プロジェクトにおける WBS コードの既定区切文字でもあります。WBS コード区切文字は「プロジェクト詳細」の「設定」タブで特定のプロジェクト用に入力できます。



週の最初の日は、1 週間の日にちがグラフやスプレッドシートなど週間のタイムスケールを示すレイアウトに表示される方法に影響を与えます。例えば、水曜日が週の最初の日の場合、「アクティビティ稼働グラフ」では 1 週間は「WTFSSMT」と表示されます。

Progress Reporter モジュールのインストールと設定の詳細については、113 ページの「**P6 Progress Reporter のインストール**」と 427 ページの「**P6 Progress Reporter の実装**」を参照してください。

Timesheets 「タイムシート」タブを使うと、Progress Reporter モジュールを使用する際の既定設定オプションを指定できます。一般的なタイムシート設定、およびプロジェクトデータが更新される前のタイムシートが承認される方法を指定できます。



「タイムシートの監査を有効にする」設定も Progress Reporter Administrator から利用できます。

全般設定セクションには以下のオプションがあります。

- **新規リソースは既定でタイムシートを使用** 特に指定しない限り、新規リソースは Timesheets を使用することを要求する場合にマークします。
- **リソースは既定で自身をアクティビティに割当可能** すべての新規に作成したプロジェクトがリソースに自身でアクティビティの割り当てを行うことを許容する場合にマークします。この設定の変更は、既存のプロジェクトには影響しません。新しい設定は、新規プロジェクトが作成されたときのみ適用されます。各プロジェクトでは、「プロジェクト詳細リソース」タブでこの設定を変更できます。
- **タイムシートの監査を有効にする** タイムシートの提出、承認、却下、レビュー担当者、関連のある日付の履歴を保存することができます。このオプションを選んだ場合は、履歴データを表示するために「タイムシートの履歴」という部分をタイムシートレポートに追加できます。

タイムシートの承認に関しての情報は、『Project Management リファレンスマニュアル』の「更新、スケジューリング、平準化」の章を参照してください。

タイムシートの承認レベルセクションには、以下のオプションがあります。

- **自動提出** これを選択すると、リソースのタイムシートが提出または承認される必要がないことを示します。実績を記入すると、Timesheet のデータは自動的にデータベースで更新されます。
- **自動承認** これを選択すると、リソースのタイムシートが管理者の承認を必要としないことを示します。タイムシートは、提出時に自動的に承認されます。
- **承認レベル 1** これを選択すると、リソースのタイムシートは、リソース／コストマネージャの承認が必要であることを示します。このオプションを選択すると、あらゆる提出済みタイムシートのステータスは、承認担当マネージャが当該ステータスを変更するまでは「提出済」のままになります。以前はプロジェクトマネージャとリソース／コストマネージャ双方の承認を必要としていた場合にこのオプションを選択すると、1 レベルの承認を受けた現行タイムシートすべてのステータスが「承認」に変わります。
- **承認レベル 2** これを選択すると、リソースのタイムシートは、プロジェクトマネージャとリソース／コストマネージャの承認が必要であることを示します。このオプションを選択すると、あらゆる提出済みタイムシートのステータスは、両マネージャがタイムシートを承認するまでは「提出済」のままになります。
- **プロジェクトマネージャがリソースマネージャの前に承認** 承認レベル 2 を選択した場合、これをマークするとプロジェクトマネージャがタイムシートの承認をリソース／コストマネージャの前に行う必要があることを示します。
- **タイムシート承認の既定リソースマネージャ** 特に変更しない限り、リソースのタイムシートを承認するマネージャ名。「ブラウズ」ボタンをクリックして新規マネージャを選択します。



Progress Reporter モジュールのユーザがタイムシートの提出を開始した後に承認レベルを低く設定すると、すべての現在提出済みのタイムシートは、変更を反映して改変されます。例えば、設定を承認レベル 2 から自動提出に変更すると、現在 1 人だけのマネージャに承認されたタイムシートを含むすべてのタイムシートは、提出・承認が不要と変更されます。そして Project Management データベースは実績が入力されると更新されます。

階層制限 「階層制限」タブを使用すると、階層構造レベルの最大数を指定できます。また、プロジェクトに含むことのできるベースラインとアクティビティコードの最大数も指定できます。

EPS と WBS における階層レベルの合計最大数は、1 が最低、50 が最高となります。

このような構造内の最大階層レベル数は、1 が最低、25 が最高となります。

プロジェクトにおけるアクティビティコードの最大数は、0 が最低、500 が最高となります。

プロジェクトにおけるベースラインの最大数は、無制限の数を入力できます。

プロジェクトにおいてコピーできるベースライン最大数。プロジェクトでコピーできるベースラインの最大数は、このフィールドに 1 から 50 までの数字を入力することができます。

Data Limits	
Specify the maximum number of levels for trees.	
EPS/WBS tree maximum levels	5
OBS tree maximum levels	8
Resources tree maximum levels	20
Role tree maximum levels	4
Cost Account tree maximum levels	8
Activity Code tree maximum levels	4
Resource Code tree maximum levels	4
Project Code tree maximum levels	4
Maximum activity codes per project	8
Maximum baselines per project	4
Maximum baselines copied with project	1



最大階層レベル数の設定を変更すると、新規ノードを追加したり既存ノードを編集したりした場合にのみ新規設定が適用されます。

ID 文字数 「ID 文字数」 タブを使うと、ID やコードの最大文字数を指定できます。

このような ID やコードの最大文字数は、1 が最低、20 が最高となります。

ID Lengths	
Specify the maximum number of characters to allow for ID fields at each tree level.	
Project ID maximum characters	20
WBS Code maximum characters	10
Resource ID maximum characters	10
Activity ID maximum characters	10
Cost Account ID maximum characters	10
Role ID maximum characters	10



ID またはコードの最大文字数を変更すると、新規 ID/ コードを追加したり既存の ID/ コードを編集したりする際に新しい文字数が適用されます。

期間 「Time Periods」タブを使用すると、稼働日、稼働週、稼働月、および稼働年あたりの既定時間数を定義し、または各期間の既定稼働時間数をカレンダーごとに定義することを指定できます。分、時間、日、週、月、年を表示するために略称を指定することもできます。

期間稼働時間の値は、ユーザが時間以外の単位で期間単位および期間を表示する際に、変換ファクタとして使用されます。例えば、既定の時間 / 日が 8.0 に設定されている場合にユーザが期間として 1d を入力すると、この値はデータベースに 8h として保存されます。

有効な入力範囲 : 1.0 ~ 168.0.

有効な入力範囲 : 1.0 ~ 744.0.

有効な入力範囲 : 1.0 ~ 24.0.

リソースとアクティビティに別の期間稼働時間の設定が必要になる場合は、このチェックボックスにマークを付けて、定義されているカレンダーごとに期間稼働時間を指定する必要があります。カレンダーごとにこれらを設定するには、「エンタープライズ」、「カレンダー」を選択します。

選択した期間単位や所要期間の表示形式を表示する際は、1 字の略語を入力します。

有効な入力範囲 : 1.0 ~ 8784.0.

Hours per Time Period

Specify the number of work hours for each time period.

Hours/Day	Hours/Week	Hours/Month	Hours/Year
<input type="text" value="8.0"/>	<input type="text" value="40.0"/>	<input type="text" value="172.0"/>	<input type="text" value="2000.0"/>

☐ Use assigned calendar to specify the number of work hours for each time period

Time Period Abbreviations

Specify the abbreviation for each time period.

Minutes	Hours	Days
<input type="text" value="n"/>	<input type="text" value="h"/>	<input type="text" value="d"/>
Weeks	Months	Years
<input type="text" value="w"/>	<input type="text" value="m"/>	<input type="text" value="y"/>

「ユーザに各期間毎の特定の時間数の入力を許可」チェックボックスのマークを外すと、このタブで指定する期間稼働時間の値は、期間単位と所要期間を変換するために常に使用されます。

「ユーザに各期間毎の特定の時間数の入力を許可」チェックボックスにマークを付けると、このタブの期間稼働時間の設定は無視されます（ほとんどの場合）。モジュールは、アクティビティまたはリソースに割り当てられたカレンダーで定義されている期間稼働時間の設定を使用して期間単位と所要期間を変換します。タスク依存アクティビティを例として使用すると、モジュールは、アクティビティに割り当てられたカレンダーで定義されている設定を使用してアクティビティの期間単位と所要期間を変換します。



「ユーザに各期間毎の特定の時間数の入力を許可」チェックボックスにマークを付けても、「期間」タブで各期間について値を入力する必要があります。シナリオによっては、管理設定も変換ファクタとして使用されます。

カレンダーを使用して期間稼働時間の設定を定義

P6 は、時間単位で値を計算して保存しますが、ユーザは日または週などのその他の増分を設定して期間単位を表示できます。期間稼働時間に設定された値は、増分を他の期間単位に変換して表示するために使用し、時間以外のすべての増分値は時間に変換してデータベースに保存されます。管理者は、「管理設定」の「期間」タブで期間稼働時間をグローバルに定義できますが、期間稼働時間をカレンダーごとに定義するように指定することもできます。

期間稼働時間をカレンダーごとに定義すると、期間単位と所要期間をより正確に表示できます。期間稼働時間をグローバルに定義し、ユーザが期間単位や所要期間を時間以外の増分で表示するように指定していると、管理者による期間稼働時間の設定がカレンダーでアクティビティとリソースに割り当てられた稼働時間に一致しない場合に、予期しない値が表示されることがあります。これは、表示がアクティビティまたはリソースのカレンダーによって定義された 1 日あたりの時間数ではなく、「管理設定」の「期間稼働時間」の設定の変換ファクタを反映しているために発生します。例えば、以下のような状況を想定してください。

ユーザ設定、期間単位 = 日

管理設定、期間稼働時間 = 8 時間 / 日

アクティビティカレンダー、1 日あたりの稼働時間 = 10h/d

ユーザの入力したアクティビティ期間 = 30 時間

実際の期間表示 = 3 日 6 時間 (30 時間の期間 / 1 日当たり 8 時間、「管理設定」で設定された変換ファクタに基づく)

期待される期間表示 = 3 日 (30 時間の期間 / 1 日当たり 10 時間、アクティビティのカレンダーで設定された変換ファクタに基づく)

予期しない結果が表示されないようにするには、「管理設定」の「期間」タブの「ユーザに各期間毎の特定の時間数の入力を許可」チェックボックスにマークを付けます。次に、定義されている各カレンダーに対して期間稼働時間を指定し、カレンダーを該当するアクティビティとリソースに割り当てます。

アーンドバリュ 「アーンドバリュ」タブを使うと、アーンドバリュを計算する既定の設定を指定できます。「ワークブレイクダウンストラクチャ詳細」の「アーンドバリュ」タブで特定の WBS ノードの設定を変更できます。

「アーンドバリュ」タブのフィールドの詳細については、『Project Management リファレンスマニュアル』を参照してください。

アーンドバリュの計算に使用するベースライン値のタイプを選択します。

Technique for computing performance percent complete

☐ Activity % Complete
 ☐ 50/50 % Complete
☒ Use WBS Milestones
 ☐ Custom % Complete
☐ 0/100 % Complete

Technique for computing Estimate to Complete (ETC)

☐ ETC = remaining cost for activity
 or
 $ETC = PF * (Budget\ at\ Completion - Earned\ Value)$, where:

☒ PF = 1
☐ PF = 1 / Cost Performance Index
☐ PF = 1 / (Cost Performance Index * Schedule Performance Index)
☐ PF =

Earned value calculation

When calculating earned value from a baseline use

レポート 「レポート」タブを使うと、最高3セットのレポートのヘッダ、フッタ、カスタムラベルを定義できます。

ヘッダ、フッタ、カスタムテキストラベルから成るセットを定義するために選択します。

次に、当該セットのヘッダ、フッタ、カスタムレベル用のカスタムテキストを指定します。

Report Headers and Footers

Specify three sets of header, footer, and custom labels to place on application reports.

☒ First Set
 ☐ Second Set
 ☐ Third Set

Header Label 1

Footer Label 1

Custom Label 1

オプション 「オプション」タブを使うと、アクティビティやリソース/ロール用にコストや定量サマリを計算する間隔を指定できます。カレンダー間隔、報告期間の間隔、またはその双方を利用できます。選択した間隔に応じて、チャートやスプレッドシートに表示できるデータが決まります。このようなチャートやスプレッドシートでは、P6 Web Access や Project Management モジュールで集計されたアクティビティや割当データが表示されます。カレンダー間隔のオプションがデフォルトで選択されています。カレンダー間隔で集計しないよう選択できますが、これはほとんどの企業では推奨されません。

チャートやスプレッドシートで、P6 Web Access ユーザが報告期間のタイムスケール間隔でアクティビティと割当データ（現時点実績および過去の期間実績の双方）を表示できるようにするには、報告期間による集計を選択します。このオプションを選ぶと、Project Management モジュールの報告期間タイムスケール間隔は格納中のプロジェクトの集計済みの現時点実績値を正確に表示します。



P6 バージョン 6.0 から P6 Web Access バージョン 7.0 にアップグレードした後に集計の設定を変更すると（例えば、「報告期間別」オプション）、すべてのプロジェクトを集計しても無視されるプロジェクトが出てきます。特に、アップグレードの前に集計され、それ以降は変更されていないプロジェクトは、すべてのプロジェクトを集計しようとしても集計できません。

このようなプロジェクトの報告期間データの集計を含むには、アップグレード後にこれらのプロジェクトの既存集計データを削除して、各プロジェクトを集計する必要があります（個々に、またはジョブサービスによって集計します）。ひとつのプロジェクトの集計データを削除するには、Project Management の [プロジェクト] ウィンドウでプロジェクト名を右クリックし、[プロジェクト集計の削除] を選択します。

カレンダーおよび報告期間間隔の双方で集計を行うと、サマライザジョブの実行時間が増えます。パフォーマンス上の問題が発生した場合は、250 ページの「[ジョブサービスレジストリの設定](#)」を参照して、サマライザパフォーマンスの改善方法に関する情報を入手してください。



データを報告期間別に集計する場合でも、報告期間タイムスケールを表示できるよう P6 Web Access ユーザ向けに報告期間を適切に定義する必要があります。報告期間の設定については、410 ページの「[報告期間の定義](#)」を参照してください。



報告期間間隔で集計することを選択し、ユーザが報告期間タイムスケールを表示する場合に格納中のプロジェクトのデータを含めたい際は、格納中のプロジェクトを各々1回集計する必要があります。プロジェクト集計の詳細については、『Project Management リファレンスマニュアル』を参照してください。

Project Architect を使ってアクティビティを追加したり新規プロジェクトを作成したりするためにユーザがメソドロジにアクセスできるかどうか選択できます。ユーザが Project Management からコンテンツリポジトリドキュメントや Timesheet Approval アプリケーションを起動できるようにするには、URL を P6 Web Access サーバに入力します。ワークフロー管理者は、P6 Web Access のワークフローテンプレート（プロジェクトの要求に使用）を管理する Web ユーザです。「ブラウズ」ボタンをクリックして選択します。さらに、このタブを使うと Contract Manager モジュール（旧称 Expedition）へのリンクを設定できます。

アクティビティのコストや量を集計する間隔。

このオプションを選択すると、ユーザは P6 Web Access でサマリデータを表示したり、報告期間タイムスケール間隔で高レベルの計画割当を編集したりできるほか、Project Management モジュールで正確なデータが報告期間タイムスケール間隔で表示されるよう確認できます。

ユーザが Project Management からコンテンツリポジトリドキュメントや Timesheet Approval アプリケーションを起動できるようにするには、URL を P6 Web Access サーバに入力します。

Specify the interval to summarize and store resource spreads

Select summarization periods

☒ By calendar

VBS Level
Week

Resource/Role Assignment Level
Week

☐ By financial period

Project Architect

☒ Allow use of Project Architect

Web Access Server URL

http://P6WA/ServerName:port_number/context_x

Workflow Administrator

admin Administrator

Contract Management URL

☒ Enable Link to Contract Management

http://<serverIP>:<listenport>

リソース/ロール割当のコストや量を集計する間隔。

Contract Management Web サーバの URL を入力します。URL にはサーバ名（または IP アドレス）を含む必要があります。既定ポートである「80」を使用しない場合はポート番号も必要です。








Contract Management へのリンクを設定すると、Contract Management プロジェクトへのリンクを作成してプロジェクトレベルのデータをインポートしたり表示したりできます。詳細については、『Project Management リファレンスマニュアル』を参照してください。

単価タイプ 「単価タイプ」タブを使うと、利用可能な 5 つの「単価」フィールドにそれぞれタイトルを付けられます。タイトルは単価タイプの内容を説明したものでなくてはなりません。単価タイプがリストや列で表示される場合に定義した単価タイプのタイトルも表示されます。

このようなタイプの単価には新たなタイトルを定義できます（「商業用単価」や「政府用単価」など）。

Resource and Role Rate Types

Specify titles for Resource and Role Rate Types.

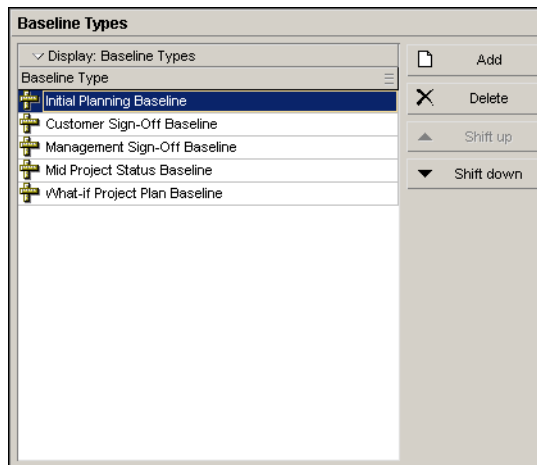
Default Title	User-defined Title
 cost_per_qty	Price / Unit
 cost_per_qty2	Price / Unit2
 cost_per_qty3	Price / Unit3
 cost_per_qty4	Price / Unit4
 cost_per_qty5	Price / Unit5

標準的な分類と値の定義

「管理分類」ダイアログボックスを使うと、あらゆるプロジェクトに適用できる標準的な分類と値を定義できます。「管理」、「管理分類」を選択します。

ベースラインの詳細については、『Project Management リファレンスマニュアル』を参照してください。

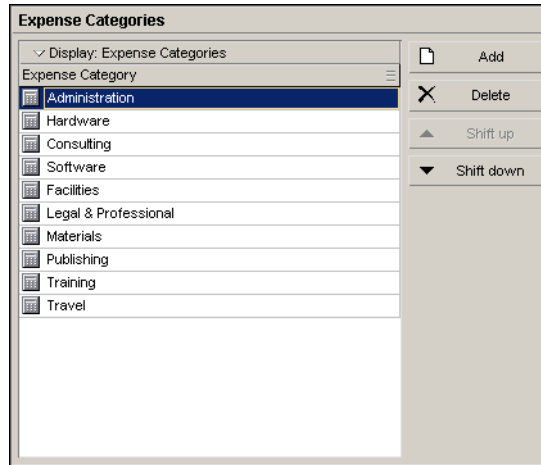
ベースラインタイプ 「ベースラインタイプ」タブを使用すると、ベースラインのタイプを作成、編集、削除できます。ベースラインタイプを利用すると、プロジェクト全体でベースラインを分類して標準化できます。ベースラインのタイプを変更するには、当該タイプをダブルクリックして新しい名前を入力してください。変更内容は、ベースラインが割り当てられるプロジェクトすべてに適用されます。



「上ヘシフト/下ヘシフト」ボタンをクリックすると、選択した分類/タイプを上下に移動できます。これにより割当の際に分類/タイプが表示される順序が変わります。このボタンは、リストがアルファベット順にソートされていない場合に限り利用できます。

経費の詳細については、『Project Management リファレンスマニュアル』を参照してください。

経費分類「経費分類」タブを使用すると、経費のカテゴリを作成、編集、削除できます。経費分類は、プロジェクト経費を分類して標準化したり、経費情報を整理、維持するために利用できます。経費分類を変更するには、当該分類をダブルクリックして新しい名前を入力してください。変更内容は、経費アイテムが割り当てられるプロジェクトすべてに適用されます。



WBS の詳細については、『Project Management リファレンスマニュアル』を参照してください。

WBS カスタム分類「管理分類」ダイアログボックスの 3 番目のタブを利用すると、カスタム WBS 分類と分類値を定義できます。タブには、定義した名前が表示されます。分類名を変更するには、右上にあるフィールドをクリックして新しい名前を入力してください。この分類を使うと、あらゆるプロジェクトで WBS 情報を整理、フィルタ、報告できます。分類値を変更するには、当該値をダブルクリックして新しい名前を入力してください。変更内容は、WBS アイテムが割り当てられるプロジェクトすべてに適用されます。



WBS 分類を変更しても、分類の値や値割当は変わりません。

WBS Category Project Phase

Display: WBS Categories

Category Value

- Project Management
- Requirements Definition
- Project Planning
- Design
- Implementation
- Testing
- Quality Assurance
- Deployment

Add

Delete

Shift up

Shift down

ドキュメント分類 「ドキュメント分類」タブを使うと、作業成果物やドキュメントの分類を設定してこの分類を「ドキュメント」ウィンドウのドキュメントや「アクティビティ詳細」の「ドキュメント」タブのアクティビティに割り当てられます。ドキュメントの分類を変更するには、当該カテゴリをダブルクリックして新しい名前を入力してください。変更内容は、ドキュメントが割り当てられるプロジェクトすべてに適用されます。

Document Categories

Display: Document Categories

Category

- Requirements Specifications
- Application Solution Products
- High-Level Design Specifications
- External Products
- Detailed Design Specifications
- Test Plans
- Major Products
- Change Orders
- Contracts
- Techniques
- Sample Products

Add

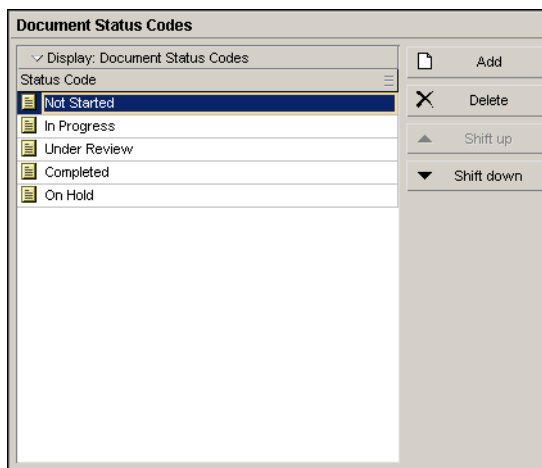
Delete

Shift up

Shift down

作業成果物とドキュメントの詳細については、『**Project Management** リファレンスマニュアル』を参照してください。

ドキュメントステータス 「ドキュメントステータス」タブを使用すると、ドキュメントステータスのタイプを作成、編集、削除できます。ステータスのタイプは、プロジェクト内の作業成果物やドキュメントの現在のステータスを識別します。これを使うと、アクティビティや WBS ノードに割り当てられるドキュメントを判定できます。ステータスのタイプを変更するには、当該タイプをダブルクリックして新しい名前を入力してください。変更内容は、ドキュメントが割り当てられるプロジェクトすべてに適用されます。



Progress Reporter モジュールの詳細については、『**Project Management** リファレンスマニュアル』を参照してください。

間接コード 「間接コード」タブを使うと、Progress Reporter ユーザ用の間接アクティビティコードを作成、編集、削除できます。Progress Reporter ユーザは間接アクティビティを自分のタイムシートに追加して、プロジェクトアクティビティとは関係のないタイムシート時間をログすることができます。例えば、ユーザは、休暇、休日時間、病欠時間、または一般管理作業を間接アクティビティとして入力できます。コードを変更するには、当該コードをダブルクリックして新しい名前を入力してください。変更内容は、コードが割り当てられるプロジェクトすべてに適用されます。



タイムシートの承認に必要な承認レベルを2つと指定すると、間接アクティビティのみを含むタイムシートはプロジェクトマネージャの承認をバイパスして、リソース/コストマネージャに直接送付されます。通常のアクティビティと間接アクティビティの双方を含むタイムシートについては、プロジェクトマネージャは間接アクティビティを表示できません。

Overhead Codes

Display: Overhead Codes

OH Code	Overhead Description
HOL	Holiday
G&A	General & Accounting
VAC	Vacation
SICK	Sick Leave
COH	Corporate Overhead
JURY	Jury Duty
PERS	Personal Time

Add
Delete
Shift up
Shift down

リスクの詳細については、『Project Management リファレンスマニュアル』を参照してください。

リスクタイプ 「リスクタイプ」タブを使うと、リスクのタイプや潜在的なリスクの分類を作成、編集、削除できます。リスクタイプを利用すると、プロジェクト全体でリスクを分類して標準化できます。リスクのタイプを変更するには、当該タイプをダブルクリックして新しい名前を入力してください。変更内容は、リスクが割り当てられるプロジェクトすべてに適用されます。

Risk Types

Display: Risk Types

Risk Type
New Requirements
Requirement Changes
Project Staff
Schedule Constraints
Project Facilities
Support & Funding
System Performance
Technology Integration

















Add
Delete
Shift up
Shift down

アクティビティノートの詳細については、『Project Management リファレンスマニュアル』を参照してください。

ノートトピック 「ノートトピック」タブを使用すると、ノートのトピックを作成、編集、削除できます。ノートトピックは通常、アクティビティを実施するための指示や説明で構成されています。ただし、ノートトピックはEPS、プロジェクト、WBSレベルで割り当てすることもできます。トピックには、目的や入力基準、ツールとテクニック、終了基準などがあります。ノートトピックを変更するには、当該トピックをダブルクリックして新しい名前を入力してください。変更内容はあらゆるノートの割当に適用されます。

Notebook

▼ Display: Notebook Topics

Notebook Topic	EPS	Proj	WBS	Actv
 Purpose	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
 Activity Constraint R	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
 Lessons Learned	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
 Scope	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
 Objectives	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
 Recent Highlights	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
 Anticipated Problems	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
 Status Report	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
 Rationale	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
 Entry Criteria	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
 Core Requirements	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
 Verification / Validati	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
 Tools / Techniques	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
 Metrics	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
 Exit Criteria	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
 Description	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

Add

Delete







Shift up

Shift down

計量単位 「計量単位」タブを使うと、材料リソースに割り当てられる計量単位のラベルを設定できます。計量単位のラベルを変更するには、当該ラベルをダブルクリックして新しい名前を入力してください。変更内容は、あらゆる計量単位の割当に適用されます。

Units Of Measure

▼ Display: Units of Measure

Unit Abbreviation	Unit Name
 lf	Linear Feet
 lb	Pounds
 gal	Gallons
 ea.	Each
 sq	Square Yards
 Unit	(New Unit of Measure)

Add

Delete

Shift up

Shift down

通貨の定義

データベースのあらゆるプロジェクトでコストデータを保存するための通貨単位（**基本通貨**）と、ウィンドウやダイアログボックスでコストデータを表示するための通貨単位（**表示通貨**）を指定できます。



管理スーパーユーザ権限のあるユーザのみが基本通貨を変更したり、追加表示通貨のタイプを定義したりできます。

基本通貨の為替レートは常に 1.0 です。コストデータを表示するために基本通貨以外の通貨を選択すると、コストおよび価格フィールドに表示される値を計算するために、基本通貨の値に表示通貨用の現在の為替レートが乗算されます。

例えば、基本通貨が米ドルで表示通貨がユーロ、ユーロの為替レートが 0.75 だとします。データベースに保管されている 10 ドルの値は、ウィンドウやダイアログボックスのコストおよび価格フィールドでは 7.5 ユーロと表示されます。同様に、10 ユーロとコストまたは価格フィールドに入力すると、データベースには \$13.30 と保存されます。



コストおよび価格フィールドに値を入力すると、常に表示通貨で表示されます。

通貨がコストデータの保存に
使われるベースであることを示します。

Base	Currency ID	Currency Name	Currency Symbol	Exchange Rat
<input checked="" type="checkbox"/>	USD	Dollar	\$	1.000000
<input type="checkbox"/>	CAD	Canadian Dollar	CA\$	1.538200
<input type="checkbox"/>	BRL	Brazilian Real	R\$	2.481000
<input type="checkbox"/>	EUR	Euro	€	0.771367
<input type="checkbox"/>	HKD	Hong Kong Dollar	HK\$	7.799200
<input type="checkbox"/>	INR	Indian Rupee	Rs.	48.969700
<input type="checkbox"/>	ILS	Israel Shekel	NIS	4.864600

WBS: F-SYS1.FUSYS.IM System Implementation

General | Appearance

Currency ID: USD Currency name: Dollar

Currency symbol: \$ Exchange rate: 1.000000

「通貨」ダイアログボックスを使うと、基本通貨と表示通貨を設定できます。



Project Management の古いバージョンから更新している場合は、プロジェクトを追加、変更する前に新しいバージョンで基本通貨を設定する必要があります。

基本通貨の定義 基本通貨は既定で米ドルになっています。異なった通貨を基本通貨として定義するには、「管理」、「通貨」を選択します。基本通貨を選択してから、「全般」タブで通貨の ID、名称、記号を入力します。基本通貨の為替レートは常に 1 です。「表示」タブをクリックすると、通貨の表示方法をさらに詳しく定義できます。

通貨の表示では、整数と小数を分離します (500.5 など)。

通貨表示の桁を分けます (300,000 または 300,000 など)。

Decimal symbol: .

Number of decimal places: 2

Digit grouping symbol: ,

⌘ = Universal currency symbol

Positive currency format: ⌘1.1

Negative currency format: (⌘1.1)

小数点以下に表示される数字の数を示します。例えば、「なし」(70)、「1」(70.1)、「2」(70.14) などです。



古い基本通貨でコストを表示する必要がある場合には、これを利用可能な通貨の一覧に追加する必要があります。

表示通貨の追加 「管理」、「通貨」を選択します。「追加」をクリックします。通貨の ID、名称、記号、為替レートを指定して、通貨を表示する方法を示します。

「編集」、「ユーザ設定」を選択し、「通貨」タブをクリックして、コストの表示に使用する通貨を選択します。

通貨のタイプを明確に定義する ID を入力します。

通貨を識別するために一般的に使用されている記号を入力します。

WBS: F-SYS1.FUSYS.IM System Implementation

General | Appearance

Base	Currency ID	Currency Name	Currency Symbol	Exchange Rat
<input checked="" type="checkbox"/>	USD	Dollar	\$	1.000000
<input checked="" type="checkbox"/>	CAD	Canadian Dollar	CA\$	1.538200
<input type="checkbox"/>	BRL	Brazilian Real	R\$	2.481000
<input type="checkbox"/>	EUR	Euro	€	0.771367
<input type="checkbox"/>	HKD	Hong Kong Dollar	HK\$	7.799200
<input type="checkbox"/>	INR	Indian Rupee	Rs.	48.969700
<input type="checkbox"/>	ILS	Israel Shekel	NIS	4.864600

Currency ID: CAD

Currency name: Canadian Dollar

Currency symbol: CA\$

Exchange rate: 1.538200

当該通貨の現在の世界的な為替レートを入力します。

報告期間の定義

期間パフォーマンスおよび過去実績の編集をはじめとする報告期間に関連の詳細は *Project Management リファレンスマニュアル* またはヘルプを参照してください。

P6 Web Access での報告期間タイムスケールの表示の詳細については、**P6 Web Access** のヘルプを参照してください。

Project Management モジュールでは、「報告期間」ダイアログボックスで組織のグローバル報告期間を定義することができます。カスタマイズした報告期間によって、実績工数とコストのより正確な表示とレポートを提供することができます。プロジェクト期間に一律に工数とコストを分散するのではなく、報告期間をカスタマイズすることで、ユーザは実際の工数とコストの発生を表示することができます。ユーザは、報告期間ディクショナリで予め定義した期間で期間パフォーマンスを保存することができます。

P6 Web Access では、定義された報告期間範囲において、サマリプロジェクトデータを報告期間タイムスケール間隔でグラフやスプレッドシートに表示することができます。また、高レベルのリソース割当を報告期間間隔で編集することも可能です。



報告期間ダイアログボックスでデータの追加や編集を行うには、「報告期間の編集」のグローバル権限が必要です。プロジェクトの定義された報告期間に対して過去実績を保存するには、「期間締切」のプロジェクト権限が必要です。期間実績を保存した後、過去の実績データを編集するには、ユーザは「期間実績の編集」のプロジェクト権限をもつ必要があります。

P6 Web Access ユーザ用の報告期間の特記事項 P6 Web Access では、ユーザは多くのタブやページをカスタマイズして、報告期間タイムスケールを表示できます。ただし、Project Management モジュールで報告期間を適切に定義する必要があります。P6 Web Access でユーザが報告期間タイムスケール間隔を表示できるようにするには、報告期間を作成する際に以下のガイドラインに従う必要があります。

- 定義済みのあらゆる報告期間は最低 1 週間（7 日）でなくてはなりません。
- 2 つの報告期間の間には時間的なギャップがあってはなりません。



このような要件に従うと、P6 Web Access ユーザは確実に報告期間タイムスケールを表示できます。P6 Web Access でデータを報告期間タイムスケール間隔で表示するには、さらに報告期間別にプロジェクトを集計する必要があります。報告期間別にプロジェクトを集計するには、「管理」、「管理設定」、「オプション」タブを選択してから「報告期間ごと」オプションを選びます。このオプションに関する情報については、398 ページの「オプション」を参照してください。

報告期間のバッチ作成 Project Management モジュールで、[管理]、[報告期間] を選択します。

バッチを作成したら、[期間名] 列をクリックして、名前を編集します。名前は固有でなければなりません。報告期間を作成すると、既定の名前は「YYYY-MM-DD」になります（「2007 - 04 - 01」など）。報告期間が適切な順序で一覧表示されるよう（[列] ダイアログボックスなど）、デフォルトの名前、または連続した命名規則を使います（「2005 Fiscal Month 1」、 「2005 Fiscal Month 2」 など）。

バッチ開始日と終了日を入力します。

バッチの各報告期間に対し、タイムスケールと期間終了の曜日を選択します。

ここをクリックして報告期間バッチを生成します。



報告期間の開始日と終了日は、既存の報告期間と重複してはいけません。また、作成した後は報告期間の開始日と終了日の変更はできません。



報告期間別（[管理設定]、[オプション] タブで指定）にプロジェクトデータを集計する場合は、データベースのあらゆるプロジェクトデータ（格納中のプロジェクトを含む）が確実に集計されるよう、データベース内のあらゆるプロジェクトの日付を含む報告期間を作成する必要があります。例えば、データベース内の最も古いプロジェクトの開始日が2001年10月1日の場合、報告期間はその日付以前から始まらなくてはなりません。

単一の報告期間の作成 Project Management モジュールで、[管理]、[報告期間] を選択します。「追加」をクリックします。

クリックして期間をディクシヨナリに追加します。

クリックして報告期間の開始日と終了日を選択します。日次の報告期間を作成するには、開始日と終了日を選択します。



すべての期間は真夜中（午前 12 時）に始まり、午後 11 時 59 分に終了します。1 日の報告期間を作成することもできますが、ユーザが P6 Web Access で報告期間タイムスケール間隔を表示できるようにするには、すべての報告期間の最低期間が 1 週間（7 日間）でなくてはなりません。

報告期間の削除 Project Management モジュールで、[管理]、[報告期間] を選択します。削除する報告期間を選択します。「削除」をクリックします。



過去のプロジェクト期間実績が保存されている報告期間を削除することはできません。複数の報告期間を一度に削除しようとする場合、その中のいずれかの期間に過去のプロジェクト期間実績が保存されていればどの報告期間も削除されません。その場合、報告期間を削除するには、過去の期間実績を含むプロジェクトの保管を行ってから削除し、その後報告期間を削除します。



報告期間に過去の期間実績が含まれていない場合、高レベルのリソース割当の計画値を持つ報告期間を削除することができます（P6 Web Access の「リソース計画」ページで入力された内容）。高レベルのリソース割当の存在する報告期間を削除すると、その割当情報も削除されます。

Methodology Management での管理 設定と分類の定義

本章の内容：

既定設定の定義

標準的な分類と値の定義

通貨の定義

Methodology Management モジュールでは、あらゆるメソドロジに適用されるパラメータや値をモジュール全体で定義できます。この設定を使うと、特定のプロジェクト管理要件や規格を満たすようモジュールをカスタマイズできます。このような設定はあらゆるユーザが閲覧できますが、これを編集する特別なセキュリティ権限を得られるのは1人だけです。

本章では、指定できる設定のタイプについて説明します。「管理設定」は、本モジュールで使用されている既定の設定です。「管理分類」は、本モジュールのあらゆるメソドロジに適用される標準的な値です。また、「通貨」には、データベースにコストデータを保存するための基準通貨と、ウィンドウやダイアログボックスにコストデータを表示するための表示通貨があります。

既定設定の定義

「管理設定」ダイアログボックスを利用すると、プロジェクト管理コーディネータによる既定の設定を指定できます。「管理」、「管理設定」を選択します。

全般情報「全般」タブを使うと、期間タイプや進捗率タイプ、アクティビティタイプなど、新規アクティビティの一般的な既定オプションを指定できます。また、リソースやメソッドロジ、アクティビティコード、ルール、ワークブレイクダウンストラクチャ（WBS）ノードで階層レベルを分離するために使用する文字を変更することもできます。

Code Separator
Specify the character for separating code fields for WBS, Activity Code, Resource Code and Methodology Code trees.
Code Separator <input type="text" value="."/>
Defaults for New Activities
Specify the default settings for new activities.
Duration Type <input type="text" value="Fixed Units/Time"/>
Percent Complete Type <input type="text" value="Physical"/>
Activity Type <input type="text" value="Task Dependent"/>
Password Policy
The Password Policy requires a minimum length of 8 characters and at least one number and one letter in a user's password.
<input type="checkbox"/> Enable password policy

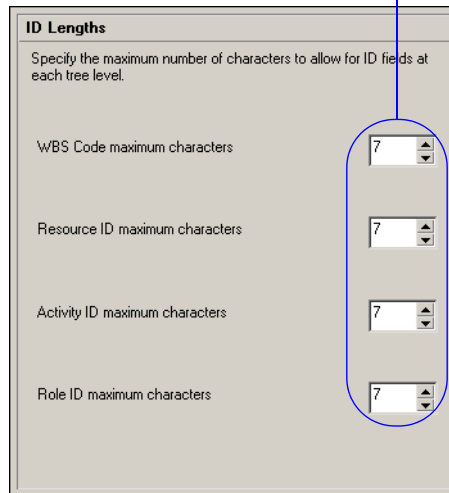
ロールヤリソー
 スコード、メソ
 ドロジコード、
 アクティビティ
 コードで階層レ
 ベルを分離する
 文字です。あら
 ゆる新規メソ
 ドロジにおける
 WBS コードの既
 定区切文字でも
 あります。

このような既定タイプは、新規アクティビティでのみ使用できます。この設定を変更しても、既存のアクティビティには影響しません。

チェックマークを入れると、新しいまたは変更したパスワード用に強力なパスワードポリシーを有効にできます。クリアになっている場合、パスワードは0～20 字の文字または数字になります。

ID 文字数 「ID 文字数」 タブを使うと、ID やコードの最大文字数を指定できます。

このような ID やコードの最大文字数は、
1 が最低、20 が最高となります。



ID またはコードの最大文字数を変更すると、新規 ID/ コードを追加したり既存の ID/ コードを編集したりする際に新しい文字数が適用されます。

データ限度 「データ限度」タブを使用すると、階層構造レベルの最大数を指定できます。

Tree Type	Maximum Levels
WBS tree maximum levels	10
OBS tree maximum levels	10
Resource tree maximum levels	10
Role tree maximum levels	20
Activity Code tree maximum levels	10
Resource Code tree maximum levels	20
Methodology Code tree maximum levels	20

このようなタイプのコード
における最大階層レベル数
は、1 が最低、25 が最高
となります。

このような構造内の
最大階層レベル数
は、1 が最低、25
が最高となります。



最大階層レベル数の設定を変更すると、新規ノードを追加したり既存ノードを編集したりした場合にのみ新規設定が適用されます。

このモジュールでは、選択した時間の単位や期間表示形式を表示する際は、このような略語を使用します。新しい1文字の略語を入力できます。

有効な入力範囲：
1.0 ~ 168.0.

有効な入力範囲：
1.0 ~ 744.0.

Hours per Time Period

Specify the number of work hours for each time period.

Hrs/Day	Hrs/Week	Hrs/Month	Hrs/Year
8.0	40.0	172.0	2000.0

Time Period Abbreviations

Specify the abbreviation for each time period.

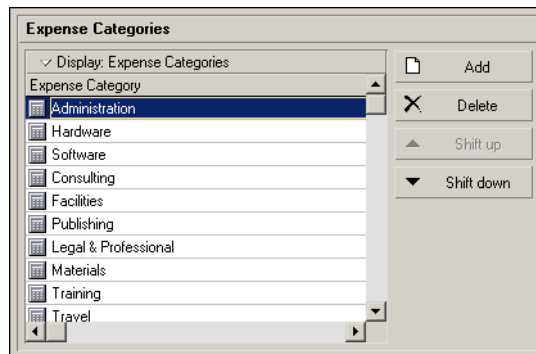
Minutes n	Hours h	Days d
Weeks w	Months m	Years y

標準的な分類と値の定義

「管理分類」ダイアログボックスを使うと、あらゆるメソドロジに適用できる標準的な分類と値を定義できます。「管理」、「管理分類」を選択します。

経費の詳細については、『Methodology Management リファレンスマニュアル』を参照してください。

経費分類「経費分類」タブを使用すると、経費のカテゴリを作成、編集、削除できます。経費分類は、メソドロジ経費を分類して標準化したり、経費情報を整理、維持するために利用できます。経費分類を変更するには、当該分類をダブルクリックして新しい名前を入力してください。このモジュールでは、変更内容を当該経費アイテムが割り当てられているアクティビティすべてに適用します。



アクティビティノートの詳細については、『Methodology Management リファレンスマニュアル』を参照してください。

ノートトピック「ノートトピック」タブを使用すると、ノートのトピックを作成、編集、削除できます。ノートは通常、アクティビティを実施するための指示や説明で構成されています。メソドロジや WBS ノードに関する注記を分類するためにノートを割り当てることもできます。適切な「メソドロジ」や「WBS」、「アクティビティ」チェックボックスにマークを入れると、「ノートトピック」タブで選択したノートトピックを有効にできます。トピックには、目的や入力基準、ツールとテクニック、終了基準などがあります。ノートトピックを変更するには、当該トピックをダブルクリックして新しい名前を入力してください。このモジュールでは、ノートトピックが割り当てられるメソドロジや WBS ノード、アクティビティすべてに変更内容を適用します。

Activity Specification	Meth	WBS	Activity
Purpose	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
Entry Criteria	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
Core Requirements	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
Verification / Validation	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
Tools / Techniques	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
Metrics	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
Exit Criteria	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>

WBS の詳細については、『**Methodology Management** リファレンスマニュアル』を参照してください。

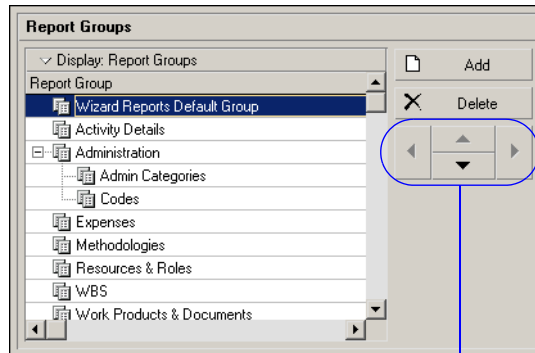
WBS カスタム分類「管理分類」ダイアログボックスの 3 番目のタブを利用すると、カスタム WBS 分類と分類値を定義できます。分類名を変更するには、右上にあるフィールドをクリックして新しい名前を入力してください。この分類を使うと、開示中のメソドロジで WBS 情報を整理、フィルタ、報告できます。分類値を変更するには、当該値をダブルクリックして新しい名前を入力してください。このモジュールでは、WBS アイテムが割り当てられているメソドロジすべてに変更内容を適用します。



WBS 分類を変更した場合でも、モジュールは分類の値や値の割当を変更しません。

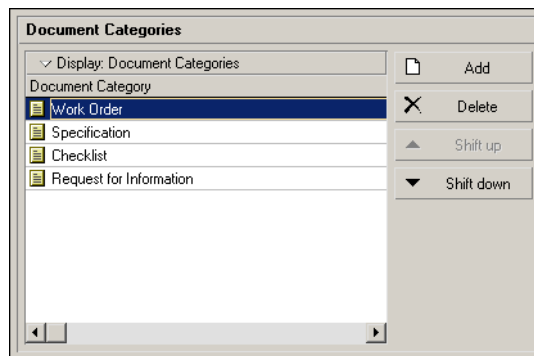
WBS Category
Project Phase
Project Planning
Project Management
Quality Assurance
Requirements Definition
Design
Implementation
Testing
Deployment

レポートグループ「レポートグループ」タブを使うと、レポートグループを作成、編集、削除してレポートを整理できます。



左または右向き矢印をクリックすると、選択したレポートの分類をインデントまたはアウトデントして、階層内のレポートをさらに分類できます。上または下向き矢印をクリックすると、選択したレポートの分類を階層内で上下に移動できます。

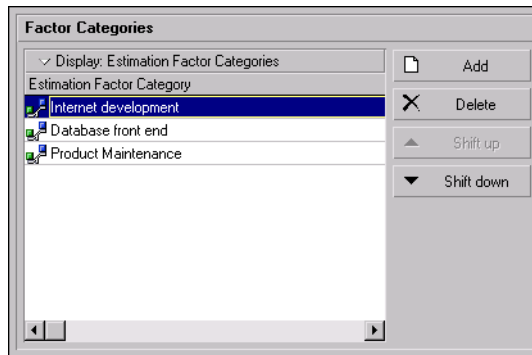
ドキュメント分類 作業成果物は通常、青写真やテスト計画などのアクティビティアウトプットを指し、ドキュメントは基準やガイドラインなどのアイテムを指します。「ドキュメント分類」タブを使うと、作業成果物やドキュメントの分類を設定して、これを「ドキュメント」ウィンドウの作業成果物やドキュメント、「ワークブレイクダウンストラクチャ詳細」と「アクティビティ詳細」の「ドキュメント」タブの **WBS** ノードおよびアクティビティに割り当てられます。ドキュメントの分類を変更するには、当該カテゴリをダブルクリックして新しい名前を入力してください。このモジュールでは、ドキュメントの分類が割り当てられる **WBS** ノードやアクティビティすべてに変更内容を適用します。



見積データ作成の詳細については、『Methodology Management リファレンスマニュアル』を参照してください。

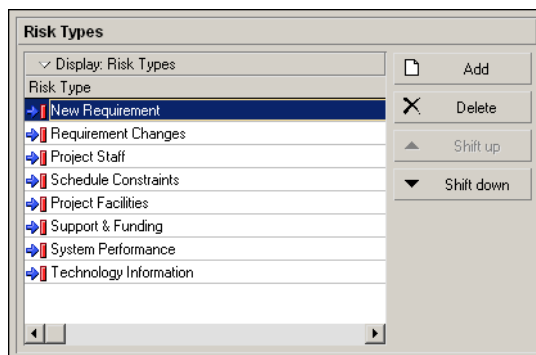
ファクタ分類 「ファクタ分類」タブを使うと、メソドロジで見積ファクタを整理するための分類を設定できます。このようなファクタを使って、Project Management モジュールでボトムアップ見積を実行するためのプロジェクトの規模や複雑度の値が Project Architect で計算されます。

見積ファクタの分類は、ファクタのセットを各メソドロジに割り当てて、これを特定の分野またはフェーズ（インターネットの開発や製品の維持など）に応じて分類する際に有用です。見積ファクタの分類を変更するには、当該分類をダブルクリックして新しい名前を入力してください。Methodology Management モジュールでは、見積ファクタの分類が割り当てられているメソドロジすべてに変更内容を適用します。

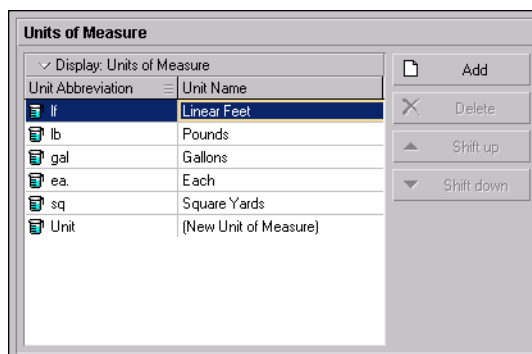


見積ファクタの分類を設定すると、ひとつまたは複数の見積ファクタを「見積ファクタ」ダイアログボックスで分類に割り当てられます（「定義」、「見積ファクタ」を選択）。

リスクタイプ「リスクタイプ」を使うと、特定の WBS ノードに
関係する潜在的なリスクを識別、分類して優先順位をつけられ
ます。リスクのタイプを変更するには、当該タイプをダブルク
リックして新しい名前を入力してください。このモジュールで
は、関連のあるリスクのタイプが割り当てられている WBS ノー
ドすべてに変更内容を適用します。



計量単位「計量単位」タブを使うと、材料リソースに割り当て
られる計量単位のラベルを設定できます。計量単位のラベルを
変更するには、当該ラベルをダブルクリックして新しい名前を
入力してください。変更内容は、あらゆる計量単位の割当に適
用されます。



通貨の定義

データベースのあらゆるメソドロジでコストデータを保存するための通貨単位（**基軸通貨**）と、ウィンドウやダイアログボックスでコストデータを表示するための通貨単位（**表示通貨**）を指定できます。



管理スーパーユーザ権限のあるユーザのみが基本通貨を変更したり、追加表示通貨のタイプを定義したりできます。

基本通貨の為替レートは常に 1.0 です。コストデータを表示するために基本通貨以外の通貨を選択すると、コストおよび価格フィールドに表示される値を計算するために、基本通貨の値に表示通貨用の現在の為替レートが乗算されます。

例えば、基本通貨が米ドルで表示通貨がユーロ、ユーロの為替レートが 0.75 だとします。データベースに保管されている 10 ドルの値は、ウィンドウやダイアログボックスのコストおよび価格フィールドでは 7.5 ユーロと表示されます。同様に、10 ユーロとコストまたは価格フィールドに入力すると、データベースには \$13.30 と保存されます。



コストおよび価格フィールドに値を入力すると、常に表示通貨で表示されます。

通貨がコストデータの保存に使われるベースであることを示します。

Base	Currency ID	Currency Name	Currency Symbol	Exchange Rate
<input checked="" type="checkbox"/>	USD	Dollar	\$	1.000000
<input type="checkbox"/>	ARS	Argentine Peso	\$	3.569740
<input type="checkbox"/>	AUST	Australian Dollar	A\$	1.796400
<input type="checkbox"/>	BRL	Brazilian Real	R\$	2.481000
<input type="checkbox"/>	U.K.£	British Sterling Pound	£	0.685097
<input type="checkbox"/>	CAD	Canadian Dollar	CA\$	1.538180
<input type="checkbox"/>	CNY	Chinese Yuan	Y	8.276900

General	
Currency ID	Currency name
USD	Dollar
Currency symbol	Exchange rate
\$	1.000000

「通貨」ダイアログボックスを使うと、基本通貨と表示通貨を設定できます。



モジュールを古いバージョンから更新している場合は、メソッドログを追加、変更する前に新しいバージョンで基本通貨を設定する必要があります。

基本通貨の定義 基本通貨は既定で米ドルになっています。異なった通貨を基本通貨として定義するには、「管理」、「通貨」を選択します。基本通貨を選択してから、「全般」タブで通貨の ID、名称、記号を入力します。基本通貨の為替レートは常に 1.0 です。「表示」タブをクリックすると、通貨の表示方法をさらに詳しく定義できます。

通貨の表示では、整数と小数を分離します (500.5 など)。

通貨表示の桁を分けます
(300,000 または
300,000 など)。

Decimal symbol	Number of decimal places
.	2
Digit grouping symbol	
,	
¤ = Universal currency symbol	
Positive currency format	Negative currency format
¤1.1	¤1.1

小数点以下に表示される数字の数を示します。例えば、「なし」(70)、「1」(70.1)、「2」(70.14) などです。



古い基本通貨でコストを表示する必要がある場合には、これを利用可能な通貨の一覧に追加する必要があります。

表示通貨の追加 「管理」、「通貨」を選択します。「追加」をクリックします。通貨の ID、名称、記号、為替レートを指定して、通貨を表示する方法を示します。

「編集」、「ユーザ設定」を選択し、「通貨」タブをクリックして、コストの表示に使用する通貨を選択します。

通貨のタイプを明確に定義する ID を入力します。

通貨を識別するために一般的に使用されている記号を入力します。

Base	Currency ID	Currency Name	Currency Symbol	Exchange Rate
<input checked="" type="checkbox"/>	U.S.	Dollar	\$	1.000000
<input type="checkbox"/>	CAD	Canadian Dollars	\$	0.656500

Currency ID	Currency name
CAD	Canadian Dollars
Currency symbol	Exchange rate
\$	0.656500

当該通貨の現在の世界的な為替レートを入力します。

P6 Progress Reporter の実装

本章の内容：

実装の概要

P6 Progress Reporter を使うためのリソースの設定

P6 Progress Reporter ユーザ用のタイムシートの作成

プロジェクト固有の Progress Reporter 設定

クライアントのブラウザから P6 Progress Reporter へのアクセス

Timesheet Approval へのアクセス設定

プロジェクトチームメンバは、Project Management モジュール内で定義された自身のアクティビティを更新するための Timesheets を P6 Progress Reporter モジュールを使用して提出することができます。本章では、P6 Progress Reporter を使用するための Project Management モジュールの設定方法、設定後の Progress Reporter モジュールの実行方法、タイムシート承認マネージャのための Timesheet Approval アプリケーションへのアクセス設定方法について説明します。

実装の概要

P6 Progress Reporter によって、プロジェクトチームメンバはどこからでも Web を使ってタイムシートとアクティビティ状況を直接組織のデータベースに通知することができるようになります。これにより、プロジェクトマネージャは常に最新のプロジェクト情報をもって作業することが可能となり、リソース計画や問題の調整が容易になります。

P6 Progress Reporter は、アプリケーションサーバでホストされる P6 Progress Reporter アプリケーション、組織のプロジェクトを含む P6 データベースサーバで構成されます。さらに、P6 Web Access アプリケーションサーバは Timesheet Approval アプリケーションをホストします。タイムシート承認マネージャはこれを利用してリソースタイムシートをレビューします。



Progress Reporter サーバをインストールして設定する方法の詳細については、113 ページの「[P6 Progress Reporter のインストール](#)」を参照してください。



P6 Progress Reporter のすべての機能を問題なく使用するには、サポートされているブラウザを使用する必要があります。サポートされている設定の詳細については、34 ページの「[クライアントおよびサーバの要件](#)」を参照してください。

P6 Progress Reporter の実装には、あらかじめ以下のステップが完了している必要があります。

- 43 ページの「[データベースのインストールおよび設定](#)」で説明されている、Project Management データベースのインストール。
- 113 ページの「[P6 Progress Reporter のインストール](#)」で説明されている、Progress Reporter サーバのインストールと設定。
- 389 ページの「[Project Management での管理設定と分類の定義](#)」で説明されている、ユーザがどのようにタイムシートを使用し、プロジェクトに関連しない作業時間を記録するための間接コードを作成する方法の設定。

上記のステップが完了したら、Project Management モジュールを使って、以下のステップを実行します。これについては、本章でさらに詳細に説明します。

- P6 Progress Reporter を使うためのリソースの設定。
- Timesheets の作成。
- P6 Progress Reporter を使用するために必要なプロジェクト固有の設定。

最後に、組織が Timesheet Approval アプリケーションを使用する計画がある場合は、以下のステップを実行します。

Timesheet Approval アプリケーションは適切に設定すると、P6 Web Access や Project Management モジュールからアクセスできるほか、スタンドアローン型のアプリケーションとして使用できます。P6 Web Access は Timesheet Approval アプリケーションをホストしているため、ユーザがアプリケーションにアクセスする方法に関わらず、P6 Web Access をインストールする必要があります。

- 139 ページの「[P6 Web Access のインストール](#)」の説明に従い、P6 Web Access をインストール、設定します。
- 389 ページの「[Project Management での管理設定と分類の定義](#)」で説明されているように、「管理設定」でタイムシート承認要件を指定します。
- 329 ページの「[ユーザ管理とセキュリティ管理](#)」の説明に従い、製品モジュールアクセスと必要なセキュリティ権限をタイムシート承認マネージャに割り当てます。
- 441 ページの「[Timesheet Approval へのアクセス設定](#)」の説明に従い、Timesheet Approval へのアクセスを設定します。



リソース割り当てに実績がある場合（インポートされたプロジェクトに対する場合でもプロジェクトの途中から P6 Progress Reporter を使い始めた場合でも）、すべての既存の実績値は、Timesheet Actualizer を実行しない限り、最初に P6 Progress Reporter を使い始めたときに失われます。さらなる詳細については、Oracle Primavera サポートナレッジベースを参照してください。

P6 Progress Reporter を使うためのリソースの設定

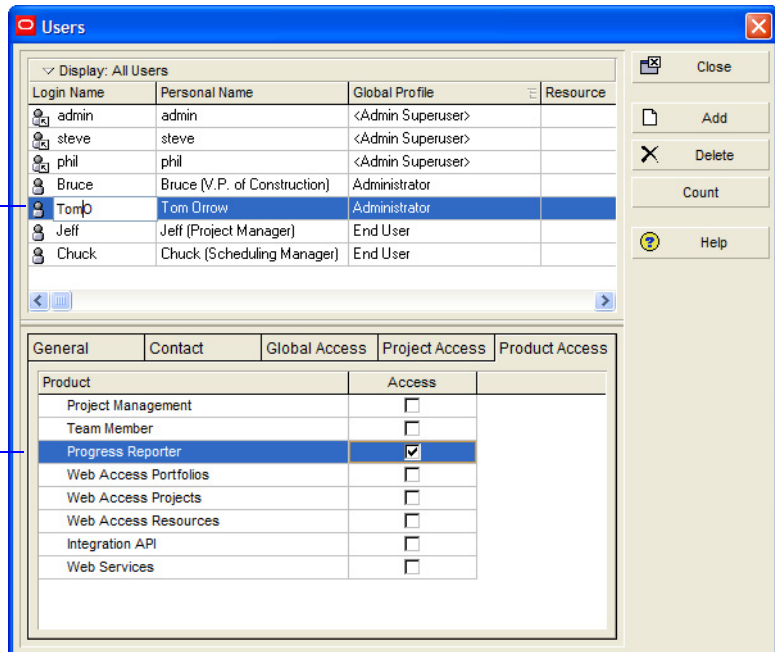
プロジェクトのリソースが P6 Progress Reporter を使用するには、リソースにユーザログインアカウントを割り当て、さらにリソースがタイムシートを使用できるように設定する必要があります。

P6 Progress Reporter 用のユーザログインの作成 Project Management モジュールで、[管理]、[ユーザ] を選択します。「追加」をクリックします。一意のログイン名を入力し、「モジュールアクセス」タブをクリックします。Team Member または Progress Reporter の横にある「アクセス」チェックボックスにマークを付けます。

モジュールアクセスに関連した機能のさらなる情報については、358 ページの「**モジュールアクセスの割り当て**」を参照してください。

Progress Reporter モジュールアクセスは、ユーザが Progress Reporter アプリケーションにログインできるようにし、アポイントメントのインポート機能に限定して P6 Web Access（この機能がユーザに設定されている場合）にログインできるようにします。Team Member モジュールアクセスは、ユーザが Progress Reporter アプリケーションにログインできるようにし、P6 Web Access では、ダッシュボードポートレットの一部、プロジェクトワークスペース（ユーザがアクセス権を持つプロジェクト）、ユーザに割り当てられているアクティビティなどにアクセスできるようにします。

ユーザに P6 Progress Reporter へのログイン許可が与えられていることを確認します。





ユーザが P6 Progress Reporter にアクセスできるようにするには、ユーザログインにリソースを割り当てる必要があります。リソースを [ユーザ] ダイアログボックスのログイン名に割り当てるには、[全般] タブを選択します。

[**Timesheets のリソース ID / リソース名**] フィールドでブラウザボタンをクリックし、リソースを選びます。また、432 ページの「[タイムシートを使うためのリソースの設定](#)」で説明されているように [リソース] ウィンドウでユーザをリソースに関連付けることもできます。

タイムシートを使うためのリソースの設定 Project Management モジュールで、[エンタープライズ]、[ユーザ]を選択します。リソース詳細を表示し、[タイムシート]タブをクリックします。

1 リソースを選択します。

2 「ブラウズ」ボタンをクリックし、ユーザログインをリソースに割り当てます。

3 マークして、リソースが進捗報告のためにタイムシートを使えるようにします。

4 クリックして、承認マネージャを選択します。

Resource ID	Resource Name	Resource Type	Unit of Measure	Primary Role
trents	Trent Smith, PMO Director	Labor		Project Manager
johnm	John McDougal	Labor		Project Manager
frankl	Frank Lee	Labor		Project Manager
georgea	George Abrams, VP of Development	Labor		
raipat	Raj Patel, Dir of Programming	Labor		Software Developer
team	TEAM MEMBER	Labor		Senior Java Programmer
bobm	Bob McArthur, Dir of Marketing	Labor		
charlesn	Charles North	Labor		Business Analyst
Project Specific	Project Specific Resources	Labor		
Lofty Resources	Lofty Heights Resources	Nonlabor		
LH Labor	LH Labor	Labor		Corporate Roles

リソースは、1つのユーザログインだけに関連付けられることができます。



新規リソースの作成時に、[管理設定] ダイアログボックスの[タイムシート]タブで[新規リソースは既定でタイムシートを使用]チェックボックスをマークした場合は、[タイムシート使用]チェックボックスは自動的にマークされます。この場合でもユーザログインをリソースに割り当て、ユーザがP6 Progress Reporter にログインする権限を付与する必要があります。



タイムシート承認マネージャとして指定されているユーザは、必要なモジュールアクセスが割り当てられている場合でもP6 Progress Reporter へのアクセスを自動的に授与されません。タイムシート承認マネージャがP6 Progress Reporter にアクセスできるようにするには、P6 Progress Reporter へのアクセスが必要な他のリソース同様、これをタイムシートリソースとして設定する必要があります。タイムシート承認マネージャをタイムシートリソースとして設定すると、承認マネージャはP6 Progress Reporter にログインして報告リソースのタイムシートを編集することができます。

超過勤務ポリシーの設定 ユーザが超過時間をタイムシートに入力することができるようにします。Project Management モジュールで、[エンタープライズ]、[リソース] を選択し、[詳細] タブをクリックします。[残業許可] チェックボックスをマークします。リソースの標準単価を乗じてリソースの超過勤務コストを出すための超過勤務ファクタを入力します（標準単価 x 超過勤務ファクタ = 超過勤務コスト）。



時間フィールドでリソースの超過時間はスラッシュで示されます。例えば、リソースが通常勤務 8 時間の日に 10 時間労働したとすると、ユーザはその日は 8/2 とタイプします。

P6 Progress Reporter ユーザ用のタイムシートの作成

[タイムシート期間管理] ダイアログボックスを使って、Progress Reporter モジュールのユーザのためにタイムシートを作成します。また、以前のタイムシートの一覧を確認することもできます。さらにどのタイムシートが現在 P6 Progress Reporter ユーザに使用されているか特定することができます。Project Management モジュールでタイムシートを作成するまで、P6 Progress Reporter ユーザはタイムシートを表示することはできません。

タイムシートバッチの作成 Project Management モジュールで、[管理]、[タイムシート期間] を選択します。

このタイムシートバッチの開始日と終了日を設定します。

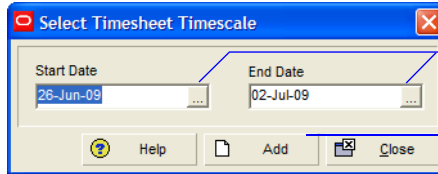
各タイムシートが管理する期間を選択します。

クリックして、これらの設定に基づいたタイムシートのバッチを生成します。

Display: Timesheet Date Periods	
Start Date	End Date
27-Aug-07	02-Sep-07
03-Sep-07	09-Sep-07
10-Sep-07	16-Sep-07
17-Sep-07	23-Sep-07
24-Sep-07	30-Sep-07
01-Oct-07	07-Oct-07
08-Oct-07	14-Oct-07
15-Oct-07	21-Oct-07
22-Oct-07	28-Oct-07
29-Oct-07	04-Nov-07
05-Nov-07	11-Nov-07
12-Nov-07	18-Nov-07
19-Nov-07	25-Nov-07
26-Nov-07	02-Dec-07
03-Dec-07	09-Dec-07
10-Dec-07	16-Dec-07
17-Dec-07	23-Dec-07
24-Dec-07	30-Dec-07

別のタイムシートセットを作成するには、バッチの開始日と終了日をリセットし、適切なタイムシート期間を選択して、[バッチの作成] をクリックします。

単独のタイムシートの作成 Project Management モジュールで、[管理]、[タイムシート期間] を選択します。「追加」をクリックします。



クリックして、このタイムシートの開始日と終了日を設定します。

クリックしてタイムシートを生成します。



既存のタイムシート日と開始日・終了日が重複するタイムシートを新規に作成することはできません。

プロジェクト固有の Progress Reporter 設定

組織の各プロジェクトで、リソースがそのアクティビティを報告する方法を管理することができます。

プロジェクト固有の Progress Reporter 設定 Project Management モジュールで、[エンタープライズ]、[プロジェクト] を選択します。プロジェクトを選択し、「リソース」タブをクリックします。

マークすると、リソースが休止中プロジェクトのアクティビティを参照したり、アクティビティや任務の完了を報告したり、次に開始すべきアクティビティの選択を行うことを可能にします。

リソースが、残工程の割合や時間を入力することでアクティビティの進捗を示すことを可能にするかどうかを選択します。

クライアントのブラウザから P6 Progress Reporter へのアクセス

113 ページの「[P6 Progress Reporter のインストール](#)」の説明に従って Progress Reporter サーバをインストールして設定し、本章の説明に従って P6 Progress Reporter を実装した後に、ユーザは以下に説明されている手順を使用して Progress Reporter モジュールを実行できます。



アプリケーションサーバの java キャッシュが有効になっている場合は、P6 Progress Reporter に初回アクセス時のみ、Java Web Start 版ユーザはこれらの手順を実行する必要があります。これらの手順を完了したあとで、ユーザはショートカットを使って P6 Progress Reporter にアクセスできるようになります。例えば、Windows プラットフォームのユーザは「スタート」、「プログラム」、「Oracle Primavera」、「Primavera P6 Progress Reporter」の順に選択します。Java Web ブラウザ版のユーザは、常に [step 1](#) で指定した URL を使って Progress Reporter にアクセスする必要があります。

P6 Progress Reporter の認証モードを選択するには、認証設定ウィザードを使用します (P6 のメディアまたはダウンロードファイルに含まれている ¥Database¥ldap-config フォルダ内にある LDAPCfgWiz.exe)。また、認証に必要な P6 Progress Reporter の設定を指定します。設定ウィザードの詳細については、309 ページの「[認証モードの設定](#)」を参照してください。認証設定情報については、Progress Reporter Administrator のヘルプを参照してください。

- 1 各自のアプリケーションサーバのプラットフォームおよび Progress Reporter バージョンに適した URL を使用して、クライアントのブラウザから P6 Progress Reporter にアクセスします。

Progress Reporter Java Web Start 版の場合

JBoss アプリケーションサーバでは、

`http://<serverIP>:<listenport>/<ContextRoot>`

例 : `http://<serverIP>:8080/pr`

既定の listenport は 8080 です。既定のコンテクストルートは pr です。

WebLogic アプリケーションサーバでは、

`http://<serverIP>:<listenport>/<ContextRoot>`

例 : `http://<serverIP>:7001/pr`

既定の listenport は 7001 です。既定のコンテクストルートは pr です。

WebSphere アプリケーションサーバでは、

`http://<serverIP>:<listenport>/<ContextRoot>`

例 : `http://<serverIP>:9080/pr`

既定の listenport は 9080 です。既定のコンテクストルートは pr です。

Progress Reporter Web ブラウザ版の場合（シングルサインオン認証使用）**JBoss アプリケーションサーバでは、**

`http://<serverIP>:<listenport>/<ContextRoot>/
applet?lang=<language_code>`

例 : `http://<serverIP>:8080/pr/applet?lang=en`

既定の `listenport` は 8080 です。既定のコンテキストルートは `pr` です。使用可能な言語コードについては以下を参照してください。

WebLogic アプリケーションサーバでは、

`http://<serverIP>:<listenport>/<ContextRoot>/
applet?lang=<language_code>`

例 : `http://<serverIP>:7001/pr/applet?lang=en`

既定の `listenport` は 7001 です。既定のコンテキストルートは `pr` です。使用可能な言語コードについては以下を参照してください。

WebSphere アプリケーションサーバでは、

`http://<serverIP>:<listenport>/<ContextRoot>/
applet?lang=<language_code>`

例 : `http://<serverIP>:9080/pr/applet?lang=en`

既定の `listenport` は 9080 です。既定のコンテキストルートは `pr` です。使用可能な言語コードについては以下を参照してください。

言語コード

- 英語 = en
- スペイン語 = es_MX
- フランス語 = fr
- ドイツ語 = de
- オランダ語 = nl
- ロシア語 = ru
- 日本語 = ja
- 繁体中国語 = zh_TW
- 簡体中国語 = zh_CN



コンテキストルートは、アプリケーションサーバで設定可能です。コンテキストルートの設定についての情報は、アプリケーションサーバのドキュメントを参照してください。また、URL はアプリケーションサーバの構成によって、大文字小文字の区別がされる場合があります。

2 Progress Reporter Java Web Start 版の場合

「Launch Progress Reporter Application」をクリックします。現在の JRE バージョンによって以下のいずれかが起動されます。

- **JRE がインストールされていない場合**、必要な JRE 版をダウンロードするよう指示されます。表示のリンクをクリックした、JRE をダウンロードします。JRE のインストールが完了後、Java Web Start は P6 Progress Reporter が起動します。
- **必要な JRE バージョンが既に存在している場合**、Java Web Start は既存の JRE を使用します。
- **必要な JRE バージョンより以前のバージョンが存在している場合**は、Java Web Start は自動的に必要な JRE をダウンロード、インストールして P6 Progress Reporter を起動します。Java Web Start はインストール完了後もクライアントマシンのブラウザ用の既定の JRE バージョンは変更しません。既定のバージョンは、Web ブラウザで [ツール]、[インターネットオプション] を選択して変更することができます。[詳細設定] タブの Java (Sun) セクションで、既定の JRE を選択します。



JRE のダウンロードには、ネットワーク速度によって多少時間がかかります。

Progress Reporter Web ブラウザ版の場合

「Progress Reporter の実行」をクリックします。プロンプトが表示された場合は、「はい」をクリックして Oracle から Java ファイルをインストールします。設定プログラムが、必要な Java Runtime Environment (JRE) を検索します。必要なバージョンがマシンに見つからない場合は、それをインストールするセットアッププロセスが自動的に起動されます。[はい] をクリックして必要な JRE をインストールして、ライセンス同意書に承諾します。

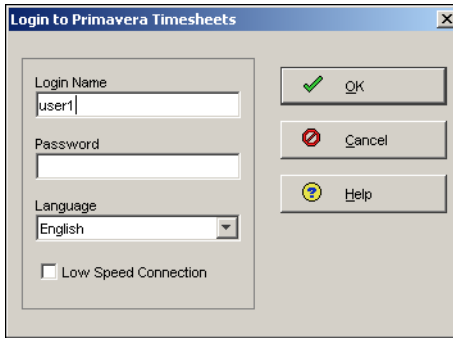


Java ファイルのダウンロードを指示されるのは、「Progress Reporter の実行」リンクを初めてクリックしたときだけです。

プロンプトで要求された場合は、「常に付与」をクリックしてアプレットを実行します。

- 3 ログイン名とパスワードを入力し、言語を選択します。

Java Web Start 版では、このダイアログには Timesheets の言語を選択できるドロップダウンメニューが含まれます。Web ブラウザ版では、言語は [step 1](#) で入力した URL によって決まります。



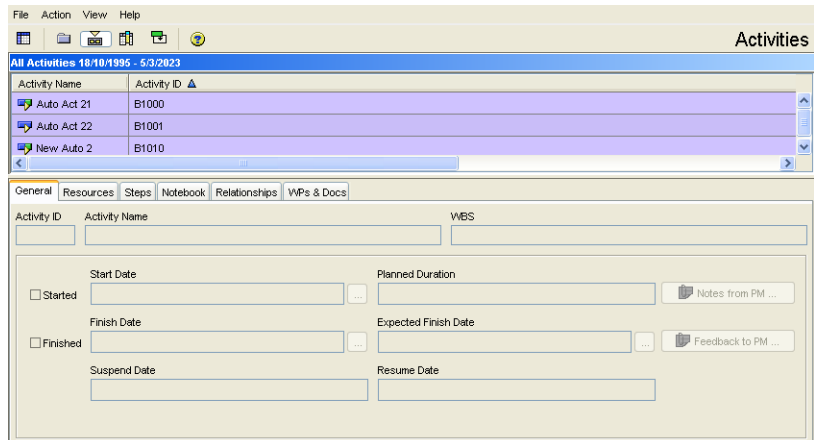
The dialog box titled "Login to Primavera Timesheets" contains the following fields and buttons:

- Login Name:** A text field with "user1" entered.
- Password:** A text field.
- Language:** A dropdown menu with "English" selected.
- Low Speed Connection:** An unchecked checkbox.
- Buttons:** "OK" (with a green checkmark icon), "Cancel" (with a red X icon), and "Help" (with a question mark icon).



P6 Progress Reporter がシングルサインオン認証モードで実行されている場合は、ログインダイアログボックスは表示されません。その代わりに、ログイン証書をポリシーサーバで検証することが要求されます。

アクティビティがアクティビティ画面に表示されます。



The screenshot shows the "Activities" window in Primavera P6. The top section displays a list of activities:

Activity Name	Activity ID
Auto Act 21	B1000
Auto Act 22	B1001
New Auto 2	B1010

The bottom section shows the "General" tab for an activity, with fields for:

- Activity ID:** (empty)
- Activity Name:** (empty)
- WBS:** (empty)
- Start Date:** (empty)
- Planned Duration:** (empty)
- Finish Date:** (empty)
- Expected Finish Date:** (empty)
- Suspend Date:** (empty)
- Resume Date:** (empty)

There are also checkboxes for "Started" and "Finished", and buttons for "Notes from PM ..." and "Feedback to PM ...".

Timesheet Approval へのアクセス設定

Timesheet Approval 使用方の詳細については、Timesheet Approval アプリケーションの [ヘルプ] をクリックするか、P6 Web Access または Project Management のヘルプあるいは Project Management リファレンスマニュアルを参照してください。

リソース/コストマネージャやプロジェクトマネージャがリソースタイムシートを承認するよう会社が求めている場合は、Timesheet Approval アプリケーションでタイムシートをレビューできます。適切に設定すると、モジュールアクセスやセキュリティ権限のあるユーザは P6 Web Access または Project Management モジュールから Timesheet Approval にアクセスしたり、これをバーチャルスタンドアローン型アプリケーションとして使用したりできます。



P6.1 よりも以前のバージョンでは、Timesheet Approval は Project Management と P6 Web Access の双方から別個のアプリケーションとして使われていました。P6.1 では、Timesheet Approval のウェブバージョンに P6 Web Access と Project Management モジュール内からアクセスしたり、スタンドアローン型アプリケーションとして使用したりできます。このような拡張のため、Timesheet Approval の新規使用やアップグレードを望む企業はすべて、P6 WEB ACCESS をインストールする必要があります。

予備設定 Timesheet Approval へのアクセスを設定する前に以下を完了してください。

- 139 ページの「[P6 Web Access のインストール](#)」の説明に従い、サポートされているアプリケーションサーバ上に P6 Web Access をインストールして設定します。
- 358 ページの「[モジュールアクセスの割り当て](#)」の説明に従って、ユーザのモジュールアクセスを設定します。

P6 Web Access から Timesheet Approval にアクセスしたり、これをスタンドアローン型アプリケーションとして使用したりするには、以下のモジュールアクセス権のうち最低ひとつをユーザに割り当てる必要があります：Project Management、Team Member、Web Access Portfolios、Web Access Projects、または Web Access Resources。Project Management から Timesheet Approval にアクセスするには、Project Management モジュールアクセスをユーザに割り当てる必要があります。

- 329 ページの「[ユーザ管理とセキュリティ管理](#)」の説明に従い、グローバル設定やプロジェクト設定をタイムシート承認マネージャに割り当てます。この中には、承認マネージャがタイムシートをレビューするために Timesheet Approval へのアクセスで必要とするセキュリティ権限が含まれています。ユーザがリソース/コストマネージャとしてリソースタイムシートを承認できるようにするには、「リソースタイムシート承認」グローバル権限をユーザに割り当てる必要があります。プロジェクトマネージャとしてリソースタイムシートを承認するには、ユーザは「プロジェクトマネージャとしてタイムシートを承認」プロジェクト権限が必要です。

- 389 ページの「[Project Management](#) での管理設定と分類の定義」の説明に従い、必要なタイムシート承認レベルを指定します。

ユーザインターフェイス画面の作成と割当の詳細については、380 ページの「[P6 Web Access 機能へのユーザアクセスの定義](#)」を参照してください。

P6 Web Access から Timesheet Approval へのアクセスを設定 :

適切なモジュールアクセスとセキュリティ権限のある P6 Web Access ユーザは、Timesheet Approval にアクセスできます。グローバルナビゲーションバーのダッシュボードアクションメニューにある「**タイムシート承認**」リンクをクリックしてください。オプションを確実に表示するには、各承認マネージャに割り当てられたユーザインターフェイス画面に [タイムシート承認] メニュー項目を含む必要があります。

新しく作成したユーザインターフェイス、およびユーザインターフェイス画面を使用しない企業については、[タイムシート承認] アクションメニュー項目が既定で表示されます。ユーザがタイムシート承認にアクセスする権利を持っていない場合、ユーザに割り当てられたユーザインターフェイス画面にリンクを含めてもメニュー項目は表示されません。

P6.1 以降にアップグレードしているユーザの場合、以前のリリースでタイムシートを承認する権限のあったユーザであれば [タイムシート承認] アクションメニュー項目が表示されます。

Project Management から Timesheet Approval へのアクセスを設定 :

適切なモジュールアクセスとセキュリティ権限のある Project Management モジュールユーザは、Timesheet Approval にアクセスできます。「ツール」 > 「**時間承認**」を選択してください。ユーザが選択した際に確実に Timesheet Approval が開くようにするには、P6 Web Access URL を指定する必要があります。

- 1 Project Management で [管理] > [管理設定] を選択してから [オプション] タブを選びます。
- 2 [Web Access Server URL] フィールドで、P6 Web Access サーバへの URL を以下の形式で入力します :

`http://P6_Web_Access_Server_Name:port_number/context_root.`

例えば、以下のような状況を想定してください。 `http://P6WebServer:8080/primaveraweb`

- 3 [閉じる] をクリックします。



Project Management から Timesheet Approval を開いても、P6 Web Access の他のエリアにはアクセスできません。

スタンドアローン型アプリケーションとしての Timesheet Approval へのアクセスを設定 :

適切なモジュールアクセスとセキュリティ権限のあるユーザであれば誰でもバーチャルスタンドアローン型アプリケーションとして Timesheet Approval にアクセスできます。タイムシート承認マネージャが確実にスタンドアローン型アプリケーションとしての Timesheet Approval にアクセスできるようにするには、P6 Web Access をインストールして設定し、P6 Web Access サーバ上で Timesheet Approval アプリケーションのロケーションを伝える必要があります。

P6 Web Access のインストールと設定後、以下の手順を実行します。

- 1 以下の形式の Timesheet Approval の URL を含む E-mail をタイムシート承認マネージャに送信します。

`http://P6_Web_Access_Server_Name:port_number/context_root/action/timesheetapproval.jnlp`

例えば、以下のような状況を想定してください。 `http://P6WebServer:8080/primaveraweb/action/timesheetapproval.jnlp`

- 2 リンクをクリックするようユーザに指示します。

Java Web Start と必要な JRE がユーザのマシンにインストールされます (必要な場合)。P6 にログインするようユーザに指示が出ます。

- 3 ユーザは自分の P6 ユーザ名とパスワードを入力し、適切なデータベースを選択してから、Timesheet Approval にログインする言語を選ぶよう指示されます。

Timesheet Approval をダウンロードすると、ユーザは Timesheet Approval にログインできます。Windows の [スタート] メニューから **[Primavera] > [Primavera Timesheet Approval]** を選択してください。

インデックス

数字

5.0 での新しい権限 [287](#)

A

API [13](#), [23](#), [31](#), [34](#), [275](#)

C

CONFIGASST.EXE

dbsetup を参照

Contract Management

接続先 [399](#)

ポートレット [366](#)

リンク [399](#)

D

DBConfig。データベース設定ウィザードを参照

dbsetup [49](#), [53](#), [289](#), [291](#)

DCOM 通信 [232](#)

Windows Server 2003、Windows Server 2008

および XP で分散ジョブサービスを設定 [236](#)

E

EPS。エンタープライズプロジェクトストラクチャを参照。

Expedition。Contract Management を参照

E- メール、サポートシステム [38](#)

G

Group Server

アンインストール [116](#)

I

ID

最大文字数の指定 [394](#)

長さ [394](#)

ID 文字数 [415](#)

Integration API モジュールアクセス、説明 [360](#)

J

Java Web Start [114](#)

L

LDAP

認証 [310](#)

プロビジョニング [322](#)

ログイン手順 [325](#)

LDAP から設定 [322](#)

LDAP サーバ

認証の設定 [313](#)

M

MDAC [263](#)

Methodology Management データベース [58](#)

アップグレード

Oracle [288](#)

SQL Server 上 [291](#)

クライアントドライバ [260](#)

作成

Oracle 上 [63](#)

SQL Server 上 [72](#)

サンプルデータ [51](#), [54](#)

除去

Oracle から [65](#)

SQL Server から [75](#)

接続設定の変更 [304](#)

- プライベートログインの管理 306
 - プライベートログインパスワードの暗号化 306, 308
 - Methodology Management モジュール
 - インストール 263
 - 概要 20
 - 既定
 - 設定 414
 - 計画時の問題 30
 - 最小構成要件 34
 - セキュリティ 382–388
 - グローバル設定 383
 - メソドロジ設定 385
 - ユーザの追加 386
 - MMDB。Methodology Management データベースを参照。
 - myPrimavera
 - アンインストール 141
- O**
- OBS**
- 責任 349, 373
 - 組織内 332
 - 定義 332
 - プロジェクト情報へのアクセスを拒否 372
 - ルート 374
 - 割当
 - EPS へ 374
 - ユーザへ 372
- Oracle**
- Methodology Management モジュールの規模ガイドの説明 40
 - Project Management モジュールの規模ガイドの説明 39
 - クライアントドライバのインストール 260
 - サポートするバージョン 36
 - 手動でアプリケーションデータをロード 59
 - データベース構造の作成 59
 - データベース性能の向上 100
 - データベースのアップグレード 288
 - データベースの自動インストール 49
- Oracle 11g Instant Client 109**
- Oracle Database Express Edition 20**
- インストール 280
- Oracle XE。Oracle Database Express Edition を参照。**

P**P6**

- アドミニストレータガイドの使用方法 8
 - インストールの概要 27
 - 旧バージョンのアンインストール 262
 - クライアントモジュール 20
 - コンポーネントの選定 30
 - サーバコンポーネント 21
 - 最低要件 34
 - セキュリティ 330
 - その他のコンポーネント 22
 - ソリューションの概要 20
 - ドキュメンテーション 12
 - 認証 310
 - モジュールアクセシビリティ 359
- P6 Progress Reporter**
- 既定設定オプション 391
 - パラメータの設定 391
- P6 Web Access**
- JSP サーバ要件 37, 38
 - Web サーバ要件 38
 - アプリケーションサーバのインストール 143
 - アプリケーションサーバの設定 153
 - アプリケーションサーバの展開 153
 - アプリケーションサーバプラグインの実装 229
 - アプリケーションサーバ要件 37
 - アンインストール 141
 - インストール 139
 - インストールの概要 146
 - 管理アプリケーション 184
 - 概要 21
 - 旧バージョンからのアップグレード 140
 - クライアントブラウザからのアクセス 171
 - クライアント要件 35
 - 計画時の問題 33
 - コンテンツリポジトリ 22
 - サーバの起動 168
 - サーバの停止 170
 - 招待ユーザ 363
 - 設定
 - Project Architect の実行 190
 - カスタムポートレット 193
 - 認証 192
 - 設定の確認と変更 186
 - 設定の削除 189
 - 設定方法 197

- 設定を追加 188
- データベースインスタンスの削除 189
- データベースインスタンスの追加 188
- データベース構成設定の変更 179
- 複数のデータベースインスタンスへのアクセスを管理 191
- 報告期間の特記事項 410
- モジュールアクセス 359, 360
- モジュールアクセス権 360
- ユーザアクセスの定義 380
- 利用可能な Primavera Web Team Member 機能 362
- ワークフローリポジトリ 22
- P6 Web Services 23, 31, 275, 311
 - ドキュメンテーション 14
- PMDB。Project Management データベースを参照。
- PMSDK 275
- Primavera
 - 旧バージョンのアンインストール 262
- Primavera Web Application
 - アンインストール 141
- Primavera クライアント、インストール 259
- Primavera ソフトウェア開発キット
 - インストール 263, 275
 - 概要 23
 - 計画時の問題 31
 - サポート構成 34
 - ドキュメンテーション 277
- Primavision
 - アンインストール 141
- Progress Reporter のモジュール
 - Java Web Start 版
 - JRE インストール 439
 - 概要 114
 - 最低要件 35
 - 定義 32
 - Web ブラウザ版
 - JRE インストール 439
 - 定義 32
 - 間接コード 404
 - 概要 21
 - 作成
 - Timesheets 434
 - ユーザログイン 430
 - 使用するリソースの設定 432
 - 実装の概要 428
 - 設定 391
 - Project Management モジュールで 427-436
 - 超過時間の入力 433
 - バージョン 32
 - プロジェクト固有の設定 436
- Progress Reporter サーバ
 - Administrator の起動 137
 - アプリケーションサーバのインストール 117
 - アプリケーションサーバの設定 122
 - アプリケーションサーバの展開 122
 - アプリケーションサーバプラグインの実装 136
 - アンインストール 116
 - インストール 113
 - インストールの概要 114
 - 管理者の設定 137
 - 概要 21
 - 旧バージョンからのアップグレード 116
 - クライアントブラウザからのアクセス 437
 - 計画時の問題 31
 - 構成ホームの場所 138
 - サーバの起動 134
 - サーバの停止 135
 - 実行 437
 - データベースの設定 137
 - ヘルプサイトの場所の指定 138
 - ユーザログイン 437
- Progress Reporter モジュールアクセス、説明 360
- Project Architect 190
- Project Management データベース 46, 58
 - SQL Server パラメータ 67
 - アップグレード
 - Oracle 288
 - SQL Server 上 291
 - クライアントドライバ 260
 - 作成
 - Oracle 上 59
 - SQL Server 上 68
 - サンプルプロジェクトデータ 51, 54
 - 除去
 - Oracle から 62
 - SQL Server から 71
 - 接続設定の変更 304
 - プライベートログインの管理 306
 - プライベートログインパスワードの暗号化 306, 308
- Project Management モジュール
 - インストール 263
 - 概要 20

計画時の問題 30
最小構成要件 34
ユーザの追加 356

Project Management モジュールアクセス、説明 359

ProjectLink

インストール 263, 278
概要 22
モジュールアクセス 361
ユーザアクセス 279

R

RDBMS。リレーショナルデータベース管理システムを参照

S

SDK。Primavera ソフトウェア開発キットを参照。

SQL Server

Methodology Management モジュールの規模ガイドの説明 40
Project Management モジュールの規模ガイドの説明 39
クライアントドライバのインストール 260
手動でアプリケーションデータをロード 67
データベース構造の作成 67
データベースのアップグレード 291
データベースの自動インストール 53

T

Team Member モジュールアクセス、説明 360

Timesheet Approval

アクセス設定 441
承認レベルの設定 392
スタンドアロン型アプリケーションの設定 443

Timesheets

承認レベル、設定 392
バッチの作成 434

TNSPING.EXE 47, 58

W

WBS

カスタム分類の定義 419
レベル、集計用に指定 399

WBS、定義 332

Web Services。P6 Web Services を参照。

Web スケジューラ 30

Web ブラウザ

P6 Web Access サポート 35

あ

アーンドバリュウ

既定の定義 397

アクティビティ

ノートトピック 406, 418

アップグレード

Oracle データベース 288

SQL Server データベース 291

自動 285

スタンドアローン版 280

プロセスの概要 286

アプリケーションデータ

Oracle へのロード 49

SQL Server へのロード 53

アンインストール

ジョブサービス 262

安全な削除、設定 101

い

インストール

Primavera クライアント 259

え

エンタープライズプロジェクトストラクチャ

アクセスと権限 373

定義 332

モジュール全体のパラメータや値、設定 389

お

オペレーションエグゼクティブ 13

か

階層構造

最大レベル数を指定 393

過去期間実績 410

カスタムポートレット

パスワード暗号化 193

為替レート 52, 55, 77, 407

監査

概要 102

詳細な設定 104

シンプル構成 103

間接コード 404

管理 389–406

設定 390

分類 401

管理設定、定義 413

管理分類、定義 413

き

期間、既定時間の定義 417

既定

各期間の時間 394, 417

所要期間 390

既定設定 390

既定の設定 390

基本通貨、設定 51, 77

SQL データベース用 55

く

クライアントモジュール

インストール 266

最低要件 34

ユーザパスワードの変更 306

グローバル設定

新しい権限 287

概要 330

権限の定義 342

Methodology Management モジュール

用 383

作成 342

Methodology Management モジュール

用 383

定義 341

ユーザに割当 358

け

経費

定義

標準的な分類 418

分類 402

計量単位

分類 422

言語サポート

ジョブサービスに 273

こ

コード

間接 404

区切文字 390, 414

最大文字数、指定 394

国際言語サポート

ジョブサービスに 273

コスト

サマリ計算、スプレッドシート表示の間隔を指定 398

コラボレーション

概要

コンテンツリポジトリを参照

ワークフローリポジトリを参照

コンテンツリポジトリ

インストール 151

概要 22

コントローラサーバ 232

設定 247

さ

サーバコンポーネント

サポート構成 36

サーバデータベース、設定 57

作業成果物

ステータス 404

分類 403

作業成果物とドキュメント

分類 420

サマライザジョブの設定 251

し

集計表

コストおよび定量サマリの間隔を指定 398

手動データベースのインストール 57

招待ユーザ、プロジェクトデータへのアクセス 363

所要期間

既定 390

既定タイプ 414

シングルサインオン

認証 310

ログイン手順 325

時間、各期間の既定時間数 417

時間、期間の既定を定義 394

ジョブサービス

Microsoft Windows 2008 Server の設定 270

P6 Web Access 用の Project Architect の設定 190

アンインストール 262

インストール 263, 268

概要 22

計画時の問題 30
言語の選択 273
サポート構成 36
サマライザジョブ 272
 レジストリの設定 251
直接プリンタにジョブを送出 272
複数インスタンスの作成 269
複数のデータベースの実行 271
分散 232
 Windows 2003、Windows 2008 および XP
 で DCOM を設定 236
 Windows ファイアウォールの無効化 234
 インストール 233
 コントローラサーバ 232
 サーバの設定 247
 レジストリの設定 250
ジョブスケジューラ
 設定、Oracle 81
 設定、SQL Server 81

す

スタンドアローン版
 インストール 263, 280
 自動的にアップグレード 280
ステータス
 作業成果物 404
 ドキュメント 404

せ

制限
 実際の 41
性能
 最適化 100
製品限界 41
セキュリティ 329-388
 Methodology Management モジュール 382-388
 OBS
 EPS の割当 374
 ユーザとプロジェクト設定の割当 371
概要 330
 グローバル設定 341
 ユーザに割当 358
実施プロセスの概要 339
プロジェクト設定 349
モジュールアクセス 358

ユーザ 356
 Methodology Management モジュール
 で 386
 OBS とプロジェクト設定の割当 372
リソースアクセス 376
リソースとユーザの関連付け 357
リソースへのアクセスの定義 378
設定ウィザード、実行 263

そ

組織ブレークダウンストラクチャについては
OBS を参照
その他のコンポーネント、インストール 259

た

タイムシート監査、有効 391
単価タイプ
 定義 400
ダッシュボード、チームメンバがアクセスする 363

ち

チームメンバ 13
 Progress Reporter のモジュール 21
 利用可能な P6 Web Access 機能 362
チームリーダ 12

つ

通貨
 基本の設定 408
 設定
 基準 424
 定義 407, 423
 表示の追加 408

て

定量サマリ計算、スプレッドシート表示の間隔
を指定 398
データ限度、最大レベル数の指定 416
データベース
 MMDB 46, 58
 Oracle 性能の向上 100
 P6 Web Access の設定変更 179
 PMDB 46, 58
 Progress Reporter サーバの設定 137
 アップグレード
 Oracle 288

- SQL Server 291
 - 管理 79
 - クライアントドライバ、インストール 260
 - 手動でインストール 57
 - 自動アップグレード 285
 - 自動的にインストール 45
- データベース管理者 12, 13, 14
 - ロールの定義 25
- データベース構成
 - 設定の変更 303
- データベース設定ウィザード
 - 管理タスク 306
 - 初期化 (INI) ファイル 304
 - データベース設定の変更 304
 - プライベートデータベースログイン 306
 - ユーザパスワードの変更 306
- データベース設定の管理 79
- データベースの自動インストール 45
 - Oracle 用 49
 - SQL Server データベース用
 - 自動インストール 53

と

- ドキュメント
 - ステータス 404
 - 分類 403
- ドキュメント、分類 420

に

- 認証
 - P6 Web Access の設定 192
 - 設定 309–325
 - ネイティブ 310
 - ログイン手順 325
- 認証設定ウィザード 313

ね

- ネイティブ認証 310
 - ログイン手順 325
- ネットワーク管理者 12, 13, 14
 - ロールの定義 25
- ネットワークプロトコル、サポートソフトウェア 38

の

- ノート
 - トピック 406

- ノートトピック 418

は

- バックグラウンド処理
 - Setting 値の読み書き 83
 - Settings テーブル 82
 - 監視 85
- パスワード
 - 暗号化
 - カスタムポートレットの設定 193
 - 変更 306

ひ

- 標準的な分類と値、定義 401

ふ

- ファイアウォール
 - 分散ジョブサービスのために無効化 234
- 分散ジョブサービス
 - Windows ファイアウォールの無効化 234
 - インストール 233, 263, 268
 - 概要 22, 232
 - 計画時の問題 30
 - サーバの準備 232
 - サポート構成 36
 - 設定 231
 - Windows Server 2003、Windows Server 2008 および XP 上の DCOM 236
 - サーバ 247
 - レジストリの設定 250
- 分類
 - WBS 419
 - 経費 402, 418
 - 計量単位 406, 422
 - 作業成果物 403
 - ドキュメント 403, 420
 - ノート 406
 - 見積ファクタ 421
 - リスク 405
- プライベートデータベースのログインパスワード
 - 新しい暗号化アルゴリズムの使用 287, 306
- プライベートデータベースログイン
 - 管理 306
- プログラムマネージャ 12, 13
 - ロールの定義 26
- プロジェクト
 - チェックアウト 353

- チェックイン [353](#)
- プロジェクト Web サイト、サポート構成 [38](#)
- プロジェクト管理コーディネータ [12, 14](#)
 - ロールの定義 [26](#)
- プロジェクト設定
 - 新しい権限 [287](#)
 - 概要 [330](#)
 - 権限の定義 [350](#)
 - 作成 [349](#)
 - 定義 [349](#)
 - 割当
 - OBS ノードへ [371](#)
 - ユーザへ [372](#)
- プロジェクトデータ
 - Team Member によるアクセス [364](#)
- プロジェクトのチェックアウト [353](#)
- プロジェクトのチェックイン [353](#)
- プロジェクトマネージャ [12, 13](#)
 - ロールの定義 [26](#)

- へ
 - ベースラインタイプ [401](#)

- ほ
 - 報告期間 [410](#)
 - 個別作成 [412](#)
 - 削除 [412](#)
 - 集計 [398](#)
 - バッチの作成 [411](#)

- み
 - 見積ファクタ分類 [421](#)

- む
 - 無人セットアップ
 - 実行 [300](#)
 - 計画時の問題 [30](#)
 - ファイルセットの作成 [296](#)

- め
 - メソドロジ設定
 - 権限の定義 [386](#)
 - 作成 [385](#)

- も
 - モジュールアクセス
 - ユーザに割当 [358](#)
 - モジュールログイン
 - アクセス権 [358](#)

- ゆ
 - ユーザ
 - Progress Reporter のモジュール [430](#)
 - 追加 [356](#)
 - Methodology Management モジュール [386](#)
 - 定義 [332](#)
 - パスワードの変更 [306](#)
 - リソースに関連付け [357](#)
 - 割当
 - Methodology Management モジュールにおける設定 [388](#)
 - OBS ノードへ [371](#)
 - グローバル設定 [358](#)
 - モジュールアクセス [358](#)
 - ユーザインタフェース画面、割当 [380](#)

- り
 - リスク
 - タイプ [405, 422](#)
 - リソース
 - アクセスの定義 [376](#)
 - スプレッドシートでの集計用割当レベル [399](#)
 - 定義 [332](#)
 - ユーザとの関連付け [357](#)
 - リソース / コストマネージャ [12, 13](#)
 - リソースセキュリティ [376](#)
 - リレーショナルデータベース管理システム
 - 概要 [21](#)
 - 計画 [30](#)
 - サポート構成 [36](#)

- る
 - ルート OBS [374](#)

- れ
 - レポート
 - 既定の定義 [397](#)
 - グループ [419](#)

ろ

ロール

 スプレッドシートでの集計用割り当てレ
 ール [399](#)

ログイン名、プロジェクトリソースとユーザーに
単一のログインを維持 [357](#)

わ

ワークフローリポジトリ

 インストール [151](#)

 概要 [22](#)

